

執筆中の著者

目 次

序 章	1
第 一 章	愛	1 2
第 二 章	人の子	1 6
第 三 章	光と闇の大いなる戦い	2 3
第 四 章	奈 落	4 1
第 五 章	ノーマルな性	4 6
第 六 章	高次の性	5 2
第 七 章	黙示録の七つの教会	5 8
第 八 章	幸福、音楽、踊りそしてキッス	8 6
第 九 章	G・A・I・O	9 4
第 十 章	直観的知識	1 0 7
第 十 一 章	成長せよ、増えよ	1 1 2
第 十 二 章	二つの儀式	1 1 5
第 十 三 章	二人のマリア	1 2 7
第 十 四 章	悪魔に対抗する仕事	1 3 1
第 十 五 章	独身生活	1 4 0
第 十 六 章	意識の目覚め	1 4 6
第 十 七 章	夢とヴィジョン	1 5 4
第 十 八 章	意識・潜在意識・超意識・超視覚	1 5 7
第 十 九 章	イニシエーション	1 6 4
第 二 十 章	復活と生まれ変わり	1 9 2
第 二 十 一 章	第九球体	2 0 6
第 二 十 二 章	性ヨガ	2 1 5
第 二 十 三 章	飛ぶ蛇	2 2 5
第 二 十 四 章	秘密のエジプト	2 4 0
第 二 十 五 章	宿命的不幸	2 4 4
第 二 十 六 章	トーテム崇拜	2 5 3
第 二 十 七 章	聖なる男根崇拜	2 5 8
第 二 十 八 章	火の崇拜	2 6 8
第 二 十 九 章	エツダ	2 8 1
第 三 十 章	五芒星	2 8 9
第 三 十 一 章	北極のエスキモー	2 9 5
第 三 十 二 章	聖なる三位一体	3 0 8
第 三 十 三 章	クリスト	3 1 4
結 び	3 3 0
ノーシスについて日本の読者へ（ミゲル・ネリ著）	3 3 8
編者あとがき	3 4 5
索 引	3 4 7
サマエル・アウン・ペオール主要著作一覧	3 5 5

序 章

私はこの本を少数の人のために書いた。少数の人と言ったのは、大多数の人はこの本を受け入れることも、理解することも、また望むこともないからである。

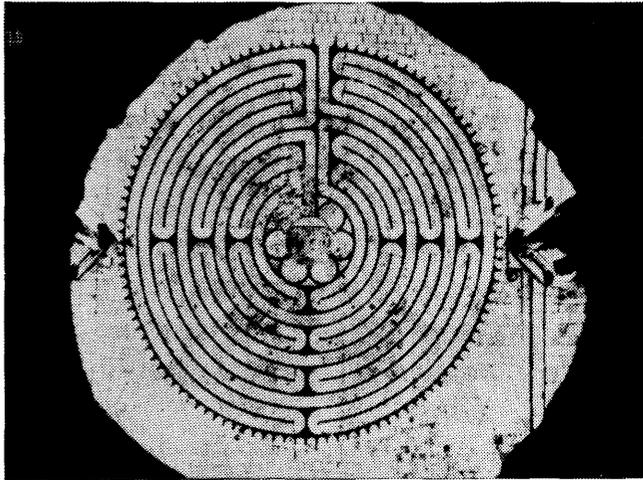
『完全なる結婚』の初版が世の中に出ていった時、あらゆる学派、秘密結社、宗教団体、教団、宗派、秘教組織の学徒の間に、熱狂的な反響を呼び起こした。この熱狂の結果、ノーシス運動が形成された。この運動は心ある少数の人々によって始められ、やがて完全に国際的な運動に変わっていった。

多くの神秘学の学徒たちがこの本を研究した。しかしこの本を本当に理解したのは、わずかな人々のみである。「完全なる結婚」という魅力的なテーマゆえに、熱心な多くの人々がノーシス運動の戦列に加わった。しかし、ノーシス運動の中に残った人は、指で数えられるほど少数であった。多くの人々がノーシスの祭壇の前で忠誠を誓った。しかし実際には、ほとんどの人が自分でたてた誓いを破ってしまった。ある人たちは本当に使徒のように見えたので、彼らを疑うことは不敬とさえ思えた。しかし結局のところ、彼らも背信者であったということを、無限の苦しみをもって納得しなければならなかった。偽りの同志がたった一冊の本を読んで考えを変えたり、町にやって来る新しい講座にとびついて、ノーシス運動から退いていくことがしばしばあった。

アクエリアスの新しい時代は、1962年2月4日の午後2時と3時の間から始まった。この新たな時代の戦いの中で、われわれは次のことを学ばなければならなかった。誠実でありながら道を誤った人たち、あるいは大変良い意図を持ちながら無知ゆえに間違えた人たちで、奈落（地獄）はいっぱいであるということ。

「完全なる結婚」と「コスミック・クリスト」は、すべての宗教、学派、教団、宗派、秘密結社、ヨガなどの「総括」である。多くの人々が実用的な総括を見出したにもかかわらず、いりくんだ迷路のような理論に陥ったために、ノーシスから離れてしまうことは本当に残念である。

伝説によれば、迷宮の中心には総括が存在したと言われる。すなわち総括とは、寺院の十字旗 (Labarum) のことである。迷宮 (Labyrinth) という



ノートル・ダム大聖堂の迷宮（ラビリンス）

パリ郊外のシャルトルにあるこの教会には、完全な形で迷宮が残っている。信者はこれを膝行して、信仰の強さを表明した。

言葉は、語源的にこの十字旗に由来する。

この十字旗は、男性と女性の性的力のシンボルとしての両刃の剣を意味した。本当の総括を見出したにもかかわらず、この中心から外に出て、再びマインドの迷宮を作っている複雑な理論に戻ってしまうとすれば、それは最大の愚行である。「クリスト」と「性の神秘」は、宗教的総括を表わすものである。

もし、それぞれの宗教を比較研究してみれば、すべての学派、宗教、秘教的宗派の基礎に、男根崇拜が存在していることを発見するだろう。愛ゆえに鳩に変身した愛の女神ヴィーナスのお供の精、ペリステラを思い出してみよう。美德のヴィーナスを、そして、古代ローマ帝政時代のプリアポス神の行列を思い出してみよう。そこでは、神殿に仕える巫女たちが、神木から作られた巨大な男根像をエクスタシーに満たされておごそかに運んでいた。まさにこのようなことから、精神分析学の創始者フロイトは、「宗教は、その起源を性に持つ」と言ったのである。

「完全なる結婚」とは、その内に「火の神秘」を宿すものである。火を崇拝するすべての信仰は、全く性的である。ヴェスタ女神に使えた処女たちは、本当の愛の巫女であった。彼女らとともに独身の司祭たちは、アデ

プトに至った。現代の巫女（尼僧）は不幸にも、性の神秘の鍵を知らない。また現代の司祭や僧も性の秘密の鍵を忘れ去っているのは残念である。ヨガの至高の鍵である性の神秘、つまりすべてのヨガ体系の最高の総括を無視するたくさんのヨガ行者を見ることは、大変深い悲しみである。

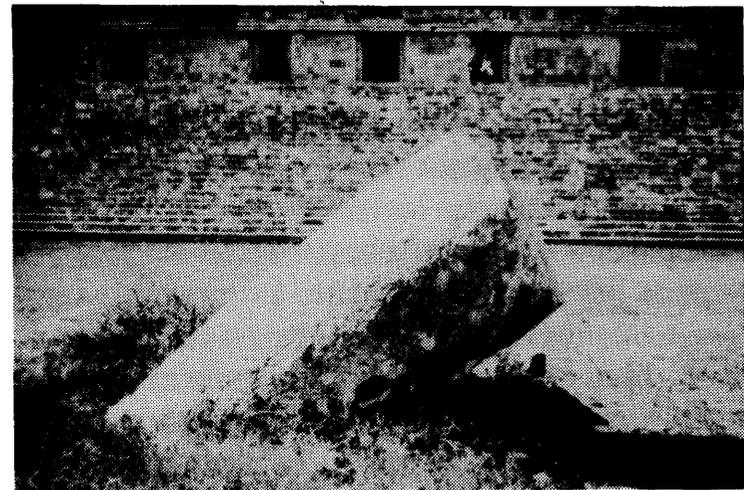
性の神秘を知る時、人々はふるえあがる。しかし反対に神聖な性を獣のような情欲にゆだねることは何のためらいも感じない。

親愛なる読者よ、ここにはすべての宗教、学派、宗派の総括がある。われわれの教えは総括の教えである。

歴史の長い夜の中に、力強い文明と偉大な神秘が存在した。神殿の中に愛の巫女が不在であるということは決してなかった。巫女たちと性の神秘を实践した人々は、白ロジのマスターになった。マスター（大師）は、性の神秘によってわれわれの内に生まれるべきものである。

古代エジプトのファラオの時代、太陽の国ケムでは「偉大なる秘儀」(性の神秘)の秘密をもらすものは誰でも死を宣告され、その頭は斧で切り落とされ、その心臓はえぐりとられた。そして遺骨の灰は四方八方に散らされた。

アステカの国では、アデプトに達することを熱望する男女が神殿の中庭で長い間抱擁し、愛しあい、性の秘儀を实践した。



メキシコのウシュマルにある神殿の中庭
男根のシンボルが中央に見られる。

神殿内部で性の秘儀を実践中、ヘルメスの杯をこぼす者があれば神殿を冒瀆したことによって、首を切られた。

魂に通ずるすべての自己教育システムは、究極の実用的総括、すなわち性の神秘を持っている。すべての宗教、すべての秘教的宗派は、総括としての性の神秘（アルカーノA・Z・F）を持っている。

エレウシスの密儀には、衣をまともわずに踊る舞と、言葉に絶するほど神聖な事柄があった。性の神秘はこれらの神秘の基礎をなしていた。そこでは誰一人として卑猥なことを考える者はいなかった。なぜなら性は深く敬まれていたからである。イニシエイトたちは、性の中で第三ロゴスが働くということを知っていた。

この本の中ではすべてを明快に公開した。隠されていたものも、ヴェールが取られた。根元的に自己を実現することを望む者は、誰でもそうすることができる。ここにはそのための道標があり、また完全な教えがある。

私は「完全なる結婚の道」を教えることによって、虐待や侮辱を受け、中傷を受け、そしてすでに裏切りも経験してきた。だが、そのようなことは問題にはしていない。はじめのころは、私は裏切りと中傷によって大変傷ついた。しかし今では、鋼鉄のように強くなったので、もうそれらが私を傷つけることはない。人類は真実を憎み、預言者をひどく嫌うものであるということを、私は知りすぎるほどよく知っている。そのようなわけで、私がこの本を書いたために人々から憎まれたとしても、あまり驚くことはない。

われわれの目的、目標、目ざすべきものはただ一つ、「クリスト化」である。人間一人一人が自分自身をクリスティックに変える必要がある。クリストを体現する必要がある。

この本の中で「クリスト」の神秘のヴェールは取り除かれた。クリスト原理が何であるかを説明した。われわれは、すべての人類がクリスト化を達成するために「完全なる結婚」の道を歩くことへ招待した。「クリスト」とは一個人ではなく、普遍的で宇宙的な非人格的原理であり、各人が性の神秘を通しておのれに同化すべきものであることを説明した。これらのことが狂信者たちを憤慨させるのは当然である。しかし真実は真実であり、われわれはたとえ生命を犠牲にすることがあっても、真実を告げねばならない。

『ゼンド・アベスタ』の教えは『エジプトの死者の書』の中の教義原理と

共通して、クリストの原理を含んでいる。ホーマーの『イリアッド』、ヘブライの聖書、ゲルマン民族の『エッダ』、古代ローマの『シビラの書』にも、同じクリスト原理が含まれている。これらは「クリスト」がナザレのイエス以前にも存在したという十分な証拠である。「クリスト」とは一個人を意味するのではない。「クリスト」とは性の神秘を通じて、われわれ自身の物理的、心理的、肉体的、精神的な本質に同化すべき宇宙的原理なのである。

ペルシア人の間で、クリストはオルmazd（アフラマズダ）であり、われわれの内に住むアーリマン（魔王）の恐ろしい敵である。ヒンズー教徒のクリストはクリシュナであり、クリシュナの福音はナザレのイエスのそれとよく似ている。エジプトではオシリスがクリストである。クリストを体現した者はすべて、オシリス化された人間となる。また中国では伏羲が、法の書『易経』を作成したコスミック・クリストである。彼は龍の使者を任命した。ギリシアでのクリストは神々の父ゼウス、ジュピターと呼ばれた。アステカではケツァルコアトルがメキシコのクリストである。ゲルマンの『エッダ』の中では、バルデルがクリストである。バルデルは戦争の神ホルが放った寄生木の矢で暗殺された。このように紀元前（イエス・クリスト生誕以前）の古い時代の言い伝えや、また数多くの古代の文書の中にコスミック・クリストを見ることができる。これらすべてがわれわれに、「クリスト」とはあらゆる宗教の本質的原理の中に含まれている宇宙原理に他ならない、ということを理解させてくれる。

本来、唯一の宗教（宇宙的宗教）が存在する。そしてこの宗教が、時代により、また人類の必要性により、様々な宗教形態をとって伝えられるということである。それゆえ、宗教間の争いは愚かなことである。もとをただせばすべての宗教は、宇宙的普遍的宗教が形を変えたものにほかならないのである。この観点から、この本はいかなる宗教、学派、思想体系とも対立するものではないということ、われわれは確信する。われわれがこの本を世に出すのは、世界中のすべての偉大な宗教が、奥深いところに内包しているクリスト原理を、そして生ける者すべてが理解し、吸収することを可能にする性の秘密の鍵を、人類に与えるためである。

イエスーイエズスーゼウスージュピターはクリスト原理を完全に体現した新しい超人であり、自分自身を神化した人間である。思うに、われわれは彼を手本とすべきである。本当の意味において、彼は完全な人間、真

実の人であった。「神化」とは、性の神秘によって普遍的宇宙的なクリスティック原理を、完璧にわがものとした者が達成できるものである。理解できるわずかの人のみならず、ヨハネの福音書第3章1節から21節までを研究すべきである。熱心な者はそこに、イエスによって教えられた「完全なる結婚」、純粋で正当な性の神秘を見出すであろう。もちろん、教えは暗号で与えられている。しかし理解する者は、直観的にそれを理解するであろう。

現代人は偉大なるマスター・イエスと、イエス以前に彼と同様なクリスト化を果たした先人とを、分離するという間違いを犯してしまった。それが、現在の人類に少なからず害を与えてきた。すべての宗教は唯一の宗教であるという理解を日に日に深める必要がある。

イエスの母、マリアはイシス、ジュノー、デメテル、ケレス、マイヤなどと同じであり、コスミック・クリストを産む宇宙の母、あるいはクングリニー（性の火）のことである。マグダラのマリアはサランボ、ミトラ、イシュタル、アスタルテ、アフロディーテ、ヴィーナスなどと同じであり、彼女とともにわれわれは火を目覚めさせるために性の神秘を実践しなければならない。

殉教者、聖者、聖母、天使また^{ケルビム}智天使などは異教の神話の中の、タイタン、女神、空気の精、キュクロプスといった神々、半神あるいは神々の使者たちと同じである。

キリスト教の宗教的原理はすべて異教的である。今の宗教形態が消える時、その原理は未来の新しい宗教形態に同化されるであろう。

無原罪の（聖母の）受胎の意味するところを理解する必要がある。「完全なる結婚」が、人間の心臓の内にクリストを誕生させることを可能にする唯一の道であることを知らなければならない。クリストを具現するために、「クングリニーの火」すなわち「聖霊の火」を目覚めさせることは、緊急を要することである。クングリニーを目覚めさせる者は、ガニメデスのように魂の鷲の翼に乗ってオリンポスの山へ昇り、言葉に絶する神聖な神々に仕える。

カトリックの司祭たちが、古い時代の多くの貴重な文書や宝物を破壊してしまったことは嘆かわしいことである。しかし幸いにも、すべてを破壊できたわけではなかった。ルネッサンス時代に、勇敢な司祭たちによって、驚くべき数冊の本が発見された。それゆえ、ダンテ、ボッカチオ、ペトラ

ルカ、エラスムスなどは僧職者たちによる迫害にもかかわらず、神秘学と性の神秘に関する文書や、かの有名なホーマーの『イリアッド』と『オデッセイ』などを翻訳することができたのである。彼らは他にも、ヴァージルの『アエネーイス』、ヘシオドスの『神統紀』『仕事と日々』、オヴィッドの『変身譚』を翻訳した。他にもルクレチウス、ホラティウス、ティブルルス、リビウス、タキトゥス、アプレイウス、キケロなどの作品を翻訳した。

これらすべてが純粋なノーシス（霊的認識、神秘的直観）である。性の神秘と完全なる結婚を無視するようなシステムに従うために、ノーシスを放棄する無知な人々がいるのは、全く嘆かわしいことである。われわれはノーシスのすべての偉大な宝を研究し、すべての古代宗教の基礎となる核心を吟味し、あらゆる信仰の土台にある性の神秘の至高の鍵を見出した。今、われわれはこの宝を、この鍵を、悩める人類にさし出している。

多くの人がこの本を読むだろう。だがこの本を本当に理解する人は数少ないだろう。これは性の神秘に関する一冊の本にすぎない。全くの知的好奇心のために何千冊もの本を読むことを習慣にしている人は、実際にこの本の根底にある核心を学びとる機会を失うことだろう。この本はただページをめくって文字のあとを追うだけなら役には立たないし、またそのように考える人は間違っている。この本は奥深く研究し、トータルにその内容を悟る必要がある。インテレクトだけでなく、マインドのすべての段階において理解するのである。インテレクトはマインドの小さな断片にすぎず、マインド全体をさすものではない。この本をインテレクトだけで理解しようとする者は、内容を把握することはできない。マインドのあらゆる段階で内観し、瞑想する時、はじめてこの本を理解することができるのである。

「クリスト化」を実現するには、性の神秘の実践が緊急に必要である。読者はこの本の中に、魂の自己実現を達成するための至高の鍵を見出すであろう。われわれはいかなる宗教、学派、宗派、教団、秘密結社とも対峙するものではない。なぜならば、すべての宗教形態は宇宙のすべての分子の中に潜在している宇宙的、普遍的かつ無限の大いなる宗教の表現であるからである。われわれは、それらの宗教、学派、教団、秘密結社、信仰の総括を教えるのみである。われわれの教えは総括の教えである。

性の神秘は秘教的キリスト教、秘密仏教で実践されている。イニシエーションを通ったヨギの間で実践され、回教のスーフィーの間で実践されて

いる。またトロイ、エジプト、ローマ、カルタゴ、エレウシスの奥義を伝える大学で実践され、マヤ、アステカ、インカ、ドルイドなどの密儀の中で実践されていた。

すべての宗教、学派、宗派の総括は、「性の神秘」と「コスミック・クリスト」である。われわれが教えるのは「総括の教え」である。いかなる宗教形態とも、この教えが対立することはない。われわれの教えは、すべての宗教、学派そして信仰の中に含まれている。もし読者が世界中のすべての宗教を真剣に研究するならば、すべての神秘の総括として男根と子宮を発見するだろう。コスミック・クリストと性の神秘が欠けている古代宗教または密儀的教えは、一つとして知られていない。総括の教えは、いかなる人も害することはない。なぜならこの教えは、誰にとっても総括的だからである。

すべての宗教、学派、信仰に属する人たちに、諸宗教の比較研究をお勧めする。さまざまな内的自己教育システムを実行しているすべての人々に、密儀を教える秘教グループの「性的秘教学」の研究をお勧めする。絶対的解放を成就するに不可欠な性のヨガとインドの白タントラをすべてのヨガたちにお勧めする。

宗教形態や教育体系、その名称がいかなるものであろうと、すべての秘教的研究の総括は、「性の神秘」と「クリスト」である。

われわれに向けられてきた迫害、ねたみ、放逐などの攻撃は、無知と研究不足によるものである。

どんな宗教形態や秘教体系であっても、「総括」はそれを豊かにする。「総括」はいかなる人も害することはない。これが「総括」の教えである。われわれはすべての宗教形態を深く愛している。それらは宇宙的普遍的な偉大なる宗教の愛すべき顕われであることを知っているからである。「完全なる結婚」の中には至高の宗教的総括が見出される。

神は愛であり、智慧である。古今東西のすべての秘教団体、教団、学派、宗派、魂の自己実現の方法と体系などの究極的総括は「クリスト」と「性」の中に存在する。

あなたの心に平和がなりますように

サマエル・アウン・ベオール

【プリアポス神】 ギリシア・ローマ伝説における男性生殖力の神。

【ヴェスタ女神】 かまどの女神。火の神に仕える処女（ギリシア・ローマ神話）。

【アデプト】 本書では、いわゆる帰依者というよりも、マスターという意味で用いている。あらゆるエゴ（我）を排除し、至福を手にした人がアデプトである。

【白ロジ】 「白友愛結社」の意。人類を崇高な知識へと導き、精神的進化を目指す人々を助ける高次元の霊の集団。

【ヘルメス】 魔術、文学、医学、オカルトの智慧を司るギリシアの男神、錬金術の守護神でもある。エジプトのトート、ローマのメリクリウス（ママーキュリー）と同一視された。また「ヘルメスの杯」とは性エネルギーを上昇させて蓄える杯（脳）のことであろう。「ヘルメスの杯からこぼす」とは、性エネルギーを消費してしまうことを意味する。

【アルカーノ A・Z・F】 アルカーノはラテン語のアルカーナムに由来し、神秘、秘密を意味する言葉である。Aはスペイン語のAgua（水）を、Fは同じく Fuego（火）を意味する。Zはアスティック十字の形から来ている。すなわち A・Z・Fとは「火」と「水」の交差であり、また、カバラの数秘術の見地からも（A=1、Z=26、F=6 から計33、3+3=6）「性の神秘」を意味する。

【第三ロゴス】 ロゴスとは、ギリシア語で「言葉」、「定義」、「理性」を意味し、全宇宙の究極的な存在を示す言葉であり、三位一体を通して表現される。三位とはキリスト教では、父、子、聖霊であり、神智学では第一ロゴス、第二ロゴス、第三ロゴスと呼ばれた。ここで著者は、第三ロゴスの働く性の中に三位一体を実現するキーがあると言っている。

【ゼンド・アベスタ】 ゴロアスター教の経典。

【ホーマー（Homer）】 紀元前10世紀頃のギリシアの詩人『イリアッド』『オデッセイ』の著者。

【エッダ】 古代北欧神話の詩歌集。第二十九章「エッダ」参照。

【シビラの書】 ギリシア語で書かれた古代ローマの神託集。

【オルマズド（Ormazd）、アフラマズダ（Ahura Mazda）】 ペルシア神話の太陽神。暗黒の神アーリマンと双子の兄弟として生まれた。オルマズドは後になって付けられたアフラマズダの異名。

【ケツァルコアトル（Quetzalcoatl）】 アステカの生死の神。暁の明星の

神、また風の神で羽毛のある蛇として象徴されている（マヤではククルカンと呼ばれる）。ケツァルは美しい緑色の羽を持つ鳥の名で、コアトルは蛇の意。

【バルデル (Balder)】 北欧神話の春光の神でオーディン（万物の父）の子。美しく善良で、温厚、賢明な神。

【イシス (Isis)】 古代エジプトで信仰された神々の中で最高の女神。豊饒の大母神。オシリス、イシス、ホルスで三位一体をなす。

【ジュノー (Junio、Juno)】 ローマ神話。ローマ最高の女神で、女性および結婚の守護神。

【デメテル (Demeter)】 ギリシア神話。大地の穀物生産を司り、社会秩序を守る女神。

【ケレス (Ceres)】 ローマ神話。五穀の女神。ギリシアのデメテルにあたる。

【マイヤ (Maia)】 ギリシア神話。アトラスの七人の娘の中でいちばん年上。ゼウスに愛されてヘルメスの母となった。

【サランボ (Salambo)】 未詳

【ミトラ (Mithra)】 ペルシアの太陽を意味する神。女性原理としてのこの神をミトラ、男性原理としてミトラスと呼ぶ。

【イシュタル (Ishtar)】 古代バビロニアの女神で、愛と戦いの女神。

【アスタルテ (Astarte)】 古代セム族の女神で、豊作と生殖を司る。バビロニア人、アッシリア人のイシュタルに相当する。

【アフロディーテ (Aphrodite)】 ギリシア神話。恋愛と美の女神で、ローマ神話のヴィーナスに相当する。

【^{ケルビム}智天使】 守護として神の王座を守る霊的存在。

【タイタン (Titan)】 ギリシア神話。ウラヌス（天）とガイア（地）の子。アトラス、プロメテウスなどの巨神族。

【キュクロプス (Cyclopus)】 ギリシア神話のひとつ目の巨人。

【ガニメデス (Ganimeds)】 ギリシア神話。ゼウスはこの美しい少年を寵愛し、鷲に姿を変えてさらってきたとされている。オリンポスではゼウス自身の酒盃に酒を注ぐ名譽ある役を与えられた。彼は今でも水瓶座の名で空に輝いている。

【ダンテ (Dante Alighieri)】 1265～1321。イタリアの詩人。『神曲』の著者。

【ボッカチオ (Boccaccio)】 1313～1375。イタリアの作家、詩人。『デカメロン』等の作品がある。

【ペトラルカ (Petrarch)】 1304～1374。イタリアの詩人、人文主義者。

【エラスムス (Erasmus)】 1466(?)～1536。オランダの人文主義者、神学者。文芸復興運動の先覚者。

【ヴァージル (Virgil)】 BC 70～19。ローマの詩人。ウェルギリウス。

【アエネーイス】 12巻からなる叙事詩。主人公アエネーイスがトロイ落城後、諸国を漂泊し、後にローマを建国する物語。

【ヘシオドス (Hesiodos)】 BC 8世紀ごろのギリシアの叙事詩人。

【オヴィッド (Ovid、Ovidius)】 BC43～17頃。ローマの詩人。

【ルクレチウス (Lucretius)】 BC 99～55頃。ローマの哲学者、詩人。

【ホラティウス (Horatius)】 BC 65～8。ローマの叙情詩人。ホラス。

【ティブルルス (Tibullus)】 BC 48(?)～19。ローマの詩人。

【リビウス (Livius)】 BC 59～AD 17。ローマの歴史家。著書『ローマ史』142巻のうち35巻が現存。

【タキトゥス (Tacitus)】 55～120。ローマの歴史家。著書に『年代記』『歴史』『ゲルマニア』など。

【アプレイウス (Apulius)】 BC 2世紀ごろのローマ哲学者、風刺家。

【キケロ (Cicero)】 BC 106～43。ローマの政治家、雄弁家。著述家。

【インテレクト】 ちょうどデータベースのように、外部からの情報を収集するわれわれの機関。理性（リーズン）は物事を論理的に判断するが、それに比較してインテレクトは表面上の情報の組合せしかできない。（しいて日本語に訳せば「理屈」）

第一章 愛

父なる神は智恵であり、母なる神は愛である。

父なる神は智恵の眼に宿る。智恵の眼は、眉間に位置している。愛なる神は、心の寺院におわす。

智恵と愛は、偉大な白ロッドに高くそびえる二本の柱である。

愛することは何と美しいことであろう。気高い霊のみが愛することを知っており、それを実現できる。愛は無限の優しさであり、日々昇る太陽の中で脈打つ命のように、一つ一つの原子の中で躍る生命である。

愛を定義することはできない。なぜならば愛は世界の聖なる母であるから。それは真に愛する時にわれわれの内に訪れて来るものである。

愛は心の奥深くで感じるものである。それは無上の喜びをとまなう甘美な体験であり、燃えあがる炎であり、飲む人を恍惚とさせる聖なるワインである。たった一枚の香りのよいハンカチや一通の手紙、一輪の花が心の奥底の何かを激しく揺り動かし、いつになくうっとりさせ、何とも言えない艶麗な官能のふるえを呼びおこす。

誰一人として、愛を定義できた者はいない。愛はおのれの内に生き、感じとるしかないのである。偉大な恋人どうしだけが、愛と呼ばれているものが何であるかを真に知っている。

「完全なる結婚」は、真実、愛することを知っている二人の結びつきである。真実の愛が在るためには、男と女が七つの偉大な宇宙の次元すべてにおいて、互いに敬愛しあうことが必要である。そこに愛があるためには、思考、感情、意志の三つの領域で互いの霊の真の共感（親交）が存在しなければならない。

思考、感情、意志において、二人の波動が共振する時、「完全なる結婚」は宇宙意識の七つの次元において実現される。

物質界とエーテル界の次元では結婚しているが、アストラル界では結婚していない人々がいる。また物質界、エーテル界、アストラル界では結婚しているが、メンタル界では結婚していない人々もいる。それぞれが別の考えを持っていて、妻がある宗教を信じ、夫は別の宗教を信じているなど

と、決して考え方で一致を見ることがない。

思考と感情の世界では合致するが、意志の世界では全く反対の夫婦も存在する。このような結婚は、常に衝突しあい、幸福とはほど遠い。

「完全なる結婚」は、宇宙意識の七つの次元で実現されなければならない。アストラル界にさえ達することのない結婚もある。そうすると互いに性的に惹きつけあうこともなく、それは失敗以外の何物でもない。このような種類の結婚は、全く結婚の形式のみに基づいている。中には、肉体的には結婚生活のある決まった配偶者と過ごしながら、メンタル界ではそれぞれ別の相手と結婚生活を送っている人々もいる。

実際に、「完全なる結婚」をこの世の中で見出すことは大変まれである。愛が存在するためには、思考、感情、意志の一致が必要である。

打算があるところに、愛はない。残念なことに現代生活において、愛は銀行口座や商品、プラスチックの臭いがする。収入と支出の勘定書きしか存在しないような家庭に、愛はない。

愛が心から出て行ってしまうと、なかなか戻ってくることはない。愛は捕らえにくく、すばしこい子供のようなものである。

愛もなく経済的、社会的関心だけで結ばれた結婚は、まさに聖霊にそむく罪である。このような結婚が失敗するのは明らかである。

恋人たちは、恋に陥ると往々にして愛と欲望を混同してしまう。最悪の事態は、二人が愛しあっていると信じたまま結婚してしまうことである。性行為を行ない、肉欲を満足させてしまうと幻滅がやってくる。そして残るものといえば、空恐ろしい現実だけである。

恋人たちは結婚をする前に、本当に愛しているのかを知るために、自己分析をする必要がある。情欲は愛と混同されやすい。しかし愛と欲望は全く相反するものである。

真に愛する者は、自分の血の最後の一滴までもその愛する人のために与えることができる。結婚する前に、自分自身を内観しなさい。あなたは愛する人のために、残された最後の血の一滴までも与えられる気持ちになれるか、愛する人を生かすために、あなたの命を投げ出すことができるか。深く省りみて、瞑想しなさい。

あなたと愛する人とは、思考、感情、意志において本当の一致があるか、もしそこに完全な一致がないならば、あなたの結婚は天国ではなく、地獄となることを憶えておきなさい。欲望にひきずられるままではいけない。

欲望だけでなく、誘惑を与える欲望の木の影さえも抹殺しなければならない。

愛は、甘美な親愛の稲妻のような光とともに始まり、あくことのない思いやりによって育ち、至高の敬愛で完成される。

「完全なる結婚」とは、完璧に愛し、尊敬しあう二人の結びつきである。愛には、何のもくろみも銀行の勘定もない。もしあなたが何かをもくろんだり、打算したりするならば、それはあなたが愛していないからである。

大きな一歩を踏み出す前に、深く省りみなさい。あなたは本当に愛しているのか否か。欲望の幻想に気をつけなさい。欲望の炎が生命を燃え尽くし、そこに残るのは死という恐ろしい現実だけであることを忘れずにいなさい。

あなたの愛する人の目を見つめ、その瞳の中にわれを忘れなさい。しかし、幸福になりたいのならば、欲望に捕らわれたままではいけない。



愛する者は決して愛と情欲を混同してはならない。冷静に深く自己分析をなさい。あなたの相手が魂において、あなたにふさわしいかどうかを知ることが、まず第一である。思考、感情、意志の三つの世界において、相手と完全に相性があるかどうかを知る必要がある。

姦淫は、愛の欠如による無残な結果である。本当に愛している女性は、姦淫を犯すくらいならば死を選ぶことだろう。また姦淫をする男に愛は存在しない。

愛とは、畏ろしく神聖なるものである。愛と呼ばれるそれは、世界の神聖な母なる神である。愛はその畏るべき火でわれわれ自身を神々へと変え、宇宙科学の円形劇場へ、荘厳な足どりで進み入ることを可能にさせる。



愛の女神、宇宙の聖なる母クンドリニー。処女なる蛇の火で、われわれ一人一人に生命の子を授ける。太陽のテントを持つ。

第二章 人の子

「神は愛なり。神の愛は創造する。そしてまた新たに創造する」。

甘美な愛の言葉は、敬愛の燃えるような口づけをもたらす。性の行為は、われわれの本性の恐ろしいほどの心理生理的なりリズムにおける、愛の真の相互聖体化の状態である。

男女が性的に結びあう時、あるものが創造される。敬愛が至高に達した瞬間、その男女は、実際に神々のような創造力を持つ一人のアンドロジヌスの存在となる。

エロヒムは男であり、女である。男（夫）と女（妻）が性的に結ばれて、至高の愛のエクスタシーにある間、二人は実際に畏敬すべき聖なるエロヒムとなる。

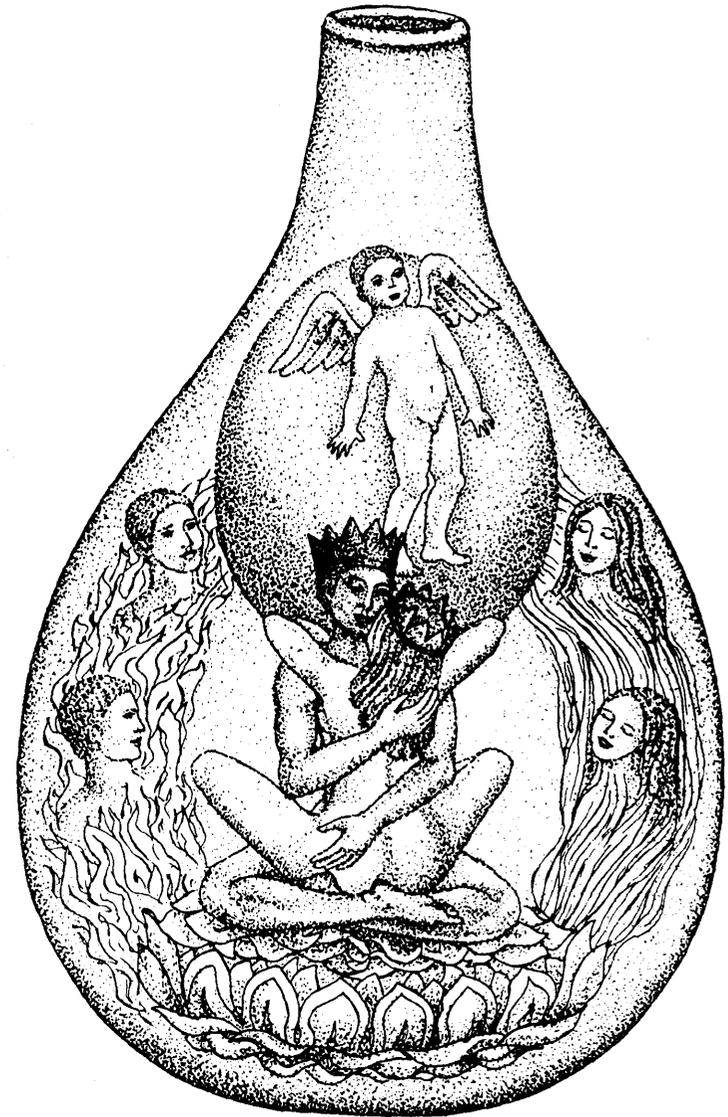
性的に結びあったそのような瞬間に、われわれは聖錬金術の実験室（祈りの部屋）に実際にいることになる。

偉大な超視覚者ならば、その瞬間、二人のまわりをすばらしい聖なる輝きがとり巻いているのを見ることができる。その時、われわれは高等魔術の神聖なる王国へと浸透する。そしてこの畏るべき聖なる力で、われわれの内なる悪魔を滅ぼすことができるのである。さらに、この聖なる力は、われわれを偉大なる秘儀司祭へと変えることができる。

性の行為が長くなるにつれて、また甘美な愛撫による愛のエクスタシーが高まるにつれて、うっとりとするような精神的で至高なる艶麗な官能のふるえを感じる。その時、二人は宇宙的な電気と磁気で充電され、宇宙の強烈な力が彼らの霊の奥深くに蓄積される。そしてアストラル体のチャクラが輝き始め、偉大なる宇宙の母の神秘的な力が、われわれ有機体のあらゆる経路の中を循環するのである。

燃えるような口づけと睦みあう愛撫が、宇宙のオーラを通して感動的に響きわたる不思議な調べに変えられる。

その無上の喜びの瞬間を文字や言葉で説明することはできない。そして火の蛇が揺り動かされる。心臓の火はかきたてられ、父の大いなる光線は、性的に結びあった男女の額で荘厳に満ちて輝く。



聖錬金術の実験室

火と水の交差、男と女の交差から、黄金の霊体を持つ人の子（超人）が誕生する。人の子の誕生とは、まさに性的な問題なのである。

もし、男と女が痙攣（オルガズム）に達する前に身を引く方法を知るならば、すなわち甘い喜びのさなかに、動物的エゴを支配することのできる力と意志を持てるならば、子宮の中でも、また外でも、そのほかのどんな所にも、精液をこぼすことがなく性の行為を終わらせることができる。その時、性の奥義がなされたことになるのである。これが神秘学で言うところの「アルカーノ A・Z・F」である。

アルカーノ A・Z・F により、あの驚くべき光のすべて、宇宙の流れのすべて、聖なる力のすべてを保持することができる。その時、われわれの中の神聖な聖霊の火、クングリニーが目覚める。そして、われわれを畏敬すべき神聖なる神々へと変えるのである。

しかし、精液をこぼしてしまったならば、われわれは宇宙の流れから切り離されてしまう。そしてルシファーの邪悪な力と致命的な磁気、血の色をした光線が、二人の霊の中を貫通する。その時、天使は嘆きながら飛び去ってしまい、エデンの園の扉は閉じられてしまう。愛は幻滅へと変わり、愛の魔法の効力は失われ、ただ涙の谷という暗い現実だけが残る。

性の痙攣（オルガズム）に至る前に退く方法を知る時、われわれの魔法の力を持つ火の蛇が目覚める。

カバリストは、第九球体について語っている。カバラでいう第九球体とは、性のことである。

神秘なる古代において、第九球体への降下は、秘儀司祭の至高の威厳を示す最大の証明であった。イエス、ヘルメス、仏陀、ダンテ、ゾロアスターなどは、世界や動物、そして人間や神々の起源である火と水の仕事をするために、第九球体へ降りて行かなければならなかった。真正にして正統なる白のイニシエーションはそこから始まるためである。

「人の子」は第九球体で生まれる。「人の子」は火と水から生まれる。

錬金術師が火に熟達する仕事を成し遂げた時、金星のイニシエーションを授かる。

子羊と霊との婚約は霊の最高の祝祭である。かの偉大なる光の主が霊に入る。主は、人間の内に具現し、霊は神聖化される。この神と人間との一体化から、大いなる確信を持って、われわれが敬愛して呼ぶところの救世主、「人の子」が生まれる。

至高の敬愛がもたらす最高の勝利のしるしは、世界の飼葉桶の中で、「人の子」が誕生することである。

互いに愛しあう男と女は、不思議なハーモニーで栄光のエクスタシーを奏でる二つのハーブである。それは、定義することができない。もし定義したならば、その美しい価値は、損なわれてしまうであろう。それが愛である。

口づけは、互いに敬愛する二つの霊がともに捧げあう、深く神秘的な献身である。そして性の行為こそ、われわれを神々へと変える鍵である。神々、そう、まさに神々は実在する。あなたがたは、真にわれわれを愛している存在を知っている。まぎれもなく神が愛であることを知っている。愛すること、それは何と美しいことであろうか。そしてさらに愛は愛をはぐくむ。その愛だけが、錬金術の結婚を可能にするのである。

愛をまっとうした人、イエスは、ヨルダン川で金星のイニシエーションを達成した。バプテスマ（洗礼）の瞬間、キリストは、松果腺を通して、尊敬すべきイエスの内部に入った。言葉は肉となり、われわれの間に住まわれた。われわれはこの方の栄光を見た。父のひとり子としての栄光であった。それは恵みと誠に満ちていた。



バプテスマのイエス

頭上の鳩は、イエスの内部に入ったキリストの象徴

その言葉が、力を与えるということを知る者だけが、その言葉を具現した。これまで、その言葉を発する者は誰一人としていなかった。

『ヨハネの黙示録』の中で、黙示の聖者は人の子、われらの口づけの子について、次のように述べている。

「わたしは、主の日に御霊を感じた。そして、わたしはうしろの方で、ラッパのような大きな声をするのを聞いた。この声はこう言った。『私は、アルファであり、オメガである。はじめであり、終りである。あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤにある七つの教会、すなわちエペソ（尾てい骨の磁気センター）、スミルナ（性腺の磁気センター）、ペルガモ（へその部分に位置する太陽神経叢）、テアテラ（心臓の磁気センター）、サルデス（創造的なものの磁気センター）、フィラデルフィア（智慧の眼、眉間に位置する超視覚のセンター）、ラオデキヤ（聖者の王冠、松果腺の磁気センター）へ送りなさい』

そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような方がいた」（すべてのマスターたちがお召しになるリンネルのチュニック、栄光のチュニックである）。黙示録の聖者が見た七つの燭台というのは、脊髄にある七つの教会のことである。

「そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった」（いつも清らかで純潔）。

「その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった」（人間の水、精液）。

「その右手に七つの星を持っていた」（脊髄の七つの教会を支配する七人の天使）。

「口からは、鋭い両刃の剣が突き出ており（言葉）、顔は、強く照り輝く太陽のようであった」。

「わたしは彼を見た時、その足もとに倒れて死人のようだった。すると、彼は右手をわたしの上において言った、『恐れるな。わたしははじめであり、終りであり、また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。アーメン。そして、死と黄泉との鍵を持っている』」。

こうして霊の中に入った内なるキリストは、彼女に変容する。彼（キリスト）は、彼女（霊）に変容し、彼女は、彼に変容する。彼は、人間化され、彼女は、神聖化される。この神と人間との錬金術的結合により、大いなる確信を持って、われわれが敬愛して呼ぶところの救世主、「人の子」が誕生するのである。

錬金術師は言う。われわれは、月を太陽に変換すべきだと。月とは、霊のことである。太陽とは、キリストのことである。月を太陽に変えることは、火によってのみ可能である。この火だけが、完全なる結婚の愛の生活に、火をともしることができるのである。

完全なる結婚は、互いにこの上なく愛しあう二人（夫婦）の結びつきによってのみ可能なことである。

神はこのような完全なカップルの上で、ひときわ輝く。

「人の子」は、燃え立つ火、激しい風、荒れ狂う大洋の波、香りを放つ大地を支配する力を持っている。

性の行為とは、非常に畏敬すべきものである。それゆえにこそ、黙示録で次のように述べられている。

「勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない」。

【リアリズム】 一般には現実主義という意味であるが、ここではそういう人間の心身の状態をいっている。

【相互聖体化】 原文のスペイン語は、Consubstancialization。神聖な愛の行為によって、物質的な人間の心身がキリスト化され、本質と一体化することを意味している。

【男女】 七つの偉大なる宇宙の次元すべてにおいて、互いに敬愛しあっている夫婦のこと。一般にいうフリーセックスの男女の性的な結びつきではない。肉体だけで結びついた男女の性は、精神的にも肉体的にも退廃をもたらす恐ろしい結果となる。

【アンドロジヌス】 日本語に訳せば、「男女（おめ）」とか「陰陽一体」という意味になる。その意味するところは、人間的な性別を超越した高次の存在になることである。第31章注参照。

【エロヒム(Elohim)】 ヘブライ語で女神たち及び神々を意味する。

【錬金術】 一般に「錬金術」というと、すべてのものを精錬して、それを金に変換させようとする前近代的な化学技術のことであるが、ここでいう錬金術はそういう意味ではない。それは、本来の錬金術の秘教的な意味で使われている。すなわち、人間の霊体を黄金化することである。永遠なる黄金の霊体を創造するための術であり、そのための実験と祈りの部屋である。

【秘儀司祭(Hierophant)】 古代、特にエジプトやギリシアの神秘的宗教において、イニシエーションの儀式を司った司祭。アデプト。

【動物のエゴ】 「エゴ」とは、われわれが持っている欠点のすべてを表現したものである。ここでいう動物のエゴとは、神聖な性の行為を動物的なものとしてしまう肉欲、情欲、色欲などを意味している。

【アルカーノ A・Z・F】 序章注参照。

【カバラ】 ユダヤの「隠された伝説」「秘密の教え」である。これを研究する人をカバリストという。

【バプテスマ】 洗礼。イエスはヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。マタイ福音書の第3章13～17節参照。

【ヨハネの黙示録】 新約聖書の最後に収められている書。ここで引用されている文章は、その1、2、3章の一部である。「黙示(Apocalypsis)」とは、啓示を意味し、その完全な表題は、「神が、すぐにも起こるべきことをその僕たちに示すためにキリストにあたえ、そして、キリストが御使いをつかわして、僕ヨハネに伝えられたイエス・キリストの啓示」である。

第三章

光と闇の大いなる戦い

光と闇の戦いの根源

エレミア書第21章8節に「見よ、わたしはあなたがたの前に、二つの道、いのちの道と死の道を置く」と書かれている。男女は自らを神々あるいは悪魔に変えるために、性のふれあい、愛の妙なる感覚、口づけを用いることができる。

生命のあけぼの以来、光の勢力と闇の勢力の間に大いなる戦いが続けられてきた。この戦いの隠された根源は、性の中にある。

性の神秘についての正しい解明が存在する。白魔術師は、決して射精することはない。しかし黒魔術師は必ず射精する。白魔術師は脊髄経路を通して、魔術的な力を持つ火の蛇を上昇させる。黒魔術師は、蛇を人間の原子地獄へ下降させる。

神々と悪魔は、終わることのない戦いの中に生きている。神々は、純潔の教えを擁護する。一方、悪魔は、純潔を憎む。性の中に、神々と悪魔の戦いの根源がある。

大いなる戦い、それはアストラル光の中で行われる。アストラル光は、大自然の過去、現在、未来のあらゆるかたちが貯えられているところである。アストラル光は、古代の錬金術師の水銀とマグネシアとメデアの天かける龍、キリスト教徒のインリ(INRI)、ジプシーのタロットである。アストラル光は、太陽の光軸からスパークして離れた大いなる性の火である。そしてそれは重力と大気の高さによって、地球に定着する。太陽はこのすばらしい光を、引きつけたり、撥ねつけたりする。またアストラル光は、アルキメデスのてこである。賢者アルキメデスは、「私に支点を与えよ。そうすれば宇宙を動かしてみせる」と言った。

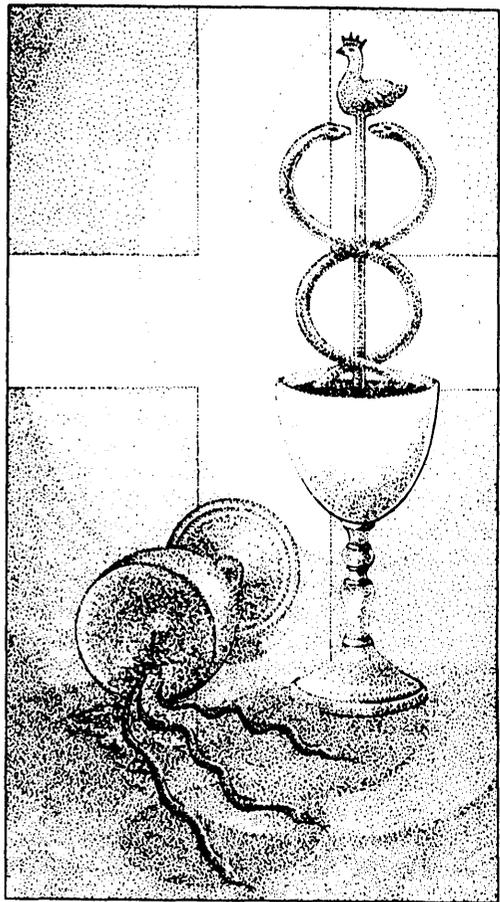
精液は、人のアストラル液である。精液の中にアストラル光がある。精液は、すべての力の鍵であり、すべての帝王・支配権の鍵である。

アストラル光は、二つの極を持つ。ポジティブな極とネガティブな極である。上昇する蛇は、ポジティブである。下降する蛇は、ネガティブであ

る。上昇する蛇は、荒野でイスラエル人たちを癒した青銅の蛇であり、下降する蛇は、エデンの園で誘惑した蛇である。

無限のやさしさと至高の純潔さをもって、愛し、また口づけすることを
知る時、蛇は上昇する。肉欲をむさぼり、杯をこぼす時、蛇は狂喜に酔い
しれながら、まっさかさまに人間の原子地獄へ向って落ちていく。

光の領域で生きる存在、彼らは互いに敬愛しあう。闇の領域に生きる存
在、彼らは肉欲の杯に酔いしれてその杯をこぼしてしまう。彼らは、自分
自身の肉欲の火によって消耗する。



聖なるワイン（性エネルギー）を保てば、蛇（クンドリー）は上昇し、
勝利の勝どきをあげる。聖なるワインをこぼせば、蛇は下降し、われわれ
のエゴを増大させる。

地球はクリストとヤーヴェ（Jahve）によって統治されている。両者の戦
いは、永遠に続く。クリストは、神々の長であり、ヤーヴェは、悪魔の長
である。

ヤーヴェは、山頂で、クリストを誘惑した大変邪悪な悪魔である。その
時、「イタバボ（Itababo）、もしあなたがひれ伏して私を拜むなら、地上
のすべての国々をあなたに引き渡そう」と言って、クリストを誘惑した。
その時、クリストは「サタン、サタンよ『神を試みてはならない。あなた
の神である主だけに仕えよ』と書いてある」と言った。

ヤーヴェは、たいへん邪悪な墮天使である。ヤーヴェは、悪の天才であ
る。一方クリストは、白の大ロジの長である。ヤーヴェは、クリストの
対抗者であり、黒の大ロジの長である。光の勢力と闇の勢力の戦いは永
遠に続くものである。この戦いの根源は、性の中にある。精液は、その戦
いの戦場である。精液の中で、天使と悪魔の死をかけた戦いが行われるの
である。脊髄における天使と悪魔の大いなる戦いが、性である。そこに、
問題がある。そこに、すべての白と黒の教えの根源がある。クリストは、
クリストの活動のプログラムを持っている。ヤーヴェは、ヤーヴェの活動
のプログラムを持っている。選ばれた人だけが、クリストに従うが、人類
の大多数はとりつかれたように、ヤーヴェに従う。それにもかかわらず、
彼らはみな、十字架のうしろに隠れている。

アストラルの十字架の上で、天使の大群と悪魔の大群が戦っている。そ
れぞれの天使一人一人に、それぞれの悪魔が対応している。

ダブル（白と黒）

人類のすべてが、それぞれのダブルを持っている。これがツインソウル
（対霊）の神秘の一つである。デバダッタはブッダの兄弟であり対立者で
ある、とラマ僧は言う。デバダッタは、地獄の王である。ダブルは、その
対のダブルと、あらゆる点で似ている。ダブルどうしは、相似の関係にあ
り、正反対の相似という違いがあるが、同じ性向を持っている。白の占星
術師に対応して、黒の占星術師が存在する。あるマスターが、白の性の神
秘を教えるとすれば、彼のダブルは、黒の性の神秘を教えるだろう。ダブ
ルどうしは、正反対であるということはあるが、それ以外はすべての点で
同じである。

ダブルどうしの容姿は、よく似ている。なぜならば、彼らは双生児（ツイン）だからである。これは神秘学における偉大な神秘の一つである。すべての白の霊に、それと対抗して戦う正反対の霊、黒のダブルが存在するのである。

愛と反愛（Anti-Love）は互いに対抗しあう。アナエル（Anael）は、愛の天使である。リリット（Lilith）は、アナエルの黒のダブルであり、反愛を代表している。古代において、偉大な魔術師ヤンブリチユスは、二人の天才を呼び出した。その時、川から愛と反愛、エロスと反エロス、アナエルとリリットの二人の子供が現われ出た。ヤンブリチユスの奇跡をまのあたりに見た群衆は、その偉大な魔術師の前にひれ伏した。

ニルヴァーナ（涅槃）に向う困難な道を歩む使徒が、愛の天使アナエルを瞑想する幸運を得る時、エクスタシーに満たされる。アナエルは、彼を呼ぶ方法を心得ている者の前に、姿を現わす。アナエルは、あけぼのの美しさを持つ子供である。愛の天使を前にすると、失われたエデンの園の無垢をとり戻したように感じられる。アナエルの髪は、^{かが}黄金色の滝のようになって、雪のように白い肩へ落ちている。愛の天使は、あかつき色の輝く顔をして、白いチュニック（上着）を着ている。それは、言葉で言い表せないほどに美しい。アナエルは、音楽と愛の天使、美と優しさの天使、すべての恋人たちの喜びのキューピット、すべての敬愛がもたらすエクスタシーである。

リリットは、アナエルの敵対する兄弟であり、宿命的な対立者である。リリットは、非常な悪意に満ちた子供であり、すべての愛の詐欺に係わる地獄の天使である。また、人間の原子地獄の君主である。

リリットは、愛の天使のまなざしに耐えることができない。しかし彼は、愛の天使の影である。リリットは、たいへん意地の悪い子供のような風采をしていて、髪は、見苦しいほどに色あせている。彼の意地の悪い顔と、黒と青のチュニックは、明らかに彼の世界が、残酷さと苦しみからなりたっていることを示している。

アナエルは、金星のポジティブな光線を代表している。リリットは、金星のネガティブな光線を代表している。

黒の月（リリット）

偉大なカバリストの言い伝えでは、アダムにはリリットとナヘマ（Nahe-mah）という二人の妻がいた。リリットは、中絶の母、弱い者いじめの母、性的墮落の母、同性愛の母、幼児殺しなどの母である。

ナヘマは、不義姦通の母である。ナヘマは、その美しさと処女のような魅力で誘惑する。

神々の法によって与えられた妻を裏切って、不貞を働いた男は、眉間に、ルシファーの印を与えられる。ある男が自分に相応しない女性と結婚する時、また法にそむいた結婚を行う時、それが間違いであると気づくのは容易である。なぜならば、結婚式のその日、花嫁の頭に禿げが現れるからである。花嫁は頭を見られないように、ヴェールで完全にそれを隠すということをする。女性は、このことを本能的な仕方で行うのである。髪の毛は、女性の純潔のシンボルである。ナヘマの結婚式では、髪をのばしているのは禁じられている。それは、法である。

光の天使と闇の天使は、永遠に続く戦いの中に生きている。光の天使と闇の天使の大なる戦いの根源は、性の中にある。

すべての惑星は、偉大な法則に従って二つの極性を持っている。火星のポジティブな光線は、エロビム・ギボール（Elohim Gibor）によって代表されている。火星のネガティブな光線は、エロヒムのダブルが代表している。このダブルは、アンドラメレック（Andramelek）と呼ばれている。この邪悪な悪魔アンドラメレックは、現在、中国の地に生れ変わっている。

月のポジティブな光線を代表する最高の長は、エホヴァ（Jehovah）である。チャバホット（Chavajoth）は、まさにエホヴァの対抗者、敵対の兄弟である。エホヴァは、月のポジティブな光線を支配し、白の性の神秘を教えている。一方、チャバホットは、黒の性の神秘を教えている。

二つの月が存在する。白の月と黒の月である。これら二つの月は、性の宇宙的パワーの女性的な力を代表している。

「音」が進化していく過程で、創造がなされる。その音は、性的表現をとる。天使たちは、創造的などの性の力を用いて創造するのである。

原初から発した未顕現なる音は、絶え間ない発展の過程を経て、エネルギー形態の安定した重い物質へと変化していく。原初から発した未顕現なる音は、かすかな声である。原初の音は、その中に陰陽（男女）の性の力

を持っている。そしてその力が増大し複雑化するにつれて、われわれは困難の多い物質の奈落へと降りていくのである。

音のポジティブな極は、驚くべき力である。それは、幸福だけが支配している未顕現なる絶対境へと私たちを導く力である。音のネガティブな極は、苦しみの谷間へとわれわれを導く闇の力である。ポジティブな極は、太陽に属し、クリスティックで神聖な極である。ネガティブな極は、月に属し、月によって代表される。白の月の陰がリリットである。性の消耗の起源は、リリットにあり、全体から分離した個別性は、リリットを起源とする。我（エゴ）の起源は黒の月である。黒の月がリリットである。

エホヴァは白の月とともに働き、チャバホットは黒の月とともに働く。月からの諸々の力の干渉なくして、現象世界の創造はありえない。不幸にも、黒の月の暗い力が干渉し、創造は傷つけられる。

太陽と月が音のポジティブな極とネガティブな極を代表している。太陽と月によって創造が引き起こされる。太陽は夫であり、月はその妻である。悪魔リリットは、太陽と月の間に割り込み、偉大な仕事に損害を与える。上なるものは下なるもののごとし。男は太陽であり、女は月である。リリットは、男女を誘惑して性エネルギーを消耗させ、彼らを奈落へ連れ込む悪魔である。リリットは黒の月である。それは白の月の陰の側面であり、我（エゴ）と全体から分離した個別性の起源である。

エホヴァは肉体を持っていないが、チャバホットは肉体を持っている。チャバホットは、現在ドイツで生まれ変わり、戦争のベテランとして名が通っている。彼は、黒の大ロジのために働いているのである。内的世界で黒魔術師チャバホットは、赤いチュニックと赤いターバンを身にまとっている。この悪魔チャバホットは、暗いほら穴で黒の性魔術の神秘を開拓し、ヨーロッパ人の弟子をたくさん持っている。一方、エホヴァは通常エデンの園に住んでいる。エデンの園は、エーテルの世界である。エデンの園に戻る者は誰であろうと、神エホヴァによって迎え入れられる。エデンの園の扉は、性である。

モンセラットの寺院

光の寺院と闇の寺院が、アストラル界にある。光の寺院は、光り輝いている。他方、闇の寺院は、暗い気配に包まれている。

スペインのカタロニア地方には、ヒーナス（Jinas）の状態にある不思議な寺院がある。モンセラットの寺院がそれである。この寺院では、イエスキリストが最後の晩餐の時に、ブドウ酒を飲んだ銀の聖杯が保存されている。そしてその聖杯の中には、救世主の凝固した血が残されている。言い伝えによれば、アリマタヤに住んでいたローマ議員のヨセフは、十字架上の救世主の足もとから、本物の血をその聖杯に満たしたという。愛すべき方の傷口から血は流れ出て、聖杯は満たされた。

モンセラットの寺院と聖杯は、誰の眼にも見えるものであった。しかし後になって聖杯とともにその寺院は（普通の人には）見えないものとなった。その寺院はヒーナスの状態で存在している。聖杯とともにその寺院は超空間の中へ隠れてしまったのである。現在では、ヒーナスの状態になれば（アストラル体で、あるいは、肉体を伴って）、その寺院を訪れることができる。

肉体は、三次元世界から抜け出すことができる。そして、四次元の中へ移動することができるのである。これは、超空間をたくみに使いこなすことで実現できる。近い将来、天体物理学によって、超空間の実在が実証されることであろう。



メキシコのタイガースの騎士

アメリカ大陸の先住民族は、ヒーナスの科学について、深い知識を持っていた。メキシコのタイガーの騎士は、肉体のまま超空間に入る方法を知っていた。アメリカには、ヒーナスの状態の沼や山、また寺院が存在する。メキシコのチャプルテペックの寺院も、ヒーナスの状態で存在している。

マスター・ウィラコッチャは、チャプルテペックの寺院で、イニシエーションを受けたのである。

すべての光の寺院のそばには、闇の寺院が存在している。光がこの上もなく光り輝いているところでは、闇の景観は対照的に、さらに一層暗いものとなる。白の杯の騎士と黒の杯の騎士は、必然的に抗争しあう運命にある。

スペインのサラマンカにある魔女のサロン（集会場）と、モンセラットの寺院とは、宿命的な対立の関係にある。

白の寺院、黒の寺院

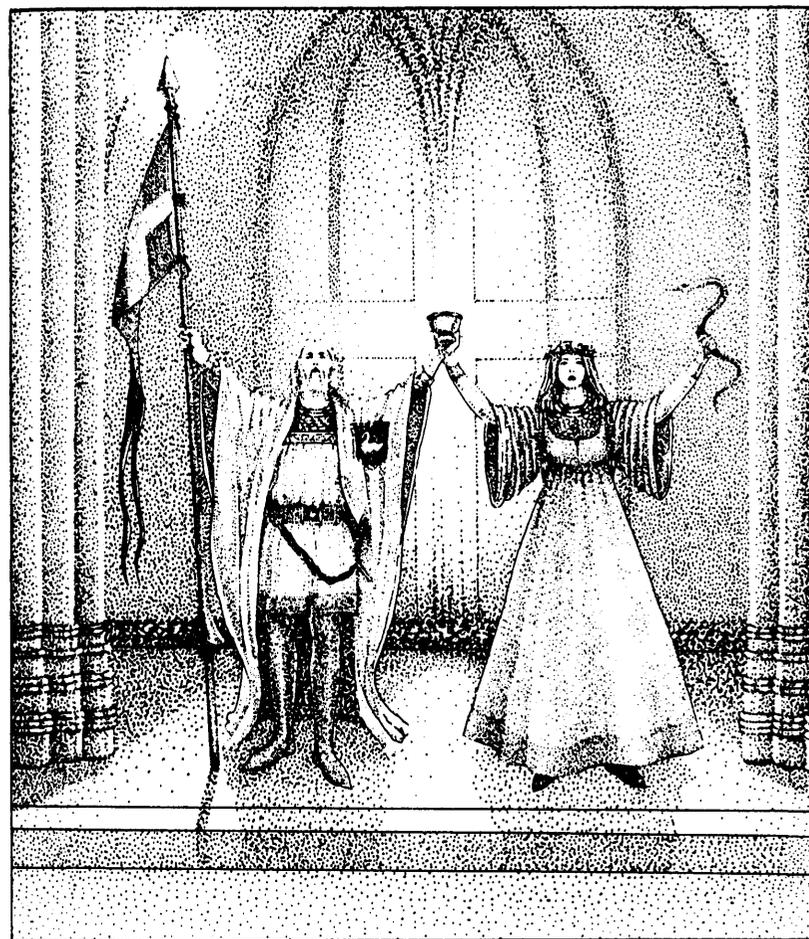
この奇妙で不思議な反対の類似について、考えてみよう。

白の杯の寺院は、偉大なる光の、すばらしい修道院である。他方、サラマンカの寺院は、豪華なつくりの闇の寺院である。

モンセラットの修道院は、二階建である。サラマンカの魔女のサロンも、同じように二階建である。かぐわしい香りの美しい庭園が、モンセラットの寺院をとりまいている。魔女のサロンにも、そこをとりまくロマンチックな庭園があるが、その花々からは、死の臭気がたちこめている。どちらの寺院でも、秩序と教養が守られ、神聖な事柄と愛が語られている。

このようなことを読むと、読者の方は驚かれるであろう。邪悪な寺院で、なぜ神聖な事柄と愛が語られるのか、疑問に思うであろう。親愛なる読者よ、どうか惑わされないでほしい。黒の杯の騎士は、子羊の毛皮をかぶったオオカミであるということを、思い出さない。

邪道の帰依者たちは、自分のクリスティックな精液を射精して喜ぶのである。それが、彼らの中に黒魔術師がいるという証拠である。彼らの哲学は、不幸な宿命の哲学である。善良であるということは、彼らにとっては悪であり、悪のすべてが、彼らにとっては善となる。彼らにとって、ヤーヴェの教えは神聖なものであり、クリストの教えは、悪魔的である。闇の神々は、クリストを非常に嫌っている。奈落の子も聖なる母をひどく嫌っ



モンセラットの寺院

この寺院には、イエス・クリストの銀の聖杯が保管されている。最後の晩餐の時に、彼はそれでブドウ酒を飲み、また十字架上の彼の傷口から流れ出た血がその聖杯を満たした。

ている。奈落の領域では、聖なる母とその子に祈る者は、手ひどい仕打ちを受けるのである。神秘学探求者が、アストラル体で魔女のサロンに浸入する時、たいへん美しい優美ならせん階段のところにいる自分に、気づくはずである。その階段は、サロンの中で最も秘密とされている所へ導くものである。そのサロンは、18世紀に、贅を尽して作られた豪勢な大邸宅である。魅惑的なじゅうたん、ナヘマの邪悪な美しさが、サロンにある無数の鏡に反射している。宿命の大邸宅の支配人、ドン・ラモンルビフェロは名の知れた黒の杯の騎士、恐ろしい闇の悪魔である。

魔女のサロンに通う弟子たちは、なんと不運な人たちであろう。不幸を宿命とするナヘマ、その美貌によって弟子たちは誘惑される。ナヘマの魅惑によるあの手この手を尽した甘い魔法によって誘惑されるのである。その結果、弟子たちは、奈落へ転落していくことになる。そこは、泣き叫ぶ声と歯がみだけが聞こえる世界である。それならば、生れてこなかったほうがよかったか、あるいはひきうすを首につりさげて海の底に身投げするほうがよい。

モンセラットの寺院には、救世主の血が入っている銀の杯があり、それは栄光に輝いている。サラマンカの寺院には、黒の杯があり、その暗黒さがあたりをおおっている。モンセラットの寺院では、宇宙的祝祭が行われ、サラマンカの寺院では、冒瀆的な^{ゴット}舞踏会やむかつくような魔宴が行なわれる。白の杯の騎士は、クリストと聖なる母を崇拜する。黒の騎士は、ヤーヴェと大自然の宿命のシャドウ（陰）を崇拜する。このシャドウは、サンタマリアと呼ばれ、このサンタマリアの支配する王国が奈落である。光の力と闇の力の大きい戦いは、はるか昔から終わることなく続いている。

ヒ ー ナ ス

性は、脊髄の中の大きい戦いである。白魔術師は、蛇を上昇させようとする。そして、完全なる結婚の道に従う。しかし、黒魔術師は姦淫と姦通を好む。

白の大ロッジのマスターたちが存在する。また黒の大ロッジのマスターたちも存在する。白の大ロッジの弟子たちが存在し、黒の大ロッジの弟子たちも存在する。

白の大ロッジの弟子たちは、アストラル体で意識的に、そして積極的に

移動する方法を知っている。黒の大ロッジの弟子たちもアストラル体で移動する方法を知っている。

われわれは、子供の時から魔女や妖精について多くの物語を聞かされてきた。祖母たちは、魔女の物語（真夜中に、ほうきに乗って雲を通り抜けて空を飛ぶ魔女の物語）を話してくれた。

神秘学や神智学、バラ十字思想などを学ぶ者は、このような物語を信用できないであろう。しかし、魔女は、本当に存在しているのである。祖母たちは、魔女がほうきに乗って空を飛ぶと信じているが、事実はそのではなく、魔女たちは、空中を移動する方法を知っているということである。魔女と呼ばれている人たちは、空中を肉体のまま移動する。魔女たちは、超空間を利用する方法を知っているので、ある場所から他の場所へ肉体のまま移動するのである。近い将来、宇宙物理学によって、実際に超空間が存在していることが明らかにされるであろう。それは超幾何学によって証明することができる。肉体が超空間の中に潜んで見えなくなる時、そのことをヒーナスの状態に入ったという。ヒーナスの状態になれば、肉体は重力の法則から解放され、超空間の中に浮く。

ヴォリュームがあり、超ヴォリュームがある。魔女と呼ばれている人たちは、われわれが生きているところの曲った空間の超ヴォリュームの中を移動する。空間の曲りは、惑星としての地球の範囲だけを取り上げてみても適用できない。空間の曲りは、星が満ちている無限の宇宙を取り上げてみて適用できるものである。サイクロン（低気圧）ができるということは、地球が回転して動いているという証拠である。また筋道の通った確かな証拠がある。無数の太陽を含む星々の世界が回転しているということは、空間が曲っているということの確かな証拠である。

白魔術師もまたヒーナスの状態に体を置くことを知っている。イエスは、超空間の知識をたくみに利用し、ガリラヤ湖の上を歩いた。仏陀の弟子たちも、超空間の利用により、岩を端から端まで貫通することができた。インドでは、超空間を利用して火の中を燃えることなく渡ることのできるヨギがいる。ペテロは、超空間を使って監獄から抜け出し、死刑から逃れたのである。偉大なヨギ、パタンジャリの金言では、肉体の上にサンニヤマを行うことにより、肉体は綿のように軽くなり、空中に浮くことができると述べている。

サンニヤマは、三期より成る。集中、瞑想、法悦である。第一期は、ヨ

ギは肉体に集中すること。第二期は、眠気に打ち勝ちながら肉体について瞑想すること。第三期は、法悦に満たされて、ヒーナスの状態、床から体を浮び上がらせる。その時、超空間の中に浸透し、重力の法則から解放され、空中に浮き上るのである。サンタマリアの帰依者（魔女と魔法使い）たちも、同じことを黒魔術の法式で行なう。

白魔術師は、ヒーナスの状態になった体を高い次元の中へ浸透させる。黒魔術師は、ヒーナスの状態になったその肉体を低い次元の中へ浸透させる。

自然界すべては、上にも下にも無数の次元が常に存在する。われわれは今いる次元を去ってもう一つの（高い次元あるいは低次の）次元へ浸透することができる。これが法である。

聖 十 字

サンタマリアの支配する王国は、失敗者たちの奈落である。光の王国は、神々の都市である。

至高の純潔の状態を達成した者だけが、光の領域で生きることができる。奈落においては、純潔は罪となり、姦淫が法則となる。

ヤーヴェ・セモ（Javeh-Semo）の優雅なサロンを見る者は、きらびやかさと陽気さで、目がくらんでしまうことだろう。そこで何千人もの黒の女魔術師と出会うことだろう。黒の女魔術師たちは、大変邪悪な美しさを呈している。未熟な者が、邪悪な領域に侵入するならば、いともたやすく過ちの道へ迷い込み、破滅の待ちうける奈落へ永遠に落ちることだろう。ナヘマの邪悪な美しさは、危険をはらんでいる。

光の寺院には、愛と智慧だけが見られる。闇の住人は、低い次元で生きているため、光の寺院へ入ることはできない。

ナヘマの美しさは、宿命的な災いの美しさである。強く愛しい永遠の愛を誓った二人、幸せになるべき二人なのに、ナヘマの美貌にたぶらかされ、他の人を愛してしまい、絶望の奈落へ落ちていく。ヤーヴェ・セモのサロンでは、ナヘマの美しさが、不幸の宿命のもとに、きらびやかに輝いている。

黒魔術師にも、聖なるシンボルがある。銅の手おけがそれである。白魔術師の神聖なシンボルは、聖十字形である。後者のシンボルは男根崇拜で

ある。外形上、子宮に対して垂直に男根を挿入することで十字形を形づくる。この十字は創造の力を持つ。聖十字の印なくして、創造はありえないのである。動物たちは交わる。また原子や分子も生命を永続させるために交わる。

完全なる結婚の十字の上で、祝福された魂のバラが咲き誇る。完全なる結婚は、互いにこの上なく愛しあっている二人（夫婦）の、結びつきである。愛は、人類が成しとげることのできる最高の宗教である。

黒魔術師は、完全なる結婚を憎んでいる。ナヘマの不幸を呼ぶ美しさとリリットの性的犯罪は、完全なる結婚と宿命的に対立しあうものである。



バラ十字とペリカン

バラ十字は、イエスの献身のシンボルであるとともに「完全なる結婚」のそれでもある。バラはこのうえなく愛しあう二人の真実の愛を指し、十字は男女の交差（性の結びつき）を指している。また、下のペリカンは、くちばしで自らの腹を刺して血を流し、わが子を育てている。これもバラ十字と同じく、イエスの献身を表現している。

サタンと「我」

白魔術師は、内なるキリストを崇拝し、黒魔術師は、サタンを崇拝する。サタンは「我」であり、私自身と思っているものであり、生れ変りを繰り返すエゴである。

実際、「我」なるものは、(アストラル界の)入口にいる目に見えない門番である。エゴは欲望を満たすために絶えず生れ変わってくるものである。「我」とは、記憶であり、この我の中に、昔からのパーソナリティーのすべての記憶がある。この我が、アーリマン、ルシファー、サタンである。

われわれの本当の自己は、内なるキリストであり、宇宙の本性に由来している。それは、優れている我とか劣っている我とか、そういう種類のものではなく、人格を越えた普遍的かつ神聖なるものである。われわれの本当の自己は、エゴなどといった我のいかなる概念をも超越しているものである。

黒魔術師は、自己のサタンを強化させる。そして、その上で、自分の中の宿命的な力を確固なものとするのである。人間の邪悪さの度合いに比例して、その人のサタンの姿と大きさが決められる。われわれが完全なる結婚の道を歩き出すと、サタンの大きさと醜くさは、減少する。サタンは解体させなければならない。それは、完全なる結婚によってのみ可能となるのである。

完全なる人(天使)

われわれは、自分自身を天使の状態にまで引き上げねばならない。それを可能にするのは、巫女としての妻との性の秘儀の実行だけである。天使は完全な人間である。

白と黒のポジティブとネガティブの二通りの性の秘儀がある。白の性の秘儀を実践する人は、決して射精することはない。射精をする性の秘儀は、黒魔術である。射精のない性の秘儀が、白魔術である。ボン教や紅帽派などのチベットタントラの黒魔術師たちは、射精後、膣の中から精液を集める。女性の性液と混ぜ合わされた精液は、尿道を使った暗い方法で、再び吸い上げられる。この黒のタントリズムは、完全にネガティブな形で蛇を目覚めさせる。そして、それは不幸な結果をもたらす。その蛇は、脊髄の



性の秘儀を通じて、われわれは天使に変身する。

経路を通って上昇せず、人間の原子地獄へ向って降下するのである。そしてそれが、恐るべきサタンの尾となる。ボン教や紅帽派の僧が、このような方法を行うことは、内なるキリストから永遠に離れてしまうことを意味する。そして、永久に恐ろしい奈落に沈むことになるのである。

白魔術師は、射精をせず、完全なる結婚の道を歩む。ボン教や紅帽派の僧は、クンドリーニを目覚めさせるために、太陽と月の原子を結合させるあの不幸な方法を熱望する。そのような無知ゆえ、内なる神から永久に離れてしまう結果になるのである。白魔術師も彼ら自身の性の実験室で太陽と月の原子を混ぜ合わせる。そのために完全なる結婚がある。女性に祝福あれ！ 愛に祝福あれ！

白と黒の魔術師たちの大いなる闘いの根源は、彼らの性の中にある。エデンの園で誘惑した蛇は、荒野でイスラエル人を癒した青銅の蛇と互いに戦っている。蛇が上昇すると天使となり、下降すると悪魔になる。

ブラフマの糸を通して降りてくる純粋なアカーシャの三つの氣息は、性の秘儀の間、強化される。魔術師が射精をすると、何百万の太陽原子を失う。そしてその代わりに、興奮した運動によって性の器官が集めた何百万の悪魔的な原子が、射精の瞬間に入れ替わる。悪魔的な原子は、ブラフマの糸を通して脳まで上昇しようと試みる。しかしアカーシャの三つの氣息は、悪魔的な原子を奈落へ向けて投げ返す。悪魔的な原子が、尾てい骨に住む黒の原子の神と衝突する時、蛇が目覚める。そして、アストラル体に悪魔の尾を形作るために、蛇は降りていく。

天使は完全なる人である。天使の状態にまで上昇するためには、完全なる結婚が必要不可欠である。悪魔は邪悪なる人である。

白と黒の二通りの性の秘儀がある。白の性の秘儀を実践する人は、決して射精をすることはない。黒の性の秘儀を実践する人は、必ず、射精をする。チベットの黒ロジに属するボン教や紅帽派の僧は、射精をする。その闇の住人は、射精後、女性の陰門から特殊な手段で精液を集める。その後、ある種のヴァジロリ・ムドラ (Vajroli Mudra) の黒い力を用いて、尿道から精液を再吸収するのである。不幸を招く暗黒の科学が普及しないように、われわれはヴァジロリ・ムドラについては公表しない。

闇の魔術師たちは、クンダリニーを目覚めさせるために、太陽と月の原子を混ぜ合せることができると信じている。脊髄の経路を通して上昇せずに、人間の原子地獄へ向って下って行った脊椎の火は、サタンの尾となる。

白魔術師は、精液をこぼすという罪を犯すことなく、彼ら自身の性の実験室で、太陽と月の原子を混ぜ合せる。このようにして、良い方向に目覚めたクンダリニーは、脊髄の経路を勝ち誇ったように上昇する。これが天使の道である。白魔術師は、天使の地位に達することを熱望する。闇の顔つきの人 (黒の魔術師) は、アナガリカス (Anagarikas) の階級に達することを望んでいる。

三つの危険

完全なる結婚の道に従う人は、内なる神と一体となって、超人の王国へと登っていく。完全なる結婚の道を嫌悪する人は、内なる神から離れて、

奈落の底へ沈んでいく。

白魔術師は、脊髄の共鳴経路を通して、性エネルギーを上昇させる。その二つの弦が聖なる ∞ を形作りながら、脊髄のまわりからみつく、それが、黙示録の二人の証人である。

「兄弟よ、あなたの聖杯を聖なる光のワインで満たしなさい」。

聖杯は頭脳であることを思い出しなさい。われわれには、鷲の視力と炎の翼が必要である。

闇の住人は、あなたを真実の道からそらせようと奮闘している。学徒を待ちうけている三つの重大な危険について知っておきなさい。それは降神術の霊媒、にせ予言者、そして性的誘惑である。

この道は、鋭いやいばの刃先のような道、内側でも外側でも危険に満ちた道である。油断をせず、注意深く生きるようにしなさい。ちょうど戦争の時の不寝番のように。性について魂の重要性を少しも考えず、ただ動物的機能としてしか考えない人がいたとしても、驚いてはならない。一般的に、にせ予言者は、性を嫌悪するものである。彼らは、弱い人間を迷わすために目新しい夢のような教えを示して人々を魅了し、のちに奈落へ導いていくのである。

闇の住人の偽りの声明に惑わされないようにしなさい。降神術の霊媒は、ほとんどが黒の実体の乗り物として使われているということ思い出しなさい。その黒の実体は厚かましくも聖者のようなふりをして、完全なる結婚の道にそむくように忠告する。彼らは決まって「イエス・クリストである。仏陀である」などと断言するが、これは無知な愚か者を欺くためである。

あなたの周囲に待ち構えて、あなたを誘いこもうとする誘惑に、気をつけなさい。分別を持ち、注意深くありなさい。

光の力と闇の力の大きい闘いは、性の中にあるということ、思い出しなさい。完全なる結婚の道に入るものは誰でも、あの三つの大きな危険に対して十分に注意して、自分自身を守らなければならない。闇の住人は、あなたがたを完全なる結婚の道からそらせようと、絶えず奮闘しているのである。

射精することを勧める崇高ぶった教えに、惑わされないようにしなさい。その教えは黒の魔術である。悪魔の原子の王は、蛇がネガティブに目覚めた時、下に向わせるために、尾てい骨の中に番人として待ち構えている。

射精によって、黒の原子の神は、恐るべき電氣的衝撃を受ける。その衝撃は、蛇を目覚めさせて、人間の原子地獄へ向わせるために十分な力である。このようにして、人は悪魔に変わっていく。このようにして、人は奈落へ落ちていくのである。

【原子地獄】 著者は本文中で精子・卵子の中には、クリスティックな光の原子が存在すると述べている。性が消耗された場合、それは悪魔的な原子に置き替わり、尾てい骨の部分は性エネルギーの墓場と化し、悪魔的な原子に満たされる。原子地獄とは、このような地獄の状態を意味していると思われる。

【メデア (Medea)】 太陽、月、星を支配できる女神。龍に引かせた車に乗って、大地と天界の両方を支配していた。各地の神話に女神とし登場している。

【デバダッタ (Devahdet)】 一般的には、釈尊の弟子であったが、後に反逆して別一派を作り、極悪人と見なされている。

【ヤンブリュス (Jamblichus)】 AD 250~325頃。ギリシアの哲学者として知られる。プロチノスの思想を発展させ、新プラトン学派を始めた。

【現在】 1950年前後のこと。サマエルは1950年に本書を完成させた。

【ウイラコッチャ (Huiracocha)】 インカのマスター。近年ではアーノルド・クルムヘラーとしてアルメニアに存在した。第7章注参照。

【サンタマリア】 中南米で固有名詞的に使われている黒魔術の黒いマリアのことである。日本で一般的に言われているサンタマリアとは違うので要注意。

【アーリマン】 ゾロアスター教における悪の権化。

【ルシファー (Lucifer)】 悪魔。われわれ自身の内にあるクリストの影。人間が原罪を犯す前は、ルシファー（本来は光をつくる者という意味）は光の大天使であった。われわれがエゴを根絶した時、悪魔は光の大天使となり、われわれ自身もそれに統合することによって大天使となる。

【ボン教、紅帽派】 第2章注参照。

【タントリズム】 第2章注参照。

【アカーシャ (Akasha)】 宇宙空間に遍満している精妙な、超感覚的、靈的な媒質。宇宙のすべてのでき事が、ここに記録されている。

第四章 奈落

カバラの伝説によれば、アダムにはリリットとナヘマという二人の妻がいた。リリットは、墮胎と同性愛の生みの母、一般的には自然に反するあらゆる種類の罪の母である。ナヘマは、邪悪なる美貌の母、欲情と姦淫の母である。

奈落は二つの大きな領域に分けられる。リリットの領域とナヘマの領域である。両者の領域ではインフラセクシャリティ（退廃した性）が幅をきかせている。

リリットの領域

リリットの領域で生きているインフラセクシャルな人（性的退廃者）は、性を憎んでいる。にせの秘教宗派の修道僧、隠者、牧師、そしてにせのヨギや尼僧などは、性を憎んでいる。すべてのインフラセクシャルな人は、まさにインフラセクシャルの性向ゆえ、中性的な人たちにしばしば魅力を感じる。そういうわけで多くの尼僧院や宗教組織の中に、またにせの秘教的宗派や学派の人々の中に、同性愛を見つけ出すのは難しいことではない。

インフラセクシャルな人たちは、自分たちを、ノーマルな性の人たちよりもすぐれた人間であると思込んでいる。そして、ノーマルな性の人たちを自分たちよりも劣っているとみなして、見下している。ノーマルな性の人たちの生活を実際に条件づけているすべてのタブーや制約や偏見は、インフラセクシャルな人たちが作り上げて社会に通用させているものである。

ある老隠者の場合を、われわれは知っている。その隠者は、にせの神秘主義の教を説いていた。彼は、聖者とみなされ、すべての人々から尊敬されていた。見た目にはマスターのようだったので、人々は彼に敬意を払っていた。しかし、結局のところ、一人のあわれな女性によって、すべてが暴露されてしまった。それは、彼が秘儀を伝授するという口実で、不自然な性の結びつきを彼女に求めて言い寄った時だった。この隠者は実際に、

インフラセクシャルな人であった。それにもかかわらず、純潔の誓いを立てたかのようにうわさされていたのである。その男は、アルカーノA・Z・F（性の秘儀）を嫌っていた。そして、それを危険なものと考えていた。しかし、彼を崇拜する狂信者にとっては、膾炙で性の結びつきを行うという彼の提唱には、何ら不都合はなかった。これは、彼が本当にインフラセクシャルであったということである。

見た目は聖者のようであったのだから、誰がこの男を疑うことができたろうか。彼を信じて従っている人たちは、彼をマスターとみなし、他の人々も同じように信じていた。彼は性を憎んでいた。まさに彼は性をひどく嫌っていたのである。これが墮落したインフラセクシャルな人の特徴である。この場合の由々しき問題は、彼らがノーマルな性の人々よりも自分たちの方が、すぐれていると考えていることである。そして彼らは、自分が超越した存在であると感じ、ノーマルな性の人々をそそのかすことができるまでになると、彼らも追従者になってしまうということである。

ノーシスの秘密を公開し、それを普及していく中で、インフラセクシャルな人々について学ぶ機会を持つことができた。しばしば、われわれが耳にしたことは、彼らが次のように言っていることである。

「あなたがたノスティックは、エゴイストだ。なぜならばあなたがたは、いつまでも自分のクンダリーニと性の秘儀のことしか考えていないのだから」「あなたがたは、性の狂信者だ」「性の秘儀は全く動物的だ」「性はとても下品なものだ。私は精神主義者だから、物質的で粗野なものは、すべて嫌いだ」「性は不潔なものだ」「神に至るための道は、ほかにたくさんある」「私は神のためだけに生きているので、くだらない性のことなど興味がない」「私は純潔を守っているので、性を憎んでいる」等々。

これらは、インフラセクシャルな人々の言葉そのままである。彼らはいつもうぬぼれている。そしてノーマルな性の人たちよりも、すぐれているというプライドを持っている。自分の夫を憎んでいるあるインフラセクシャルな女性が、われわれに次のように言った。

「私は、グルとの性の秘儀ならば行おうでしょう」。こういうことを自分の夫の面前で言ったのである。性を憎んでいると言ったのだから夫と性の関係がなかったに違いない。それにもかかわらず、そのグルとだけならば性の秘儀を受け入れたのである。その女性はそのグルと同類である。なぜならば、そのグルもまたインフラセクシャルな男だからである。この章で

すでに述べたように、このグルがその女性の信徒と自然に反した性交を享受した、いわゆる聖者である。

われわれは、ある秘儀大司祭の例を知っている。彼は女性を嫌っていた。そしてしばしば「女を足蹴りしてやったよ」などと口にしていた。彼は、ある種の教義を説き、その追従者たちは、彼を神のように崇めていた。彼は、いつも成長期の若い人たちにとり囲まれて生活し、警察がすべての実情を発見するまで、そういう生活を続けていた。彼は、異性の服を着て性的満足を感じる倒錯者であり、未成年者相手の同性愛の墮落者であった。それにもかかわらず、彼はインフラセックスのすべてに、それが言語に絶した神聖なもので、超越的かつ超自然的なものであるといった誇りを持っていた。

リリットの領域は、大邪教の領域である。そこにいる人々は、聖霊を憎んでいるので、もはや救われる可能性はない。

どんな罪も許されないことはない、ただし聖霊に反する罪を除いて。

性エネルギーは聖なる母から発せられたものである。宇宙の母を拒絶する者、聖なる母を憎む者、聖なる母の神聖なエネルギーをけがす者は、永久に奈落に沈められるであろう。そこで第二の死を通過しなければならない。

リリットの領域の心理学

リリットの領域は、残忍性によって特徴づけられる。この領域の心理学では、たとえば、性を憎んでいる修道僧や尼などの様々な状況を取り上げることができる。尼僧院の中での同性愛、修道院生活の外で行なわれる同性愛、そそのかされた墮胎、マスターベーションを好む人々、売春宿の罪深い連中、他人を責めさいなんで喜んでいる連中。警察の記録に登録された最も恐ろしい犯罪は、このリリットの領域の中に見つけ出すことができる。

同性愛の犯罪が発生するところでは、恐ろしい流血の事件がある。恐るべきサディズム、刑務所内での同性愛、女性の同性愛、恐るべき心理的犯罪、自分の愛人を苦しめて楽しむ人々、恐るべき幼児殺し、父親殺し、母親殺し、等々。結婚による交わりの代わりに、夢精にわずらわされることを好むにせ神秘学徒たち。「アルカーノA・Z・F」と「完全なる結婚」

を宿命的に嫌う人たち。性を憎みながら神に到達できると信じている人たち。性を俗悪で下品なものと考えて、それをひどく嫌う求道の人々などもある。

ナヘマの領域

ナヘマの領域で、人々はナヘマの邪悪な美貌に魅惑され、誘惑される。このインフラセックスの領域の中に、すべてのドンファンとアイネス（ドンファンに誘惑された修道女）が見出せる。この領域に売春の世界も含まれる。ナヘマの領域のインフラセクシャルな男は、自分をたいへん男らしいと思っている。たくさんの女と不道德な性関係を持つ男たちはすべて、この領域で生きているのである。彼らは、姦淫を犯すことに幸福を感じている。自分をたいへん男らしいと信じこんでいて、自分がインフラセクシャル（性的退廃）であるということを知らない。

ナヘマの領域では、無数の売春行為が見られる。そこであわれな女たちは、ナヘマの不幸をもたらす魅力の犠牲である。このナヘマの領域には、社会的地位の高い上品な女性も見出せる。そういう人たちは、姦淫を犯すことにたいへん幸福を感じて生きている。これが彼らの世界である。

インフラセクシャルなナヘマの領域には、霊を動揺させる甘い誘惑がある。優しさで魅惑する処女性の魅力。魅惑する女たち。言葉にできないほどの魅惑的魔力、抑え難い情欲、美しいサロン、エレガントなキャバレー、柔らかなベッド、楽しい舞踏会、奈落のオーケストラ、忘れがたいロマンチックな言葉など。凝った魅惑によって男たちに家庭を棄てるようにそそのかす美しい女たちがいる。

ナヘマのインフラセクシャルな人も、アルカーノ A・Z・F（性の秘儀）を受け入れることがある。しかし、彼らは射精を避けることがうまくできないために失敗する。そして必ずと言ってよいほど、彼らは「完全なる結婚」について、誤ったひどいことを言って退いていく。彼らは次のように言う。

「性の秘儀を実行し、時々、精液をもらさずに耐えることができた。セックスの気持ちよい情熱は動物的な楽しみだった」と。

やいばの刃先の道（脊髄を象徴する）から彼らは退き、ナヘマの魅惑的な教えの中に逃げ口上を探す。運よく、リリットの領域に落ちこまなかったとしても、彼らは自分の精液を放出し続けるであろう。これらが彼らの

インフラセクシャルな世界である。

ナヘマの領域の心理学

ナヘマの領域に住むインフラセクシャルな人たちは、たいへんデリケートである。彼らは次のようなことを言う人たちである。

「この侮辱は決闘でかたをつけよう」「自分は恥を知る人間だから殺したのだ」「傷つけられたのは私の名誉……」「夫としてのプライドを侮辱された……」等々。

ナヘマのタイプの男は、どんな女のためにも、自分の人生をかけてしまうような男である。ぜいたく好みの愛人、社会的偏見のとりこになった男、酒に酔うことや、宴会やパーティーを好む男、しゃれた流行を好む男など。このタイプの男たちは、こういうことに情熱的になる。

この種の人たちは、「完全なる結婚」を実現不可能なものと考え。それを受け入れたとしても、ほんのわずかの間だけである。なぜなら、すぐに失敗してしまうからである。このタイプの人たちは、獣のようにセックスを楽しむ。そして、アルカーノ A・Z・F を受け入れたとしても、肉欲を楽しむために利用するだけである。そして、逃げ口上となるような誘惑の教えを見つけると、すぐにも「完全なる結婚」から離れてしまう。

ナヘマの神秘

インフラセックスのナヘマの領域で、時々神秘的なタイプの人を見かける。彼らは酒を飲まず肉食をせず、たばこも吸わない。菜食主義者でないにしても、たいへん宗教的な人たちである。ナヘマの神秘家タイプは、ただ見えないところで情欲的であるにすぎない。彼は公衆の面前では性の欲情に反対したとしても、そのあとで性の欲情を激しく享受する。

彼らは、アルカーノ A・Z・F を受け入れようとすることもあるが、「神は言われた『生めよ、殖やせよ』と。性の行為は全く動物的な機能であり、精神的なものは何一つない」などと言う慰めの教えを見つけると、すぐにも道から離れてしまう。このようにナヘマのインフラセックスの人たちは、自分の精液を射精する正当性を見つけ出して「完全なる結婚」の道から離れて行くのである。

第五章

ノーマルな性

ノーマルな性の人々は、性に関するいかなる種類の葛藤も持っていないということを理解してみよう。性エネルギーは、三つの異なった型に分けられる。

1. 種の再生産（生殖）と一般的な肉体の健康に関するエネルギー。
2. 思考、感情、意志の領域と関係するエネルギー。
3. 人間の神聖な魂に關係するエネルギー。

性エネルギーは、実際に、人体の中で自然に作り出されるエネルギーの中で、最も精妙で最もパワフルなエネルギーである。そしてそれは、人の有機体のすみずみまで運ばれていく。思考、感情、意志を含む人間のすべては、まさしく性エネルギーが様々な形を変えたその結果にほかならない。

性エネルギーは、非常に精妙でパワフルなものであるため、それをコントロールし、蓄えるのは確かに困難である。その上、その存在（性エネルギー）は巨大な力の源泉を代表していて、もしその力を放置したままにすれば、本当の破滅を産み出しかねない。

有機体の中には、このパワフルなエネルギーが正常に循環するためのある種の経路が存在する。性エネルギーが性機能以外の繊細な組織に侵入するときのひどい結果は、災いそのものである。この場合、人の有機体の中の多くの繊細なセンターが害される。そして実際にその人は、インフラセクシャル（性的退廃）化していくことになる。

すべてのネガティブな精神的態度は、直接的にも間接的にも、われわれの性エネルギーをはなはだしく破壊的な惨状へと導く可能性を持っている。性の嫌悪、アルカーノ A・Z・F への憎悪、性への反感と嫌気、性の軽蔑と軽視、激しい嫉妬、性に対する恐怖、性的冷笑、サディズム、猥談、ポルノグラフィ、性的な野蛮さなど、これらすべては、人を「インフラセクシャル」に変えるものである。

性は、それによって人間が真に神となる創造的機能である。「ノーマルな性」とは、性と性以外のすべての機能との全体的調和と一致の結果であ

る。ノーマルな性は、健康な子供を創り出す力をわれわれに与えるものであり、また芸術や科学の世界で創造する力を与えるものである。

性のパワフルなエネルギーが他の機能の中へ浸透してしまうのは、性に対するあらゆるネガティブな精神的態度が原因である。それは恐ろしい惨状を引き起し、性的荒廃という不幸な結果となる。

ネガティブな心の態度によって、性エネルギーは、もともと他のエネルギー（心理的エネルギーや意志のエネルギー、すなわち性エネルギーよりも力の弱いエネルギー）に適した経路や組織の中を強制的に循環させられる。この結果は致命的である。なぜならばこの種の経路や組織は、非常にパワフルな性エネルギーの高電圧に耐えることができないからである。ちょうど細い電線ケーブルに高電圧の電流を流した時、熱の発生で電線が溶けてしまうようなものである。

男女が「完全なる結婚」によって性的に結びあい、心地よい精神的、官能的な高みの状態にある時、二人はまさに、「言語に絶する神々」である。「完全なる結婚」の男女が性的に結びあう時、完全な聖なるアンドロジヌス、男であり女であるエロヒム、畏ろしいほどに聖なる神々を形成する。生命のあけぼの以来、離ればなれにあった半身どうしが、創造の時に一体となる。これは言語に絶するほど崇高なことであり、楽園の事柄である。



聖なるアンドロジヌス

火と水、男と女、反対のものの結合が巨大なパワーを生み出す。

性エネルギーは、飛び散りやすく、また爆発の危険性を持っている。秘密の行為の間、そして性のエクスタシーの間、畏るべき神聖なすさまじいエネルギーが、カップルのまわりを取り巻いている。至高の歓びの間、そして霊の奥深くに火をともし熱い口づけの間、われわれを完全に純化し、また変革する奇跡の光を内に保つことができるのである。しかし、「ヘルメスの杯」をこぼした時、つまり射精が行われた時、神々の光線はわれわれから去り、ルシファーの血の色をした赤い光線を受け入れるために、内なる扉が開かれてしまう。歓喜は消え、失望と幻滅がやって来る。そしてのちに男と女は、姦淫の道に導かれる。なぜならば、彼らの家庭は地獄と化してしまったからである。

いかなる宇宙であっても、それが創造されるためには、蓄えられた巨大な量の創造エネルギーが動員される。これは自然の特徴である。しかしながら、自然はその創造を実現するために、巨大な蓄えの中からほんのわずかの量しか使用しない。このように、子供を産むために必要な精子は、ただ一つでよいにもかかわらず、男は一回の射精で六千万から七千万の精子を失っているのである。

レムリア（ム大陸）の時代、射精をする人はいなかった。当時、カップル（夫婦）は創造のために、寺院の中で性の結びつきを行った。その性行為の間、月の天使軍（受精を司る天使たち）は、創造のためにオルガズムや射精を必要とすることもなく、一つの精子と一つの卵子だけを使った。射精をする者は誰もいなかった。性行為は寺院の内部だけでとり行われる秘蹟（ sacrament ）であった。当時の女性は、苦痛なしで子供を産んだ。そして蛇は、勝利の内に脊髄の経路を通して上昇した。この時代には、人間はエデンの園を離れてはいなかった。自然のすべてが人間に従い、そして人間は苦痛も罪も知らなかった。射精を人間に教えたのは闇のルシファーである。われわれの最初の両親が犯した罪は、射精の罪であった。これが性の消耗である。至福の楽園にいる人が性エネルギーを消耗する時、ルシファーの王国への浸透を余儀なくされる。今日の人間は、ルシファー崇拜者（ルシフェリアン）である。

創造のために必要な精子は、わずか一つであるのに、六千万から七千万の精子を放出することは、ばかげたことである。射精することなく一つの精子が性腺から脱出することは難しいことではない。人々が出発した地点にもどる時、つまりエデンの園で行われていた性の方法を再確立する時、



エデンの園を追われるアダムとイヴ
フランスのパリ郊外のシャルトルにあるノートル・ダム
大聖堂の壁面に彫られたレリーフ

聖なる蛇「クンダリニー」は、われわれを神々に変えるために再び勝ち誇ったように上昇するであろう。エデンにおける性の方法は、ノーマルな性である。ルシファー崇拜者の性の方法は、全くアブノーマル（異常）である。肉体のレベルでの性の消耗だけでなく、メンタル界やアストラル界における性の消耗もある。みだらな会話をする人々、ポルノ雑誌を読む人々、情欲的でエロティックな映画を見せる映画館へ行く人々、彼らは性エネルギーの多量の蓄えを浪費している。このような哀れな人々は、悲しむべきことに、最も繊細で最もすばらしい性の原料を、動物的情欲の満足のために費やしてしまっている。

性的妄想は心理的インポテンツを引き起す。そういう病んだ人たちは、普通の勃起機能を持ち普通の男のように見えるが、女性の性器と結合しようとする瞬間、勃起は萎えてしまい、最もみじめで絶望的な状態となる。彼らは性的妄想の中で生きてきた。それゆえ、妄想ではどうすることもできない生の現実、性の現実実際に直面しなければならない時には、当惑

し、目の前の現実に対処することができない。

性感覚は非常に微妙で捕え難く、たいへんな速さで機能する。これは、性エネルギーが非常に繊細で、捕え難いエネルギーだからである。分子レベルでは、性感覚機能の速さは、思考の波動よりも百万倍も速い。論理的な思考や妄想は、性感覚をつまずかせる石である。理屈でいっばいの論理的な思考や、エロチックな幻想で満たされた性的妄想によって、性感覚機能をコントロールし、またその幻想下で操作しようとする時、性感覚機能は致命的に破壊されてしまう。論理的な思考や性的妄想のために性感覚機能を仕えさせようとするならば、性感覚は破壊されてしまうのである。心理的なインポテンツは、狂信的な人々や全く理屈家タイプの人々を苦しめる最も恐ろしい悲劇である。

多くの修道僧や尼僧、隠者やにせのヨギなどの苦闘（性を宗教上の狂信主義の中に封じ込めること、性を罪ほろぼしの苦行の牢獄に閉じ込めること、性について沈黙を強制し、そして不毛なものにすること、創造的な表現をすべて禁止することなど）はすべて、彼らを自分の情欲の狂信的な奴隷にしてしまうものである。彼らは性的狂信者であり、インフラセックスの墮落者である。このような人々は、毎晩、不快きわまりない夜の汚れの中で放電（夢精）し、あるいはホモセクシャルの悪癖をつけ、あるいは惨めにマスターベーションを行う。性を押えつけて閉じ込めてしまおうとすることは、太陽をビンに詰め込むようなものである。このような男は、まさに性の奴隷そのものであり、恩恵や真の喜びは少しも得られることはない。これが女であれば、つまらない意地張りで、隷属させたいと思っている当のもの（性）の哀れな奴隷である。聖霊の敵は奈落にいる人々である。このような人々は生れてこなかったほうが、あるいは首に重しをつけて海の底に沈んでしまったほうがましである。

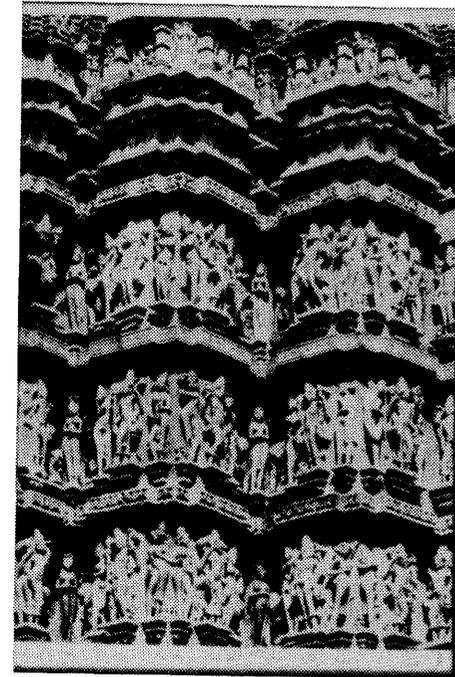
人は、性を生きることを学ばなければならない。アクエリアス（水瓶座）の新しい時代、性の時代はすでに始まっている。性腺は天王星^{ウラヌス}によって支配されている。ウラヌスは、水瓶座の支配者である。それゆえ「性の錬金術」は、実際にアクエリアスの新時代の科学である。「性の秘儀」は、アクエリアスの新時代の大学で公式に受け入れられるであろう。アクエリアスの新時代の使者であると名乗る人がいたとしても、アルカーノA・Z・Fを憎悪するのであれば、それはまさしく詐欺師であることを示している。なぜならば、アクエリアスの新しい時代は性の統治者によって支配されて

いるからである。この統治者は天王星^{ウラヌス}である。

性エネルギーは大宇宙の中で最もすぐれたエネルギーである。性エネルギーは、われわれを天使にもあるいは悪魔にも変えることができる。真理の表象は、性エネルギーの中にある。アダム・クリストのコスミックな原型は性エネルギーの中に存在している。

「人の子」、「超人」はノーマルな性から生まれる。超人は決してインフラセックスから生まれることはない。インフラセックスの王国が奈落である。

偉大なギリシアの詩人ホーマーは、「闇の帝国の王であるよりは、この地上でこじきであるほうがましである」と言った。この帝国とは、インフラセックスの闇の世界のことである。



インドのカジュラホ寺院

高次の性、ノーマルな性、退廃的な性（インフラセックス）という三つの性の段階が、壁面いっばいに描かれている。

第六章 高次の性

内なる超人の創造

高次の性は、性の質的変換(Transmutation)の結果である。クリスト、仏陀、ダンテ、ゾロアスター、マホメッド、ヘルメス、ケツァルコアトル、そして他の多くの偉大なマスターたちも高次の性を実現した人々であった。

性機能の二大側面は、生殖および再生と呼ばれるものである。われわれはすでに前章で、意識ある生殖について学んだ。ここでは、再生について学んでみよう。

動物の生命について研究すると多くの興味深い事柄を発見する。蛇を半分^{センチュウ}に切断してみれば、蛇がその体を再生する能力を持っているということを確認することができる。蛇は失った体のすべての器官を、新しい半身として完全に成長させることができる。海中や陸地に住むほとんどの蠕虫類も、絶え間ない再生の能力を持っている。とかげは自分のしっぽを再生することができ、人の有機体はその皮膚を再生することができる。その再生のパワーは100パーセント性的である。

人間は自分自身を再創造する能力を持っている。人間は内なる超人を創造することができるのである。これは賢明な方法で性のパワーを用いることにより可能となる。われわれは、自分自身を本物の超人として再創造することができる。これは、性の質的変換によってのみ可能となる。性の質的変換の基本的な鍵は、アルカーノ A・Z・F (性の秘儀) である。

男根と女陰の結合の中に、すべてのパワーの鍵がある。重要なことは、夫婦が淫擧(オルガズム)や射精の前に性行為から身を引くことを習い覚えることである。子宮の中にも外にも、また他のどんな所にも精液をもらすべきではない。インフラセクシャルな道徳家がわれわれをわいせつであると非難しようとも、われわれは人々が理解できるように明確に言うことにしよう。

人間の人生は、ただ生きているだけでは何の意味もない。生まれ、成長し、生計を立てるために一生懸命働き、動物と同様に子供を産み、そして



死ぬ。こういうことは霊を縛りつける受難の鎖である。もしそれが人生ならば生きる価値はない。幸運なことに、われわれは性腺の中に種子を持っている。この種子から超人アダム・クリスト、性の錬金術の黄金の子を生むことができる。このためにこそ、人生は生きる価値があるのである。そしてこのための道が性エネルギー昇華である。これは天王星の科学である。天王星は性腺を支配する惑星であり、また水瓶座を統治する惑星である。

天王星は84年の性的な周期を持っていて、太陽の方向にその極を向けている唯一の惑星である。天王星の二極は、男性的なものと女性的なものの二面に相当する。この二極は42年毎に交替する。この天王星の二極によって交互に引き起こされる刺激は、人間の進化における性的な歴史のすべてを支配している。女性がその肌をさらす時代と男性が着飾る時代は交互に入れ替わる。女性優位の時代と剛勇な騎士の時代は互いに入れ替わる。これが時代交替の歴史である。

人が円熟に達した時期に、幼年期や青年期に支配していたものと対立する正反対の周期によって刺激される。その時に、われわれは真に成熟するのである。われわれは異性の性によって性的な刺激を感じる。実際に成熟期は、性的再生の仕事のためにはすばらしい時期である。性的な情感は、30代よりは40代のほうがより豊かでより円熟している。

超人は進化の結果ではない。超人は種から生れる。超人とはすさまじい意識革命の結果であり、クリストの言う「人の子」である。そして、超人とはアダム・クリストである。

進化とは、止まったままのものは何もなく、すべてが時間、空間、運動という概念の中で生きているということの意味している。自然の中には、あらゆる可能性が存在している。進化によって完全な人に至った者は誰もいない。人によっては良くなる者もいるが、ほとんど大多数の人々がひどく邪悪な存在と化す。それが進化というものである。何百万年も前の無垢な人間、楽園にいた人間は、多くの進化を経て、現在、原子爆弾や水素爆弾を作る人間、犯罪や横領で墮落し、腐敗した人間になってしまった。

進化とはエネルギーの複雑化の過程である。われわれは、出発点(性)に戻り自分自身を再生させる必要がある。人間は生きている種である。種子は超人を発芽させるために努力すべきである。これは進化とは異なるものである。それはすさまじい意識の革命である。「モーゼが荒野で蛇を上昇させたように、人の子も上昇させられなければならない」とクリストが

言ったことは、まさにこのことを意味する。「人の子」とは、アダム・クリスト、超人である。

性の質的変換による再生

性エネルギーの昇華によって、われわれは完全に再生する。性的快楽の年代は、性的エクスタシー(法悦)のそれより常に先じる。性的快楽を生み出す同じエネルギーが精錬され、昇華された時にエクスタシーを生み出すのである。

タロットの第九のアルカーノの隠者が持っているランプは、通常、性器官の洞窟の奥深いところにしまい込まれているものであるが、これを寺院の塔の中に移さなければならない。この塔が脳である。この時、われわれは光明を受けるのである。これこそ、サマディ(三昧、エクスタシー)の達人になる最善の方法である。



すべての内的瞑想の眞の技術は、性エネルギー昇華と深い関係がある。われわれは、われわれ自身を光り輝かせるためにランプを高く持ち上げる必要がある。

王冠を授かったのち、すべての錬金術の子鳩（弟子）たちは、徐々に性行為から退いていく。東洋のゴングによってしるされる宇宙のリズムに従って、秘密の結婚から退いていく。これが持続するエクスタシーを生むために、性エネルギーを精錬し完全に質的に変換し昇華する方法である。

前生において「火に熟達する仕事」をしてきた錬金術の子鳩ならば、比較的短い期間でこの性の実験室の仕事を実現する。しかし、はじめてこの「大いなる作業」を行う者は、少なくとも集中的にこの仕事を行うための20年間と、ゆっくりとこの実験室の仕事から退いていく20年間を必要とする。この仕事を完全に成就するためには、合計で40年間が必要である。錬金術師がヘルメスの杯をこぼす時、実験室のかまどの火は消え、すべての仕事は水泡に帰してしまう。

性の快樂の年代が終わるところから、神秘的なエクスタシーの年代が始まる。金星のイニシエーションに達した人たちはすべて、のちに実現困難な仕事を持つことになる。その仕事とは性エネルギーの変換より成っている。野菜の植え替え、あるいは植物を植木鉢から別の植木鉢へ移すのと同じように、われわれも性エネルギーを地上の人間から取り出して、アダム・クリストの中へ移植することができる。錬金術では「われわれは、哲学者の卵を物質の不快きわまる腐敗から解放し、最終的にその卵を人の子に引き渡さなければならない」と言う。

この仕事の結果は素晴らしい驚異である。それはまさしくアダム・クリストがその人間的意識を飲み込む瞬間である。しかしその瞬間に至る前に罪深いアダムの意識は死んでいなければならない。「内なる神」のみが、霊を飲み込むことができる。そのような高い段階に至った時、内なるマスターが完璧に顕現する。その時から、永続するエクスタシー、偉大な秘儀司祭の至高の光明を獲得したことになるのである。

「超人」の誕生は、完全に性的な問題である。われわれは天の王国に入るために、再度生れ直す必要がある。雷光と黒雲が異なるように超人と人間も異なっている。雷光は雲の中から発するが、それは雲ではない。この雷光が超人であり、雲が人間に相当する。性的再生は、われわれがエデンの園にいた時に持っていたパワーを再度活性化することである。そのパワ

ーを失ったのは、われわれが動物的生殖に堕ちた時である。われわれが自分自身を再生した時、それらのパワーを再び獲得する。ちょうど昆虫の幼虫がそのからだを再生できるように、また、とかげがその尾を再生できるように、われわれも神々のごとく再び光り輝くために、失われてしまったパワーを再生することができるのである。

アダム・クリストの中に移植された性エネルギーは、神聖な清浄さで白く光り輝く。そのエネルギーは、まさに畏敬すべき神聖な光線のように見える。「超人」の偉大さと荘厳さは、すばらしいものである。実際に、「超人」は長い世紀の夜に去り、一瞬間、光り輝いたのち、消え去り、人の目には見えなくなる。

公的にはほとんど知られていない再生のための秘密の教団の中に、超人が存在した跡を見つけ出すことができる。われわれが、そのような崇高な高次の性の人々の存在を知っているのは、このような秘密の教団によってである。再生のための学校には、公開活動の時期と秘密裏に働く時期とがある。海王星が、このような学校の活動の周期を統治している。

人の有機体の中では、海王星は松果腺を支配している。この神々の腺は、性エネルギー昇華が伴ってはじめて活動を開始する。天王星は性腺を支配し、海王星は松果腺を支配する。天王星は実際的な性の秘儀であり、海王星は秘教的な学習である。われわれは、最初、習得し、その後、実験室で働かなければならない。天王星は84年の性的周期を持ち、海王星は165年の学習の周期を持っている。天王星の周期は人間の平均寿命である。また海王星の周期は、いくつかの再生のための学校が公に活動を行なう周期である。「完全なる結婚」の道を歩むことによってのみ、われわれは高次の性へと至ることができる。

第七章

黙示録の七つの教会

アストラル体の感覚器官-七つのチャクラ

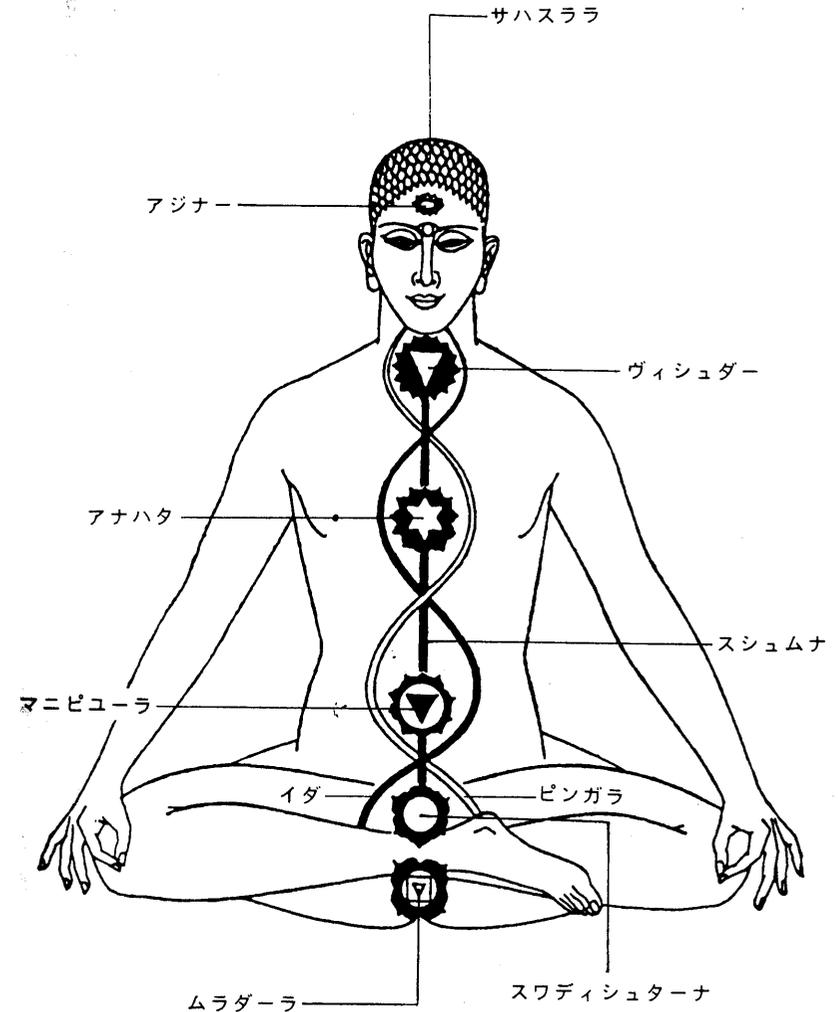
人間は、肉体、霊、魂の三重体である。魂と肉体の間に仲介者が存在する。それが霊である。われわれノスティックは、霊がすばらしい衣をつけていることを知っている。アストラル体がそれである。すでにノーシスの学習を通して、アストラル体がすばらしい内的感覚を持つ有機体であることをわれわれは知っている。

偉大な超視覚者たちが、七つのチャクラについて語っているが、リードビーターはチャクラについてたいへん詳しく記述している。この七つのチャクラは、実際にアストラル体の感覚器官である。そしてこれらの磁気センターは、内分泌腺と密接な相関関係にあることが知られている。

人間の有機体の実験室の内には、三重の神経系のコントロール下にある七つの要素がある。三角の法則を代行するそれらの神経は、七つの腺を支配している。三つの神経系は、以下に示すように、それぞれが相互に作用しあっている。第一は、脳脊髄神経系で、意識機能を代行する。第二は、交感神経系で、無意識と潜在意識と本能的機能を代行する。第三は、マインドの指示のもとに本能機能を抑えることによって他の神経と共同して働く迷走神経系あるいは副交感神経系である。

脳脊髄神経系は、聖なる魂の玉座である。交感神経系はアストラル体の乗物である。迷走神経系あるいは副交感神経系は、マインドの命令に従う。三つの光線と七つの磁気センターは、どんな宇宙にとっても基礎となるものである。無限に大きな宇宙でも、無限に小さな宇宙でも同じである。上にあるがごとく、下にもある。

人間の中にある七つの重要な腺が七つの実験室を構成し、それらは、三角の法則によって統制されている。有機体のチャクラの中にはこれら七つの腺の代表者がいる。七つのチャクラのそれぞれは、脊髄の七つの教会と密接な相関関係の内に根をおろしている。背骨にある七つの教会は、交感神経系の七つのチャクラを統制している。脊髄経路を通してクンダリーニ-



七つのチャクラ（教会）と三つの脊髄経路

われわれのアストラル体には、その感覚器官である七つのチャクラと三つの脊髄経路が存在する。七つのチャクラには、黙示録の七つの教会が対応している。三つの脊髄経路とは、クンダリーニの通り道となるスシュムナ（中央管）、性エネルギーの通り道となるイダ（月・女性）及びピンガラ（太陽・男性）である。この三つの経路は、マーキュリーの杖を構成している。

が上昇する時、七つの教会は、活発に活動を始める。クンドリニーは、電子の中に住んでいる。賢者はそれについて瞑想し、敬虔な者は、それを崇拜する。そして「完全なる結婚」の実現している家庭では、実際、クンドリニーとともに仕事する。

クンドリニーの上昇と黙示録の七教会

クンドリニーとは、精液の原子に内蔵された太陽の火、太陽の燃える電子の本体であり、それが解き放される時、われわれを畏るべき聖なる神々に変える。

心臓の火は、クンドリニーの脊髄経路の上昇を支配している。クンドリニーは、ハートの美德に従って発達し、進展し、上昇する。クンドリニーは、エペソの教会の内に含まれている根本的エネルギーである。この教会は肛門から指二本分上方、生殖器から指二本分下方のところに位置する。神聖な火の蛇が、三回半のどぐろを巻いてその教会の中で眠っている。太陽の原子と月の原子が、尾てい骨付近のトリベニで出あう時、魔法の力を持つ火の蛇クンドリニーが目覚める。その蛇が脊髄経路を通して上昇するに従って、七つの教会を一つずつ活動させていくのである。

性腺のチャクラは、天王星によって統治されている。また、脳の上にある松果腺は、海王星によって統治されている。この二つの内分泌腺には、密接な相関関係がある。完全な自己実現を達成するために、クンドリニーの神聖な火によって、この二つの内分泌腺をつなぎ合わせる必要がある。

エペソの教会は、輝かしい四枚の花びらを持つ蓮の花である。この教会は、太陽一千万個分の輝きを持っている。賢い土の精は、この教会のパワーによって支配される。

前立腺の領域をクンドリニーが上昇すると、六枚の花びらをもつスミルナの教会が活動を始める。この教会は、生命の水の精を支配するパワーと創造する幸福をわれわれに授けてくれる。

へその領域に神聖な蛇が達すると、われわれは火山を支配できる。なぜならば、賢者である火の精は、太陽神経叢のところにあるベルガモの教会と応じあっているからである。このセンターは十枚の花びらを持っていて、脾臓、肝臓、膵臓などを支配している。

心臓の領域にクンドリニーが上昇すると、テアテラの教会が活動を始め

る。それは、十二枚のすばらしい花びらを持っている。この教会によって、賢い空気の精を支配するパワーがわれわれに与えられる。この心臓のセンターが発達すると、インスピレーション、予感、直観が与えられる。またアストラル体の状態を意識的に操作するパワーだけでなく、ヒーナスの状態に体を置くパワーも与えられる。

ヨハネ黙示録の第2章は、われわれの有機体の中の下部の四つの教会について述べている。これら四つのセンターとは、根本あるいは基礎センター、前立腺のセンター、へそのセンター、心臓のセンターとして知られている。次に黙示録の第3章で言及されている上部の三つの磁気センターについて研究してみよう。上部の三つの教会とは、サルデスの教会、フィラデルフィアの教会、そして最後がラオデキヤの教会である。

七つの教会とチャクラ

教会	チャクラ	花卉の数	位置	能力・機能	内分泌腺	マントラ
エペソ	ムラダーラ	4	尾てい骨	クンドリニーの目覚める所	副腎	SSSS
スミルナ	スワディシュターナ	6	前立腺 子宮	性行為を コントロール	生殖腺	MMMM
ベルガモ	マニピューラ	10	臍	テレパシー 感情センター	脾臓	UNRU
テアテラ	アナハタ	12	心臓	魂の宿る所 真実の愛の場 直観、予感	胸腺	ONRO
サルデス	ヴィシュダー	16	咽喉	超聴覚 言葉による創造	甲状腺 副甲状腺	ENRE
フィラデル フィア	アジナー	2	眉間	超視覚 マインドの玉座	脳下垂体	INRI
ラオデキヤ	サハスララ	1000	頭頂	完全なる超視覚 霊性の場	松果腺	AUM

のどのチャクラとサルデスの教会

創造するのどの領域をクンドリニーが上昇すると、高次世界に住む存在の声を聞くパワーが与えられる。このチャクラは、純粋なアカーシャと関係している。アカーシャは、音の代行者である。のどのチャクラがサルデスの教会である。クンドリニーがサルデスの教会を開く時、われわれの創造性に富むくちびるに言葉が花開く。のどのチャクラは、たいへん美しい十六枚の花びらを持っている。

このアカシックなセンターが完全に発達すると、大いなるプララーヤの深い夜の間でさえ、肉体を生きた状態で保つことができる。

神聖な蛇が目覚めることがなければ、偉大なる言葉を体現することはできない。まさしくこの言葉の代行者が、アカーシャである。言葉にとってのアカーシャは、電気にとっての伝導線と同じ関係である。言葉は自らを表現するためにアカーシャを必要とするのである。

アカーシャは音の代行者である。クンドリニーはアカーシャである。アカーシャは性的であり、またクンドリニーも性的である。クンドリニーが通常住む磁気センターは、完全に性的である。なぜならば、その磁気センターのある位置が確固たる事実としてそのことを示している。その場所は、肛門より指二本分の上方、生殖器より指二本分の下方にあり、指四本分の幅がある。

性の秘儀だけが、クンドリニーを目覚めさせ、それを完全に発達させることができる。これこそインフラセクシャルの人（性的退廃者）が好まないことである。彼らは自分たちが超越した存在であると感じている。そして死ぬほどに性の秘儀を嫌っている。ある時、性の秘儀についてのわれわれの講演のあとで、次のように言って抗議する者がいた。「これが、ノスティックたちが女性をだめにするやり方か」と。この人物は、インフラセクシャルである。その人物が抗議した訳は、われわれが再生のための科学を教えていたからである。それにひきかえ、彼はありきたりの性に反対せず、売春に反対せず、マスターベーションの悪癖についても一言として抗議せず、そういう人たちが墮落しているとも言わないのである。彼は再生のための教えに対しては抗議するが、退廃に導く教えには異議を申し立てない。これがインフラセクシャルの人のやり方である。彼はノーマルな性の人たちよりも、自分がたいへん優れていると感じている。彼らは再生に

対して抗議し、退廃を擁護する。

インフラセクシャルな人たちは、決して言葉を体現することはできない。彼らは、性の神聖な至聖所につばを吐きかける。そして、法によって彼らは罰せられ、永久に奈落へ落とされる。性は、聖霊の聖殿である。

眉間のチャクラとフィラデルフィアの教会

クンドリニーが眉間の高さに達すると、フィラデルフィアの教会が開く。これが智慧の眼である。この磁気センターの中に秘密の内に居られるわれわれの父が住んでいる。眉間のチャクラは、主要な二枚の花びらを持ち、たくさんの素晴らしい放射がある。

このセンターは、マインドの玉座である。真実の超視覚者で、自分がそうであると言う人は誰一人としていない。真実の超視覚者は、誰一人として「私は見た」と言わない。イニシエイトである超視覚者は、「私たちは考える (conceptualize)」と言う。

すべての超視覚者は、イニシエーションを必要とする。イニシエーションを受けない超視覚者は、たいへん重大な誤りにおちいる危険がある。誰それかまわす自分のヴィジョンを話すことに時を費やす超視覚者は、その能力を失い易いものである。しゃべり好きの超視覚者は、マインドのバランスをたやすく失うことだろう。超視覚者は、もの静かで、控え目で、慎み深くあるべきである。また超視覚者は、幼児のようであるべきである。

松果腺のチャクラとラオデキヤの教会

クンドリニーが、松果腺の高さに至った時、ラオデキヤの教会が開く。この蓮の花は、千枚の輝く花びらを持っている。松果腺は海王星の影響のもとにあり、この教会が開くと、総合的超常視覚や直観などを獲得する。松果腺は、生殖腺チャクラ、すなわち性腺と密接な関係にある。松果腺の高度な発達には性能力の高度な発達と関係し、性能力が低ければ、松果腺も低い段階の発達となる。性器管の中の天王星と松果腺の中の海王星は、われわれを完全な実現に導くために結び合わされる。

再生（インフラセクシャルの人たちは、この再生をひどく毛嫌いする）の教えでは、天王星と海王星の科学を使って、実際に働くこと（ワーク）

を教えている。

三つの道をうちを含むタオ(TAO)の道、そしてこの道が、第四の道である。四つの道について多くのことが言われてきた。われわれノスティックは、完全なる意識を持って第四の道を踏破する。性行為の間、われわれは、肉体の獣的本能を意志に変え、アストラル体の情欲を愛に変え、メンタル体の衝動を理解力に変える。そして、魂であるわれわれは、偉大なる作業を実現する。このようにして実際に、われわれは四つの道を踏破するのである。第一の道の行者にも、第二の道の僧にも、第三の道のヨギにも、われわれはなる必要はない。完全なる結婚の道により、まさに性行為の間、われわれは四つの道を踏破することができるのである。(第十二章参照)

尾てい骨のセンターとエペソの教会

ヨハネ黙示録第2章の1節から7節までは、尾てい骨のセンターに関して述べている。このセンターの中に、エペソの教会がある。この創造的センターの中に、三回半のとぐろを巻いた火の蛇がいる。その蛇を目覚めさせて、炎の剣を授かりエデンの園に入ることができる。

この蛇の中に人間の救いがある。しかし、抜け目のない蛇に対して十分な警戒が必要である。われわれは、禁断の実について黙想すべきである。そしてその芳香を吸収すべきである。また主エホヴァが言った言葉、「もしこれらの果実を食べたならば、死ぬであろう」を、忘れてはならない。

われわれは、愛の幸福を喜び、女性は愛されるべきである。すばらしい絵画は、われわれを喜ばせ、美しい音楽作品は、われわれを法悦の境にさえつれていく。だが美しく愛すべき女性は、その時、彼女を所有したいという気持ちを起こさせる。彼女は、母なる神の生きているシンボルである。愛しあう性の行為は、言うまでもなく喜びである。性の喜びは、人間の正当な権利である。愛の幸せを喜び味わいなさい。ただし精液をもらさないようにしなさい。神聖さを汚す罪を行わないようにしなさい。姦淫(性の消耗)を行う人になってはならない。純潔さは、われわれを神々に変えるが、姦淫はわれわれを悪魔に変える。

クルム・ヘラーは言った。「セティアンは、偉大なる光とその姿、つまり太陽の放射を崇拜する。その太陽の放射は、われわれの内に巢を作り、蛇を形作る」と。ナザレ人(イエス)は言った。「もしあなたがたが、エ

ジプトを去り紅海を渡るならば、あなたがたすべては、神々になるであろう」と。クルム・ヘラーはその著書『ノーシス教会』で述べている。「このノーシス派は、聖なる品物、それに入れてベニヤミンの精液を飲んだという聖杯を所有していた」と。ウィラコッチャの言うところでは、この精液はワインと水を混ぜたものであった。また偉大なるマスター、クルム・ヘラーは次のように述べている。「ナザレ人(イエス)の祭壇から性的な蛇の神聖なシンボルが失われたということは、一度としてなかった」と。実際にモーゼが備え持っていたパワーや支配力は、杖の上の蛇であった。その蛇はのちに杖そのものになった。そのことを他の蛇に伝え、またイヴを誘惑したのもその蛇であった。

賢者ウィラコッチャは、彼の不滅の本『ノーシス教会』の中で、他に次のように書いている。「砂漠で、モーゼは彼の民に向かって杖の上の蛇を指し示して言った。その蛇を利用する者は、道中、害されることはないだろう」と。

モーゼの驚異的なパワーのすべては、クングリニーの神聖な蛇の中にある。モーゼは杖に蛇を昇らせるために性の秘儀を非常に多く実践したのである。そのモーゼには、一人の妻がいた。

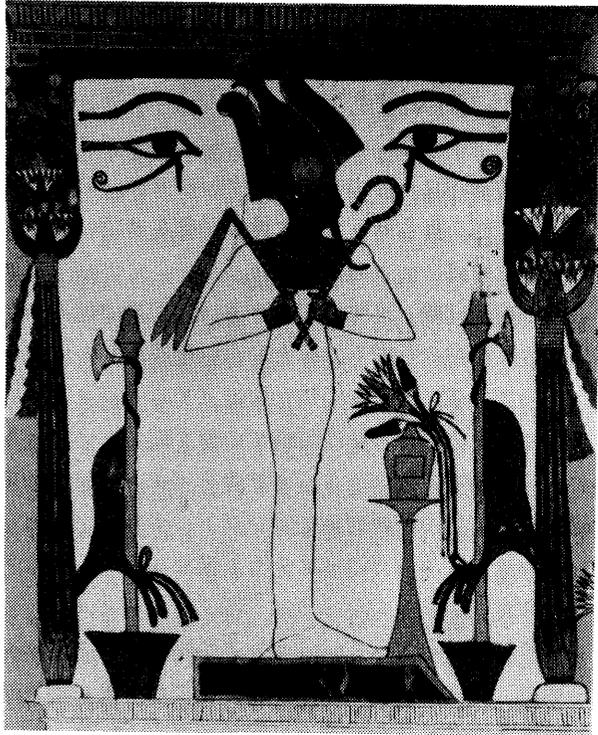
偉大なる神秘を受け継いだ秘儀司祭たちは、崇高で慎み深かった。それゆえひどい闇の数世紀の間でも、偉大なる秘儀を細心の注意を持って守り保護してきたのである。偉大な司祭たちは(アルカーノについて)沈黙を誓った。そして人々の目から秘密の科学の鍵を隠した。偉大な司祭たちだけが、性の秘儀を知ることができ、また実行できた。蛇の智慧は大いなる神秘の基礎である。この蛇の智慧はエジプト、ギリシア、ローマ、インド、ペルシア、トロイ、メキシコのアステカ、ペルーのインカなどの秘密の学校で培われてきた。

クルム・ヘラーは言っている。「ロシアの図書館にあるホーマーのデメテルの歌の中に、偉大で超越的な宇宙の生理的な行為の周りをすべてのものが回転している様子をうかがうことができる」と。偉大なるエレウシス寺院の基礎石として性の秘儀が非常に重要な役割を果たしたということが、かの『神人(MAN-GOD)の詩』、古代トロイの栄誉とアキレスの怒りを歌った詩の中にはっきりと見てとることができる。衣をまとわずに踊る舞踏、気持ち良い寺院音楽、酔わせるような口づけ、秘密の行為の神秘的魔法は、崇拜すべき神々と女神たちの楽園エレウシスを作り出す。そこでは誰も卑

猥なことを考える者はなく、ただ「崇高で神聖な事柄」だけがあった。

一人として、寺院の神聖さを汚そうと考えるものはいなかった。神聖なワインがこぼれてしまうのを避けるために適切な時期に退く方法を、夫婦は知っていたのである。

エジプトでは、男性的原理としてオシリスが現われ、それに対応して、永遠の愛すべき女性原理としてイシスが現われた。この太陽の国ケムでは、すべての点で卓越した君主でさえ、伝道を始める前にイニシエーションのための準備の期間があり、偉大なるアルカーノA・Z・Fで働いた。このようなことは、大自然の記憶の中に書かれている。



エジプトのオシリス

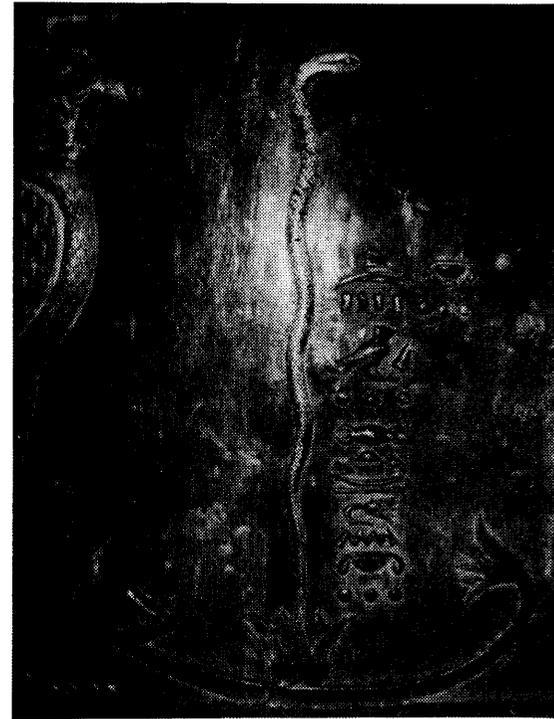
フェニキアの国では、ヘラクレスとダゴンは、互いに強く愛しあった。アッチィカでは、プルートとペルセポネが愛しあった。しかしそれらは、クルム・ヘラー博士が「これはギリシアの密儀の中のリングとヨニである」

と言っているように、明らかに男根と子宮について語っているのである。

エジプトの偉大な司祭たちやアトランティス人によって培われてきた古代の智慧を受継いだ人々は、トキの頭をもつ偉大なトート神を直立した男根を持つ神として表現した。そしてクルム・ヘラーは言っている。「トキの頭をもつトート神の直立した男根の上に『理性を授ける者』という句が書かれていた。そしてその碑文の横には、蓮の花が光り輝いていた」と。

聖なるエジプトの老賢者たちは、千年王国の壁に、神聖なシンボル、性の蛇を彫刻した。

性の秘儀は、伝達禁止の秘密であった。それは非常に重要な秘密であった。絶対に他言してはならないとされている秘密をもらした不運な者は、死の宣告を受けた。彼らは、敷石のある中庭へ連れて行かれ、そしてワニの皮でおおわれ、判読できない象形文字が書かれている千年王国の壁の前



デンデラの蛇

エジプトのデンデラ神殿の一番奥の地下に、秘密の部屋がある。その壁面には、蓮の花から上昇する蛇が数多く描かれている。

で、首は切り落され、心臓はつかみ出された。のろわれた彼らの遺骨は、四方八方に投げ捨てられた。

ところで今、フランス革命のさなか、ギロチンで殺されたフランスの大詩人カゾテを思い出した。この男は、有名な饗宴の席上で、自分自身の死を予言した。また、イニシエーションを受けたある貴族のグループに待ちうけている不運をも予言した。彼らは、大いなる秘密をもらそうともくろんでいたからである。ギロチンによって殺される者、また短刀で刺される者、毒を盛られる者、監獄へ入れられる者、追放される者などがいると予言した。彼の予言は絶対的な正確さで実現した。中世では大いなる秘密をもらした者は誰でも、不思議な殺され方をした。たとえばネツソスのシャツによって、あるいは死を宣告された者の玄関に誕生日の贈り物として届けられた毒入りせっけんによって、あるいは香水が吹きかけられた花束によって、あるいは短刀によって殺された。

偉大なる秘儀

グランフルカーノ
偉大なる秘儀は、すべてのパワーの鍵であり、あらゆる帝王支配権の鍵である。自然を支配しようと試みる大胆な人間に対して、自然はそのパワーを解放する。偉大な秘儀司祭は、その秘密を隠す。そして聖王たちも、自然のパワーの秘密の鍵をいかなる人にも、引き渡すことはなかった。性の秘儀の秘密を授かったにもかかわらず、それを役立てる方法を知らない人は、まことに哀れで不幸な人である。「そういう人間ならば、生まれてこなかった方がよかったか、あるいは首にひきうすをつり下げて海の底に身を投げてしまったほうがよかった」と言われているように。大自然にとって人間の宇宙的な実現は、興味のないことである。むしろそれは、大自然の計画と反対でさえある。これが、大自然を支配しようと試みるすべての勇敢な人間に対して、自然がそのすべてのパワーで反対する理由である。

よいタイミングで、ある奇妙な話を思い出した。あるとき貧しい税関吏が海岸を歩いていた。突然、ある物が彼の注意を引いた。彼が砂のくぼみの中に見たものは、カリブ海の荒々しい波によって洗われている皮製の物体であった。男は、それに近づき、非常に驚いた。それは黒い皮の小さなかばんであった。あわてて彼は、港にある事務所にその拾い物を持って行き、彼の上司に託してしまった。彼の役割は果たされたので、家へ帰って

行った。翌日、仕事に出てみると、上司か怒りに体を震わせていた。上司は男に12セントのコインをたたきつけて、次のように言った。「この愚か者め！ これがお前の値打ちだ。このコインを持って行って、首を吊ってしまえ！ お前は生きていてもしかたない。この12セントでロープを買って木につるして、首を吊ってしまえ。せっかく幸運か訪れたのに、お前はそれを放り出してしまった。お前か私に引き渡したかはんは、100万ドルの包たったのだ。消えうせろ。ここから出てゆけ、愚か者め！ 生きる資格などお前にはない！」

実際に、これは貴重な宝である大いなる秘儀を利用する方法を知らない者に待ちうけている不運そのものである。そういう人物は、生きていてもしかたがない。いまだかつて、性の秘儀に関する大いなる秘密が教えられたことはなかった。しかし今、われわれはそれを公にしている。人生の途中で王者の宝を見出した後にも、例の税関吏のようにそれを放り出してしまう人は、不幸としか言いようがない。大いなる秘密の宝は、例の税関吏が見つけた財産よりもずっと価値のあるものである。それを放り出してしまうとは、何と愚かなことであろうか。

クンドリニーを目覚めさせるためには、女性が必要である。しかしながら、次のことを警告しておかなければならない。イニシエイトは、ただ一人の女性とだけ性の秘儀を実践することができるのである。妻以外の別の女性とそれを行うことは、不義姦通の罪を犯すことである。そういう人たちは、人生の学びは得られない。

女性を誘惑する口実として性の秘儀を利用する者がいるということは、不幸なことである。この種の人は、神聖な寺院を冒瀆する人であり、必然的に黒魔術におちいるものである。すべての女性は、そういう邪悪な人物に対して十分に気をつけなければならない。また奥深い自己実現に達するという口実のもとに、どんな男性であっても結びつくような女性が少なからずいる。そういう情欲的な女性が望んでいることは、肉欲を満足させることである。そういう世界は、いつもそういう世界である。偉大なる秘儀を公に普及し始めて以来、予期した通り、この教えを踏みじめる者たちが現われた。しかし智恵のパンによって毒殺された。

性の秘儀における相互礼拝は、男とその妻の間だけで行すべきものである。肉欲的な誘惑やそれによる忘我、また聖なる名のもとに行われる情欲的欲望を避けるために、この点をはっきりとさせておきたい。

宇宙的な性の力

性のパワーは、強力な武器である。科学者は、いまだ電気の源となるものを発見することができない。電気エネルギーの源は、宇宙的な性のパワーの中に発見されるはずである。このパワーは、性の器官の中にだけあるのではなく、宇宙のすべての原子と電子の中にある。太陽の光は、性による生産物である。水素の原子は、炭素の原子と性的に結合して太陽光線を生み出す。水素が男であり、炭素が女である。太陽光線は、両者の性的結合の結果である。炭素の変化するプロセスを研究すると、たいへん興味深い結果を得るだろう。そのプロセスは、光の懐胎である。

電気の源泉は、宇宙に遍く存在する蛇の火の中に発見されるはずである。電子の中でその火は生きている。賢者はそれについて瞑想し、神秘学徒はそれを崇拜する。「完全なる結婚」の道に従う者は、実際にそれ（火の蛇）とともに働く。

性の力は、白魔術師と黒魔術師の両方の手中にあり、それは強力な武器となる。思考力によって脊椎のところへ性の流動体を引き寄せ、それぞれの袋にそれを蓄える。不幸にもその流動体をもたらしてしまえば、無数の太陽原子を失うことになる。精液をもたらしてしまう性の痙攣の動きは、太陽原子を失い、その代わりに人間の原子地獄から集めた無数の悪魔的原子と入れ替わるときに起きるのである。これが、われわれの内に悪魔を作り出す方法である。

内なる性の衝動を抑制する時、そのすばらしい流動体は輝きを一段と増して、アストラル体の中へ戻ってくる。これが、われわれの内にクリストを創造する方法である。このように性エネルギーによって、われわれの内にクリストか、あるいは悪魔を創造することができる。

アストラル・クリスト

コスミック・クリストを具現してその資格を持つ偉大なマスターが言った。

「私は命のパンである。私は生きているパンである。もしこのパンを食べる者があれば、彼は永遠に生きるであろう。私の肉を食べ、私の血を飲むものは、永遠の命を得るであろう。そして私は、彼をよみがえらせるで

あろう」

「私の肉を食べ、私の血を飲むものは、私の内におり、私もまたその人の内におる」（ヨハネ福音書第6章）。

クリストは、太陽霊である。太陽の生ける魂^{スピリット}である。クリストはその命で、小麦の穂を成長させ、太陽ロゴスの潜勢力のすべてを穀物と種の中に取り込む。人間や動物や野菜などのすべての種子（貴重な小箱）の中には、太陽ロゴスのクリストの実質が内包されている。



エレウシス出土の大理石の浮き彫り

豊穡の女神デメテルが、エレウシス密儀のシンボルである穀物の種子を与えている。穀物は太陽エネルギーの結晶であるが、われわれ人間のそれである精子、卵子の活用が、密儀のキーであったことを示している。

創造エネルギーを内部へ戻し、上昇させることによって、われわれの内にはそれは懐胎し、そしてすばらしい子、クリスティック化したアストラル体が生まれる。この乗物は、われわれを不死にする。それが、われわれのクリストゥス（クリスト）の仲介者である。この乗物を使って、われわれは秘密の内にいる聖なる父のところへ行くことができる。「誰であろうと

私を通らずして父のもとへ行くことはできない」と、かの完全なる主は言われた。

死ぬべき運命のアストラルの幽霊は、人間のスケッチにすぎない。それは統一でさえない。この幽霊の実体は、悪魔の隠れ家であり、すべての汚れた鳥たちの巣窟である。

このアストラルの幽霊の中に「我」(悪魔)が住んでいる。これが地獄の軍団である。「我」は軍団である。肉体がたくさんの原子で構成されているように、「我」も無数の「我」によって構成されている。ずる賢い悪魔や、悪意ある悪魔どうしが互いに争いあっている。人が死ぬとその軍団となる。その人の体はおのずと塵となり、生き残る唯一のものは、「我」である軍団である。

超視覚者は、しばしば肉体のない存在に出くわすことがある。それは、様々な格好で同時に違った場所に現われる。その人物が、たくさんの複数の人になってしまったように見える。それが軍団である。しかしクリスティックなアストラル体をわれわれの内に生み出したならば、死後もその恒星の体で生き続ける。そうなった時、われわれは本当に不死の存在となる。クリスト化したアストラル体を持つ人々は、死後も目覚めた意識を持ち続ける。普通の人々は死んで肉体のない存在になった時、意識を眠らせた状態で生活する。事実、死は、妊娠中の胎児へと戻っていくことである。死は、種子へと戻ることである。死んだものは誰でも、全くの無意識、つまり眠った状態で新しく母親となる人の子宮へ戻っていく。

人々は体現した霊さえも持っていない。彼らの霊は、体を持っていないのである。人々は未熟な霊を持つにすぎない。しかしクリスト化したアストラル体を持つことで、はじめて霊を体現することができる。普通のありふれた人々は、単なる「我」の乗物であるにすぎない。死をさげられない者の名前、それが軍団である。

性の秘儀によってのみ、アストラル・クリストをわれわれの内に生み出すことができる。誘惑が火である。誘惑に打ち勝つことが光である。「欲望を慎むことで、アストラルの液体は松果腺の方向に向かって上昇する。このようにして、われわれの内に、超人アダム・クリストが生れる」。

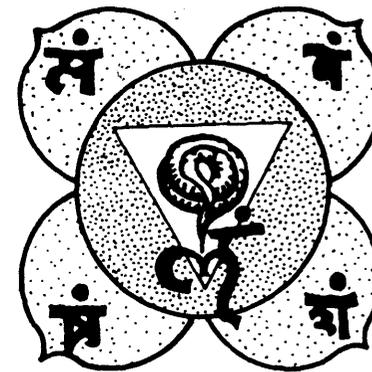
性の交わりのために性的な器官が興奮する時、精液は増加する。精液をもらさない時、それは変化する。そしてそれは、われわれを神々に変えるのである。

クンドリニーと七つの教会

性の火とは、われわれの内なる神が、闇の者と戦う時に使う剣である。性の秘儀を実践する者は誰でも、七つの教会を開く。

クンドリニーとともに働いた後で射精をしてしまう人は、必ず失敗する。なぜならば、あやまちの程度に従って、クンドリニーは脊椎骨の一つ、またはそれ以上を下降するからである。完全な純潔を達成するために、われわれは奮闘しなければならない。「さもないと、私は汝のところに来て、汝は不適當であるとして燭台を取り去るであろう。汝には後悔だけが残るであろう」。

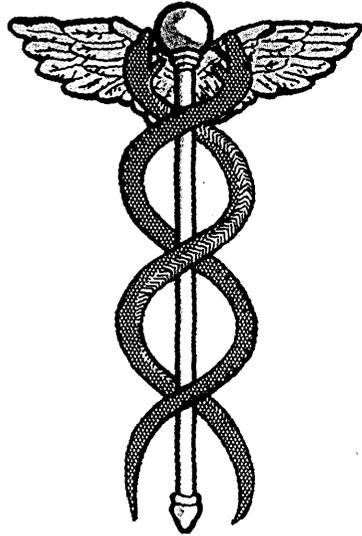
精液を作る組織から上昇する蒸気は、脊髄にある下の穴を開き、その穴から聖なる蛇が入っていく。普通の人はこの穴は閉じている。黒魔術師の精液の蒸気は、奈落へ向けられる。白魔術師の精液の蒸気は天へ向って上昇する。エペソの教会が開くことは、クンドリニーの目覚めを意味している。このセンターの色は、放蕩者はよごれた赤であり、普通のイニシエイトは黄色がかった赤、そして秘伝を授かったイニシエイトは紫である。



エペソの教会

太陽の原子と月の原子は、精液を作る組織から上昇していく。太陽の原子と月の原子は、精液の蒸気の基本成分である。精液の蒸気は、エネルギーに変換され、そのエネルギーは、ポジティブとネガティブ、つまり太陽と月に二極化される。そのエネルギーは、イダとピンガラの共鳴経路を通り聖杯に向かって上昇する。この聖杯が脳である。精液が完全にエネルギーに変換されて上昇する時に通る二つの共鳴経路は、黙示録の二人の証人

であり、寺院の二本のオリーブ、全地の主の御前にある二つの燭台、マーキュリーの杖にまといつている二匹の蛇である。その蛇の尾が触れあう時、太陽と月の原子がトリベニの近くの尾てい骨で出あう時、クングリニーは目覚めるのである。



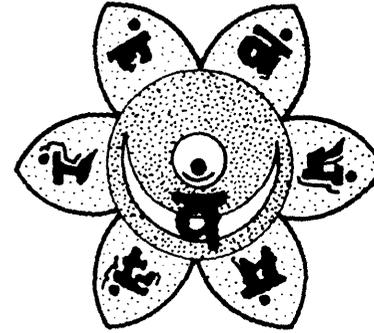
マーキュリーの杖

魔術的パワーを持つ火の蛇は、膜でとり囲まれた袋から出てくる。そして脊髄経路を通り聖杯（脳）に向って上昇する。脊柱と七つのチャクラや交感神経系を結びつけているある種の神経繊維が、脊髄経路から出ている。聖なる火は七つの磁気センターの活動を開始させる。クングリニーは、驚くべき方法で七つのチャクラの活動を調和的に働かせるのである。香りのよい七つの美しいバラをつけた一本の杖で、このすべてを表現することができる。この杖は脊柱を表わし、七つのバラは、七つのチャクラすなわち七つの磁気センターを表わす。七つの燃える火のバラの繊細な茎は、脊柱に結ばれた美しい糸である。

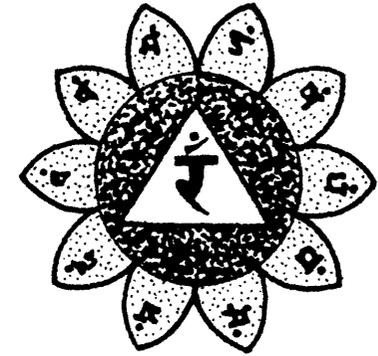
精液の中で、光の勢力と邪悪なる闇の勢力が対抗して戦っている。

火の到来は、完全なる結婚の中で最も大きな出来事である。蛇がとぐろを巻いているセンターは四枚の花びらを持ち、そのうち二枚だけが活動している。そして、イニシエーションによって、残りの二枚も活動を始める。

スミルナの教会とペルガモの教会



スミルナの教会



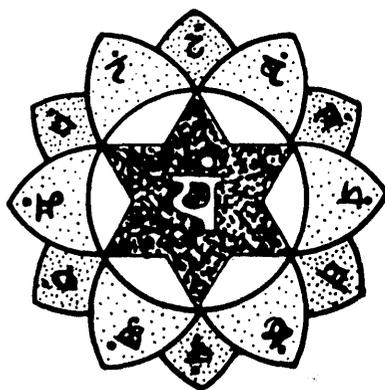
ペルガモの教会

前立腺チャクラは、赤、オレンジ、黄、緑、青そして紫の六つの重要な色を持っている。これがスミルナの教会である。魔術師にとって、このセンターは非常に重要なものである。このセンターによって、われわれは性の行為をコントロールするのである。これは実践魔術の磁気センターである。

三番目のセンターがペルガモの教会である。ここは感情の頭脳である。人間の有機体の中には、無線局に相当するものが本当に存在する。へそのセンターが受信センターである。一方、送信のアンテナは、松果腺である。われわれのことを考えている人の精神波動が、われわれのへそのセンター、すなわち感情の頭脳に届き、そして脳まで伝わってくる。そこで彼らの考えていることが、われわれに意識されるのである。

テアテラの教会

四番目のセンター、テアテラの教会は、まさに称賛に値するものである。噴門あるいは心臓のセンターは、太陽系の中心と親密な関係にある。人間は小さな宇宙である。宇宙を研究しようと思うならば、人間を研究すべきである。宇宙の中に人間を発見し、人間の中に宇宙を発見できる。



テアテラの教会

太陽系を遠くから眺めてみると、本当に栄光に輝く人間が、永遠無限の中を歩いているように見える。そこではすべての生きた時間が、言葉に絶する音楽、天球の音楽に満たされ、生きた形態に変えられている。この天上の人間の知覚の一瞬は、80年である。この天上の人間の心臓は、実際に太陽系の渦の中心にある。意識を持ち良い意図を持ってアストラル体で移動する方法を知っている人であれば、この寺院を訪れることができる。

夜にまさる暗い巨大な深淵が、人を至聖所へと導く。勇気ある少数の人々が、災いの深淵へ降りていく。肝をつぶすような深い太陽の深淵の中で、恐ろしい出来事（燃え盛る焰と神秘の恐ろしさ）を知ることができる。あえてその場所を通して降りていく勇気ある人ならば、至聖所の入口を見つけ出すだろう。

一人のアデプトが、オリーブの枝で、あなたを祝福するであろう。秘密の場所に入ることを許された者は、幸いである。愛すべき弟子は、狭い通路を通して至聖所の秘密の場所に案内される。そこに太陽系の心臓がある。この聖なる場所に七人の聖者が住んでいる。彼らは、七つの太陽光線の主たちである。最も重要な光線は、クングリニーの光線、つまり夜明けに強烈に輝く蛇の火である。夜明けに性の秘儀を行えば、この蛇の火の援助が得られるであろう。

太陽系は、一人の偉大なる存在の身体である。その方は、全く完全である。この偉大なる存在者の心臓は、太陽の中にある。その心臓のチャクラは、十二枚の花びらを持っていて、六枚が活動し、他の六枚は活動してい

ない。神聖な火によって十二枚すべての花びらが活動を始める。われわれは、集中した強い祈りによって、心臓の上に働きかけなければならない。

サルデスの教会

五番目のセンターが、サルデスの教会である。これは創造的なもののセンターであり、十六枚の花びらを持つ蓮の花である。火によってこの蓮の花の活動を開始させた人は、魔法の耳を授かる。

神聖な火は、のどのところでは、創造的なものとなる。天使は言葉のパワーで創造する。

爽り豊かな唇の上で、その火は言葉を開花させる。イニシエイトは、マインドによってあらゆるイメージを創造し、それを言葉で物質化することができる。神秘学研究者は、魔法の耳で聞くことについて、十分な定義をしてこなかった。そこで次のことを知っておかなければならない。魔法の耳で実際に聞くことができる人は、内なる声を、あたかも体で感知するかのように聞くことができる。もっとはっきり言えば、肉体が聞くのと同じように聞くことができるのである。魔法の耳ならば、天使の言葉に耳を傾けることが許される。

創造エネルギーがすべて脳のところまで上昇する時、われわれは天使の状態まで上昇する。その時、言葉のパワーで創造することができるのである。



サルデスの教会

自然の機械的な進化によっては、天使の高みに至ることはできない。進化とは、宇宙生命の活動のことであり、自然の進化によって天使の状態に至った者は誰もいない。自然はあらゆる可能性をその内に持っているが、自然は超人に興味を示さない。超人は、自然の与えた恩恵に戦いを挑み、一方、自然は巨大な力で、超人の誕生をはばもうとする。天使や超人は、意識のすさまじい革命の結果である。これは各自にとって、たいへん内密な問題であり、完全に性的な問題である。剣は、さやから抜き出さなければならぬ。そして超人の誕生に対抗してくる自然の恐ろしい勢力と、戦わなければならない。

フィラデルフィアの教会



フィラデルフィアの教会

神聖な火が、額にあるチャクラ（二枚のすばらしい花びらと無数の光線を放っているフィラデルフィアの教会）を開く時、われわれは超視覚の視力を得られる。人々は、理屈や理論で考える生活に慣れ、また実際に自分で見たこともない事柄について明言することに慣れている。偉大なる内的現実を見るために、超視覚を目覚めさせることが必要である。額のチャクラはマインドの玉座である。実際にバランスのとれた調和的な学習と超視覚が、手に手をとって進んで行く時、真実の知識の寺院へ入って行くことができる。

多くの人々が、本で読んだ内容をうのみにし、他の人が理解したことを借用して繰り返す。こういう人たちは、自分では見たことがないことでも、本で読んだということを知っていると考えてしまう。彼らは、オウムのように繰り返す。それだけのことである。彼らは何も知らない。彼らは無知

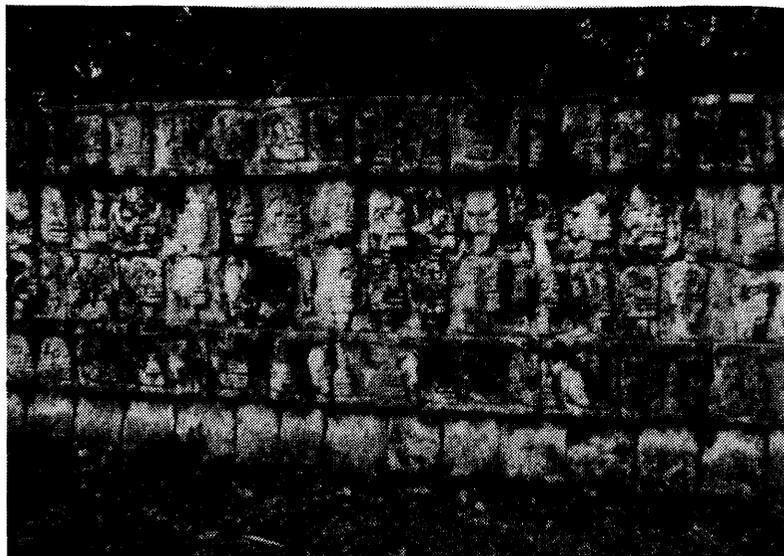
である。学識のある人々かも知れないか、無知である。知ることこそ、われわれがまず最初になすべきことである。超視覚は、真の存在（魂）の目である。存在の本質と知識は、バランスを保って、リズムカルな足どりとともに進む必要がある。

神秘学の本をたくさん読んだ人は、自分を賢者と思っている。しかし読んだ事柄を実際に見ることかなければ、悲しいかな、全く何も知らないのと同じである。世界中には、あらゆるタイプの予言者が無数に存在する。真の超視覚者であれば、自分か超視覚者であると決して言いふらすことはない。神秘学の生徒か、はじめて超視覚のヴィジョンを経験した時、そのことを、まわりの人たち全員に言いふらす傾向がある。しかし、人々は彼を笑いものにし、しかもその否定的な反応のために、ついにその初心者は、心のバランスを失ってしまう。

イニシエーションを受けていない超視覚者は、多くの誤りの中に生徒を導いてしまう。中傷や侮辱によって人をはすかしめ、ときには殺人犯にしてしまうことさえある。一瞬の超視覚のひらめきを経験する人か、もしイニシエーションを受けておらず、その上嫉妬深い人ならば、例えば彼の妻かアストラル界で友人と姦通を犯しているところを見た場合、妻かあるいは友人のどちらかを暗殺しかねない。その不運な妻か聖人であっても、またその友人か本当に信頼できる人であったとしてもである。

次のことに注意しなさい。アストラル界では、人間は多数の「我」からなる一つの集合体であり、それぞれの「我」か前生で行った行為を繰り返しているのであるということ。

白ロンの偉大なマスターたちは、ありきたりの超視覚者たちによって中傷されてきた。すべてのマスターに彼とそっくりのダブルか対応して存在する。もし白のマスターか純潔を説くならば、そのダブルは、性の消耗や姦淫を説く。もし白のマスターか良い仕事を行えば、そのダブルは邪悪な仕事を行う。それは、まさに正反対の関係である。こういうことすべてから、大密儀の第五イニシエーションを達成した超視覚者だけを、われわれは信頼することができる。さらに注意すべきことは、大密儀の第五イニシエーション以前には、人は彼の内なる神の寺院に仕えるためのクリスティックな乗物を持つことがないということである。人が乗物を作りあげないかぎり、霊にしても、クリストにしても、その人の中に入ることはできないのである。



マヤ神殿のツオンパトリー（チチェン・イツア）

壁一面に掘られたドクロの彫刻は、われわれの内的な死を表している。
内にある無数のエゴを殺してはじめて、真実の存在となることができる。

霊を体現しない者は、真の存在を持たない。「我」とは、多数の「我」が集まった軍団である。多数の「我」は、人の体を使って自らを主張するために、抗争しあっている。ある時は、「飲む」我、また別の時は、「タバコを吸う」我、「殺す」我、「盗む」我、「愛する」我など。それぞれの「我」が衝突しあっている。このような「我」ゆえに、ノース運動に関わることを誓ったが、のちに突然、心を変えてノースの反対者であると宣言する多くの人たちを多く見かける。ノースに忠誠を誓った「我」が、ノースを憎むもう一つの「我」に明け渡されたのである。女性を敬愛することを誓った「我」が、女性を憎むもう一つの「我」と交替する。「我」とは、悪魔たちの軍団である。どうして霊を体現していない超視覚者を信頼することができるか。霊を体現していない人は、論理的責任を持たない。われわれは、悪魔を信頼することができるだろうか。

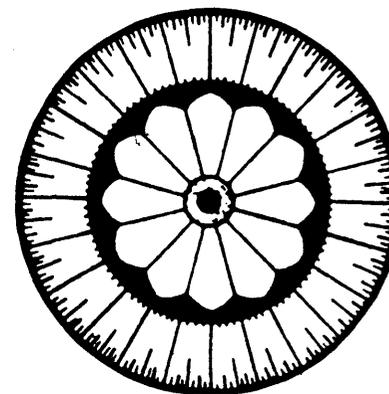
「われこそは超視覚者であり、予言を行う」と人々に宣言し、言いふらしている人に対して、ノースの学徒は十分に注意し、惑わされないよう

にしなければならない。真の超視覚者は、決して自分から超視覚者であるということはない。大密儀の第五イニシエーションを受けたマスターの方々は、たいへんに謙虚でもの静かである。神秘学を学んだからといってマスターではない。本当のマスターは、大密儀の第五イニシエーションを達成した人たちだけである。第五イニシエーション以前には、誰一人としてマスターである人はいない。

ラオデキヤの教会

最後に開く蓮の花が、ラオデキヤの教会である。

この蓮の花は、千枚の花びらを持ち、聖者の頭でこうごうしく輝いている。クンダリニーが松果腺に達する時、この驚くべき花が開花する。これは完全なる超視覚、ダイヤモンドの眼である。この機能によって、われわれは大自然の記憶を研究することができる。これが魂の神聖な眼である。



ラオデキヤの教会

最初の聖なる蛇は、松果腺から眉間にある智恵の眼に向って進む。そして鼻の上の付け根の磁場の中を通過する。この場所にある聖なる父の原子に、聖なる蛇が触れた時、大密儀の第一イニシエーションがやってくる。大密儀の第一イニシエーションを受けたという単なる事実だけでは、どんな人もマスターではない。それは、ただニルヴァーナに導く流れに入った人であるということの意味しているだけである。学徒は、一連の順序で七つの蛇を上昇させなければならない。

二番目の蛇は、生命体に属している。三番目はアストラル体に、四番目はメンタル体に、五番目はコーザル体に属している。六番目と七番目の蛇は、意識霊と聖なる魂に属している。七つの蛇のそれぞれが、大密儀のそれぞれのイニシエーションと対応している。七つの蛇は、三つずつの二つのグループがあり、そしてわれわれと唯一なる存在（法、すなわち聖なる父）とを結びつけている七番目の、火の舌である崇高なる戴冠がある。われわれは宇宙意識のそれぞれの次元において、七つの教会を開いていかななければならない。イニシエーションの期間に、帰依者はクリストの聖痕を受けなければならない。それぞれの内なる乗物は、はりつけにされ、聖痕を受けなければならない。聖痕は、その人が値するならば与えられる。それぞれの聖痕には、秘教的試練がある。両手に受ける最初の聖痕は、たいへん苦痛に満ちたものである。



七つの尻尾を持つ獅子

七つの蛇の神秘は、日本の神道にも見られる。滋賀県日吉神社には、七つの尻尾を持つ獅子がある。上に向かう七つの尻尾は、われわれが上昇させなければならない七つのクンダリーネを表している。

宝石もイニシエーションにおいて、たいへん重要な役割を演ずる。

「そして、都の城壁の土台石は、あらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髓、第四は緑玉、第五は赤編めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった」。

黙示録（ヨハネ黙示録第21章）は述べている。

「私はアルファであり、オメガである。私は、渇く者には命の水の泉から、価なしに飲ませる」

「私はアルファであり、オメガである。都の門を通過して入るために、子羊の血（クリスト化された精液）で着物（七つの体）を洗い清める者は、幸いである」。

しかしながら、実際に高次のイニシエーションに到達する人は、何とわずかであろう。ごくわずかの人たちだけが、（エゴの）死刑執行人のむちにキスをしたいと望んでいる。高いイニシエーションに至る必要性を強く感じているにもかかわらず、われわれを懲らしめてくださる手に口づけをすることは、非常に難しいものである。

クリストは言われた。「千人の人が私を探すけれど、私に従うのは一人である。千人の人が私に従うけれど、私と同じようになるのは一人である」。

最も悪いことは、たくさんの神秘学の本を読んでいる人たち、たくさんの教えと関わっている人たちは、陳腐な神聖さをつめすぎているということである。彼らは、自分を謙虚な存在であると自慢するが、実際は自分をたいへん神聖で賢いと信じ込んでいる。その哀れな兄弟たちは神の冒瀆者以上に、イニシエーションの祭壇から遠くにいる。

高いイニシエーションに到達したいと望む者は誰でも、まず自分自身を邪悪な人間として認めることから始めなければならない。自分の邪悪さを認める者は、自己実現の道の上にいる。祈りの香の中にも、罪が隠されていることを思い出ささい。こういうことは、あまりにも本を読みすぎた者にとって理解し難いものである。彼らは自分が、神聖さと智恵で満たされていると思っている。ちょっとした超視覚を経験しただけで、彼らは自分自身を博識のマスターであると宣言する。何と見苦しいことだろう。そのような人は、奈落と第二の死の候補者になるのは確実である。奈落はまじめでありながら道を誤った人たち、たいへん良い意図を持っていながら道を誤った人たちでいっぱいである。

神に至るための高次の性

イニシエイトが創造的な火の一部を頭から出す時、それは子羊の足もとに王冠を置くことである。聖ヨハネは、二十四人の長老が、彼らの王冠を神の玉座のもとに置くことを語っている。

黙示録第19章に、ももにリボンをつけた騎手についての記述がある。このリボンに聖なる文字で次の句が書かれてある。

「王の王、主の主」。

実際、王は額にいたるのではなく、性の中にいる。ラスプーチンは、酒のまわった狂宴で、彼の男根でテーブルをたたきながらよく言ったものである。「これが世界の王だ」。

愛することを知っている男女は、幸せである。黙示録の七つの教会は、性の行為によって開かれる。それによって、われわれは神々になることができるのである。エジプトの強力なマントラ“フェ…ウィン…ダグ (FE…WIN…DAGJ)”は、七つの教会で反響する。最後のことば“グ (GJ)”は喉音である。

七つの教会の完全な営み、司祭としての完全な務めは、ヒーナスの状態の体で執り行われる。偉大なる魔術師は、自分の体をヒーナスの状態に置く方法を知っている。そのようにして、彼らは、七つの教会の司祭を務めるのである。

イエスが海の上を歩いた時、その体はヒーナスの状態であった。イエスのごとくなればわれわれは全能の神々である。

ヒーナスの状態になるために魔術師が使う神秘的なチャクラは、へそのところにある。へそのチャクラのパワーを利用して、自分の肉体を離れたところから見る事ができるすべての魔術師は、次のようにして内なる神に懇願することができる。「わが主、わが神よ、私のからだを連れて行って下さい」と。内なる神は、肉体をヒーナスの状態の魔術師のところへ、連れて行ってくれる。これがいわば、アストラルの次元に潜むということである。その瞬間、ヒーナスの科学で言う神秘的チャクラが回転する。

ヒーナスの科学を学びたい者には、『イエローブック』の研究を勧める。

七つの教会は、われわれに火と空気と水と土を支配するパワーをもたらしてくれる。

【C. W. リードビーター】 1847～1934。英国生まれ。神智学徒で、すぐれた透視力の持ち主。著書に『アストラル界』『透視力』他。

【三角の法則】 三角の図形から暗示されるように、三つの力の相互作用因。

【トリベニ】 原文ではTRIBENIとなっているが、サンスクリットのTRIVENIと思われる。トリベニとは、三つの支流が合流するガンジス川の別名。尾てい骨付近のトリベニからスシュムナ、イダ、ピンガラの三つの気道が始まる。また、ここでクンダリニーが目覚める。

【プラーラヤ (PRALAYA)】 宇宙の夜のこと。宇宙は振り子のように昼と夜を繰り返す。昼はマハーマンヴァンタラ。

【クルム・ヘラー (Arnold Krumm Heller)】 1876～1949。偉大なノスティックのドクター。バラ十字会の一員。ベルリン大学医学教授。別名ウイラコッチャ。著書『ノーシス教会』の中で完全なる結婚の道について述べている。

【フェニキア】 現在のシリア沿岸で、紀元前二千年ごろ栄えた国。

【ヘラクレス (Hercules)】 ゼウスの子で、12の難業を遂行した大力無双の英雄。

【アッティカ (Attica)】 古代ギリシアのアテネを中心とする国家。

【プルート (Pluto)】 ギリシア神話。クロノスとレアの子。ゼウス、ポセイドン、プルトの三兄弟は世界を三分し、プルトは下界を治めた。

【ペルセポネ (Persephone)】 ゼウスとデメテルの娘。プルトの妻になり下界の女王となる。大地の豊穰と春を司る。

【トート (Thot)】 トキの頭をもつエジプトの神。学問や智恵を司る。

【ネッソスのシャツ】 ギリシア神話。ヘラクレスに破れたネッソスは死に際して、自分の血で赤く染まったシャツをヘラクレスに贈った。後に嫉妬に狂った妻ディアネイラによって、そのシャツを着せられたヘラクレスは、そのシャツのため、まるで「炎に包まれた」かのように身を焼かれてしまった。死後、ゼウスによってオリンポスの山に運ばれ、不死の体が与えられた。

【噴門】 食道の下端で、胃に続くところ。

【第二の死】 最後の審判によって罪の刑罰として与えられる永遠の死。

(ヨハネ黙示録20:6、20:14、21:8)

【イエローブック】 サマエル・A・ベオールの本の題名。

第八章

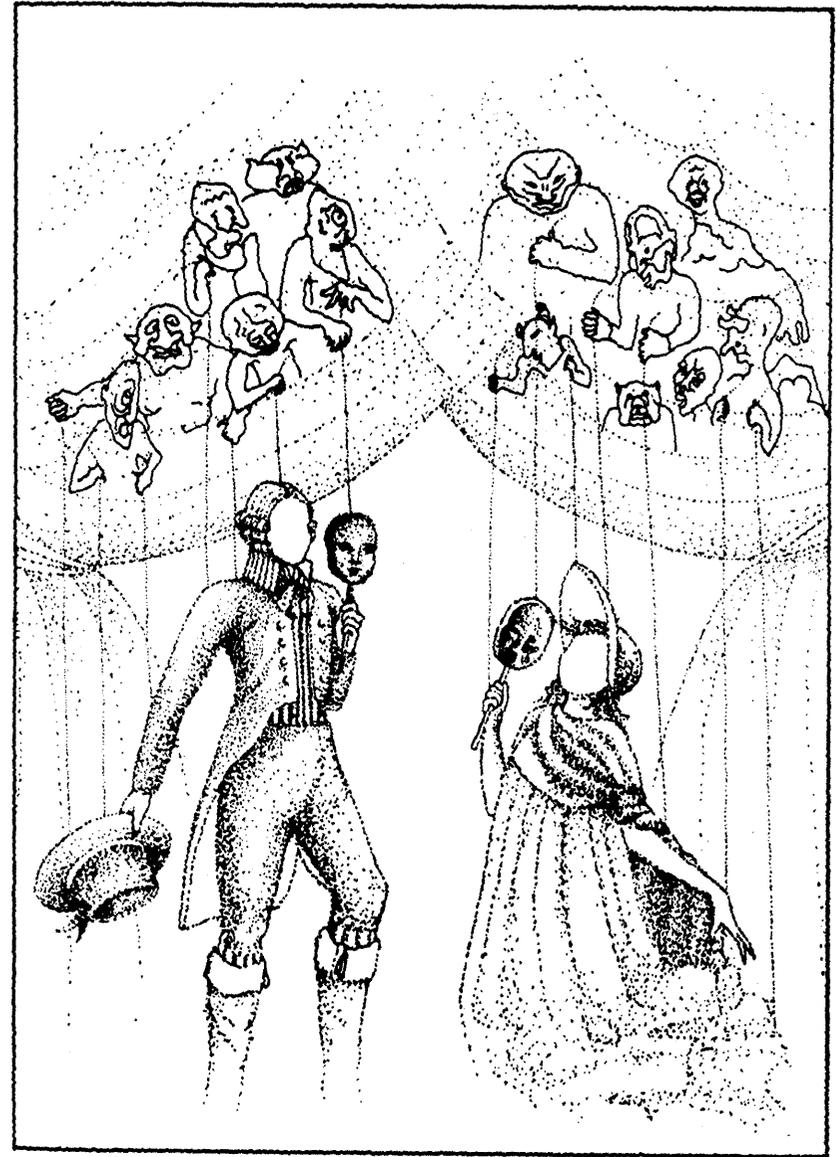
幸福、音楽、踊りそしてキッス

複数の「我」

ノーシスを学ぶ人々の家庭は、愛と智慧によって治められるべきである。実際のところ人々の多くは、情欲を愛と取り違えている。偉大なる霊だけが愛を知っており、また愛することができる。エデンの園では、完全な男性と言葉で表現できないほどすばらしい女性が、愛しあっている。われわれも愛することのできる存在にならなければならない。霊を具現した者だけが、真に愛する方法を知っている。「我」は愛することを知らない。きょう、愛を誓った「悪魔」(我)が、愛したくないという別の「悪魔」(我)と入れ替わる。われわれはすでに「我」は複数である、ということを知っている。その複数の「我」は、文字通り軍団である。絶えず入れ替わっている「我」は、永遠の争いの中に生きている。

一般的には、マインドはただ一つのもののように言われているが、われわれノーシスを学ぶ者は、マインドは複数であることを肯定する。複数の「我」であるそれぞれの幽霊が、それぞれのマインドを持っている。恋人を愛し、口づけをする「我」が、彼女を憎む別の「我」と入れ替わる。われわれは、愛することのできる存在にならなければならない。しかし人間は、いまだにそうなってはいない。まだ霊を具現していない人間は、愛することのできる存在ではない。人間は、いまだに真実の存在を持たないのである。人間の口を通して、悪魔(我)の軍団が話をする。愛を誓う悪魔、恋人を捨てる悪魔、憎悪する悪魔、嫉妬する悪魔、怒りや恨みの悪魔などがある。

しかし、それらの我(悪魔)に支配されながら、誤って人間と呼ばれている知的動物はエッセンス、すなわち、わずかばかりの人間的霊、ブダクタを持って生まれる。彼女(エッセンス、人間的霊、ブダクタ)は愛を知っている。しかし、「我」は、愛を知らない。われわれは恋人や妻(夫)の欠点を許すべきである。なぜならば、その欠点は「我」に属するものだからである。ノスティック・イニシエイトの家庭は、幸福と音楽と、そし



仮面舞踏会

何よりもわれわれは、機械的人間であることを理解する必要がある。自分の内部に隠れている複数のエゴに操られるマリオネットでしかないということ。

て言葉で表現できない口づけを基礎として治められるべきである。踊りと愛と愛することの喜びが、子供たちの内にある霊の萌芽を強く成長させていくのである。これこそ、ノスティックの家庭が、愛と智慧の真のパラダイスとなる方法である。

ノスティックの家庭から、酒と姦淫は追放されねばならない。しかしながら、狂信的になってはならない。乾杯を余儀なくされた一杯の酒さえ飲めない人は、酒を抑えることができずに、酔ってしまう人と同じである。姦淫は言うまでもない。姦淫は許されるべきものではない。性の酒をこぼす者は、性の消耗者（姦淫者）である。姦淫や性を消耗する者には、奈落と第二の死は必然である。

人間は、どんな活動にも関わるることができる。しかし、いかなるもの犠牲者にもなるべきではない。人間は王になるべきであって、奴隷になるべきではない。一杯の酒を飲んだからと言って罪を犯したわけではないが、酒の奴隷となって、その犠牲者になるのなら、罪を犯したことになる。マスターは、天国でも、地上でも、地獄においても、王である。弱い者は王ではない。弱い者は奴隷である。

カップルの性

イニシエイトは、妻である唯一人の女性とだけ性の秘儀を実践する。実際に、女性と結びあって精液をもらす男は、不幸としか言いようがない。イニシエイトは、性を消耗する時感じる、死の体験への誘惑に負けることはない。男は半身であり、女はもう一つの半身である。性行為の間、われわれは完全な存在となった喜びを経験する。射精をしなければ、永遠にその喜びは保存される。子供をつくるために、射精は必要ではない。射精によらないで脱け出した精子は、選ばれた、優良な、完全に成熟した精子である。その精子による授精から、実際に非常に優れた新しい被造物が生まれる。それが超人という種を創り出すことのできる方法である。

子供を生むために射精は必要ではない。愚かな人々は射精を好む。しかしノーシスを学ぶ者は、愚か者であってはならない。超視覚者は、夫婦が性的に結びあう時、すばらしい光の輝きが彼らを包み込むのを見る。まさにその時、新しい存在を生み出すために自然の創造力の奉仕に来るのである。

逆に夫婦か、情欲の奴隷になって自己を失う時、射精という罪を犯す。その時この光輝く力は離れ去り、赤い血の色をしたルシファーの力か、代わりに彼らの中に入り込む。それが家庭の中に、争い、嫉妬、姦淫、喧嘩、絶望をもたらす。こうして地上に天国をあらわすべき家庭か、反対に本当の地獄と化してしまうのである。射精を避ける人は、平和、豊かさ、智慧、幸福、愛を保ち、蓄える。性の秘儀の鍵によって、家庭の中の争いに終止符を打つことかできる。それが真の幸福への鍵である。

性の秘儀の間、夫婦は磁気で満たされ、互いに磁気化しあう。女性の骨盤からは女性的磁気流が発生し、胸からは男性的磁気流が発生する。男性は、口から女性的磁気流が発生し、男根から男性的磁気流が発生する。性の秘儀の間、生命磁気力は質的にも量的にも、たいへんな勢いで増加し続けている。それを集め、運び、与え、そして受けとるために、それらの器官は十分に機能していなければならない。



ノスティック・イニシエイトの家庭では、夫婦の魂からの性のふれあいがある。甘美な踊りと喜びの音楽、熱い口づけは、互いに相手の磁気化を完成させるという目的を持っている。磁氣的パワーは男性的であると同時に、女性的でもある。男が本当に革新を望むのであれば、妻から流れる磁気流が必要である。また女がその能力を発達させ、その完成を望むのであ

れば、夫から流れる磁気流が必要である。

夫婦が互いに磁気化しあう時、物事はうまく運び、家庭は幸福になる。一人の男と一人の女の結びつきから、何かが生まれる。叡智ある科学的純潔だけが、性の分泌を光と火に変化させることができるのである。

墮落した宗教は、すべて独身主義を説いている。すべての宗教は、その誕生と栄光に輝く時代には「完全なる結婚」の道を説いていた。仏陀は結婚し、「完全なる結婚」を成し遂げた。しかし不幸にも、その五百年後には仏陀の予言は完全な正確さで果たされた。仏陀の徳は使い果たされて、教団は対立しあう宗派に分裂してしまった。その時から、仏教の僧院（出家）制度が生まれ、また「完全なる結婚」に対する忌避が始まったのである。

聖なる救世主イエスは、クリストの秘密の奥義をこの世にもたらし、また「完全なる結婚」の道を弟子たちに教えた。最初の教会の司教ペテロは結婚していた。彼は独身ではなく、一人の妻がいたのである。不幸なことに、六百年後には崇拜すべき人（イエス・クリスト）の教えは、誤った教えによって損なわれてしまった。ローマ教会は、仏教の僧院制度のように死せる組織となり、僧や尼僧は「完全なる結婚」の道に背を向けて修道院に閉じこもってしまった。「完全なる結婚」の別の教えが必要になったのは、キリスト教発生以来六百年後であった。その時「完全なる結婚」を説いたのは、偉大なるマホメットであった。当然、これまでの例にもれずマホメットも、女性を憎むインフラセクシャルな人々によって激しく拒絶された。女性の敵である忌むべき人々は、強いられた独身主義を通して、神に到達できると信じている。しかし、それは罪である。

インフラセクシャルな人々が説く禁欲という行為は、全く実行不可能である。自然は、そのような行為に反発するものである。その時何が起るかと言えば、有機体を荒廃させる夜の汚れ（夢精）である。禁欲者はすべて、夜の夢精という射精に悩まされている。溢れるまで一杯になったコップは、ついにはこぼれてしまうだろう。禁欲という贅沢は、すでに超人の王国に到達した人々だけが実行できることである。超人は、すでに彼らの有機体を、性エネルギーを交換する機構に変えているのである。また彼らの内分泌腺は、性の秘儀によって鍛えられている。超人とは、神である。超人とは、多くの年月をかけた性の秘儀のたまものなのであり、また性機能における厳しい訓練のたまものなのである。

聖なる音楽と踊り

イニシエイトは、偉大なクラシック音楽を愛し、俗趣味の音楽は、とても聞くに耐えないように感じる。アフリカ、キューバ系の音楽には、人間の中の最も低い動物的な深層を目覚めさせるものがある。イニシエイトは、偉大な作曲家の音楽を愛する。たとえば、モーツァルトの「魔笛」。それはエジプトのイニシエーションを思い起こさせてくれる。

言葉と性的な力は深い関係がある。偉大なマスターであるイエスの言葉は、性の聖杯の中にある錬金術師の光のワインを飲むことで、クリスト化された。

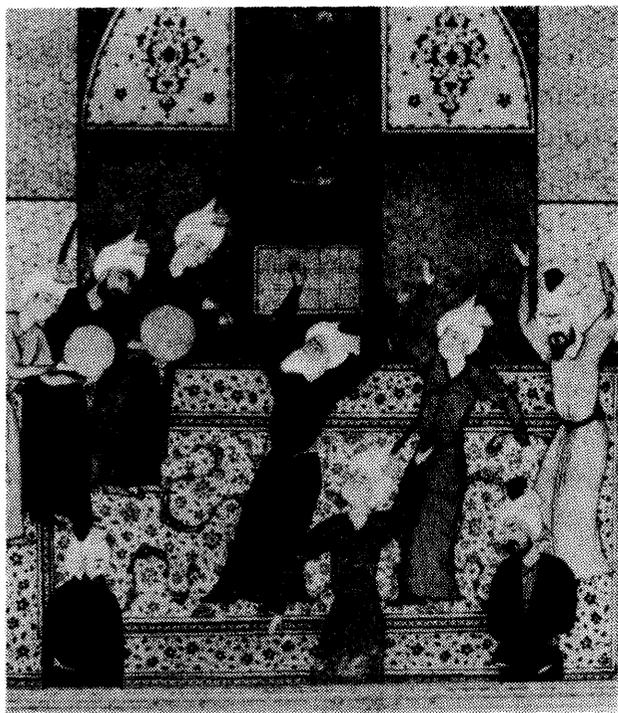
ベートーヴェンの九つの交響曲やショパンの作品、リストの聖ポロネーズなどを聴く時、われわれの霊はそれらの天球の音楽と共振する。音楽は永遠なるものの言葉である。われわれの言葉は、神聖な音楽でなければならない。このようにして、われわれは創造エネルギーを心臓へ向けて昇華させる。俗悪な、胸が悪くなるような、下品な言葉は、創造エネルギーの質を低下させるだけでなく、邪悪なパワーを持つものに変えてしまう。

エレウシスの密儀においては、聖なる踊り、衣をまとうずに踊る舞い、熱い口づけと性の結びあいが、人々を神に変えた。そこでは冗談や卑猥なことを考える者はなく、神聖で深い敬虔の念に包まれていた。

聖なる踊りは世界と同様に古く、地上の生命のあけぼのにその起源がある。スーフィーダンスや旋回するダーヴィッシュは、大変すばらしいものである。黄金の言葉を話すために、音楽を人間の有機体の内で目覚めさせるべきである。

マハヴァン(MAHAVAN)とチョタヴァン(CHOTAVAN)の偉大なリズムは、永遠の三拍子で宇宙の行進をしっかりと支えている。それは火のリズムである。霊が聖なる空間で陶然として浮かんでいる時、そのリズムはわれわれのために聖歌を伴奏してくれる。なぜならば、宇宙は言葉によって支えられているからである。

ノスティック・イニシエイトの家庭は、美しさで満ちているべきである。芳香を漂わせる花々や美しい彫刻など、完全な秩序と清らかさが、それぞれの家庭をノーシスの真の聖所とする。



スーフィーダンス

性の秘儀は両刃の剣

エレウシスの密儀は現在でも秘密の内に存在している。バルトの偉大なイニシエイト、フォン・ウクスクルは、エレウシス派の最高位のイニシエイトの一人である。彼は性の秘儀を熱心に実践した。ここで明確にしておきたいことは、性の秘儀は夫とその妻の間だけで実行できるということである。不義の男女は必ず失敗する。愛がある時のみ、結婚することができる。愛は法である。しかしそれは意識ある愛である。性の秘儀の知識、女性を誘惑するために使う者は、黒の魔術師である。彼は嘆きと歯がみが待つ奈落へと転落するであろう。そこには肉体の死よりも千倍も恐ろしい、第二の死が待ち受けている。

すべての若い女性や無垢な婦人たちに、次のことを緊急に訴え、誘惑に落ちることのないよう警告しよう。それは、夫を得てはじめて、性の秘儀

を行うことができるということである。性の秘儀を実践するという口実で、無垢な乙女を誘惑しようと、あちこちを歩きまわっている悪賢いキツネに注意しなさい。世間の救いがたい姦淫者（性を消耗する人々）にも警告する。永遠なる神の目から逃れることはできない。自らの欲望を満足させるために、また快楽のためにベッドに入る口実に、この知識を用いる哀れな女性も奈落へ落ちるであろう。そこでは泣き叫ぶ声と歯がみだけが待ち受けている。

はっきりと理解できるように、明確に言うことにしよう。神聖さを汚す者、冒瀆する者は近寄ってはならない！ 性の秘儀は両刃の剣である。性の秘儀によって、純潔で徳の高い者は神々へと変えられるが、邪悪で淫らな者は打たれて滅ぼされるであろう。

【マインド(Mind)】 日本語の「心」とは異なり、次のような限定した意味で使われる。マインドは、われわれが日常生活の一瞬一瞬に受容したすべての印象を記録する機能を持つ。マインドに受け入れられた印象とともに、われわれは考える。マインドの中は、また多くのエゴが住む場所でもある。

【ブッダタ(BUDDHATA)】 本質と同義語。人間的霊のひとかけら。

【エレウシス】 ギリシアのアッティカ地方の町の名。

【スーフィーダンス】 スーフィーはイスラム神秘主義の一派。彼らの宗教的実践の一つである回転運動を主にした舞踏が、スーフィーダンス。

【ダーヴィッシュ】 スーフィーの修道僧。

【バルト】 バルト人（リトアニア、ラトビア、エストニア諸国の住人）。

第九章

G・A・I・O

聖なるマントラI・A・O

ソロモン神殿の至聖所では、大祭司が畏るべきマントラI・A・Oを唱える時、神聖さを汚す者たちに崇高なるI・A・Oが聞こえないように、神殿の太鼓を鳴り響かせた。

偉大なるマスター・ウィラコッチャは、『ノーシス教会』という著書の中で次のように言っている。

「ディオドロは、あらゆる神々の中で、最も崇高な神がI・A・Oであることを知りなさいと言った」

「冬にアイデスが、春にゼウスが、夏にヘリオスがその活動を始め、秋には休みなく働いているI・A・Oの活動が戻ってくる」

「I・A・Oとはジョビス・パーテル、すなわちジュピターのことであり、ユダヤ人たちがヤーヴェという名で指し示す神である」

「I・A・Oは、生命の実質的成分であるワインを与えてくれる。その時、ジュピターは太陽の献身的な僕でもある」

I..... Ignis (火、霊)

A..... Aqua (水、実質的な水)

O..... Origo (原因、空気、起源)

「I・A・Oは、ノスティックの間では、神の名である」。

神聖なる魂は母音「O」によって象徴される、永遠なる円である。「I」という文字は一人一人の内なる存在の本質を象徴している。しかも「O」と「I」は、「A」という文字を支点として、混合され一体となっている。これは非常にパワフルなマントラであり、巫女である妻と「性の秘儀」を行う時、唱えるべき魔術的言葉である。

この三つのパワフルな母音の発音は、 $\overset{1}{I} \overset{1}{I} \overset{1}{I}$ 、 $\overset{1}{A} \overset{1}{A} \overset{1}{A}$ 、 $\overset{1}{O} \overset{1}{O} \overset{1}{O}$ のように長く伸ばさなければならない。つまり各母音を長くするのである。肺が一杯になるまで息を吸い。次に吐く。20数える間、息を吸い、その息を20数える間止めて保ち、それから「I」の音を発音しながら、息を

吐くようにする。息を吐くときも20数えて行う。同じ方法で「A」を行い、それに続いて「O」も行う。7回、このI・A・Oのマントラを繰り返す。次に、古代から伝わる強力なマントラ、カウラカウ(KAWLAKAW)、サウラサウ(SAWLASAW)、セサル(ZBESAL)を続けて唱える。カウラカウは魂を振動させ、サウラサウはパーソナリティを振動させる。セサルはアストラル体を振動させる。これはたいへん古い時代からあったマントラである。



アブラクサス (ABRAXAS)の護符

アブラクサスとは、イエス・クリストの秘密の教えを守ろうとしたグノーシス派の言葉で、365の光を発する宇宙の源、太陽の力、口にしてはならない神の名などを示す。この護符には、二匹の上昇する蛇とギリシア文字のI・A・Oが記されている。これらが、秘教的キリスト教において、いかに重要であったかを示している。

世界の聖なる救世主がケフレンのピラミッドの中で、巫女である妻と性の秘儀を行った時は、妻と一緒にパワフルで神聖な火のマントラを唱えた。それがインリー (INRI) である。あらゆる点で崇拝すべき主クリストはエジプトで彼のイシスとそれ (INRI) を実践した。彼はこのマントラと五つの母音I・E・O・U・Aを組み合わせた。

Í^{ンリ}NRÍ, É^{ンレ}NRÉ, Ó^{ンロ}NRÓ, Ú^{ンル}NRÚ, Á^{ンラ}NRÁ

最初のINRIは超視覚のためのものである。第二番目のENREは魔法の耳（超聴覚）のためのものであり、第三番目のONROは心臓のチャクラ、すなわち直観力の中枢の開発のためのものである。第四番目のUNRUは、テレパシーの中枢である太陽神経叢のために役立つ。第五番目のANRAは、過去の転生の記憶を取り戻すための力を持っている肺のチャクラ（複数）のためのものである。

マントラINRIと、チャクラの開発に適用される四つの派生的マントラは、二つの音節に分けて発音する。そして各マントラの四つの魔術的文字のそれぞれの音を伸ばす。(例 IIIIIIIINNNNNNNN、RRRRRRRIIIIIII)

「性の秘儀」の実践中に、これらのマントラを使って、各チャクラへ性の火を送ることができる。



INRIと十字架

イエス・クリストの十字架には必ず、INRIの文字が付けられている。この秘教的な意味は、Ignis Natura Renovatur Integra（すべてのものは火によって変換される）。われわれの“火”である性エネルギーによって自らを変革することが、イエス・クリストに至る真の方法である。

さて、I・A・Oに再び戻ると、これはすでに述べたように、ノスティックの間では神の名である。I・A・Oについてさらに次のことを付け加えよう。「I」の母音は松果腺と霊の胚芽を振動させる。霊の胚芽とは、人間なら誰でも持っているものである。「A」の母音は肉体を振動させる。畏るべき「O」の母音は、精液をクリスティック・エネルギーに昇華させるすばらしい振動を睾丸にもたらす。そしてクリスティック・エネルギーは勝ち誇ったかのように、聖杯（脳）まで上昇する。

ヨハネの福音書が教える性の秘儀

聖者ヨハネ(Juan)の福音書は、次の言葉を唱えることから始まる。

「はじめに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。この言葉ははじめに神とともにあった。すべてのものは彼によって造られた。そして、彼によることなく造られたものは何一つとしてなかった。彼の内に命があった。そして命は人の光であった。そして光は闇の中に輝いていた。闇が光を包むことはなかった」（ヨハネの福音書第1章より）。

「JUAN」という言葉は I E O U A・・・I E O U A N・・・JUAN のような五つの母音から成っている。ヨハネの福音書のすべては、言葉の福音書である。

「性の秘儀」から、聖なる言葉を分離させようとする者がいるが、それは不可能なことである（聖なる言葉が欠けるならば、すでに「性の秘儀」ではない）。また「性の秘儀」なくして言葉を具現できるものではない。言葉の化身そのものであり、肉となった言葉自身であるイエスが「性の秘儀」を教えたのは、まさしく聖ヨハネの福音書の中においてである。聖ヨハネの福音書の第3章の最初から20節までを研究する必要がある。次にそれを記す。

「パリサイ人の一人で、その名をニコデモというユダヤ人の指導者がいた。この人が夜、イエスのもとに来て言った。『先生、私たちは、あなたが神から来られた教師であることを知っています。神が御一緒でないなら、あなたがなさっているようなしは、誰にもできません』。イエスは答えて言われた。『よくよくあなたに言うておく。誰でも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない』」。

親愛なる読者よ、ここに性に関する問題がある。生まれることとは、こ

れまでも、そしてこれからも常に性的なことである。誰一人として、理論から生まれることのできる者はいない。理論や仮説から生まれた、という人間がいるだろうか。生まれることは信仰の問題ではない。もし福音書を単に信仰するだけで、われわれが生まれるとしたら、あらゆる聖書研究者たちは、どうして生まれたことがないのか。誕生するということは、信じるとか信じないとかいう問題ではない。信仰から生まれる子供は一人もいないのである。子供は性行為から生まれる。これは性に関する問題なのである。ニコデモは「偉大なる奥義」に全く無知であるがゆえに、次のように答えて言った。

「人は、年をとってから生まれることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますか」。イエスは答えられた。「よくよくあなたに言うておく。誰でも、水と魂とから生まれるのであれば、神の国に入ることはできない」。

読者よ、福音書の中で水とは精液であり、魂とは火であるということを知らなくてはならない。「人の子」は水と火から生まれる。このことは完全に性的である。

「肉から生まれる者は肉であり、魂から生まれる者は魂である。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったからといって、不思議に思うには及ばない」。

マスターは、まさにわれわれ自身の中に生まれる必要がある。

「風が音をたてて吹く。あなたは風の音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。魂から生まれる者もみなそれと同じである」。

実際、魂から生まれる者は、しばらくの間、輝いている。そして後に大衆の中に姿を消す。大衆はその超人を見ることができない。超人は大衆から自分を隠す。さなぎは、空を飛ぶ蝶を見ることができないように、一般大衆は超人を見ることができないのである。ニコデモは、このことがさっぱりわからず、イエスに答えて言った。

「どうしてそんなことがあり得ましょうか」。イエスは彼に答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、これくらいのことがわからないのか」。

ニコデモは律法学者であったので、実際、神聖なる書を知ってはいたが、イニシエイトではなかったので、「性の秘儀」を知らなかった。イエスは続けて言われた。

「よくよく言うておく。私たちは自分の知っていることを語り、また自分の見たことの証しをしているのに、あなたがたは、私たちの証しを受け入れない」。

イエスは、自分の知っていること、見たこと、自ら体験したことについて証しをしたのである。イエスはケフレンのピラミッドの中で、火の神ヴェスタ神（かまどの女神）の巫女と「性の秘儀」を実践した。このようにして彼は生まれたのである。これが、イエスがクリストをその身に現わすために準備した方法である。「性の秘儀」によって、イエスはヨルダン川で、クリストを具現することができたのである。

われわれは、イエスがエジプトを出てからインド、チベット、ペルシアなどを旅した後、聖地へ戻り、ヨルダン川で「金星のイニシエーション」を授けられたことを知っている。ヨハネがマスター・イエスにバプテスマを与えた時、クリストがマスター・イエスの霊の内に入った。クリストが人間化し、イエスは神聖化した。聖なるクリストと人間との一体化が、われわれが「人の子」（超人）と呼ぶものを造りあげるのである。



バプテスマのイエス

頭上の鳩が、イエスの霊の内に入ったクリストを象徴している。

もしイエスがエジプトで「性の秘儀」を実践しなかったら、クリストを具現することはできなかつたであろう。そして良き師とはなつても、聖なる超人の実例には入らなかつたであろう。

「私が地上のことを語っているのに、あなたがたが信じないのならば、天上のことを語つた場合、どうしてそれを信じることができようか」。

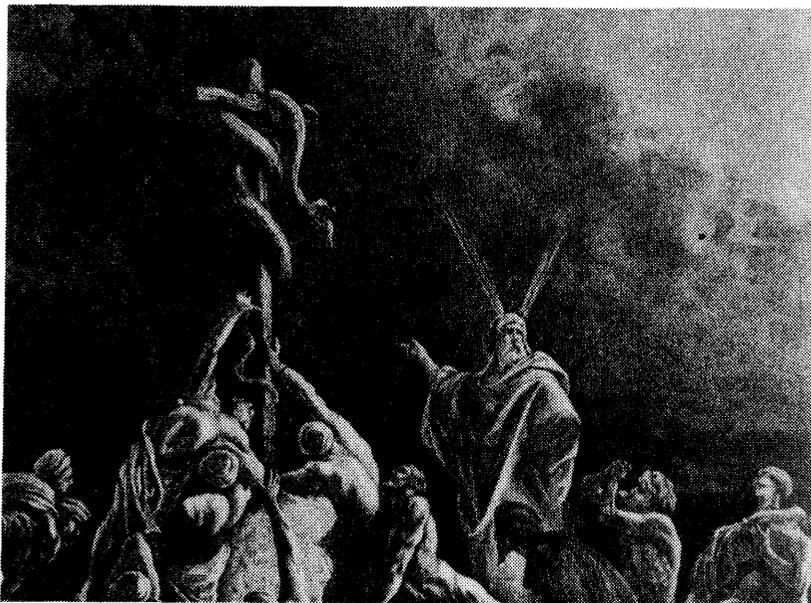
このことを述べることで、偉大なるマスターは地上のことについて語つたことを強調された。地上のこととは、「性の秘儀」の実践である。「性の秘儀」の実践がなければ、人は生まれることはできない。地上のことを信じない者が、どのようにして天国を信じられるのか。

「天から降ってきた者、すなわち人の子のほか、だれも天に昇つた者はいない」。

我は天国に昇ることはできない。なぜなら、我は天国から降つてきたものではないからである。我はサタンであり、必ず溶解されなければならない。それは法である。

神聖な蛇について、偉大なるマスターは次のように言われた。

「そして、ちょうどモーゼが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければならない」。



モーゼが荒野で上げた蛇（ギュスターヴ・ドレ画）

われわれはモーセが荒野で行つたように、杖（背骨）に沿つて蛇を上昇させなければならない。これは「性の秘儀」に関することである。なぜならば、クダリニーは「性の秘儀」によつてのみ上昇するからである。この方法によつてのみ、われわれは「人の子」、すなわち超人を自らの内に上昇させることができるのである。「人の子」は高められなければならない。

「それは彼を信じるものすへてか、滅びることなく永遠の命を得るためである」。

誤つて「人間」と呼ばれている、理性を持った動物であるわれわれは、正真正銘のアストラル体、メンタル体、コーサル体という魂の乗物をいまだに持っていない。実際のところ、単なる幽霊に過ぎないのである。アストラル・クリスト、メンタル・クリスト、コーサル・クリストを生むために、「性の秘儀」を実践し、「完全なる結婚」の道を生きなければならない。

神はその一人子をつかわされたほどに、この世を愛された。それは彼を信じるものが誰一人として滅びることなく、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世を裁くためではなく、彼によつてこの世が救われるためである。彼を信じる者は裁かれない。信じない者はすでに裁かれている。神の一人子の名を信じないからである。

真の信仰とは、行動によつて証明されるものであると、われわれは断言する。「性の秘儀」を信じない者は、「私は神の子を信じている」とどんなに言つても、生まれることはできない。働くことをしない信仰は死んでいる。イエスによつてニコデモに教えられた「性の秘儀」を信じない者は、神の子を信じてはいない。そういう人々は、道を見失うことになるであろう。

その裁きというのは、光がこの世に来たにもかかわらず、人々はその行いが悪いために、光よりも闇の方を愛したことである。悪を行っている者はみな、光（性の秘儀）を忌み嫌う。そして、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光に近づこうとはしない。しかし、真実を行っている者は光に来る。その人の行いが、神にあってなされたということが明らかにされるためである。

これらすべてのことは、聖ヨハネの神聖なる福音書からもたらされるものである。

性による内的乗物の創造

すべての次元に生まれる必要がある。いろいろな理論や訓練にいくら明け暮れたとしても、アストラル界に生まれていない哀れな男女に、いったい何ができるというのだろうか。いまだにメンタル体も持たずして、マインドをコントロールするとか、マインドを働かせるということが、何の役に立つのだろうか。人間はまず、内的乗物を創るべきである。そうすれば、どのようなことでも望むことができ、研究することができるだろう。ゆえに、われわれは最初に霊を具現する権利を獲得するために、まず内的乗物を創るべきである。そしてそのずっと後で、はじめて「言葉」を具現できるのである。

真正のアストラル体が生まれる時、われわれは24法則の世界（月の世界）で不滅となる。真正のメンタル体が生まれる時、われわれは12法則の世界（水星の世界、あるいはマインドの世界）で不死となる。真正のコーザル体が生まれる時、われわれは6法則の世界（金星の世界、あるいはコーザル界）で永遠を獲得する。これらの高みに至ることによって、われわれの内に人間的霊を具現し、本当の人となることができるのである。

これらのクリスティックな乗物は、性を通して生まれる。問題は性にある。上にもあるように、下にもある。肉体が性を通して生まれるならば、高次の乗物もまた、性を通して生まれるのである。

クリスティックな乗物を生み出す者はみな、霊を具現し、黄金の言葉で話をする。この言葉は、火の子供たちが崇拜されていたアルカディアと呼ばれる古代の国で、クリスティックな乗物を作った人々が話したパワーのある言葉である。そして、それは全宇宙で話される言葉である。それは聖なる言葉であり、恐るべきパワーを持っている。バビロンの天使は、その神秘的な言葉を、有名なベルシャザルの宴で用いた。畏怖すべき言葉メネ・メネ・テケル・ウパルシン（MENE MENE TEKEL UPHARSIN）と書いたのである。その夜、その言葉は成就した。バビロンは破壊され、王は死んだ。

普遍的言語について多くのことが言われてきたが、われわれは霊を具現してはじめて、普遍的言語を話すことができる。その時、クンダリニーは、実り豊かな言葉となって唇で開花するのである。人類が精液を漏らしたかどで、天国から追い出された時、われわれは、太陽の光がふりそそぐ深い森を、雄々と流れる黄金の川のような、あの聖なる言葉を忘れてしまった。

あらゆる言葉の起源は、この原初の聖なる言葉にある。それを再び話すために存在する唯一の道が、「性の秘儀」である。性の器官と創造的なものとは密接な関係がある。古代の神秘主義の学派の間では、イニシエイトは、古代の大洪水以前の破局について語ることを禁じられていた。それは、言葉にしてしまうと、その破局を実際に招いてしまう恐れがあったからである。古代の秘儀司祭は、自然界の要素と言葉とは、密接な関係があることを知っていた。

アーノルド・クルム・ヘラーの魔術の書

ノスティック・バラ十字の偉大なマスターであるアーノルド・クルム・ヘラーの魔術の著作『ロゴス・マントラム』は、神秘主義の智慧が収められている本当の宝石である。この本の最後で、偉大なるマスターは次のように語っている。

「古代には、蛇によって一体となっているアイリスとセラピスの像が刻まれた指輪を保有している神秘学派があった」。

加えて、クルム・ヘラー博士は次のように言っている。

「私がこの本で述べたすべては、このことに総括される」。

『黄道コース』の第8課で、クルム・ヘラー博士は、多くの自称博識者たちを憤慨させるような文章を書いた。マスターが亡くなった後に、それらの人々は自分たちの理論と合うように、勝手にこれらの文章を書き換えようと試みた。しかし、ここではマスター・ウィラコッチャ（クルム・ヘラー）が記述しているとおりに、正確にその文章を書き写してみよう。それは次のとおりである。

「オルガズムに達する性的結びつきかわりに、マインドから動物的情欲を絶えず切り離し、最も純粋な精神性を保持する。そしてその行為が、あたかも真の宗教的儀式であるかのように、互いに思いやりを持って、甘美な愛撫と愛に満ちたささやきと、繊細ないたわりを惜しみなく与えるべきである。

しかし、聖なる感情と満ち足りた喜びが二人を包むように、男はペニスを膣の中に挿入したら何時間も持続するように、そのまま維持しなければならない。またそうすることは可能である。そしてオルガズムの瞬間が近づいた時には、射精を避けるために退かなければならない。このようにし

て、カップルはその都度、互いを抱擁し愛撫したいという気持ちがより強くなっていく。

この行為は疲れることがない限り、望むだけ何回でも繰り返してよい。疲れるどころか、逆にこの行為は日毎に若返り、肉体の健康を保ち、長生きを促す魔術的鍵なのである。なぜならそれは、絶えず磁気化を促進する健康の泉だからである。

われわれは通常の磁気作用において、次のことを知っている。磁気の送り手が受け手に流れを伝達する。その時、もし送り手の磁気力が開発されていれば、受け手を治療することができるということ。

磁気流の伝達は通常、手や目を通してなされるが、それらよりも千倍も強力で優れた伝導体は、送受信器官としての男根と女陰である。そのことを言うておく必要がある。

多くの人々がこれを実践するならば、自分たちのまわりにこの力が広がり、商業的、社会的な分野でも成功を収めることができるだろう。しかし、今われわれが述べている崇高でかつ神聖な磁気化の行為においては、男と女が相互に磁気化しあって、互いに一方は他方にとっての楽器のようになる。つまびかれて、神秘と甘美のハーモニーの不思議な調べを奏でるだろう。この楽器の弦はからだ中いたるところに張り巡らされていて、主弦は唇と指である。そして、それがこの上なく完全な純潔によってコントロールされる行為であるという条件にあれば、その純潔さゆえに、われわれはその崇高な瞬間に魔術師となる」。

ここまでの、クルム・ヘラー博士の著作によるものである。これがイニシエーションの道である。この道を通して、われわれは「言葉」を具現するに至るのである。

完全なる結婚の道

われわれはバラ十字の学徒にも、神智学徒にも、心靈主義者にもなることができる。またヨガを実践することもできる。これらすべてには、驚くべき修業と、重要な秘教的実践があるということは、疑う余地はない。しかし「性の秘儀」を実践しないのであれば、われわれはアストラル・クリスト、マインド・クリスト、意志・クリストを生まれさせることはできない。「性の秘儀」なしに、われわれは再び生まれることはできないのであ

る。あなたが望むことを実践しなさい。自分が最も気に入った学派で研究するのもよいし、あなたが最も幸せに感じる寺院で祈るのもよい。しかし「性の秘儀」を実践しなさい。そして「完全なる結婚」の道を生きなさい。われわれは、いかなる神聖な宗教にも反対しない。またいかなる学派、教団、宗派にも反対しない。これらの神聖な団体はすべて必要なものである。しかし、われわれは「完全なる結婚」の道を生きることを勧める。「完全なる結婚」は、宗教的に生きることに反するものでもなく、神聖なヨガの秘教的な修業に反するものでもない。ノーシス運動は、あらゆる宗教、学派、ロッジ、宗派、教団などの人々から形作られている。

親愛なる読者よ。I・A・Oがちりばめられている神聖な宝石を忘れずにいなさい。G A I Oの中にI・A・Oが隠されている。I・A・Oとともに働きなさい。

「性の秘儀」を実践すれば、司祭、あらゆるロッジのマスター、ヨガの弟子などすべての人々は誕生を獲得し、真の純潔を維持できるであろう。

I・A・Oに祝福あれ、「性の秘儀」に祝福あれ、「完全なる結婚」に祝福あれ、「性の秘儀」の中にあらゆる宗教、学派、教団、ヨガの総括が見い出される。「性の秘儀」がない自己実現のシステムはすべて不完全である。それゆえ、役に立たない。「クリスト」と「性の秘儀」が、あらゆる宗教の最高の実践的総括を形成しているのである。

【ディオドロ(Diodoro)】 ディオドロス(Diodoros)と思われる。紀元前1世紀ごろの古代ギリシアの哲学者。40巻の『ビブリオテカ・ヒストリカ』と呼ばれる世界史を書いた。

【アイデス(Aides)】 別名ハデス(Hades)、ハイデス(Haides)、アイドゥネス(Aidoneus)。ギリシア神話の冥府の王。クロノスの子。地下の王であるとともに、地下の富を地上に送り出す神でもある。

【ゼウス(Zeus)】 ギリシア神話では神々と人間の父と呼ばれている。水や雨や風を支配して地に豊作を与え、これによって人々に富を与えた。西ギリシアでは、自然神であったがオリンポスを支配するゼウスは諸神に君臨する王となった。

【ヘリオス(Helios)】 ギリシア神話の太陽神。御者として、毎朝、4頭

第十章 直観的知識

無数の理論の中での迷い

神秘学を研究する誰もが「直観的知識」を求め、そして行動のあり方と内的進歩を知ることを願っている。すべての学徒が最も熱望するのは、高次の世界における、意識の目覚めた一員となり、マスターのもとで学ぶことである。神秘学は、残念ながら、一般に思われているほど容易なものではない。人類の内的能力は萎縮して、完全に損われてしまった。人類は肉体的感覚を損っただけでなく、さらに悪いことには、内的諸能力をもだめにしてしまったのである。それは、われわれの悪い習性による、カルマ的結果である。

学徒はあれこれと探し求め、手に入る限りの神秘学や魔術の本を読み、また何度も読み返す。しかし、かわいそうに、より一層の強い疑問で満たされ、インテレクトの混乱をきたしてしまうのが関の山である。

数えきれないほどの理論と著者が存在する。あるものは他者の思想のおうむ返しである。またあるものは他者の思想に反論し、相互に対立しあう。仲間の中で当てこすりや争いがあり、互いに対立しあう。実際すべての者が、自分以外のすべての者と対立する。人々に菜食主義を勧める著述家もいれば、勧めない者もいる。呼吸法の実践を勧める者もいれば、実践しないように忠告する者もいる。その結果、哀れな求道者はおじけづいてしまい、何をしたらよいかわからなくなってしまふ。光を熱望し、請い願ひ、絶叫しても、何物も、何一つ得られない。全く何一つとして得られないのである。

一体どうしたらよいのだろうか。

われわれは“グループ・英雄たち”という極端な神秘主義者たちを知っている。彼らの多くは菜食主義者であり、節制した生活を送り、徳も高い。そして、一般的に大変誠実である。彼らは、後に続く者たちにとって最善の手本となることを望んでいるが、他の人と同じように嘆き、ひそかに苦悩し泣いている。これらの哀れな人々は、自分が説いているものを決して

立ての馬車に乗って東天に昇り、天空を走り、夕方西へ降り、夜に黄金の小舟(椀)に乗って東へ戻る。

【ケフレンのピラミッド】 エジプトのカイロ市郊外のギザには、北から順にクフ王、カフラー王、メンカウラー王の三大ピラミッドが残っている。ケフレンのピラミッドとは、中央にあるカフラー王のピラミッドのことである。ケフレンはカフラーのギリシア語読みから来ている。

【JUAN(フアン)】 スペイン語の読み方。英語でジョン、日本ではヨハネ、またはヨハネス。

【パリサイ人】 イエスの時代のユダヤ教の中のパリサイ派。モーゼの律法を尊重しすぎたため、形式主義に陥ったといわれる。

【バビロンの天使】 旧約聖書のダニエル書第5章参照。ベルシャザル王の宴会の途中、天使は手の先だけ見える姿で、王の宮殿の塗り壁に文字を書いた。

【ベルシャザルの宴】 ベルシャザルはバビロンの王の名。バルサザールあるいはバルタサルとも言われる。旧約聖書のダニエル書第5章1節に「千人の貴人たちのために、大宴会を催し…」とある。

【アイリス(Iris)】 ギリシア神話の虹の女神。虹は天から地へ届くゆえに、神々の使者でもあった。イリスと読む場合もある。

【セラピス(Serapis)】 エジプトの神、オシリスとアピスの両神の性格を備える神として民間に信仰された。その信仰は後にギリシアやローマにも伝わった。

見ることはなかった。彼らは自分のグル（導師）を知らず、グルと個人的に話すという光栄を受けたことは、ただの一度もなかったのである。彼ら自身が興味深く描写し、非常に美しい図表で説明する宇宙意識界、つまり高次元の世界を、実際に自分で見ることは決してなかった。われわれ寺院の兄弟たちは、それらの人々に対して心から深い同情を感じ、助けようと試みた。われわれがしようと思うのは、助けたいということである。しかし、それは無駄であった。

彼らは、性に関するすべてのことを嫌っている。性に関すると思われるものなら、何でも嫌うのである。彼らは「完全なる結婚」についてさえ話されると、笑い飛ばし、禁欲を守ることを、いら立たしげに主張する。これらの哀れな盲人たちには、道案内が必要である。彼らは「直観的知識」を満喫するという恩恵にあずかることがないので、非常に悩み苦しんでいる。彼らは、自分の弟子たちを墮落させないように、そして弟子たちを失望させないようにと、大変苦しんでいるのである。われわれノーシスの兄弟は、本当に彼らに親愛を感じ、同情している。

理論によって世界を見ることをやめなければならない。

失われた能力を性の秘儀で取り戻す

理論というアヘンは、死よりもっと苦い。失われた能力を取り戻すための唯一の道が、性の秘儀である。「偉大なる秘儀」には、人間を再生させるという特別な効果がある。人類は再び生まれる必要があり、これは著者や本によってどうこうなるという問題ではない。われわれは種の仕事、種子の仕事をしなければならないのである。

トカゲが失った尾を再生し、ミミズがその体を再生できるように、人間も失った諸能力を再生することができるのである。トカゲやミミズは、失った尾を自分の性の力で、新しい尾に取り替えることができる。このように、人間も性の力で、内的諸能力を回復することができる。この方法によって苦難の巡礼者たちは、「直観的知識」に至ることができるのである。そうすれば兄弟愛に満ちたグループの、真に正覚を得た司祭となれるだろう。道は性の秘儀にある。すべての道案内人は超視覚者であり、超聴覚者であるべきである。

続いて、われわれは超視覚と「秘密の耳」（超聴覚）を開発するための

エクササイズを提供しよう。これらの能力が得られたら、都市生活から離れて、奥深いジャングルの中に、しばらく留まることをお勧めする。自然の平和の中で火の神々、空気の神々、水の神々、大地の神々が、言葉では表現できないほど素晴らしいことを、われわれに教えてくれるだろう。だからといって、ジャングルの中だけに住めばいい、というわけではない。

「聖者は森の中で何をやるのか」。しかし、われわれは田舎で素晴らしい休暇を取るべきである。それだけである。

精神的進化のためには、完璧な心理的バランスをかきわめて重要である。秘教主義を志す者のほとんどか、簡単に心理的バランスを失い、あまりにも愚かな事柄に落ちてしまう。

「直観的知識」を望む者は誰でも、自分のマインドを完全なバランスのうちに維持するよう、特に努力すべきである。

プラクティス

偉大なマスター・ウィラコッチャは、タットワ（エーテルの振動）を見るために、たいへん簡単なプラクティスを教えている。

このプラクティスは次のように行う。まず両親指で両耳をふさぐ。両目を閉じて、人差指でおおう。中指で鼻をふさぎ、最後に薬指と小指で唇を封じる。この状態で第六感を用いて、タットワを見るようにする。そのための眼は眉間にある。



* ヨガナンダは、このエクササイズにマントラ「オーム」を用いることを助言している。彼の方法によればまずクッションを机の上に置く。東を向いて机の前に座り、そのクッションの上に肘を乗せる。そしてこのプラクティスを行うのである。なお、彼はこのプラクティスを行う時に使う椅子を、羊毛製の掛けもので覆うとよいとも言っている。このことは、ティアナのアポロニウスが騒がしい世間から自分を隔離するために、羊毛のマントで身をおおったことを、思い起こさせる。多くの著述家がこのエクササイズを提供しているが、われわれも、それが非常に有効だと思う。このプラクティスを実践すれば、超視覚と超聴覚を開発できると、われわれは信じている。

はじめのうちは、暗闇しか見えないだろうが、さらに練習を積み重ね、努力を続けると、超視覚と超聴覚が開発されるだろう。ゆっくりと、しかし確実に開発されるであろう。最初は自分の生理機能の音しか聞こえないかもしれないが、このプラクティスを重ねるにつれて、少しずつ少しずつかすかな音が聞こえてくる。魔術的耳はこのようにして目覚めていく。

読者よ、矛盾したさまざまな理論で消化不良を起こすよりも、プラクティスを実践し、内なる能力を開発させることの方がはるかによいことである。再生のプロセスは、秘教的な訓練と歩調を合わせて進められるべきである。科学的にも、使用しない器官は衰退すると言われている。超視覚器官や超聴覚器官を使う必要がある。内なる実現を達成するには、これらの器官を訓練し、再生することが急務である。

このプラクティスは、いかなる宗教、宗派、学派、信仰とも対立するものではない。すべての学派や教団の司祭、指導者、教師たちは、諸能力を開発するために、このエクササイズを行うことができる。このようにして、彼らはそれぞれのグループをよりよく導くことができるだろう。

内的諸能力の目覚めは、精神的開発、知的開発、教養の開発と平行して行うべきである。さらに、重大な過ちに陥らないために、あらゆるチャクラを開発しなければならない。超視覚者たちの大部分は、大きな誤りを犯してきた。有名な超視覚者たちの多くが、世界を涙で満たし、同胞を中傷してきた。超視覚の誤った使い方は、離婚や暗殺、不義姦通や窃盗などを招いてきた。

超視覚者たる者は、論理的思考力や、正確な概念把握力を必要とする。そして完璧に心理的バランスを保つ必要がある。超視覚者は、すぐれた分

析力を持つ人でなければならない。そして、調査研究においても、表現においても、数学的に正確でなければならない。超視覚を正しく機能させるためには、超聴覚、直観、テレパシー、予知能力やその他の諸能力の完全な開発が必要である。

【直観的知識】 内なるハートを通して聖なる母から直観的に受ける叡智。

【ヨガナンダ】 パラマハンサ・ヨガナンダ (1893~1952)。インドに生まれ、スリ・ユクテスワについてクリヤ・ヨガをきわめた。米国で多く普及活動を行う。死にあたっては、自ら肉体を脱することを宣言し、その肉体は死後3週間も腐敗せず、光輝いていたという。

【アポロニウス】 イエスと同時代の新ピタゴラス派の哲学者。カッパドキアのティアナで生まれ、紀元97年頃エペソスで没。超常感覚と魔術にもすぐれ、各地で奇跡を起こしたという。悪魔に取り憑かれた人から、悪魔を追い出し、助けたことも伝えられている。



第十一章

成長せよ、増えよ

神の子と人間の子

旧約聖書の創世記に「成長せよ、増えよ」と記されている。「成長せよ」という言葉は、精神的に成長するために、性エネルギーを変換し昇華すべきことを意味している。「増えよ」という言葉は、人類の種の再生産（生殖）のことを言っている。聖書の中では二種類の子について書かれている。神の子と人間の子である。神の子は、射精をしない性の秘儀から生まれる。人間の子は射精を伴った情欲的快楽から生まれる。

われわれは、神の子を生み、そして、その子の精神的成長のために戦う必要がある。

教育と子供

子供は教訓を聞かされるよりは、実例を示されることで学び取る。もしわれわれが子供の精神的成長を望むならば、われわれ自身の精神的な進歩について、油断なく気を配らなければならない。人生は生殖だけでは十分ではない。われわれは精神的、靈的に成長しなければならないのである。

罪

われわれの^{さんぜん}燦然と輝く叡智の龍は、三つの相を合わせ持っている。それは父と子と聖霊である。

父は光と命である。子はロンジヌスの槍の一突きによって、主の脇腹から流れ出た血と水である。聖霊は^{ペンテコステ}聖霊降臨祭の火であり、ヒンズー教徒たちがクンダリーニーと呼ぶ聖霊の火である。これは魔術的なパワーを持つわれわれの火の蛇であり、黄金で象徴される神聖な火である。

われわれが嘘をつく時、父に対する罪を犯す。憎悪する時、子に対する罪を犯す。性を消耗する時、すなわち射精する時は、聖霊に対する罪を犯

す。父は真理である。子は愛である。聖霊は性の火である。

子供の指導

真実を話し、そして真実以外は語らないように、子供たちに教えるべきである。われわれは、子供たちに愛の法を教えなければならない。愛は法である。しかし意識ある愛である。子供が14才の誕生日を迎えたならば、子供に性の神秘を教えるべきである。こうして子供たちは、高潔と完成化の中の三つの見地に沿って精神的に成長するであろう。子供をこの完成化の三つの面に基づいて教え導く者は、子供たちの幸福な未来のために、確実な基礎を作ったことになる。しかしながら教訓によってではなく、実例によって教える必要がある。自ら説いたことを、実際の行いで示して、手本とならなければならない。

職業

現代生活を生きている以上、子供たちは知的な準備をするよう求められている。生計のために職業を持たなければならないということは、当然のことである。注意深く子供を観察し、天性を引きだし、その知的な方向づけをする必要がある。子供たちを無防備のままにしておいたり、職業に就かせないままにしておくことは、親として大きな罪である。

娘について

現代においては、若い女性であっても、しっかりとした知的、精神的準備をすることが要求されている。娘が14才の誕生日を迎えたならば、母親は性の神秘について娘に教える必要がある。娘たちは真理、愛、純潔という三つを備えた道を歩むのが最も賢明なことである。

現代を生きる婦人は、生計のために職業を持つべきである。娘たちも精神的に成長する必要がある、また完全なる結婚の法のもとで、人類を存続させなければならないということを、両親は理解する必要がある。しかし、すべてを憤り深く、分別を持って行うべきである。娘が恋人と二人だけで映画やダンスに行ったり、一人で夜の道や公園を散歩することに対して、

注意しなければならない。彼女の中の動物的エゴを抹殺していないならば、彼女はたやすく性的な誘惑に落ちて、みじめな失敗をなめるであろう。娘は両親や家族などと一緒にいたほうがよい。恋人と二人だけにすることは賢明ではない。しかし、両親は娘の結婚に関して障害となってはならない。ここでもう一度繰り返すが、すべては法と秩序のもとに行われなければならない。純潔をもって子孫を残し、また精神的、霊的に成長する必要がある。これが「完全なる結婚」の道である。

【「成長せよ、増えよ」(Creced Y Multiplicaos)】 創世記第1章28節にある言葉。日本語訳聖書では、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、……」のように、冒頭の句を「生めよ」と訳しているものが多い。ここでは原著 Creced の意をくみ、「成長せよ」とした。

【ロンジヌスの槍】 イエスの磔刑の際、十字架上のイエスの死を確かめるために、兵士ガイウス・カシウスがイエスの脇腹を突き差したという槍。ヨハネ福音書第19章34節によれば、その時「すぐ血と水が流れ出た」という(こときれた体から血は出ない)。この槍は、イエス復活の証拠としてキリスト教社会では神聖視され、聖杯と同じく、探索的のようになって来た。

【三つの見地】 父と子と聖霊(真理、愛、性の火)のこと。

第十二章 二つの儀式

歴史上の最も古い時代から、ある種の闇の儀式が存在した。テッサリアの魔女たちは、共同墓地や霊廟で、死者たちの亡霊を呼び寄せるための儀式を行っていた。かつて愛した者の命日に、彼らは墓の前に集まり、すさまじい叫び声を上げながら自分たちの胸を突き刺し、血を吹き出させた。その流された血は、死者の亡霊を、この世界に物質化するための乗物として使われたのである。

偉大なイニシエイトであったホーマーは、『オデッセイ』の中で、残酷な女神キルケの支配するカリスト島で、魔法使いが行っていた儀式について述べている。

司祭が、掘られた穴の中で、一頭の雄牛の首を切り落とすと、その中は血の海となった。次に、司祭はテーベの魔術師を呼び寄せた。どのようにして、魔術師がその招きに応じたのか、また血による完全な物質化はどのようになされたのかを、ホーマーは説明している。このテーベの魔術師はユリシーズと直接話をし、多くの予言をした。

『ツァラトゥストラ』の賢明な著者は、「血をもって書け。そうすれば、血が魂であることを知るだろう」と述べている。

またゲーテには、メフィストフェレスの口を通じての「血は大変独特な液体である」という言葉がある。

最後の晩餐

「最後の晩餐」は、巨大なパワーの魔術的セレモニーである。それは古代になされた「血の兄弟結社」のセレモニーとよく似ている。この兄弟結社のセレモニーの伝統では、二人あるいはそれ以上の人が、一つのコップの中に彼らの血を混ぜ合わせ、互いにそれを飲む時、彼らは永遠に「血の兄弟」となるということが伝えられている。彼らのアストラルの乗物が、永遠に相互の緊密な絆で結ばれるのである。



ヘブライの人々は、血を非常に特殊な性質のものと考えた。「最後の晩餐」のセレモニーは、血のセレモニーである。イエスの使徒たちは、自分の血を数滴入れた杯を持ち寄り、イエス・クリストの聖杯の中に、それを注ぎ入れた。「崇拜すべき方」もまた、その聖杯の中に、自身の真の血を注ぎ入れた。このようにして、聖杯の中でイエス・クリストの血と、彼の弟子たちの血は混ぜ合わされ、一体となった。言い伝えによれば、イエスは彼自身の肉の極小粒子を、弟子たちに分け与えたという。パンを取り、神に感謝を捧げた後、それをちぎって弟子たちに与えながら、次のように言った。

「これは、あなたがたに与えるために、引き裂かれた私の体である。私を思い出すために、このようにしなさい」。

パンを食べた後、ワインの杯を取って言った。

「この杯は、あなたがたのために流された、私の血による新しい契約である」。

このようにして契約はなされた。契約は血によって、署名されるべきものである。イエス・クリストのアストラル体は、血の契約を通して、その弟子たちと、またすべての人類と結びつき、兄弟の関係が保たれることになった。崇拜すべきその方は、世界の救い主である。

この血のセレモニーは、無限の過去から存在した。はるかな古代から、すべての偉大なアヴァターラたちによって、血のセレモニーは実証されてきたのである。アトランティスの偉大なる主も、彼の弟子たちと「最後の晩餐」を行なった。

血のセレモニーは、聖なるマスターの、その時の思いつきによるものではない。それは、大変古い時代から存在した偉大なるアヴァターラたちのセレモニーなのである。

われわれの儀式にはパワーがある。この中には、^{グランドマスター}偉大なる秘儀の秘密の科学のすべてが込められている。儀式では、性エネルギーを心臓へ向けて昇華させるための、パワーのあるマントラが唱えられる。心臓の寺院の中には、内なるクリストがいる。性エネルギーが心臓へ向かって昇華する時、この内なるクリストの力と融合するという幸福に至り、イニシエイトは高次の世界に入ることができるのである。われわれが儀式を行う時には、宇宙の偉大なる七つの層においても、同じことが起こっている。

このセレモニーによって、物質層から七つの偉大なる層を通して太陽ロゴスの世界へ至る秘密の通路ができる。太陽ロゴスのクリスティックな原子は、この通路を降り、パンとワインの中に集積される。このようにして、実際にパンとワインはその実質的成分が変換され、クリストの血と肉となるのである。パンとワインを摂れば、クリスティックな原子がわれわれのすべての組織に拡がって内的な体の中に浸透していき、太陽のパワーを目覚めさせる。

使徒たちは、このクリストの血を飲み、その肉を食べたのである。

性的な力と儀式

アドウム博士（魔術師ヘファ）の『ホレブのいばら』には、中世の黒ミサに関する記述があり、その中でユイスマンスの作品の一部が引用されている。大変興味深い記事なので、ここに紹介しよう。

一般的には、儀式を執り行うのは司祭である。彼は服を全部脱ぎ、僧衣に着替える。祭壇の上には裸の女（志願者）が横たわっていた。

裸の二人の女が、侍者の役を演じた。時々、若者が使われることもあったが、必ず裸でなければならなかった。参会者は、その時の気まぐれで服

をつけたり、つけなかったりした。司祭が儀式のすべてを執り行い、助手は淫らな身ぶりを演じて付き従っていた。その場の雰囲気はますます重くなり、不気味にうごめく流動体となった。沈黙と暗黒と凝集が渾然となり、その場を支配していた。

その“流動体”は、それ自体の引力によって、自然界の精霊との接触を、可能にするのである。

このセレモニーの最中、祭壇の女は自分の欲する相手に思いを集中させれば、実際にその思いが伝わり、彼女の目的の人物を文字通り虜にしてしまうことも珍しいことではなかった。その日のうちか、あるいは数日のうちに目的は達せられた。そのような現象が、現実のものとして起こったが、それはサタンのもてなしによるものであった。しかし、その“流動体”には、必ずある不都合がつきものであった。そこに集まった人たちの神経をいら立たせ、その中のある者は狂乱状態に陥り、それが時には全員に広がったのである。

時にはヒステリーになった女性が、自分の衣服をむしり取り、また男性が乱行に及ぶこともたびたびであった。さらには、二、三人の女性が激しい痙攣とともに床に倒れ、単純な霊媒たちは、トランス状態に陥った。彼らは“取り憑かれた”と叫んだが、それは全員に大変満足を与えるものであった。

ここまでの、アドウム博士によって書き写されたユイスマンスの記述である。この報告から、恐るべき邪悪な行為を行うために、彼らがどのように性の力と儀式を冒瀆するかを知ることができよう。この種の儀式では、性の情欲的な興奮状態によって、創造の力を持つエネルギーが、マインドの力を破壊的な方向へ向けて強化してしまう。このような儀式がもたらすのも魔術的現象なのである。

すべての儀式は、血と精液に関係している。儀式は両刃の剣である。純粹で貞潔な人には守護と生命が与えられ、闇に属す不純な者は、害され破壊される。儀式は、短刀やダイナマイトよりも、はるかに強力なものである。儀式においては、原子力が操作される。原子エネルギーは神の賜物である。それによって癒すことも、逆に殺すこともできるのである。実際、ノーシスの神聖な塗油式（実質的成分変換の儀式）の祝われるすべての寺院は、まさに原子エネルギーの発電所である。

アトランティス時代の黒魔術師たちも、性の力と結びついた同様の儀式を行っていた。儀式の悪用により、アトランティス大陸は没し、その高度な文明も滅びたのである。性の力は、自然界の四大要素と深く関わっている。すべての黒の儀式や黒ミサによって、自然界における宿命的な結びつきが作られる。アトランティス大陸の沈没の原因がこれでわかるであろう。

性の力は電気と似ている。それはどんな所にもある。それは電子の中に存在する力であり、すべての原子核の中を流れ、またすべての星雲の中心に流れている力である。この力がなければ、無限の宇宙も存在しなかったであろう。それは、第三ロゴスの創造エネルギーである。

白魔術師も黒魔術師も、この力を用いている。白魔術師は白の儀式を行い、黒魔術師は黒の儀式を行っている。尊敬すべき救世主の行った「最後の晩餐」は、長い時の流れの中で、見失ってしまうほどに古い伝統を持つものである。一方、黒ミサや黒の闇のセレモニーは、非常に古い「月の時代」に由来するものである。

あらゆる時代に、二つの儀式が存在した。光の儀式と闇の儀式である。儀式とは魔術的实践である。黒魔術師たちは、聖餐式を死ぬほどに忌み嫌う。彼らは、自分たちがパンとワインの儀式を忌み嫌うことを、様々な方法で正当化しようとする。また自分たちの空想によって、福音書をひどく気まぐれに解釈したりもする。それは彼ら自身の潜在意識が、彼らをだますのである。彼らは何らかの方法で、「最後の晩餐」を廃止させようと試みたりする。彼らは崇拜すべき方（イエス）の「最後の晩餐」をたいへん嫌っているのである。われわれノーシスを学ぶ者は、この種の人物に対して油断せず、常に用心しなければならない。「最後の晩餐」の儀式を憎む者は、黒魔術師である。

ノーシスの聖なる塗油式^{アンクシオン}において、パンとワインを退ける者は、実際にキリストの血と肉を退ける者である。このような人物は、黒魔術師と呼ぶべき者である。

四つの道

完全なる結婚には、知っておくべき重要な四つの道がある。第一が行者の道、第二が僧の道、第三がヨギの道、第四がバランスを取って歩む人の道である。正しく生きることを学びつつ、実生活を生きる第一の道。第二

の道、ここには秘跡と儀式と僧としての生活がある。第三の道では、われわれは実践を伴う神秘主義者として生きる。ここでは秘教的実習と潜在能力の開発のための、特別なエクササイズを行なう。第四の道は、如才なく油断のない人間の道であり、完全にバランスの取られた実践のうちに生きる道である。そこで、われわれは錬金術とカバラを学び、心理的エゴを崩壊するワークを行う。そして四つの道すべてを歩き通す。

行者の道で正しく生きることを学び、僧の道で情緒を豊かにする。ヨギの道で、隠れた潜在能力を活動させる秘教的エクササイズを実践する。バランスの取れた人間の道では、われわれは錬金術とカバラを修め、エゴを崩壊させるために闘うのである。

クリスト

ノーシスを学ぶ人々は、イエスと呼ばれる救世主を敬愛する。ノーシスの学徒は、イエスがクリストを具現したことを知っているゆえに、彼を崇拜するのである。クリストとは、一人の人間でもなければ、神なのでもない。クリストとは、マスターたる道を完全に実現したすべての者に与えられる名称なのである。クリストは、神の「声の軍隊」である。また、クリストは「言葉」である。肉体と霊と魂をはるかに超えたところに、「言葉」がある。「言葉」の体現を達成した者はすべて、クリストの名称を授かる。クリストとは、「言葉」自身であり、われわれ一人一人が、「言葉」を肉としなければならない。われわれのうちで「言葉」が肉となる時、われわれは「光の言葉」を話すことができるだろう。

現在、何人かのマスターが、クリストを具現した存在となっている。神秘の国インドでは、ヨギ・クリストのババジ、不死のババジが数百万年もの間生きている。賢者であり、偉大なるマスターであるクーツゥミーも、クリストを具現した存在である。白ロッジのイニシエイトのための大学の創立者、サナット・クマラも、生けるクリストである。過去において、多くの人々がクリストとなった。現在も何人かが、それを達成している。そして、将来も多くの人々がクリストとなるであろう。バプテスマの聖ヨハネも、クリストを具現した人であった。彼は、生けるクリストである。イエスと、他のクリスト具現者であるマスターたちとの違いは、階級の違いである。イエスは、宇宙の最高位の太陽イニシエイトである。

復活

至高なる偉大なマスター、イエスは、死者の中から復活し、肉体を持って現在も生きている。彼は、現実にはシャンバラに住んでいるのである。シャンバラは、東洋のチベットにある秘密の国である。彼とともに復活に至った他の多くのマスターたちもそこに住み、父の「偉大なる作業」に協力している。

塗油式 (UNCTION)

司祭を務めるイニシエイトは、エクスタシーの状態でクリストの実質的成分を受ける。魔術的操作を通して、彼自身の感応をパンとワインに伝え、その内に宿る神聖な成分を変換させる。それは、われわれの内的な体のクリスティックなパワーを目覚めさせるという奇跡を、起こさせるためである。

祭壇

祭壇は、石で造られなければならない。われわれは賢者の石（性）の仕事をしているのだということを、思い起こそう。祭壇はまた、賢者の土を表わしている。聖杯の脚部は植物の茎を、杯部は花を、それぞれ象徴している。これは太陽のクリスティックな成分が、大地である子宮に浸透し、小麦の実るまで穂を成長させ、その実、すなわち種を生み出すことを、意味しているのである。種は収穫され、それ以外は枯れ果てる。クリスト太陽のすべてのパワーは、種の中に残る。ワインにも同じことが起こる。太陽はぶどうを成熟させ、クリスト太陽のすべてのパワーが、種の中に封じ込められるのである。ノーシスの塗油式では、クリスティックな太陽のパワーが、パンとワインから解放され、われわれの有機体の内部にクリスト化の作用をもたらすのである。

顕現

顕現とは、顕われであり、啓示であり、われわれの内におけるクリスト

の昇天である。クルム・ヘラーによれば、偉大な神学者ディートリッヒは、次のように言っている。

「おのれの望むところ、レリガーレ、すなわち神聖なるものとの一体化に至るには、次の四つの道における実践が必要である。神を受け入れること（聖体拝受、聖餐）、愛の結合（性の秘儀）、子としての忠節な愛（神の子としての父の業を行なう）、そして死と転生」。

ノーシスを学ぶ者は、これら四つの道を生きるのである。

神 殿

高次層には、ノーシスの神殿、霊の大聖堂が存在する。この大聖堂では、金曜日と日曜日に、あるいは人類のために善なる行いが必要とされる時にはいつでも、オーロラの光の中で儀式が行なわれる。多くの敬虔な人たちが、アストラル体で神殿にやって来る。また、ヒーナスの科学の達人たちは、肉体ごと神殿にやって来る。そこにおいて、敬虔なこれらの帰依者には、パンとワインを受け取る幸運が与えられるのである。

意識的に、アストラル体で肉体から抜け出る鍵

アストラル体で肉体から抜け出る鍵は、大変簡単なものである。ファーラーオン（FA-RA-ON）というパワフルなマントラを、メンタリーに（声を出さずに、心で）発音しながら、眠りにつくだけで十分である。このマントラは、F A ・ R A ・ O Nの三つの音節に分けられる。目覚めの状態から、眠りに移る境目にある時、意識的に、内部に自分を反映させることによって自己の内部に浸透しながら、繊細なかすかな動きと完全に同調させて、ふんわりとベッドからジャンプしてみるのである。アストラル体の状態で、敬虔な帰依者は誰でも神殿を訪れることができるであろう。

アストラル・クリストを、いまだに生み出していない者は、アストラル体で意識を持って肉体を抜け出す方法を覚えられないため、大いに悩み苦しむかもしれない。しかし、多くの努力と訓練、苦勞の後にそれを実現するしか方法はない。過去の転生でアストラル・クリストを生み出した者は、容易に肉体から離れることができるであろう。



ヒーナスの状態で肉体ごと飛び出す鍵

学徒は、マスター・オグアラに思いを集中させる。そして次の祈りを暗唱しながら、眠りにつくとよい。

わたしはクリストを信じる。

わたしはオグアラを信じる。

わたしはマタジ（Mataji）とババジ（Babaji）を信じる。

わたしはヒーナスのマスターを信じる。

お願いいたします。わたしを肉体ごと、ここから連れ出して下さい。

ヒーナスの状態で、肉体のまま聖なる教会まで連れて行って下さい。

熱心な帰依者は、この祈りを何千回も唱えることだろう。この祈りを唱えながら、眠りにつかなければならない。眠りと目覚めのはざま、眠りが、

目覚めよりも少しまさったと感じられた時、肉体から力が抜けて、けだるく感じられる時、あたかも眠りに酔うように感じられる時、夢を見始める時に、ちょうどけちな人が自分の宝を大切にするように、眠気を保ちながらベッドから起き上がらなければならない。眠りの中にすべてのパワーがある。眠りに落ちるその瞬間に、原子の運動は、驚くべき速度で加速され、肉体のバイブレーションを増幅させる巨大な力が働く。その時、肉体はヒーナスの状態に入るのである。超空間の中に、肉体が浸透したのである。空中に浮くつもりでジャンプしてみれば、自分が飛ぶことができるので、きっと驚くことだろう。この状態の時、彼は物質界からは見えない。この状態で、彼は神殿を訪問することができるのである。

肉体がヒーナスの状態に入り始めると、踵から始まって、肉体は下から上まで膨張しだす。正確に言えば、肉体が膨張するのではなく、アストラルの力が肉体に浸透して、肉体が膨張したように感じるのである。

主の祈り

すべての祈りの儀式の中で、最もパワフルなものが「主の祈り」（マタイ福音書第6章）である。この祈りは、巨大なパワーを持つ魔術的な祈りである。想像力、インスピレーション、直観は、イニシエーションのための三つの必須の道である。

マスター・ウィラコッチャは次のように言っている。

「まず、内面の精神的事柄を観察する必要がある。その後、直観のために準備されている、われわれの霊的な有機体を持つために、“言葉”、すなわち神の“言葉”を聞かなければならない。言葉における三位一体は、主の祈りの最初の三つの祈りの中に見出すことができる。

“御名が崇められますように”とは、すなわち神の“言葉”、神の偉大な名、創造する“言葉”である。

“御国が来ますように”とは、“言葉”やマントラの発声によって、聖なるマスターの内なる王国が、われわれにやって来ることをいう。

“御心が天に行われるとおりに、地にも行われますように”この中に、神との合体の意が含まれ、このことにすべてが帰着する」。

クルム・ヘラー（ウィラコッチャ）は言う。「これら三つの祈りを行っただらば、われわれは完全なる祈りをしたことになる。もしある日、われ

われの願いがかなえられた日には、われわれは、その時すでに神々となっているであろう。そうなれば、もう願う必要はないのである」。

ノーシスには、尊敬すべき救世主の秘密の教義のすべてがある。これは、幸福と美の教義であり、母なる叡智の幹である。ここに、クリストが彼の弟子に口伝した教義が唯一、秘密裏に保存されている。

われわれは、いかなる宗教にも反対しない。主を崇め、われわれの教えを学ぼうとするすべての聖なる宗教の人々を、招待する。

光と闇の二つの儀式があるということ、忘れてはならない。われわれは、尊敬すべき救世主の秘密の儀式を持っている。われわれは、どんな宗教も軽蔑したり、過小評価したりはしない。すべての宗教は、神性という黄金の糸でつながりあわされた貴重な真珠である。われわれはただ、ノーシスが宇宙のすべての宗教が出現した源の炎であるということ、肯定するだけである。ただそれだけである。

※十二章については、非常に長大なため、訳者の判断により、適宜省略、要約を行い、抄訳としました。—— 訳者

【テッサリア】 ギリシア本土の中北部の都市。神話伝説の中心舞台。

【オデッセイ】 ホーマーの作といわれる大叙事詩。トロイ戦争の後、オデッセウスが十年を費やして、故郷イタケ島に帰還するまでのさすらいを歌った作品。

【テーベ】 中部ギリシアのボイオティア地方の都市。多くの神話、伝説の舞台となった。アポロンの神殿、イスメノスの神殿等の遺跡が発掘されている。

【ユリシーズ(Ulises)】 オデッセイの主人公オデッセウスのラテン名ウリセス Ulyssesの英語読み。

【ツァラトゥストラ】 ドイツの哲学者ニーチェ(1844~1900)の著書。

【メフィストフェレス】 悪魔。ゲーテの『ファウスト』では、メフィストフェレスはファウストを誘惑し、墮落させて地獄に落とそうと働く。

【最後の晩餐】 イエスの死の前夜、十二人の弟子たちとともにした会食。パンとワインを通して、イエスが彼自身の死の意味を明らかにしたとされる。新約聖書（マタイ第26章、マルコ第14章、ルカ第22章、ヨハネ第

13章等)。

【セレモニー】 著者によれば、儀式の意には多くリチュアル Ritual を用いている。セレモニーとリチュアルはほぼ同意義であるが、リチュアルのほうが、セレモニーに比して厳格な形式を有するようである。本訳では Ritual をすべて「儀式」とし、Celemonia のみを「セレモニー」として区別した。

【アヴァターラ】 サンスクリット語。神が人間や動物の姿をとって、天上から降臨すること。化身。

【アドウム博士】 ?～1958。アラビア生まれの医師。秘教学者。魔術師ヘファとしても知られる。

【ユイスマンス(Huysmans)】 1848～1907。フランスの小説家。神秘主義的傾向の強い作品が多い。特に『彼方』には、中世伝来の悪魔礼拝や魔術が描かれている。

【ババジ(Babagi)】 インドの復活のマスター。百万年前から生きていられる。妻マタジとともに不眠不休で、人類を守護している。

【クーツミー、クートフーミ(Kout Humi)】 チベットの伝説の都シャンバラにあって、人類を導くといわれる聖師。神智学運動と関連が深い。

【サナット・クマラ(Sanat Kumarat)】 金星からやって来たと言われる偉大なマスター。1800万年以上、肉体を持ってこの地上に存在している。現在はゴビ砂漠で、アデプトたちの一団とともに、人類の最後の開放のために援助を与え続けている。

【顕現】 一般には「神の顕現」を言うが、ここでは、内的なクリスト化の達成を意味している。

【ディートリッヒ(Dietrich)】 未詳

【レリガーレ(Religare)】 Religion(宗教)の語源。「再び、しっかりと結びつける」の意。

【ヒーナス(Jinas)】 霊体としてでなく、肉体ごとアストラルの次元に参入すること。

【オグアラ(Oguara)】 われわれが肉体を持ったまま、ヒーナスの状態に入ることを援助してくれるマスター。

【マタジ(Matagi)】 一般的には、ババジの妹とされているが、著者によると実際は妻であり、性の秘儀を実践したという。第25章参照。

第十三章

二人のマリア

二種類の蛇が存在する。脊髄を通して、上昇する蛇と下降する蛇である。白魔術師の蛇は、上昇する。なぜなら、白魔術師は射精をしないからである。しかし、黒魔術師の蛇は、下降する。それは黒魔術師が射精してしまうからである。

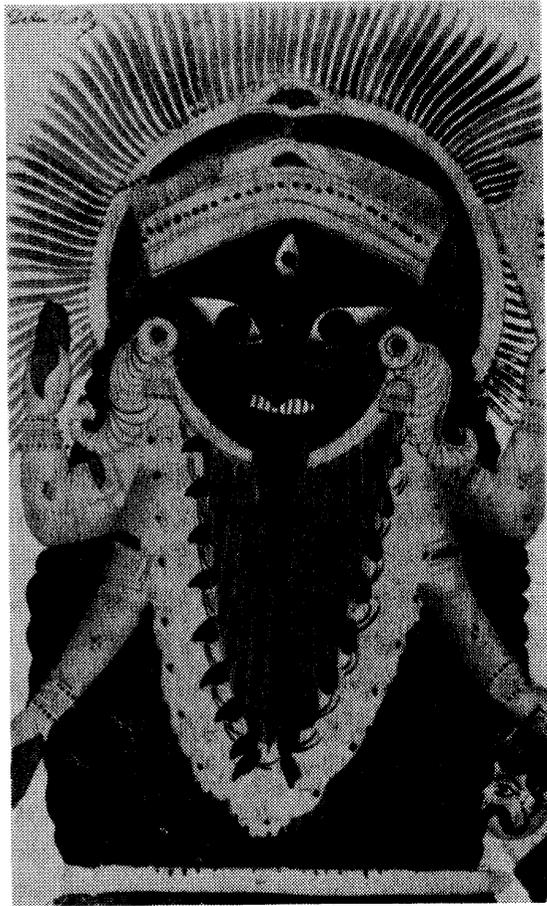
脊髄を上昇する蛇は、「処女マリア」である。尾骨から自然界の原子地獄へ向かって下降していくもう一つの蛇は、黒魔術師や魔女の「邪悪なるマリア」である。このように、白と黒の二種類の「マリア」が存在する。白魔術師は黒の邪悪なマリアを嫌悪し、黒魔術師は白の処女マリアを忌み嫌う。勇敢に処女マリアの名を呼ぶ者は、すぐに、闇の存在たちの攻撃を受けるだろう。

偉大なる作業を働いているイニシエイトは、邪悪なるマリアの婦依者たちと、壮絶な戦いを余儀なくされる。

創造の力は、男性的、女性的、中性的の三重の流れである。その偉大な力は、上から下に向かって流れる。自分自身を再生させたいと望む者は、流れを変えなければならない。それらの創造エネルギーを内側へと、そして上方へと向かわせなければならない。このことは、自然の利益に反することである。その時、闇の存在たちは不平を抱き、そのイニシエイトに対し手ひどい攻撃を加える。黒い手(黒魔術)の女婦依者たちは、イニシエイトを性的に放電させるために襲いかかる。これは、特に眠っている間に起こる。こうして、夜の汚れ(夢精)がもたらされるのである。学徒が美しい女性の夢を見ている時、魔女は、脊髄を通して上昇する火を妨害するために、学徒を性的に放電させるのである。闇の存在たちは、奈落の邪悪なマリアを崇拜し、彼女に大いなる悪の詩歌を捧げている。

白魔術師は、脊髄を上昇する火の蛇としての、処女マリアを崇拜する。そして白魔術師は、優しい母の腕に抱かれた子供のように、処女マリアに頭をもたせかけて安らかに憩う。

インドでは、カーリー神、すなわち聖なる母クンダリニーが崇拜されている。しかし一方で、おぞましい黒のカーリー神も崇拜されている。ここ



カーリー神

にも、白と黒の二種類のマリアがいる。砂漠で、イスラエル人たちを癒した青銅の蛇と、エデンの園で誘惑を与えた蛇。ここにも、白と黒の二種類の蛇が存在する。

白のイニシエーションと黒のイニシエーションがあり、光の寺院と、闇の寺院がある。すべての段階と、すべてのイニシエーションの土台に蛇がいる。この蛇が上昇した時、われわれを天使に変え、下降した時には、悪魔に変えるのである。

次に、われわれが調査した一つの黒のイニシエーションについて、話す

ことにしよう。

黒魔術師の志願者が、肉体から抜き取られたのは、彼が眠り込んでいた時であった。悪魔たちの宴は、ある路上で行われた。すべての出席者が、アストラル体であった。新参の信者は、精液を放出するネガティブな性の魔術を行なった。このようにして新参者は、悪魔たちの科学の中を進まされていった。彼らは黒の上着チムツクを身に着けて、宴に来ていた。その宴は、本当に魔女の魔宴マジックというものであった。

狂宴が終わると、邪道の帰依者は、愛する弟子たちを黄色い寺院へ案内した。そこは黒魔術のための洞穴であった。外側から見ると、粗末なつくりの礼拝堂のようであったが、内側はすばらしい宮殿のように二階建てになっており、闇の者が通る豪華な大通路があった。陰の帰依者は、新参者の悪の勝利を祝った。邪悪なマリアの帰依者を間近に見ることは、われわれにとって空恐ろしいことであったが、悪の志願者にとっては、居心地の良いところであるらしい。彼らのアストラルの幽霊には、悪魔の尾が付いているのが見えた。

その闇の魔宴は盛大なものであった。奈落の底から一人の司祭がやって来て、説教をするために岩の上へ登って行った。彼は「まじめではあったが、間違いを犯した者」の幽霊である。善良な意図を持っていたが、正道を発見できずに迷った者である。その闇の帰依者は、もったいぶった話しぶりで次のように語った。

「私は、わが宗教に忠実である。何ものも、私を後退させることはできないであろう。これは聖なるものである」。その闇の者は、長い説教を終えると、全員から喝采を受けた。

ネガティブな方法で、クンドリーニを目覚めさせるという不幸を背負いこんだその闇の者に、宿命的な刻印が刻まれた。そのしるしは、黒と灰色の線が入った三角形であった。それは、まず火の中に置かれてから、使用されるのである。そのしるしは、左の肺の下につけられた。闇の者はまた、その弟子に運命的な名前を与えた。その名前は、黒い文字で左腕に刻みこまれた。

この黒の新参者は、非常に邪悪であり、また妖しい美しさを放つ像の前に連れて行かれた。その像は、黒の女神、闇のマリアの王国を象徴している。弟子はこの像の前で、アナガリカ式に足を交差させて坐った。右足の

上に左足を組み、手を腰のところへ置いて、おのれの宿命的な女神に心を集中させた。すべてが終わると、闇の者たちは「勝利」を喜びながら、自分の肉体に戻っていった。

以上は、奈落のイニシエーションに関する、われわれの調査報告である。「完全なる結婚」の道を行くすべての人たちは、自分自身を闇の存在たちから守らねばならない。闇の存在たちは、敬虔な信者を黒ロジのメンバーに引き込むために、真実の道から引き離そうと企んでいる。その目的が達せられた時、学徒は悪魔たちの宴会へ連れて行かれるのである。

戦いは、すさまじいものである。頭脳と性の戦い。性に対立する頭脳の戦い。そして心と心の戦いこそ、最もすさまじく、最も苦しみに満ちた戦いであることは、あなたがたも知っているであろう。

われわれのすべての人間的愛着は、磔刑むくわづにされなければならない。肉欲を意味するすべてのものを捨て去ること、それは大変困難なことである。われわれの過去が泣き叫び、涙を流しながら、捨てないでくれと哀願するからである。これは本当に心痛のきわみである。

超人は、意識のすさまじい革命の結果、生まれるものである。自然に、機械的な進化によって、われわれがマスターに変えられると信じている人は、必ず失敗するであろう。マスターは、意識のすさまじい革命の結果として生まれるものである。

われわれは自然と、また自然の陰と戦わなければならないのである。

【カーリー神】 インド神話における大女神。戦い、破壊の神とも言われる。タントラの図象の中に描かれることが多い。

第十四章

悪魔に対抗する仕事

クングリニーの目覚めと、「我」の徹底的排除によって、完全な自己実現のための主要な基礎が形成される。

この章では、「我」の根絶に関するテーマについてふれることにしよう。これは最終的解放を決定づけるものである。

「我」とは、われわれの内部にあって、われわれが連れ歩いている悪魔である。従って「我」の根絶フツの仕事は、実際に悪魔に対抗して働くことである。この仕事は、大変困難である。悪魔に対抗する時、闇の存在が、しばしばわれわれに激しい攻撃を仕掛けてくるからである。これが実際に、油断のない人の道、かの有名な第四の道、タオの道である。

複数の「我」の起源

肉欲は、罪深い「我」の起源である。エゴやサタンは、万物の永却回帰の法則下にあり、その欲望を満たすために新しい子宮にもどってくる。だから「我」は、それぞれの転生において、同じドラマ、同じ誤りを繰り返す。「我」は、それまでのすべての生涯を通じて複雑化し、邪悪さを増していくのである。

サタンの死

われわれの内部にあって、われわれが連れ歩いているサタンは、隠れた敵の原子によって作られている。サタンにははじめがあった。それゆえに終りもある。われわれの内うちにあって、いつもわれわれに微笑みかけている星がある。この内なる星に戻るために、われわれはサタンを撲滅させる必要がある。これこそが、真実の最終的解放である。「我」を根絶することが、究極の解放を達成する唯一の方法である。

秘められた内なる星

われわれの神聖なる存在の知られざる深みには、内なる星、完全なる原子の星がある。この星は、崇高なる原子である。カバラ探求者たちは、その星を聖なる名アイン・ソフと名づけた。これが、われわれの存在の中の存在であり、われわれの内なる、偉大なる現実である。

神は進化しない

神は進化する必要がない。なぜなら神は完全だからである。神は自分自身を完全にする必要がない。神はすでに完全である。神は、われわれの内なる存在の本質である。

進化と退化

われわれノースの学徒は、進化の法則を否定することはない。しかし、その機械的な法則の型にはまった教義（ドグマ）は、受け入れられない。進化と退化の法則は、自然機械論の縦軸を成している。上昇があれば、必ず下降が続いてくる。進化があれば、必ずそれに対応した退化がある。芽を出す種子の中に、成長する茎の中に、果実を実らせる植物の中に、進化がある。もはや成長しなくなった木の中に、しなびた植物の中に、枯れていく老木の中に、退化が存在する。

トータルな革命

われわれを導く内なる星がある。この星に帰るために、意識のすさまじい革命が必要である。「我」を根絶したその時、トータルな革命が起こるだろう。

苦しみ

苦しみは、人を完全にすることはない。もし苦しみによって、誰でも完全な人になれるとしたら、すでに全人類が完全な人となっているだ

ろう。苦しみは、われわれの過ちの結果なのである。サタンは多くの過ちを犯させ、その過ちの果実を収穫する。苦しみは、その果実である。苦しみは、サタンのものである。サタンは、自分自身を完全にすることができないばかりか、他の誰をも完全にすることができない。苦しみは、何一つ完全にすることができない。なぜならば、苦しみはサタンのものだからである。

大いなる神聖な現実とは、幸福、平和、豊かさ、そして完全である。大いなる現実が、苦しみを作り出すということはない。完全なるものが、苦しみを作り出すことなどあり得ないことである。完全なるものは、幸福だけを生み出すのである。苦しみは、「我」（サタン）によって作り出されたものである。

時間

時間は、サタンである。サタンは、思い出である。サタンは、思い出の束である。人が死んで残るものは、その人の思い出だけである。それらの思い出が、私、我自身、生まれ変わりを繰り返すエゴを形成する。満たされなかった欲望や、それらの過去の思い出が、生まれ変わった人の中に宿るのである。

このように、われわれは過去の奴隷である。われわれの現在の生活は、過去によって条件づけられていると断言できる。「サタンは時間である」と肯定できる。「時間は、悲しみの涙の谷間にいるわれわれを解放することはできない。なぜなら、時間はサタンのものであるのだから」と、疑う余地なく断言することができる。われわれは、一瞬一瞬を生きる方法を学ばなければならない。

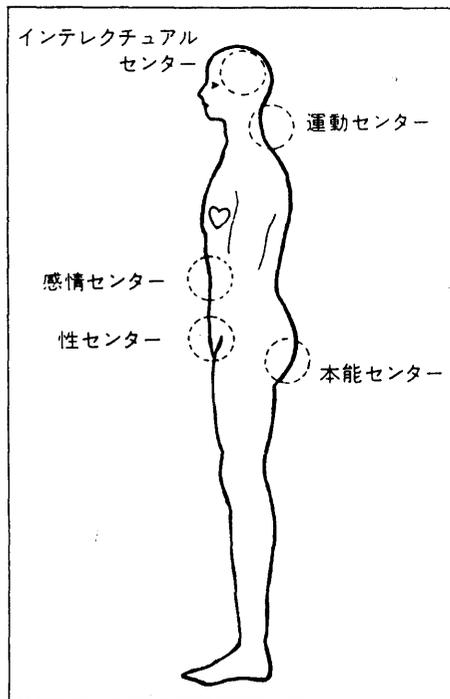
生命は、永遠の今、永遠の現在である。サタンが時間を作り出したのである。はるかな未来において、あるいは百万年のうちに、時間と時代の推移によって、自分を解放しようなどと考えている人は、奈落と第二の死の候補者になることは確実である。なぜならば、時間はサタンのものだからである。時間は、いかなる人をも自由にすることはない。サタンは、われわれを奴隷にする。サタンは、われわれを自由にはしない。今ここで、われわれは、自分自身を解放しなければならないのである。われわれは、一瞬一瞬を生きる必要がある。

人間の基本的な七つのセンター

すべての人間が、基本的な七つのセンターを持っている。次にそれらについて見てみよう。

1. インテレクチュアルセンター（頭脳に位置している）。
2. 動作あるいは運動センター（背骨の上部＝首のつけ根に位置している）。
3. 感情センター（太陽神経叢と交感神経の特殊なセンターにある）。
4. 本能センター（背骨の下部に位置している）。
5. 性センター（生殖器官に位置している）。
6. 高等感情センター（胸腺のアストラル体の部分にある）。
7. 高等思考（メンタル）センター（頭脳のメンタル体の部分にある）。

これらのうち最後の二つは、本物のアストラル体と本物のメンタル体を通じてのみ、機能するものである。



「我」を根絶させる方法

「我」は、まさに人間機械の五つの下位センターを支配している。この五つのセンターとは、インテレクト、運動、感情、本能、性の各センターである。

クリスト意識に相当する人間の中の二つのセンターが、神秘学で言うところのメンタル・クリストと、アストラル・クリストである。この二つの高等センターは、「我」によって支配されない。しかし残念なことに、すべての人が高等マインドと高等感情のための、二つのすばらしいクリスティックな乗物を持っているわけではない。高等マインドが、メンタル・クリストに満たされ、高等感情が、アストラル・クリストに包まれた時、実際に、真の人間の状態へと上昇するのである。「我」を根絶したいと望む者は、下位の五つのセンターの機能を学ばなければならない。欠点を非難すべきではなく、また正当化すべきでもない。重要なことは、欠点を理解することである。まず、人間機械の行動と反応の仕方を理解することが急がれるべきである。それら五つの下位センターのそれぞれが、行動と反応の複雑な組み合わせを持っている。そして、その各センターは、「我」と一緒に働いているのである。ゆえに、各センターのすべての構造を深く理解する時、われわれは「我」を根絶する道にいることになる。

実生活において、一つの出来事を前にした二人の人間は、それぞれが異なった反応を示すものである。ある人には快いことが、別の人には不快なこともある。また、ある人は理性的に判断することを、別の人には感情的に受けとる。このように、人によって反応は様々である。

われわれは、マインドと感情を区別することを学ばなければならない。マインドと感情は、別のものである。マインドの中には、作用と反作用の相互関係が機能している。このことを理解する必要がある。感情の中には、磔刑にすべき愛着があったり、注意深く分析する必要のある感情もある。そして一般的に、感情の作用と反作用の全構造は、非常にマインドの活動と混同されることが多い。

インテレクチュアルセンター

このセンターは、インテレクトの及ぶ範囲内だけで役に立つものである。

ただそれを、インテレクトの重力場の外にまで使おうと望む時に、大きな間違いを犯すのである。なぜなら魂の大いなる現実^{リアリティ}は、「意識」によってのみ経験できることだからである。

単なる理屈だけで、存在の超越的真理を探求しようと試みる者は、微生物を見るのに望遠鏡を使い、広大な世界を見るのに顕微鏡を用いる者、つまり、現代の科学器具の操作方法を無視して、研究を試みる者のごとく、失敗することは必然であろう。

運動センター

われわれは自分自身を発見し、そして自分のすべての習慣を、深く理解する必要がある。機械的な言動に、身を任せるべきではない。われわれは、人生を条件づけている数々の習慣の鑄型にはまって生きていながら、これらの型をよく知らないということは、信じがたく思える。自分自身の習慣を研究し、それらを理解する必要がある。

習慣は、運動センターの活動に属している。自分自身の生き方、立ち居振舞、話し方、歩き方、洋服の着方などにおいて、自分自身を観察することがまず必要である。運動センターには、多くの活動がある。スポーツも運動センターに属している。インテレクトが運動センターに干渉すると、運動センターの働きは妨害され、乱されてしまう。なぜならば、インテレクトは非常に反応が遅く、運動センターは、非常に速いからである。

たとえばタイピストたちは、運動センターによって働いているが、もし頭で何かを考えるという形でマインドが干渉すれば、タイプを間違えてしまうのは当然である。また自動車を運転中、マインドが干渉を始めれば、事故を起こしかねない。

感情センター

人間は、映画、テレビ、フットボール・ゲームなどの激しい感情の濫用によって、性エネルギーを無神経に消失している。われわれは、自分の感情をコントロールすることを習得すべきであり、性エネルギーを無駄に失ってはならない。

本能センター

様々な本能がある。自己保存の本能、性本能等々。また、本能の墮落というものも存在する。

すべての人間の奥底には、半人間的な本能の力、愛や慈悲の真実の精神を麻痺させる獣的な力が存在している。まず最初に、それらの悪魔的な力を深く理解する必要がある、そのちそれを克服し、そして絶滅させるべきである。獣的な力とは、犯罪的本能、肉欲、臆病、恐怖、性的サディズム、獣的な性などである。その半人間的な力を解体し、絶滅させようとする前に、それらを深く観察、研究し、理解する必要がある。

性センター

性は、人間の五番目のパワーである。性は、われわれを解放することも、反対に奴隷にすることもできる。性の力によらなければ、誰も統合された完全な存在になることも、完全な自己実現を果たすこともできない。独身者は、完全な自己実現を達成することはできない。性とは、霊の力である。人間として統合された完全な存在は、霊の男性的なもの、女性的ものの両極が完全に融合された時、達成されるものである。

性の力は、七つのレベル（霊の七つのレベル）で達成し、進化し、進歩していく。物質界における性は、盲目的に互いを引きつけあう力である。アストラル界における性的な引きつけあいは、その両極性と、エッセンスに応じた親和性（相性）に基づいている。またメンタル界での性の引きつけあいは、両極性とメンタルな親和性によって実現される。コーザル界におけるそれは、意識ある意志の土台の上に実現される。霊の完全な結合は、まさしくこの自然界の原因の世界で実現されるものである。実際に、この統合された完全な人間の四番目の状態に至ることがなければ、完全なる結婚の栄光に達することはできないであろう。

あらゆる性問題を、根本から理解する必要がある。われわれは、統合された完全な存在になる必要がある。われわれは機械的な性を超え、叡智の子供を生む方法を知る必要がある。

受胎という崇高な瞬間に、人間のエッセンスは、あらゆる影響に対して完全に開かれている。両親が純潔な状態を保ち、ヘルメスの杯をこぼさな

い、という強い意志を持つことだけが、生まれ変わりを欲する獣的なエゴの半人間的成分が、精子と卵子に侵入する危険を防ぐ唯一の方法である。

サタンの完全な死

五つの下位センターの、それぞれの秘められた活動を深く理解することによって、「我」のすべての動きがあらわにされる。この自己発見のもたらす結果が、サタン（月に属する闇の「我」）の完全な死である。

不義姦通

女性は受身であり、受動的であるがゆえに、姦通した男たちとの性行為の結果は、明らかに集積される。すなわち、一緒に性行為を行った男の原子的成分が集積されるのである。ある男が、すでに他の男と性関係を持ったことのある女と性行為をする時、その男は、他の男の原子的エッセンスを受け取ることになる。それはその男にとって、とりも直さず、自分を中毒させる行為となる。このことは、「我」を根絶しつつある人たちにとって、重大な問題である。なぜならば、自分自身の過失と欠点に対して戦わなければならないだけでなく、それに加えて、その女性が性的接触を持った男たちの過失と欠点に対しても、戦わなければならないからである。

苦しみの根源

「我」は、われわれの苦しみの根源であり、無知と過失の源泉である。

「我」が根絶された時に、われわれの内に残るものが、内なるクリストである。「我」は、根絶されねばならない。「我」を根絶することだけが、無知と過失を終わらせることができるのである。「我」が消えた時、われわれの内に残る唯一のものが「愛」と呼ばれるものである。

「我」が根絶された時、はじめてわれわれの内、本物の幸福があるということに気づく。

トータルな形で欲望を排除することだけが、「我」の根絶を可能にする。もし、われわれが「我」を根絶したいと望むならば、われわれは「我」にとっては、いわば「つまらない人物」とならなければならない。

「我」は、醜悪なサタンであり、われわれの人生のすべての苦しみや醜態の原因をつくる恐ろしい悪魔である。

【アイン・ソフ(Ain Soph)】 ヘブライ語。Ain Soph または、En Soph と記されることがある。一般的には、「無限なるもの」として解される。
【つまらない人物 (Como el limon)】 文字通りには「レモンのように」となる。「我」にとって、つまらない人物とは、「我」の欲望に関心を示さない人を指す。

第十五章

独身生活

スワミ・Xは、ある講義の中で次のように語った。

「独身者でも、正しい方法で瞑想を習得し、それを日常生活に適用すれば、自分自身の内で霊の持つ自然の創造の力を、精神的に一つに結び合わせることができる。そういう人ならば、実際の結婚を経験する必要はない。彼らの女性的衝動は、彼らの内なる霊の中の男性と結婚して、その経験を学ぶことができるからである」。

もし、あなたがた愛すべきノーシスの学徒が、このスワミ・Xの話の熟考するならば、彼の言うことは、不合理な表明に過ぎないという結論に達するであろう。内なる霊の中の男性と、肉体の女性的衝動が結ばれるなどということは全くの偽りである。

そういうユートピア的な結婚は、不可能である。なぜなら、人間はいまだに霊を具現していないからである。それならば、いったい肉体の女性的衝動が、誰と結婚するというのだろうか。インテレクチュアルな動物（人間）は、いまだに霊を持っていない。霊を具現したいと望む人、霊を具えた人間になりたいと望む人は、自分のアストラル体、メンタル体、そしてコーザル体を得なければならない。現在の人類は、いまだにこれらの内なる乗物を有してはいないのである。アストラルの幽霊、メンタルの幽霊、そしてコーザルの幽霊、これらは幽霊にすぎない。大多数の神秘主義者たちは、これらの内なる幽霊が、真の乗物であると信じているが、それは大きな思い違いである。

われわれは、上の世界に誕生する必要がある。そして、この誕生とは、性的問題である。理論から生まれた人間は、一人もいないであろう。理論はたった一匹の微生物さえ、生み出すことはできないものである。鼻や口から生まれる人間もいない。あらゆる生物が、性を通して生まれる。「上にあるごとく、下にもある」。この物質の世界で、人間が性によって生まれるとすれば、当然上位の、つまり内なる霊の世界においても、誕生の過程は同様である。法は法であり、法は成就される。

アストラル・クリストの誕生は、血と肉でできた肉体の誕生と同じよう

になされる。それは性によってである。そのすばらしい体は、男とその妻との、性の秘儀によってのみ与えられ、そして生み出すことができるものである。メンタル・クリストにも、コーザル・クリストにも同じことが言える。われわれは、内なる体を生み出す必要がある。それは、性の触れあいによってのみ、可能である。なぜならば、上にあるごとく、下にもあるからであり、下にあるごとく、上にもあるからである。

いかなる独身者といえども、内なる霊の中の男性と、肉体の女性的衝動とは結婚できない。なぜならば、独身者は、その霊を具現できないからである。霊を具現させるために、われわれは、内なる体を生み出さなければならない。男女の性の結びつきだけが、妊娠を可能にする。男だけでは、あるいは、女だけでは、妊娠することも出産することもできないであろう。創造するためには、二つの極が必要である。これが生命の法である。

内なる乗物を生み出すことが不可欠である。われわれは上位の世界に生まれなければならない。独身生活は、必ず失敗に至る道である。完全なる結婚の道が必要である。

それぞれの内なる乗物を誕生させたなら、次には、それらを培う特別な栄養が必要となる。その特別な栄養によってだけ、内なる乗物は発達し、十分に強靱なものとなるのである。その乗物のための栄養は、水素を基礎としている。有機体においては、異なったタイプの水素が作られ、それらが人間のそれぞれ異なった内なる体を支えている。

体の法則

- 肉 体 …… 48 法則に拘束される。その基礎的栄養は、水素 (H) 48 である。以下同様に、
- アストラル体 …… 24 法則、H24
- メンタル体 …… 12 法則、H12
- コーザル体 …… 6 法則、H 6

すべての体の実質成分は、ある一定の種類の水素に変換される。無数の実質成分や生命形態があるのと同じように、水素にも無数の種類がある。内なる体は、その体特有の水素を持ち、その水素によって養われている。

スワミ・Xは、ただの僧であった。われわれは、この善良な僧が結婚を

するため、そして、自己実現を達成するために、近いうちに生まれ変わるであろうということを知らされていた。彼は、白ロッジの美しい弟子である。彼は、すでに高次の世界で自己実現を果たしていたために、寺院でそれが誤りであることを知らされた時は、非常に驚いた。この善良な僧は、事実、クリスティックな体を創造してはいなかったのである。ゆえに、それをする必要があるのである。それは性的問題である。性的秘儀だけが、その内なるすばらしい体を創り出せるのである。

われわれを批判する人たちに、次のことを言うておこう。われわれは、スワミ・Xを攻撃しているのではない。スワミ・Xの実習は非常にすばらしく、有益なものである。しかし、このようなシステムのみでは、本当に自己を実現できる者は一人もいない。そのことを、はっきりと言っておきたいのである。

たくさんの学校があり、それらはみな必要である。それらの学校は、それぞれ人類を助けることに役立っている。しかし、ここで断言したいことは、理論では、内なる体を生み出すことはできないということである。理論から生まれてきた人間を見たことがあるだろうか。誰一人、理論から生まれる人間はいないのである。

たくさんの、すばらしい学校や学派がある。それらの学校には、教育の課程とその段階がある。それらの中には、イニシエーションの儀式を行う学派もある。しかしながら、高次の世界に行った時、それらの学派の階級やイニシエーションは、何の役にも立たない。

白ロッジのマスターたちは、物質世界の階級や階級制度には関心がなく、クンダリニーに関心を示すだけである。マスターたちは脊髄を調べ、評価するのである。もしも志願者が、蛇を上昇させなかったのなら、世間の人々と同じ単なる俗人である。この志願者が、たとえ物質世界で高い地位にあたり、あるいは、学派やロッジにおいては尊敬すべき人と考えられ、高い階級の人であったとしても、同じである。もし、クンダリニーが脊椎の三つを上昇したならば、第三段階のイニシエイトとみなされる。また脊椎の一つだけ上昇した場合は、第一段階のイニシエイトである。このように、マスターの関心は、唯一、クンダリニーのみにあるのである。

自らの洞穴で、鷲と蛇とともに働くために、すべてを捨て去る人は、わずかしかない。これは、勇敢な人のためのものである。現在の人類は、鷲と蛇とともに働くために、ロッジや学派を捨てるようなことはしない。



ツタンカーメンの黄金のマスク

額にある鷲と蛇の紋章がファラオのシンボルに使われている。退廃する以前の“金の時代”は、クンダリニーを真に上昇させた者だけが、この鷲と蛇の紋章を付けることが許された。

そのような組織に属するほとんどすべての生徒が、その学派に忠実ですらない。生徒たちは、ロッジからロッジへ、学派から学派へと、蝶のように舞い飛んでいる。そのようにしていながら、完全な自己実現を望んでいるのである。そのような、蝶のような仲間たちを見ると、私は心に大きな苦しみを覚えずにはいられない。

多くの生徒たちが、すばらしいエクササイズを行っている。確かにすべての学派には、非常にすばらしいプラクティスがある。ヨガナンダ、ヴィヴェーカーナンダ、ラーマチャラカなどのプラクティスは、すばらしいも

のである。生徒たちは、良い意図をもってプラクティスを行い、大変真剣な者もいる。われわれは、それらの生徒と学校を高く評価している。

しかし、あせりながら最終的解放を熱望する生徒を見ていて、何ともしがたい大きな苦しみを感じるのである。われわれは、内なる体を生み出すことが必要であることを知っているし、そのためには、性の秘儀の実践が不可欠であることを知っているからである。性の秘儀だけが、聖なる火を目覚めさせ、霊を具現するための内なる乗物を創造することができるのである。このことを、われわれは自らの経験を通して知っている。しかし、どのようにして、人々にそれを納得させることができようか。われわれ同胞の苦しみは、非常に大きく、なすすべもない。

昔、月が地球であった時代に、何百万という人類が進化した。その中で数百人の人類は、自らを天使の段階にまで上昇させた。しかし大多数の人類は、墮落してしまった。大多数の人々が、奈落の底へ沈められた。招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。自然を観察してみれば、すべての種子が芽を出すものではないということを知ることができよう。日々、何百万の種子が芽を出すことなく死に、何百万の生物が枯れたり、死んだりしている。これは悲しい現実である。

独身主義者はすべて、奈落と第二の死の確実な候補者である。超人の状態に自らを上昇させた人のみが、性の触れあいなしに、愛の歎びに満たされることができるのである。そうなった時、われわれは、コスミックサイエンス（宇宙的純粹科学）の円形劇場の中に浸透するのである。誰一人として、性の秘儀と「完全なる結婚」を通らずに、自分自身の内に超人を具現することはできない。

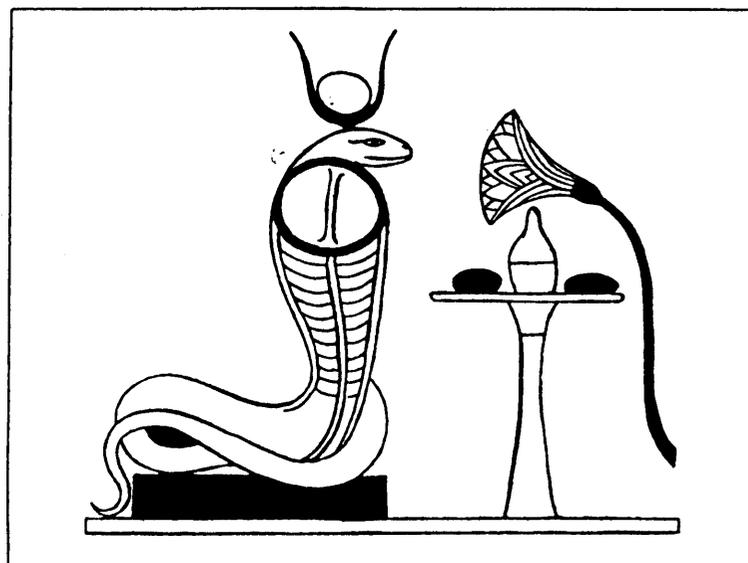
【スワミ】 ヒンズー教で学者や聖者に与えられる尊称。「スワミX」とは「あるスワミ」という意味。

【ヴィヴェーカーナンダ (Vivekananda)】 インドにおけるヒンズー教の導師（1863～1902）。ラーマクリシュナ（1836～86）の弟子。元の名ナレンドラ。

【ラーマチャラカ (Ramacharaka)】 インドのヨギ。ラージャ・ヨガを修した。邦題「研心録」（大正13年 二宮峰男訳、実業之日本社）を著

したラーマチャラカはこの人物であると思われる。

【月が地球であった時代】 現在、われわれが月と称しているものは、かつて、もっと大きかった天体（セレーネSeleneと呼ばれる）の最後の残骸である。この天体セレーネは、今の地球と同様に美しい海があり、豊かに植物が繁り、多くの人々が住んでいた。しかし、セレーネの住人たちは、退廃して悪魔と化したため、この天体は破壊され、今の月の軌道に投げ出され、現在の月が形成された。今の月には、退廃したセレーネの住人たちの数多くの意識が閉じ込められている。また、かつてのセレーネの軌道に、その残骸で、現在の地球が形成された。



太陽蛇

エジプトでは、完全に靈的成長を遂げた蛇（クンダリニー）は、日輪を抱く蛇となった。その太陽蛇の前には、グラン・アルカーノの諸要素が示されている。蛇の科学が、靈的再生のキーであったことを示している。

第十六章 意識の目覚め

人類は眠った意識の中で生きているということを、知る必要がある。人々は眠りながら通りを歩いている。人々は眠りながら生き、眠りながら死んでいく。

すべての人間は眠りながら生きている、という結論に達した時、はじめて、意識を目覚めさせる必要性を理解するだろう。われわれは、意識を目覚めさせなければならない。われわれは、意識を目覚めさせたいと望んでいるのである。

魅惑

人類が深い眠りの中に生きている理由は、魅惑にとらえられているからである。人々は、生活のすべての物事にとらわれている。とらわれているために、自分を忘れてしまっているのである。

酒場で酔っぱらっている人は、酒と酒場の楽しみと、酒飲み友だちや女たちに魅惑されている。虚栄心の強い女は、鏡の前で自分の魅力にうっとりし、強欲な金持ちは、金と財産に心を奪われている。仕事一筋の働き者は、工場で勤勉に働くことにとらわれてしまっている。父親は、自分の子供にとらわれている。人類のすべてが、とらわれの中において深い眠りに落ちている。

自動車を運転していると、人々が車の危険性も忘れて、だしぬけに通りに飛び出してくるのに驚かされる。自動車に向かって、飛び出してくる者さえいる。あわれな人々、眠りながら歩いている人々、まるで夢遊病者のようである。人々は、自分の命を失う危険と隣り合わせに、眠りながら歩いている。超視覚者ならば、それらの眠っている人々の夢を、見ることができるだろう。人々は全くとらわれた状態で、眠っているのである。

眠り

エゴは、睡眠中に肉体から抜け出る。生命体が肉体を修復するためには、肉体からエゴが分離する必要がある。内的世界では、夢をそこに連れて来るのはエゴである、ということを確認することができる。エゴによって、物質世界でとらわれていた物事に、内なる世界においてもとらわれ続けるのである。大工は自分の仕事場で、警官は街を見張りながら、また、理髪師、鍛冶職人、酒場の人々、欲望に身を任せている歓楽の家の売春婦など、それぞれの人が、それぞれの場で眠っているのを見る。彼らは、あたかも物質世界にいるかのように内的世界に生きている。眠っている時、自分が物質界にいるのか、それともアストラル界にいるのか、自分自身に問いかけられる生物はいない。

眠っている間に、その質問を自分自身にしたことのある人は、すでに内的世界で目覚めた人である。そうして、高次の世界のすばらしい出来事を、すべて学ぶことができるという驚きを知った人である。半覚醒と呼ばれる眠りと覚醒の間の状態にある時、絶えずそのような問いを自分自身に課すことを習慣づけた人だけが、睡眠中に、高次の世界で同じ問いを自分に向けることができるのである。

日中に行ったあらゆることを、眠りの間に繰り返すということは、明白な事実である。もし日中に、この問いかけを習慣づけるならば、夜眠っている間、肉体の外に出ている状態でも、同じ質問を繰り返せることになるだろう。そうして、それが意識の目覚めへとつながるのである。

自己想起(私は今、どこにいるのか)

魅惑され、とらわれ続けている人は、自分を想起しすることがない。しかし、われわれは、一瞬一瞬自分自身を想起しなければならない。われわれを魅惑する、あらゆる出来事に対して、常に自分自身を想起しようにしなければならないのである。

どんな出来事が起きても、とにかく一瞬自分自身を引き留めるのである。そして、自分に次のように問うてみよう。「私は今、どこにいるのか？ 物質世界にいるのか？ アストラルの世界にいるのか？」と。それから、その場所で空中に浮くつもりで、ジャンプするのである。もし浮いたとし

たら、それは当然、肉体の外に出ていることになる。この結果、意識の目覚めを経験するだろう。一瞬一瞬に、このように問いかける目的は、潜在意識の中に、この問いを刻み込み、後に睡眠に入った時、すなわち本当にエゴが外に出ている時、潜在意識を動かせるためである。

アストラル界では、物質界で見えるものが、同じように見えるということを知っておこう。睡眠中や死んでからも、見ているものは、物質界にいた時と全く同じである。だから眠りの中にある人や死んだ人は、自分が肉体の外にいないことを、疑うことさえしない。すでに死んでいながら、自分が死んだことを信じていないのである。魅惑にとらわれ、深い眠りをむさぼったままである。

もし、その人が生きている時に、一瞬一瞬に自己想起をする実習を行っていたならば、つまり現世的な魅惑と戦ったことがあるならば、死後も意識が目覚めていたであろうし、夢の中に生き続けることもなかったであろう。意識を目覚めさせた人は、肉体が眠っている間、高次の世界のすばらしい出来事をすべて学ぶことができる。そして、その人は高次の世界で、完全に目覚めた宇宙市民として生きる。その時、白ロッジの偉大な秘儀司祭たちとともに、生きることができるのである。

意識を覚醒させた人は、もはやこの物質界でも、あるいは内的世界でも、夢を見ることがない。夢を見ることをやめ、高次の世界の優れた研究者となる。意識を覚醒させた人は、光明を得た人である。そして、マスターの足もとで、直接教えを授かることができるのである。また、創造のオーロラを輝かせた神々と、親しく話しあうこともできる。意識の覚醒者は、自分の無数の転生を思い出すことができる。さらに自分自身の宇宙的なイニシエーションに、意識を持って臨席することも、偉大なる白ロッジの寺院で学ぶこともできる。そして、高次の世界で、自分のクンダリーナーが進化していく様子を知ることができるのである。

白ロッジのマスターたちの案内と指導を受けるために、「完全なる結婚」の道を進む男女はすべて、意識を目覚めさせる必要がある。高次の世界では、マスターたちが、真に愛しあうすべての人々を、良い方向に導いてくれる。高次の世界では、マスターたちは、われわれの内的発展に必要なことを、それぞれに授けてくれるのである。

補足の実習

ノーシスの学徒は睡眠から覚めた時、睡眠の経過を思い出すエクササイズを行うべきである。このエクササイズは、睡眠中に訪れたすべての場所を、思い出すためのものである。エゴは、われわれが、かつていた場所や見聞きした場所を、しばしば訪れるということは前に学習した。マスターたちは、弟子たちが肉体の外に出ている時に、彼らを指導する。

睡眠中に学んだことについて、深く瞑想する方法を知り、そしてそれを実行することは、緊急に必要である。眠りから目覚めた時、決して体を動かしてはならない。なぜならば、動くことでアストラル体はかき乱され、それによって記憶が失われるからである。「思い出すこと」を練習することと、「ラーオーム、ガーオーム」(RAOM-GAOM)のマントラを組み合わせることを、まず最初に実行する必要がある。このマントラは、それぞれ二つの音節に分かれるが、発音に際しては、Oの母音にアクセントをつけて行う。

学徒にとってこのマントラは、坑夫が使うダイナマイトに相当するものである。このマントラを習う者は、マントラの助けで、ちょうど坑夫がダイナマイトによって地中に通路を開くように、潜在意識の記憶に至る通路を開くことができるであろう。

根気とがんばり

ノーシスの学徒は、どこまでも根気強く、またねばり強くなければならない。なぜならば、能力を得るためには、多くの努力を必要とするからである。ただで与えられるものは、何もない。すべては、それなりの努力と犠牲を要するものである。これらの習得は、移り気な人や、意志薄弱な人のためにあるのではない。これらの学習には、限りない信念が要求される。懐疑的な人は、われわれの学習に近づくべきではない。なぜならば、神秘学はたいへん求められることの多いものだからである。疑い深い人は、完全に失敗する。疑いを抱いて、天上のエルサレムに入場することはできないであろう。

四つの意識状態

第一の意識状態 ……エイカシア (Eikasia)

第二の意識状態 ……ピスティス (Pistis)

第三の意識状態 ……ディアノイア (Dianoia)

第四の意識状態 ……ヌース (Nous)

エイカシアとは、無知、人間の持つ残忍性、野蛮、大変深い眠り、本能的な獣的世界、退化した人間の状態である。

ピスティスは、表面的信仰、先入観、宗派主義、狂信であり、真理から導かれた認識を、何一つ持たない空論である。ピスティスは、人間の常識水準の意識である。

ディアノイアは、表面的信仰のインテレクチュアルな検閲、分析、概念による総括、教養的でインテレクチュアルな意識、科学的思考である。ディアノイア的思考とは、現象と既存法則の関係を研究することであり、深く明快な形で現象に法則を適用させるため、帰納的、および演繹的体系を研究することである。

ヌースは、完璧に目覚めた意識である。ヌースはトゥリヤ (Turiya) の状態、つまり完全な深い内的光明の状態である。ヌースはまた、客観的で真正な超視覚であり、直観である。ヌースは、神聖なる原型の世界である。ヌース的思考は、総括的で明白であり、客観的で、光明あるものである。ヌース的思考の高みに至った人は、意識をトータルに目覚めさせ、自己をトゥリヤに変えることができる。

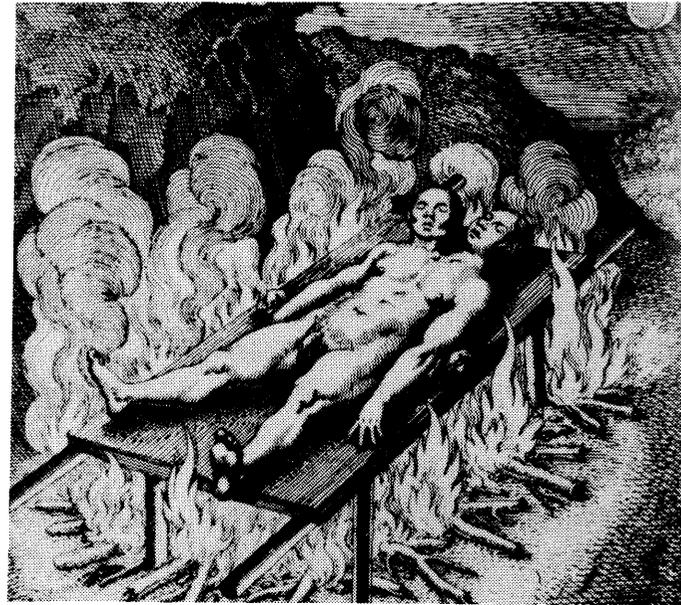
人間の中の低い部分は、理性に欠け、主観的であり、五感と関連を有するものである。

人間の中の高い部分は、直観と客観的な精神意識の世界である。直観の世界の中で、自然界のすべてのものの原型が発展する。客観的な直観の世界に浸透した者だけが、つまり神聖なヌース的思考の高みに達した者だけが、本当に目覚め、光明を得るのである。

真のトゥリヤは夢を見ない。ヌース的思考の高みに達したトゥリヤは、そのことを言いふらしたりはしない。また賢者であるとうぬぼれることもない。トゥリヤは、たいへん素朴で謙虚、かつ純潔で完璧である。

次のことを知っておくべきである。トゥリヤは、霊媒ではない。また、今日の精神科学の学校やヘルメティックの学校、あるいは神秘学などの学

校に、雑草のごとく存在する多くのにせの超視覚者やにせの神秘家などではない。トゥリヤの状態は、非常に崇高なものである。それは、一生の間、ヴァルカンの燃えたつ炉の中で働く人によってだけ、達成されるものである。クンダリーニーだけが、われわれをトゥリヤの状態にまで引き上げることができる。多くの困難な試練を経て、トゥリヤの状態を達成するためには、深く瞑想することと、生涯を通して性の秘儀を実践することが、何にも優先して必要なことである。瞑想と性の秘儀は、われわれをヌース的思考の高みへと導いてくれる。



ヴァルカンの炉の中のアンドロジヌス

ヴァルカンの火 (性の火) でエゴが溶解され、黄金が精錬される。錬金術とは、性の秘儀のことである。秘儀の間、男女はアンドロジヌス (両性具有) となり、徐々に黄金の霊体を形成していく。

夢想家や霊媒、神秘学を教える学派に入会する人たちが、即座にトゥリヤの状態を達成できるはずはない。不幸にも多くの人たちが、トゥリヤをガラスを吹いてピンを作るように、あるいは、タバコを吸ったり、酒を飲むようにたやすいことと信じている。同様に、幻想にとらわれた多くの人たち、霊媒たちや夢想家たちが、自分はマスターである、光明を得た超視

覚者であるなどと宣言している。あらゆる学校の中に、またわれわれの仲間にも、実際は超視覚者ではないのに、自分は超視覚者であるという人が、常に何人かいる。そういう人たちは、幻想と夢想の上に立っているのである。そして、次のように中傷する。「誰それは、墮落した。誰それは、黒魔術師だ」等々。

トゥリヤの高みに至るための前段階として、多くの年月をかけた心理的訓練と、「完全なる結婚」の性の秘儀が必要であるということを、警告しておきたい。これは、訓練、長期間の十分な学習、強い集中と深い内的瞑想、人類への献身などが求められるという意味である。

性急さ

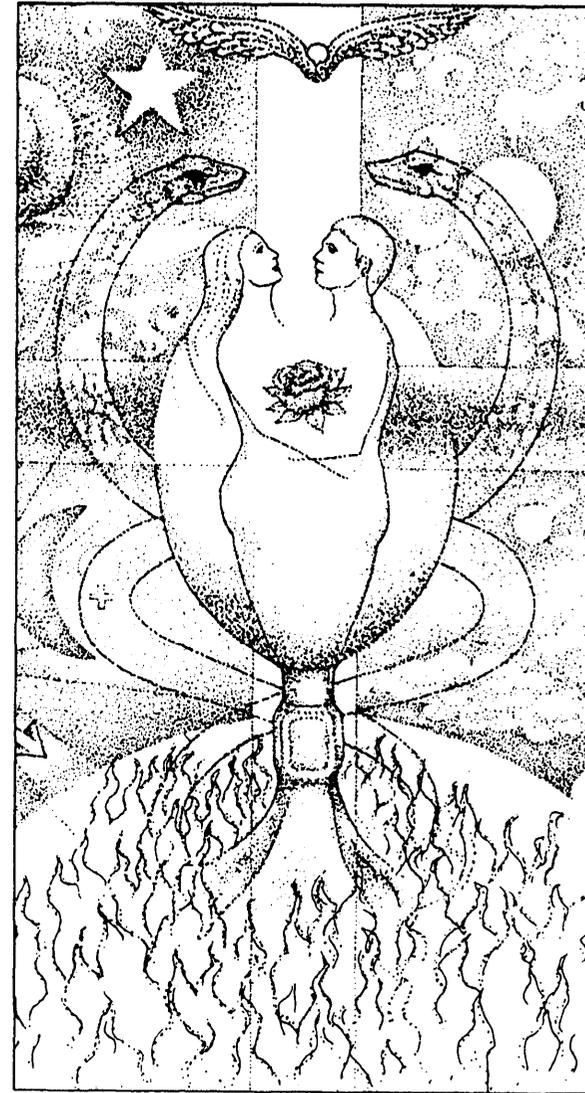
一般的に、ノーシスを学び始めたばかりの人たちは、大変もどかしさを感じるようである。すぐにも何らかの超常現象や、アストラル体験、超視覚や光明を得たいと望むからである。

しかしながら、現実はそのようなものではない。何一つとして、勞せずして与えられるものはないのである。すべてに代価が要求される。好奇心で始めて、即座に手に入れられるものなどはない。

すべて、それぞれのプロセスと展開がある。クンダリーニは、マハーチャームのオーラの内で、非常にゆっくり発達し進行していく。クンダリーニは、意識を目覚めさせるパワーを持っている。しかし、目覚めの進化過程で、華やかさや、センセーショナルなことや、心を揺さぶるような荒々しい出来事はなく、目覚めはゆっくりと、自然に、少しずつ進んでいくのである。意識がトータルに目覚めた時にも、これといってセンセーショナルな、また華々しいことなどはない。一本の木が、突然の飛躍やセンセーショナルな事件もなく、ゆっくりと成長して大きくなるように、意識の目覚めも、自然でシンプルな現象なのである。自然は自然である。ノーシスの学徒は、はじめの頃は「私は眠っている」と言う。後には「私は肉体の外に出て、アストラル体の中にいる」と感嘆の声をあげる。さらにはサマディ、^{エクスタシー}法悦を達成し、楽園の村々へと歩を進めて行く。はじめの頃の意識の表現は、とぎれとぎれで継続せず、また長い間、無意識状態が続くことになる。しかし、火の翼が与えられてからは、とぎれることのない目覚めた意識が続くようになるのである。

【ヴァルカン(Vulcano)】 ローマ神話における火と鍛冶の神。

【マハーチャーム (Mahachoom)】 「大なる主」の意。第七イニシエーションを受けた存在。ここでは第三ログス、聖霊をさす。



長い年月をかけた心理的訓練と、「完全なる結婚」の性の秘儀がわれわれを勝利に導く。忍耐強く続けなければならない。

第十七章

夢とヴィジョン

ノーシスの学徒は、夢とヴィジョンの違いを学ぶ必要がある。夢を見ることとヴィジョンを持つこととは、別の事柄である。真に「目覚めた」ノーシスの学徒は、夢を見ることはない。意識の眠った者だけが、夢を見ながら生きている。夢を見る人の中で最悪のタイプは、性の夢を見る人である。肉欲的な夢を見ている人々は、愚かにも幻想の中の快楽に満足して、創造エネルギーを消費している。この種の人々は一般的に、仕事が順調に進まず、何をやっても失敗し、みじめさを味わうことになる。

ポルノ的なイメージを思い浮かべるとき、われわれの感性は害される。そして、そのイメージはすぐにマインドに及ぶ。心理学で言う「我」は、この出来事に干渉し、メンタル界にそのイメージを再現するために、エロティックなイメージを盗み取る。そして、このイメージはマインドの世界で、生きた像に変わる。眠っている間に夢を見ている人は、その生きた像と姦淫を犯すのである。それは、好色の悪魔が欲望を満たすために、誘惑を仕掛けるのに似ている。そしてその結果は、おぞましい夜の汚れ（夢精）となって現れる。真実の道を行く帰依者は、映画館へ行くべきではない。なぜならば、そこは黒魔術の巣窟だからである。スクリーン上のエロティックな映像は、マインドの中の像やエロティックな夢の原因となる。その上、映画館の中には、人間のマインドによって作り出された悪魔的なエレメンタルが、無数にはびこっている。それらの邪悪なエレメンタルによって、映画を見る人のマインドが害されるからである。

夢の世界における幻想的な夢は、潜在意識のマインドによって作り出されるものである。夢の性質は、夢を見る人の信念に左右される。われわれを善良であると信じている人が夢を見れば、われわれを天使と見るであろうし、また、われわれを悪者であると思っている人は、悪魔として夢を見るであろう。

こうして書いているうちに、多くの事が心に浮かんで来た。以前、ある国で働いていた時に、ノーシスの学徒を観察してわかったことがある。彼らは、われわれを信じている間は、われわれを天使として夢に見ていた。

しかし、悪魔として夢に見るようになるには、ただわれわれを信じることをやめるだけで十分であった。祭壇の前で、われわれに忠誠を誓った人々は、われわれを熱狂的に賞賛し、天使として夢に見たであろう。しかし、目新しい本を読み、あるいは新興学派の会員募集の講義を聞いただけで、彼らはわれわれを信ずることをやめ、自分たちの考えや意見を変え、われわれを悪魔として夢に見るようになった。そういうことが何度もあった。このような人々の言う「超視覚」とは何なのだろうか。彼らは、何を夢に見ていたのだろうか。きょうは、われわれを神々と見なし、明日は、悪魔であると確信するような超視覚者が、一体いるだろうか。そのような夢を見る超視覚者などいるはずはない。なぜ彼らは、自分自身に矛盾するのだろうか。なぜ、きょうはわれわれを神々であると言い、明日は悪魔であると言うのであろうか。これは、どういうことなのか。

- 1) 潜在意識とは、内なるフィルムに蓄えられた出来事を写し出すスクリーンである。
- 2) 実際に潜在意識は、ある時はカメラマンとして、ある時はディレクターとして働き、また時にはマインドにイメージを投影する役もする。
- 3) 潜在意識の投影者は、多くの誤りを犯すということは明らかである。マインドのスクリーン上に、誤った思考や、根拠のない疑い、偽りの夢が浮かび上がるということも明らかである。
- 4) われわれは潜在意識を意識化し、夢を見ることをやめ、意識を目覚めさせなければならない。

目覚めた人は、夢を見ることがない。肉体がベッドで眠っている間も、強烈に目覚めながら、内なる世界に生きている。彼こそ、正真正銘の光明を得た賢者である。

意識が目覚めていない超視覚者を、われわれは、気安く受け入れるわけにはいかない。アストラル・クリスト、メンタル・クリスト、意志・クリストをいまだ創造していない人を、超視覚者として受け入れることはできない。意識を目覚めさせていない超視覚者は、それらのクリスティックな乗物を持っていないのである。彼らは内的世界の自分自身の信念と考えを見ているにすぎない。全く彼らは、人々のためになることはない。

目覚めた超視覚者だけを、つまり、すでにクリスティックな乗物を持っている超視覚者だけを、われわれは本当に信じることができる。彼らは、夢を見ないし、間違いを犯さない。彼らは、真に光明を得た人である。こ

第十八章

意識・潜在意識・超意識・超視覚

意 識

われわれが通常、目覚めた意識と言っている状態は、実際は深い眠りの状態である。この普通の目覚めた意識と呼ばれているものは、五感と頭脳とに関係している。人々は、目覚めた意識を持っていると信じている。しかし、それは全くの誤りである。人々は、毎日を深い眠りの中で生きているのである。

超 意 識

超意識は、インティモ（魂）に属している。超意識の機能は直観である。直観を強化するためには、超意識を働かせる必要がある。使わない器官は衰えていくということを思い出してみよう。超意識を働かせない人たちの直観は、衰えている。ポツヴィジョンとは、直観的超視覚であり、それは、神聖な全知である。そのための眼は、松果腺の中にあり、そこに千枚の花びらを持つ蓮の花がある。超意識はそこにある。松果腺は脳の高等部に位置している。超意識を開発したいと望む者は、内的瞑想を実行すべきである。われわれの存在の奥深くに住む聖なる母に集中し、彼女を瞑想する。そして、聖なる母に、われわれの超意識の活動が開始されるように祈りながら眠りにつくのである。毎日、瞑想をしなさい。瞑想は、賢者の日々の糧である。瞑想によって超意識は開発される。

記 憶

内的経験を思い出すためには、記憶が必要である。精液をもらしてはならない。精液の中には、何百万もの脳のための微細な細胞があるということを知らなくてはならない。あなたがたは、その細胞を失うべきではない。

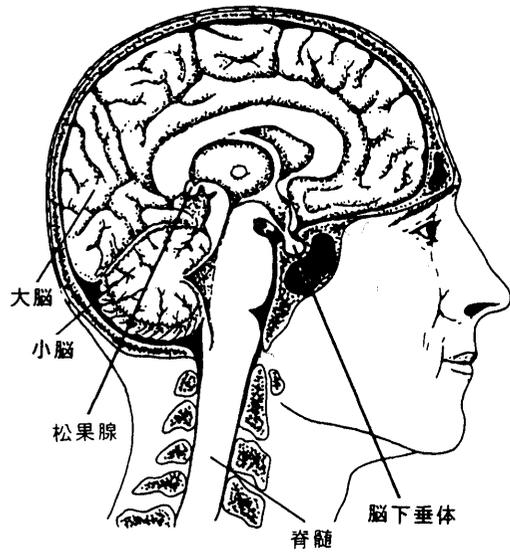
のような水準の人たちは、まさに真の白ロッジのマスターたちである。このような卓越した人々のヴィジョンは、単なる夢とは異なっている。彼らは、完全なるマスターである。彼らのようなマスターは、もはや夢を見ることはない。彼らは、自然の記憶を調査することができ、封印された創造の古文書を読むことができ、地球とその人類の歴史のすべてを読むことができるのである。

「完全なる結婚」の道を歩むすべての人は、戦争時の不寝番のように油断なく、意識を目覚めさせて生きるべきである。睡眠中に、マスターは、弟子たちを試験する。また、われわれが「偉大なる作業」^{グランオペラ}を働いている間、睡眠中に闇の存在の攻撃も受ける。睡眠中には、内なる世界において、われわれは多くの試練を通過しなければならないのである。マスターたちが弟子に何らかの試練を課しながら、弟子の意識を目覚めさせるのである。



無意識の夢み手

イスラム教では、意識の発展段階を七つに分けて説明している。これは、その一つで、夜ばかりか昼も眠り続ける“無意識”の夢み手が、天使の助けで、ついに目覚めようとする瞬間を表している（イランのカシャーン出土のラスター皿に描かれた絵）。



松果腺の位置

記憶力を開発する特別な栄養

朝食は、酸味の果物とアーモンドの実を粉にして、蜂蜜と混ぜたものを食べるようにするとよいだろう。この方法によって、記憶に必要な原子が供給される。

内的経験

肉体が眠っている間、エゴは内的世界で活動している。そして遠く離れたところまで移動する。われわれは、内的世界で多くの試練を受け、内なる寺院で、イニシエーションを授かる。われわれは、肉体の外に出ている時の体験を思い出す必要がある。この本が教える方法によって、すべての人々が意識を目覚めさせ、内的経験を思い出すことができる。しかし、記憶力が衰えているために、肉体が眠っている間に偉大な白ロッジの寺院で働いていたにもかかわらず、それを全く思い出すことができない多くのイニシエイトたちが存在する。これを知ることは痛ましいことである。

この本には、記憶力を開発するためのプラクティスがある。徹底的に練習をなさい。そして潜在意識を働かせるようにしなさい。意識を目覚めさせ、超意識の活動を開始させなさい。

超視覚と、にせの超視覚

超視覚と、にせの超視覚がある。ノーシスを学ぶ者は、これら二種類の超感覚的な知覚方法の違いをはっきりと区別すべきである。

超視覚は、客観性に基づいている。一方、にせの超視覚は、主観性に基づいている。魂の現実、精神界は、客観性に基づいて理解される。物質界、幻想の世界は、主観性によって理解され、そこには真実が存在しない。中間の領域として、アストラル界が存在する。しかし、アストラル界は、人それぞれの精神的発達の数値によって、客観的にも、あるいは主観的にもなり得るのである。にせの超視覚とは、想像上の知覚、空想、作為的に作り出された幻覚、無益な夢、あるいは実際の事実と一致しないアストラルの幻影などに対して名づけられたものである。そして、にせの超視覚は、アストラル光の中に投影された自分自身の無意識な思考を解釈したり、アストラルの幻影という無意識の創造物を、後で本当の現実のように解釈したりするのである。

主観的神秘主義や、偽りの神秘主義もにせの超視覚の範疇に入る。彼らの擬似神秘の精神状態は、深く澄んだ感情とは無縁であり、むしろ歴史やにせ魔術とかかわりを持っている。それらは別の言い方をすれば、アストラル光の中に無意識に写し出されたにせの宗教的投影であり、一般的に文学では「美（誘惑）」と呼ばれているもののすべてである。

客観的超視覚

新参者を、言葉で言い表せない程すばらしい、客観的超視覚の高みへと導くための四つのマインドの段階がある。

- 第一…… 深い眠りの状態。
- 第二…… 夢を伴った眠りの状態。
- 第三…… 目覚めた状態。
- 第四…… トゥリヤ。すなわち、完全なる光明の状態。

事実、トゥリヤだけが真正の超視覚者である。コーザル界に生まれ出ることなくして、その高みに到達することはありえないのである。トゥリヤの状態に到達したいと望む者は、多くの自己欺瞞や自己暗示や催眠の状態の起源となっている、心理的な半無意識のプロセスを十分に研究すべきである。

ノスティックは、まず連続する思考を止めること、つまり無思考の能力を身につけるべきである。この能力を手に入れたものだけが、実際に、声なき声を聞くことができるのである。まず、無思考の能力を達成したならば、次にただ一つのことを考えを集中することを習う必要がある。三番目のステップは、正しい瞑想である。それによってマインドに、新しい意識の最初のひらめきをもたらされる。四番目のステップは、観照、法悦^{エクスタシー}あるいはサマディである。これがトゥリヤ（完全な超視覚）である。

はっきりさせること

ノース運動の中で、トゥリヤの人は、ほんのわずかである。このことを明確にすべきである。わずかの例外はあるが、大部分はにせの超視覚者と主観的な神秘家であるということを知るべきである。

事実、神秘を教えるすべての学派や、降霊術のすべての運動団体は、道に迷ったにせの超視覚者でいっぱいである。益になるよりもむしろ害を引き起こす存在である。彼らは、自分自身をマスターであると称している。彼らの中には、著名な人の生まれかわり（と称している者）が多くいる。われわれの知るところでは、バプテスマのヨハネが1ダース以上、マグダラのマリアも同じくらいいる。このような人々は、イニシエーションを、まるでふいごでビンを作るように考えている。彼らは、一人よがりの優越感と不健全な精神状態が作り上げた馬鹿げた幻想をもとに予言を行い、気まぐれによって人を仲間はずれにしたりする。そして、ある人を中傷し、また別の人を黒魔術師だと言ったり、あるいはある人物を墮落したと決めつけたりする。

ノース運動は、このようなよこしまで、有害な者たちから浄化されなければならない。ゆえにX婦人を除名することから始めたのである。

われわれは、人の道を誤らせるこれらのにせの超視覚者や主観的な神秘家の有害な病的状態に対して、もはや寛容であることはできない。われわれ

れが普及しているものは、魂と調和した知性ある文化、礼儀正しい上品さ、騎士のような高潔さ、筋の通った分析力、総括の教え、アカデミックな文化、高等な数学、哲学、科学、芸術、宗教などである。幻想にとらわれた人たちの愚かなうわさ話や夢想者の熱狂を、受け入れ続ける余地はもはやない。事実、主観的超視覚者は、夢の意識を（日常の）目覚めた状態の意識に投影させている。自分の作り出した夢で、他の人々を見ているのである。通常目覚めの状態というのは、夢見る人の内的動機に従って変化する。

以前、次のようなことが判明した。

あるにせの超視覚者が、われわれの考え方や思想にすべて合意していた時、われわれを天使か神のように見ていた。そして、われわれを称賛し、崇拜さえしていた。ところが、そのにせの超視覚者がその考え方を変えた時、他の新しい学派の熱狂者になった時、何か本人にとって驚くべき本を読んだ時、街にやって来た真新しい講義を聞いた時、また他の団体、組織、学派に変わる決心をした時、彼らはわれわれを黒魔術師であると非難し、悪魔であるかのように見なしたのである。このことからわかることは、にせの超視覚者は、アストラル光の中に投影された自分自身の夢を見るだけの、単なる夢を見る人であったということである。

言語に絶した真実の超視覚の高みに到達したいと真に望む者は、自己欺瞞のわなに落ちないように十分に注意しなければならない。そして、正しい秘教の規律に従うべきである。

現 実

超意識を達成した本物の超視覚者は、決して自分が超視覚者であることを自慢したり、言いふらしたりはしない。超視覚者が人に助言を与える時は、超視覚をもとにして言っているということを、気づかせずに行うものである。

ノースのもとにあるすべての学徒は、うぬぼれて自分から超視覚者であると自称する人たちに対して、十分に注意しなければならない。ノースの学徒は、見世物じみたにせの超視覚者から、自らを守るために最大の目覚め（不眠番）を開発する必要がある。にせの超視覚者は、いろいろな場所に現れて人を中傷し、信用を傷つけ、「あいつは、呪い師だ」「あいつ



神鏡

われわれは、現実を直視しなければならない。

は、黒魔術師だ」「誰それは、墮落した」などと、われわれに確信を持って言う。

真のトゥリヤは、高慢さを微塵も持っていないということを緊急に理解する必要がある。事実、にせの超視覚者は「私は、マグダラのマリアの生まれ変わりである」「バプティスマのヨハネの生まれ変わりである」「ナポレオンである」などと愚かさを自慢したりする。道を誤ったにせの超視覚者ほど、愚かで強情なものはない。

栄光と尊厳に満ちた畏るべき父の御前では、われわれは塵から造られたみじめな小片であり、身の毛もよだつ土中の虫である。私が言っていることは、喩え話や象徴として言っているのではなく、文字通りの畏るべき現実なのである。

実際「我」と呼ばれるものは、「私は、マスター誰それである」「私は、例の予言者の生まれ変わりである」などと言う。「我＝動物」は、確かにサタンである。「我」とは、エゴ（悪魔）である。そのエゴたちが、自分がマスターや大聖、秘儀司祭、預言者などであると感じているのである。

意識・潜在意識・超意識

意識、潜在意識、超意識と言っても、もとは一つの人間の意識である。意識を目覚めさせる必要がある。意識を超意識へと目覚めさせる人は、超意識の高みに到達する。そして、真の光明を得た人、超視覚者、トゥリヤへと至るのである。潜在意識を目覚めさせること、さらにすべてを目覚めさせることは、緊急に行わなければならない。意識全体を完全に目覚めさせることが必要である。意識全体を目覚めさせた人だけが、真の超視覚者、光明を得た人、トゥリヤである。

いわゆる^{インフラ}墮落意識、無意識、潜在意識などの違いは、それぞれの意識の眠り方の表現形式と作用域の違いにすぎない。光明を得た人、超視覚者、超意識の人になるため、緊急に意識を目覚めさせなければならない。

六つの基本的次元

一般に知られた、縦、横、高さの三次元を超えて、四次元が存在する。それが時間である。そして、時間を超える五次元が永遠である。

さらに、永遠を超えるもの、永遠と時間を超える六次元が、確かに存在する。この基本的な六次元から、完全なる自由が始まる。宇宙の六つの基本的な次元のすべてにおいて目覚めた人だけが、真の超視覚者、真のトゥリヤ、真の光明を得た人なのである。

【ポリヴィジョン】 直観的超視覚のこと。物体を、前から後ろからも、上からも下からも、同時に一瞬にして、完全に見ることができる客観的知覚能力のこと。

第十九章

イニシエーション

イニシエーションとは、まさにあなたの命そのものである。もしあなたがイニシエーションを望むのなら、杖にそれを刻み込んでいきなさい。理解力のある人なら、それがわかるだろう。なぜなら、智慧があるからである。イニシエーションは、売ったり買ったりできるものではない。書状によりイニシエーションを与えるような学派、またイニシエーションを売るような学派は、すべて避けなければならない。

イニシエーションとは、霊のきわめて奥深いところの出来事である。「我」(エゴ)は、イニシエーションを受けない。「私はこんなにも多くのイニシエーションを持っている」「私は数え切れないほど多くの位階を持っている」などという人は、嘘つきである。なぜなら、「我」はイニシエーションや位階を受けないからである。

小密儀の九つのイニシエーションと大密儀の五つの重要なイニシエーションとがある。イニシエーションを受けるのは、霊である。イニシエーションはきわめて奥深い個人的なものであるから、まわりに言いふらしてはならないし、他言すべきでもない。

物質世界の多くの学校で与えられるイニシエーションや位階は、高次の世界では実際に何の価値もないものである。白ロジのマスターたちが、霊に関する真正のイニシエーションを、真実として認めるだけである。このことは全く内的なことなのである。

弟子は、アルカーノ A・Z・F (性の秘儀) で働かなくとも、九つの秘儀、つまり小密儀の九つのイニシエーションはすべて通過することができる。しかし、アルカーノ A・Z・F がなければ大密儀に参入することはできない。

エジプトでは、第九球体にまで達した者はすべて、必ず、畏るべき「偉大なる秘儀」の秘密を口伝で授けられた (最も強力な秘儀“アルカーノ A・Z・F” である)。

ウムブラル(入口)の番人

志願者がまず直面するのは、ウムブラル(入口)の番人の試練である。この番人は「我」の影である。この恐るべき試練に失敗する者は多い。

志願者は、内的世界でウムブラルの番人を呼び出さなければならない。この番人の恐るべき出現に先だって、ものすごい電氣的嵐がやって来る。

ウムブラルの怪物は、恐るべき催眠力を武器としている。実際、この怪物は、われわれ自身の邪悪な部分のひどい醜悪さを有している。この怪物との戦いは、面と向かって全身でぶつかりあうほどのすさまじいものである。番人が志願者に勝てば、志願者はこの恐ろしい怪物の奴隷になってしまう。もし、志願者が勝利してそこを通るならば、ウムブラルの怪物は恐れおののいて逃げて行く。その時、金属音が宇宙に響き渡り、志願者は、“幼子のサロン” に迎え入れられる。われわれはこのことから、秘儀司祭イエス・クリストの次の言葉を思い出す。「もし幼子のようにならなければ、あなたがたは天国に入ることはできない」。幼子のサロンでは、志願者は聖なるマスターたちに手厚く迎え入れられる。そこは、一人の人間がイニシエーションの道に参入したことによる歓喜で満ちている。イニシエイト(幼子)たちのどこの大学でも、その新参者は祝福される。志願者は最初の番人に打ち勝った。この試練はアストラル界で行われる。

ウムブラルの第二の番人

ウムブラルの番人には第二の側面がある。それはメンタルな面である。われわれのマインドは、いまだに人間の状態にはないということを知っておくべきである。それは動物の段階にある。人間は各自の性格に相応する動物の人相をメンタル界に持っているのである。ずる賢い人はメンタル界で実際に狐である。感情の激しい人は、犬や山羊などの姿をしている。

メンタル界でウムブラルの番人に出会う者はアストラル界の場合よりもさらに恐ろしい思いをすることになる。この第二の番人はウムブラル世界の強大な番人である。

第二の番人との戦いは凄まじいものである。志願者はメンタル界において第二の番人を呼び求めるべきである。この番人に先だって、ものすごい電氣的嵐がやって来る。もし、志願者が勝利してそこを通るのなら、多く

の贈り物を与えられ、メンタル界の幼子のサロンに迎え入れられるであろう。もし、敗北すればその恐ろしい怪物の奴隷になってしまう。この怪物に、われわれのメンタル的非行のすべてが擬人化されているのである。

ウムブラルの第三の番人

第三の番人との出会いは、意志界で行われる。これらの三人の番人のうちで最も恐ろしいのは、この邪悪な意志を持つ悪魔である。人々は個人的な意志を行使する。しかし白ロジのマスターたちは、天界におけるように、この地上で聖なる父の意志だけを行う。

志願者が第三の試練に勝利すると、幼子のサロンに新たに迎え入れられる。祝祭はおごそかに行われ、その時の音楽は言葉に言い表せないほど神聖である。

火のサロン

志願者は広大な領域におよぶ番人の三つの基礎的試練を克服すると、今度は火のサロンに入らなければならない。そこでは炎が、志願者の内的乗物を浄化する。

火、空気、水、土の試練

ファラオの統治した古代エジプトでは、物質世界においてこれら四つの試練に勇敢に立ち向かわなければならなかった。現在、志願者は、超感覚的世界においてこれら四つの試練を通過しなければならない。

火の試練

この試練は志願者の平静さと快活さを試すものである。怒る者、怒りっぽい者は、必ずこの試練に失敗する。志願者はしいたげられたり、侮辱されたりするのがわかる。その時、激情に身を負かせて肉体に戻り、完全に失敗する者が多い。勝利者は、幼子のサロンにすばらしい音楽とともに迎え入れられる。それは天球の音楽である。炎は弱い者を震え上がらせる。

空気の試練

何かを無くしたり、だれかを失って絶望する者、貧困を恐れる者、最も大切なものを失うことに耐えられない者は、この空気の試練に失敗する。志願者は、絶望のどん底へ投げ落とされる。弱い者は恐怖のあまり絶叫し、肉体へ戻ってしまう。勝利者は、祝祭と歓待で幼子のサロンに迎え入れられる。

水の試練

水の大試練は、本当に恐ろしいものである。志願者は大洋に投げ出されたら溺れてしまうと信じている。人生のさまざまな社会的状況に対して、適応のしかたを知らない者、貧困の中での生き方を知らない者、人生という海を泳いだ後、戦いを拒絶し死を選ぶ者、これらの者は弱虫であり、必ず水の試練に失敗する。勝利する者は、宇宙的な祝祭をもって、幼子のサロンに迎え入れられる。

土の試練

われわれは最悪の逆境から利益を得ることを学ばなければならない。最悪の逆境が、われわれに最善の機会をもたらしてくれるのである。われわれは逆境にあっても、微笑むことを学ぶべきである。これが法である。

逆境の前に苦しくて負けてしまう者は、土の試練に勝利して通過することはできない。志願者は、高次の世界で、二つの巨大な山が威嚇的に迫ってきて、自分が挟まれるのがわかる。もし恐怖のあまり叫び声をあげれば、肉体に戻ってしまい失敗する。もし冷静でいられるならば、勝利して通過し、絶大なる祝祭と幸福をもって、幼子のサロンに迎え入れられる。

小密儀のイニシエーション

志願者が道への入門である試練のすべてを征服すると、小密儀へ参入する完全な権利を有することになる。小密儀の九つのイニシエーションは一つ一つが奥深い意識に受け入れられる。もし記憶力が良ければ、これらイ

ニシエーションの記憶を肉体へ持ち帰ることができる。記憶力が良くなければ、衰れにも新参者は高次の世界で学んだり、受け取ったりしたことのすべてを、物質世界では無視してしまうことになる。イニシエーションで自分に起こったことを、何一つとして物質界で無視したくないのであれば、記憶力を開発すべきである。緊急に開発すべきである。そして、意識的にアストラル体へと移ることを、緊急に学ぶべきである。緊急に、意識を目覚めさせることが必要である。

小密儀の九つのイニシエーションは、試補（見習い）の道から成っている。小密儀の九つのイニシエーションは、試されるべき弟子たちのためのものである。

アルカーノ A・Z・F を実践している既婚の弟子たちは、これら九つの基礎的イニシエーションをすぐにパスする。弟子が独身で完全に純潔であれば、それよりは遅れるが、やはり九つのイニシエーションを通過する。しかし姦淫者（性エネルギーを消耗する者）は、たった一つのイニシエーションさえも受けられない。

大密儀のイニシエーション

五つの偉大なる大密儀がある。そして七つの蛇が存在する。七つの蛇は、三つずつの二つのグループがあり、そしてわれわれと唯一なる存在（法、即ち聖なる父）とを結びつけている七番目の、火の舌である崇高なる戴冠がある。われわれは火の七つの段階を上昇する必要がある。

第一イニシエーションは、第一の蛇に関するものである。第二イニシエーションは第二の蛇に、第三イニシエーションは第三の蛇に、第四イニシエーションは第四の蛇に、第五イニシエーションは第五の蛇にそれぞれ関係している。（第六イニシエーションはブッディ体、すなわち意識霊、そして第七イニシエーションはアートマン、すなわち人間の魂インティモにそれぞれ関係している）。



龍蓋を持つタイの仏坐像

七つの蛇の神秘は、様々な文明の中に見られる。この写真は七つの蛇を頭上に頂く仏坐像で、タイ、インドなどの仏教圏に広く見られる。七つの蛇とは、言うまでもなく七つのクンダリーニーのことである。これらをすべて上昇させた者が、仏になることを示している。

大密儀の第一イニシエーション

第一の蛇は肉体に対応している。肉体の脊髄の経路を通して第一の蛇を上昇させる必要がある。鼻のねもとの磁場に蛇が到達すると、志願者は大密儀の第一イニシエーションを獲得する。偉大なる白ロジの前に集まる霊と魂は、罪深い体もなく、「我」（エゴ）も全くない。霊と魂は互いを見つめ、愛し、まるで二つの炎が結びついて一つの炎となるように溶けあう。そのようにして聖なる両性具有者が誕生するのである。この両性具有者は支配するための玉座と、祭を司るための寺院とを授かる。われわれはメルキセデックの命によって、自然界の王、自然界の司祭へと自らを変えるべきである。大密儀の第一イニシエーションを受けた者はみな、自然界の四大要素を支配できる炎の剣を授かる。モーゼが砂漠で実践したように、四大要素を支配している蛇を上昇させるために、性の秘儀を精力的に行う必要がある。そして、愛が、イニシエーションの基礎である。われわれは、愛し方を知る必要がある。

蛇を上昇させるための戦いは、大変困難なものである。蛇はゆっくりと段階的に上昇させるべきである。三十三個の脊椎骨がある。すなわち三十三の段階がある。その脊椎骨の一つ一つにおいて、われわれに恐ろしい陰湿な攻撃が加えられる。クンダリーニは心臓（ハート）の美德に従って、きわめてゆっくりと上昇する。そのためにわれわれは、すべての罪を終わらせなければならない。

絶対的な神聖化の道を歩むことは、緊急を要する。動物的情欲を排除した性の秘儀を実践することが、不可欠である。われわれは欲望だけではなく、まさに欲望の影すら抹殺してしまわなければならない。そして、レモンのように（エゴのない状態に）ならなければならない。性行為は真正の宗教的儀式へと変えられなければならない。また、嫉妬心を排除すべきである。われを忘れてしまうような嫉妬心は、家庭の平和を終わらせてしまうということを理解すべきである。

大密儀の第二イニシエーション

エーテル体の脊髄の経路を通して第二の蛇を上昇させることは大変むずかしいことである。第二の蛇が鼻のねもとの磁場に到達すると、イニシエ

イトは大密儀の第二イニシエーションを授かるための寺院に入る。その時、人間的パーソナリティが、その寺院に入らないように注意することが必要である。パーソナリティはカルマの神々との取り決めをするため、入口のところにとどまるのである。

寺院の中では魂がエーテル体といっしょに十字架にかけられる。すなわち、魂が十字架にかけられるためにエーテル体という衣を着るのである。そのようにして、エーテル体がクリスト化される。第二イニシエーションにおいて、魂のウェディングドレスである黄金の霊体、すなわちソマ・プチコン（Soma Puchicon）が誕生する。この乗物は二つの高位のエーテルから成っている。エーテル体には四つのエーテルがあり、そのうち二つは高位の、残り二つは下位のものである。われわれは魂のウェディングドレスを着て、エーテル界のあらゆる領域に浸透することができるのである。

このイニシエーションは大変困難なものである。学徒は厳しく試される。もし勝利して通過するのなら、“真夜中の太陽”が輝き、そこから中央に目がある五芒星が降りて来る。この星は新参者を認めるために、彼の頭上にとどまる。この勝利という結果こそ、イニシエーションなのである。

大密儀の第三イニシエーション

第三の蛇はアストラル体の脊髄の経路を通して上昇する。第三の蛇を鼻のねもとの磁場のところまで上昇させ、次にそこから七つの神聖な部屋へと続く秘密の通路を通して、心臓まで降ろすべきである。

第三の蛇が心臓まで到達すると、最も美しい子、すなわちアストラル・クリストが誕生する。これらすべてがイニシエーションである。新参者はアストラル体を着て、クリストの受難のドラマをすべて体験しなければならない。新参者は十字架にかけられ、死して墓に入り、さらに復活しなければならない。そして昇天する前に、奈落に落ちて、そこに40日間留まらなければならないのである。

第三イニシエーションの至高なる儀式は、アストラル・クリストを着て授かる。祭壇の上方には、われわれにイニシエーションを授けるために、日々の長老であるサナット・クマラが現れる。

大密儀の第三イニシエーションを勝ち得た者はすべて、聖霊を授かる。このイニシエーションを達成するためには、女性の愛し方を知る必要があ

る。性的結びつきは、大いなる愛で満たされていなければならない。女性の生殖器を傷つけないように、きわめておだやかに男根を子宮へ挿入しなければならない。肉欲を完全に排除して、互いに口づけをかわし、言葉をかわし、愛撫をかわすべきである。動物的情欲は、イニシエーションによって大きな障害となる。

多くの清教徒たちはこれらの文章を読んで、われわれのことをふしだらであると考えたろう。それにもかかわらず、彼らは売春宿や売春婦を非難することさえしない。清教徒たちはわれわれを侮辱するが、売春婦に善法を説教するために、売春婦たちの地区へ足を運ぶことすらできない。清教徒たちはわれわれを嫌うが、自らの罪を嫌うことはできないでいる。清教徒たちは、われわれが性に関する宗教を教えるので、われわれを非難するが、自らの姦淫（性エネルギーの消耗）については非難できないでいる。人間性とは、そのようなものである。

大密儀の第四イニシエーション

第四の蛇がメンタル体の脊髄の経路を通して上昇すると、大密儀の第四イニシエーションに至る。そして第四の蛇は眉間に至り、心臓まで降りていく。

メンタル界においてサナット・クマラが、志願者にいつも次のように言って歓迎する。「あなたは、罪に満ちた四つの体から自らを解放した。あなたはブッダである。あなたは、神々の世界に参入した。あなたはブッダである。罪深き四つの体から自らを解放する者は誰でも、ブッダである。あなたはブッダである。あなたはブッダである」。

このイニシエーションの宇宙的祝祭は壮大である。全世界、全宇宙が幸福の振動で震え、次のように言う。「あなたは新しいブッダとして誕生した」。聖なる母クンダリニーが自分の子を寺院に連れて行き、このように言う。「これはわが最愛の子である。これぞ新しいブッダである。これぞ新しいブッダである」。聖なる乙女が、その志願者に神聖な口づけで祝福を与える。その祝祭はきわめて神聖なものである。マインドの偉大なるマスターたちが、メンタル体の霊の中から最も美しい子メンタル・クリストを抽出する。これが大密儀の第四イニシエーションで誕生するものである。大密儀の第四イニシエーションに達した者はすべて、ニルヴァーナ（涅槃）

を勝ち取る。ニルヴァーナとは神聖な神々の世界である。第四イニシエーションに到達する者は誰でも、マインドの皇帝の球体を授かる。そしてこの球体の上には十字の印が輝いている。

このイニシエーションにおいてマインドは十字架にかけられ、聖痕を生じなければならない。メンタル界では“宇宙的火”が輝いている。マインドの三十三の段階の一つ一つが、われわれに畏るべき真実を教えてくれるのである。

大密儀の第五イニシエーション

第五の蛇は、われわれが具現した霊の胚芽の脊髄経路を通して上昇する。第五の蛇は眉間に至り、心臓まで降りなくてはならない。

偉大なる第五イニシエーションにおいて、意識の目覚めた意志体が誕生する。意識の目覚めた意志界に生まれる者はみな、必然的に霊を具現するのである。霊を具現する者はみな、自らを霊を有する真人へと変換する。真に不滅で完全なる人が真のマスターであり、大密儀の第五イニシエーション以前には、誰もマスターという称号で呼ばれるべきではない。

第五イニシエーションにおいて、われわれは聖なる父の意志を行使することを学ぶ。われわれは聖なる父に従うことを学ばなければならないのである。これが法である。

第五イニシエーションでは、われわれは次の二つの道のうち、どちらを取るか決めなければならない。一つはニルヴァーナに残って、何ら制限のない、神聖な空間の、無限なる特権を享受するという道であり、もう一つはその絶大なる特権を放棄して、哀れにも苦しみ悶えている人類を救済するために、この涙の谷にとどまって住むという道である。後者の道は長く辛い務めである。人類への愛のためにニルヴァーナを放棄する者は、後に金星のイニシエーションを勝ち取る。

金星のイニシエーションを授かった者はみな、内なるクリストを具現する。しかしニルヴァーナの世界では、クリストをまだ具現していない何百万のブッダが存在している。人類への愛のためにニルヴァーナを放棄し、クリストを具現するという特権を授かるほうが望ましいことである。クリストとなった真人は、超涅槃的幸福の世界に参入して、後に「絶対」に入るのである。

完全なる結婚

宇宙的自己実現への道は、完全なる結婚の道である。偉大なるイニシエイトであり、ヒューマニストであるヴィクトル・ユーゴーは次のように述べている。原文から引用しよう。

男と女

男はあらゆる生物の中で最も高尚であり、女はあらゆる理想のうちで最も崇高である。神は男のために王座を、女のために祭壇を造った。王座は男の意気を高め、祭壇は女を神聖化する。男は脳であり、女は心である。脳は光を造り、心は愛を生ずる。光が生じ、愛が甦る。男は理性ゆえに強く、女は涙ゆえに無敵である。理性はわれわれを納得させ、涙はわれわれを動かす。男はあらゆる英雄的行為を行うことができ、女はあらゆる受難に打ち勝つことができる。英雄的行為はわれわれを高潔にし、受難はわれわれを崇高にする。男は支配権を持っており、女は選択権を持っている。支配権は力を意味し、選択権は正義を意味する。男は天才であり、女は天使である。その天才は無限であり、その天使には限界がない。男が熱望するのは崇高な栄光であり、女が熱望するのは優れた美德である。栄光はあらゆる偉大なものを創造し、美德はあらゆる神聖なものを創造する。男は法であり、女は福音である。法は正義を行い、福音は完全無欠にする。男は思考し、女は夢想する。思考とは脳の中に幼虫を持つことであり、夢想とは額に光輪を持つことである。男は大洋であり、女は湖である。大洋は真珠で飾られ、湖は詩でまぶしく輝いている。男は空を飛ぶ鷲であり、女は歌うナイチンゲールである。空を飛ぶということは空間を支配することであり、歌うということは霊を征服するということである。男は寺院であり、女は拝殿である。われわれは寺院の前で自分自身を発見し、拝殿の前にひざまずく。最後に男は地の果てにおかれ、女は空の始まるところにおかれる。

これらの崇高な文章は、偉大なヒューマニストであるヴィクトル・ユーゴーのものであるが、それはわれわれを完全なる結婚の道へと招く。

愛に祝福あれ！ 互いに敬愛しあうカップルに祝福あれ！

蛇の栄養

すべてのイニシエイトの道は、蛇を基礎にしている。この蛇は特別な宇宙的栄養を必要とし、その栄養として五つの基本的要素が知られている。哲学的な土の精、賢い水の精、火の精、空気の精、そしてエーテルの精である。これらエレメントの中に自然界の精霊が住んでいる。ノームが哲学的な土の世界に、オンディーンが水の世界に、シルフォが空気に住んでいる。

ノームは偉大なる山脈の峡谷で働いている。偉大なる山脈とは脊髄のことである。ノームが実現する仕事は、パーソナリティという鉛を、魂の金に変換することである。

第一物質は精液である。尾骨のチャクラの中に実験室のかまどがある。水とは精液のことであり、精液の蒸気が上昇して脳という蒸留器へ到達する。その通り道である背骨は、マントラの共鳴する弦であり、“偉大なる煙突”を構成している。ノームの行うこれらすべての仕事は、錬金術である。金属の質的変換がイニシエーションの基礎であり、第一物質は哲学的金に変換されなければならない。

ノームはサラマンダーの火とオンディーンの水を必要とする。またノームは生きた空気を必要とし、精液の蒸気を内側へ上昇させる推進力を得るために、メンタル界のシルフォとも仲が良い。その結果、鉛から金への変換がなされる。イニシエイトのオーラが純金であれば、その仕事は完璧になされたことになる。

土の領域は足先から膝までで、そのマントラはL Aである。水の領域は膝から肛門の間で、そのマントラはV Aである。火の領域は肛門から心臓の間で、そのマントラはR Aである。空気の領域は心臓から眉間の間までで、その基本的マントラはY Aである。エーテルの領域は眉間から頭頂に広がっており、そのマントラはH Aである。

火の蛇はこれら五大要素によって栄養を与えられる。このことから、なぜ新参者が土、水、火、空気の試練をパスしなければならないかが理解できるであろう。これらの自然界の精と関連する浄化と神聖化によって蛇に栄養が与えられ、蛇が背骨の神聖な山脈を通して上昇することができるようになる。これら四つの精の浄化と神聖化なくして蛇が上昇することは不可能である。

ブラフマ(Brahma)とは土の神、ナラヤーナ(Narayana)とは水の神、ルドラ(Rudra)とは火の神、イシュアラ(Ishwara)とは空気の神、スダシヴァ(Sudashiva)とはエーテルの神のことである。

五大要素

エレメント	精 霊	体の部位	マントラ	インドの神
土	ノーム	足先から膝	LA	ブラフマ
水	オンディーン	膝から肛門	VA	ナラヤーナ
火	サラマンダー	肛門から心臓	RA	ルドラ
空気	シルフォ	心臓から眉間	YA	イシュアラ
エーテル	プンタ	眉間から頭頂	HA	スダシヴァ

これらの言語に絶する神々を瞑想することで、われわれは生命体の車輪、あるいは円盤であるチャクラを目覚めさせるために、神々の援助が得られるようになる。火の出現を準備するという目的のために、そのような磁気的中枢を振動させることは良いことである。瞑想してそれぞれのエレメントのマントラを発音しなさい。これらのエレメントの神々にあなたがたの意識を集中して、チャクラの覚醒のための援助を頼みなさい。このようにして、あなたがたは実践的神秘主義者へと変わっていくのである。

第三ロゴスの実験室

地球には九つの層があり、第九の球体に第三ロゴスの実験室がある。実際に地球の第九番目の層はまさに惑星の中心にある。神聖な「8」がそこにある。これは無限(∞)を表す聖なるシンボルである。このシンボルの中に、惑星地球の天才の脳とハートと性が表現されている。この天才の名

はチャムガム(Chamgam)という。神聖な「8」の中央がハートに対応し、高位の極と下位の極がそれぞれ脳と性に対応する。これを基礎として、地球上のあらゆる生物が形作られる。その戦いは恐ろしいものである。脳の性に対する戦い。性の脳に対する戦い。そしてさらに凄まじく、最も重大で痛ましいのはハートとハートの戦いである。

神聖な蛇が地球の中心で、正確には第九球体でとぐろを巻いている。蛇は七重の構造をしており、その七つの火の一つ一つが人間の七つの蛇にそれぞれ対応している。

第三ロゴスの創造エネルギーは、多様で複雑なあらゆる形態をとりつつ、地球の化学元素を精巧に作り上げている。この創造エネルギーが地球の中心から退く時、われわれの世界は死んだものとなる。このようにして世界が死ぬのである。

人間の蛇の火は、地球の蛇の火から湧き出てくる。その畏るべき蛇は、神秘的な巣の中で深い眠りにについている。その巣は、奇妙な空洞の球形で、中国製のパズルに似ている。これは繊細なアストラルの同心球である。ちょうど地球には、九つの同心球があって、これらのあらゆる基礎が畏るべき蛇であるように、人間にもまた、九つの同心球がある。なぜなら人間はマクロコスモスのマイクロコスモスだからである。

人間は宇宙の縮図である。無限小は無限大に類似している。水素(H)、炭素(C)、窒素(N)、酸素(O)は四つの基礎的要素であり、それらを用いて第三ロゴスは仕事をやる。化学元素はその原子量に従って並べられる。最も軽い元素は水素であり、その原子量は1である。そして最も重い元素として知られているウラン(原子量 238.5)で終わる。

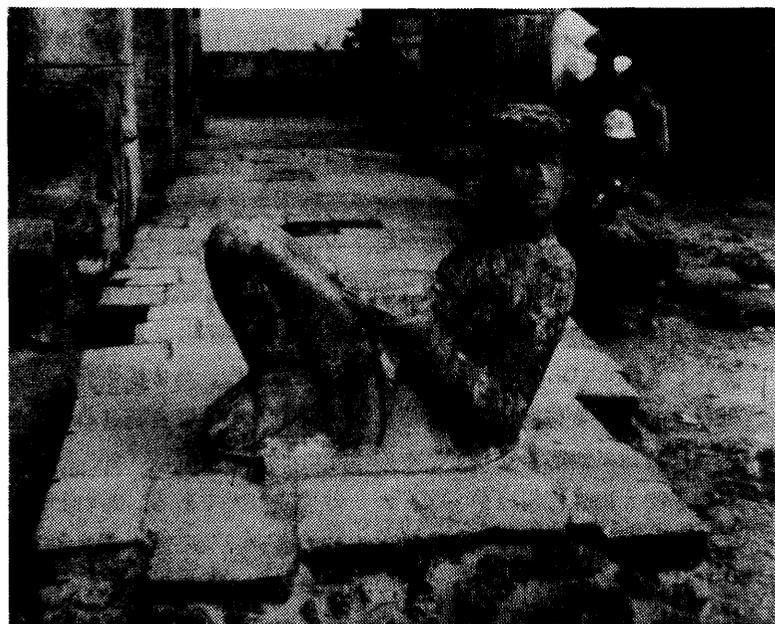
電子は魂と物質をつなぐ橋を構成するものである。水素は最も希薄な元素として知られ、それは蛇の最初の顕現である。あらゆる元素、あらゆる栄養、あらゆる有機体は、水素から一定のタイプに合成される。性エネルギーはH12に対応していて、その音階はシである。

電子的太陽の質料はクンダリーニーの神聖な火である。われわれがこのエネルギーを解放する時、真正のイニシエーションの道へ参入する。

チャックモール

メキシコのアステカ文明のチャックモール (Chac Mool) は驚くべきものである。実際にチャックモールは存在していた。彼は霊を具現したアデプトであり、古代メキシコや偉大なるテノチティトランの力強い蛇の文明の偉大なイニシエイトの一人であった。

チャックモールの墓が発見され、その遺跡もまた発見された。このようにチャックモールが実在したことは何ら疑う余地がない。もしチャックモールの姿を見たなら、エジプトのイニシエイトたちが幽体離脱をした時に F A - R A - O N と発音しながら、横たわっていた姿と同じであることがわかるであろう。また、チャックモールのへそのあたりに何か好奇心をそえられるようなものが見られる。それはまるで大きな鉢か、何かを入れる容器のようなものである。実際にその太陽神経叢は驚くべきものであり、チャックモールは人類に偉大な教を残しているのである。



メキシコの子チェン・イツァにあるマヤ神殿（戦士の神殿）の正面最上部にあるチャックモール。

われわれの魔力を持つ火の蛇クンダリニーは、へそのあたりに太陽エネルギーの偉大な保管場所を持っている。それは太陽神経叢のチャクラである。この磁気的中枢は、イニシエーションにおいて大変重要である。なぜならそこで、光輝く十の光線に細分される原初のエネルギーを受け取るからである。この原初のエネルギーは第二の神経チャンネルを通して循環し、チャクラに活力と栄養を与えている。太陽神経叢は太陽に統治されている。もし、学徒が文字通り完全に活気で満ちた、客観的透視力を望むのであれば、太陽エネルギーを太陽神経叢から額の中枢にまで上昇させなければならない。

マントラの“SUI-RA”は、太陽エネルギーを太陽神経叢から取り出して、額の中枢まで上昇させるための鍵である。SUIIII・RAAAA と発音する。これを毎日一時間行くと、その結果はポジティブな形で額のチャクラを目覚めさせることになるだろう。もし、太陽の力をどのチャクラのために必要とするならば、“SUE-RA”のマントラを発音するとよい。SUEEE・RAAAA と発音する。もし、太陽エネルギーを心臓の蓮の花のために必要とするならば、“SUO-RA”のマントラを発音するとよい。SUOOO・RAAAA。この偉大なる“SUO-RA”によってあらゆるものが取り戻される。ヴェーダやサストラによれば、このマントラによって沈黙のガンダルヴァ（天界の音楽）が見出されるという。われわれは太陽神経叢に蓄えられた太陽エネルギーの使い方を知る必要がある。

イニシエーションを志願する者は両足をベッドにつけ、ひざを立て、背中をつけておお向けに横たわることがよい（チャックモールの姿勢を見よ）。チャックモールは両足を床につけ、ひざを浮かしたままで空の方、ウラニアの方を向いているのがはっきりとわかる。この姿勢をとる志願者は、太陽神経叢を通して浸透してきた太陽エネルギーが自分を振動させ、さらにそれが太陽神経叢に向かって時計回り（右回り）に、左から右に回るように想像すべきである。このエクササイズを毎日一時間行わなければならない。この磁気センターの基本マントラは、“U”という母音である。この母音はUUUUと長く伸ばして発音する。よく目覚めた太陽神経叢は、驚くばかりに有機体のあらゆるチャクラに生命力を吹き込む。このようにしてわれわれは、イニシエーションのための準備をするのである。

チャックモールは、蛇の文明のメキシコにおいて崇拝されていた。二つの戦士階級の者たちが彼を崇拝した。大行列をなしてチャックモールはア

ステカの寺院の中へ運ばれ、多くの人々から崇められた。また彼に対して、地上に雨を降らせてくれるようにという祈りも捧げられた。この偉大なるマスターは、祈り求める者を援助する。人々はチャックモールの姿をしたお守りを携帯したり、メダルや小さな彫物にして、首から下げたりした。

蛇の文明

蛇の文明の神秘を持つ荘厳な寺院では、真正のイニシエーションが授けられた。蛇の文明だけが真の文明である。人類の文明において先駆的役割を果たしてきた、われわれの愛すべき兄弟である神智学徒、バラ十字会のメンバー、錬金術のヨギ、心霊主義者たちは、古びた偏見と恐れを捨て一致協力して、新しい蛇の文明を創造する必要がある。誤って「近代文明」と呼ばれている現代の文明は、今や崩れ去ろうとしている。世界は混沌の中で闘っており、もし世界を救いたいと心から願うのであれば、「蛇の文明」を造るため結集しなければならない。これが水瓶座の文明である。これまでのすべてが、失われようとしている。われわれは命がけで崇高な努力によって、世界を救わなければならない。

ノーシスの宇宙的運動はセクト（宗派）主義ではない。ノーシス運動は、あらゆる精神主義の学派、あらゆる結社や宗教やセクトの人々による世界の救世軍から成っている。

公開的サークルと秘教的サークル

人類は二つのサークルに分かれて発展している。公開的エクソテリックなものエクソテリックと秘教的なものである。公開的とは大衆的であるという意味である。秘教的とは秘密であるという意味である。公開的サークルには一般大衆が属している。秘教的サークルには偉大なる白ロッジのアデプトたちがいる。大衆的サークルに属する人々を助けることが、イニシエイトの兄弟たち全員の義務である。多くの人々を白ロッジの秘教的サークルに導くことが必要である。

イニシエイトへの道は、真の意識革命の道である。この革命は、はっきりと定義できる三つの側面を持っている。第一に生まれること。第二に死ぬこと。第三に人類への献身、すなわち人類のために命を捧げること、人々に秘教の道を普及するために戦うということである。

「生まれること」は、完全に性に関する問題である。「死ぬこと」は、「我」(エゴ)の根絶という仕事である。「人類への献身」とは愛である。公開的サークルには、何千もの学派、著作、宗派、矛盾、学説などが属している。これは最強の者だけが抜け出すことのできる迷路である。それらすべての学派はまさに有益なものであり、その中にわれわれは真理の種子を見出すことができる。あらゆる宗教は神聖であり、かつ必要である。秘教の道は、しかしながら、最強の者しか発見することができない道である。インフラセクシュアルな人々（性的退廃者）は、死ぬほどこの道を嫌っている。第三ログスよりも、自分たちのほうが完全であると考えている彼らには、やいばの刃先のような秘教の道を発見することはできないであろう。秘教の道とは性である。この細く狭い困難な道を通して、われわれは秘教的サークルに到達する。神聖なる神の王国、偉大なる王国へ。

チャクラと神経叢

イニシエーションを志す者は、チャクラと神経叢の位置を十分明確に知っておかなければならない。

根のチャクラは、脊柱の基底部（第四仙骨）にあり、尾てい骨の神経叢と関係している。

脾臓のチャクラは、脾臓の上（第一腰椎）にあり、脾臓神経叢と関係している。またこのセンターは太陽神経叢に従属している。しかしわれわれは、真の第二中枢は脾臓神経叢ではなく、前立腺の神経叢にあるということを知らなければならない。

へそのチャクラは、へその上（第八胸椎）にあり、太陽神経叢と関係している。

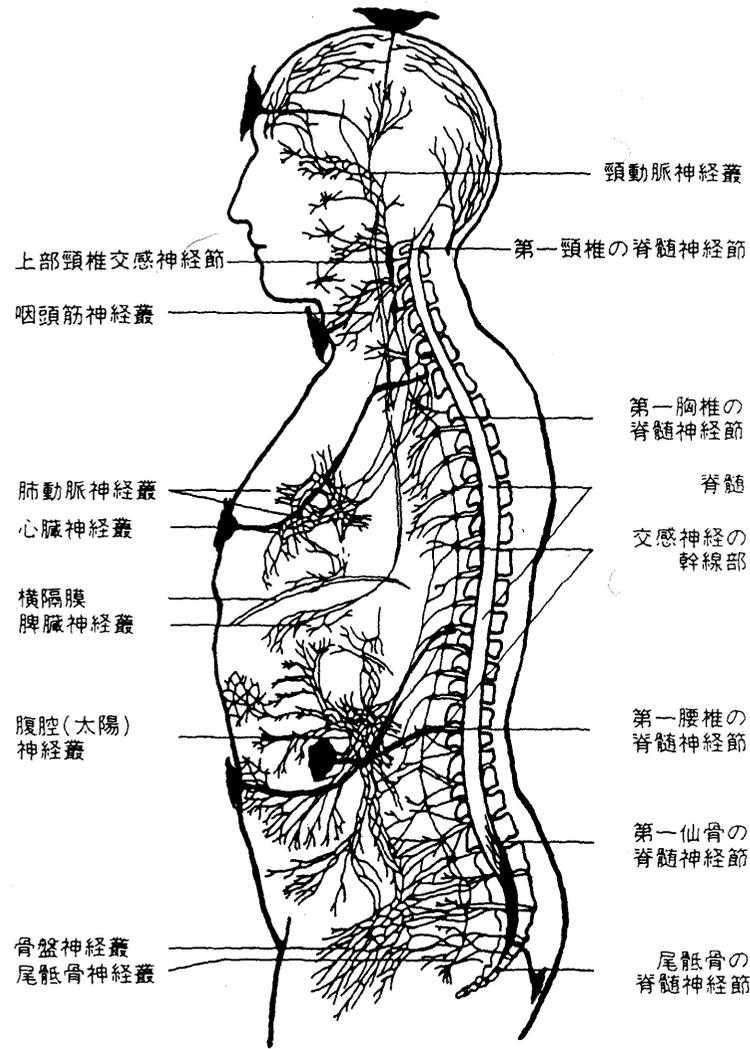
心臓のチャクラは、心臓の上（第八頸椎）にあり、心臓神経叢と関係している。

のどのチャクラは、のどのすぐ上の甲状腺（第三頸椎）にあり、咽喉神経叢と関係している。

眉間のチャクラは、眉間の上（第一頸椎）にあり、頸動脈神経叢と関係している。

チャクラと神経叢とは、神経の糸でつながっているということを緊急に理解する必要がある。脊髄を通して蛇が上昇すると、脊椎骨の各チャクラ

は活動状態となり、それに感応して各神経叢が活動状態となる。チャクラは脳脊髄神経系にあり、神経叢は交感神経系にある。



チャクラと神経系

チャクラと神経叢

チャクラの名前	体の表面上の位置	脊髄にあるチャクラの位置	関係する交感神経叢	関係する内分泌腺
根	尾てい骨	第四仙骨	尾てい骨神経叢	副腎
脾臓	脾臓	第一腰椎	脾臓神経叢	なし
臍	臍	第八胸椎	太陽神経叢	脾臓
心臓	心臓	第八頸椎	心臓神経叢	胸腺
咽喉	咽喉	第三頸椎	咽頭神経叢	甲状腺
眉間	眉間	第一頸椎	頸動脈神経叢	脳下垂体
王冠	頭頂	位置せず	関係せず	松果腺

蛇が脊髄経路に沿って上昇するに従って、次々に脊椎骨のチャクラである各教会を完全な活動状態にする。これらのチャクラは後に電気誘導によって、そのチャクラに対応する交感神経叢を振動させる。脊椎骨の各チャクラと各神経叢とは、魔力を秘めた火の蛇が七重であるように、内的に七重構造となっていることを一刻も早く知らなければならない。

第一の蛇は物質界のチャクラを開く。第二の蛇はエーテル界のチャクラを、第三の蛇はアストラル界のチャクラを、第四の蛇はメンタル界のチャクラを、第五の蛇はコーザル界のチャクラをそれぞれ開く。そして第六の蛇はブディ界のチャクラを、第七の蛇は魂の世界のチャクラをそれぞれ開く。このプロセスは神経叢のプロセスと同じである。なぜならば、チャクラという教会は、多数の神経の枝で神経叢とつながっているからである。イニシエイトたる者は諦めるべきではない。なぜならば、第一の蛇でアストラル体のチャクラを開くことはないからである。アストラル体のチャク

ラは第三の蛇によってのみ開かれる。第一の蛇は魂の対である肉体を開くだけである。魂とは肉体の対であるということを心に留めておかなければならない。

明白にすべきこと

イニシエーションは金銭で買うことのできるものではなく、また文書によって許されるものでもない。イニシエーションは売ったり買ったりするものではない。イニシエーションとは、あなたがたの命そのものであり、寺院の祝祭が伴うものである。

イニシエーションを売る詐欺師たちすべてと、距離を置くことが必要である。書状にてイニシエーションを与えるようなあらゆる人々から、緊急に離れなければならない。

イニシエーションとは非常に奥深く、大いなる秘密であり、きわめて神聖なものである。

「私は実に多くのイニシエーションと位階を持っている」と言う人々を避けなさい。「私は大密儀のマスターである。私は大変多くのイニシエーションを獲得した」と言う人々から離れなさい。

親愛なる読者よ。「我」やパーソナリティはイニシエーションを受けない、ということをおぼえておきなさい。

イニシエーションとは、魂の問題である。意識の問題、すなわち霊に関する繊細な問題なのである。これらの事柄はまわりの人々に言いふらすべきことではない。真のアデプトは、「私は白ロジのマスターである」「私は何々の階級にある」「私は大変多くのイニシエーションを持っている」「私はこのような力を持っている」などと言うことは決してない。

内的な光明という問題

多くの神秘学の学徒たちは、内的な光明を求めて長年に渡る研究や、秘教的プラクティスを続けているにもかかわらず、最初の（神秘学の）本を読んで以来、盲目のまま意識が目覚めないのが大変苦しむ。われわれ寺院の兄弟たちは自らの経験を通して、心臓のチャクラだけが、内的な光明を得ることができるということを知っている。『シヴァ・サミタ』という偉大なヒンズー教の本には、ヨギが心の平安を保ち、心臓のチャクラについ

て瞑想することの恩恵がわかり易く述べられている。「ヨギはとてつもない知識を獲得し、過去、現在、未来を知るようになる。ヨギは超聴覚や超視覚を得、望む所ならどこへでも空中を通過して行くことができる。ヨギはアデプトやヨギの女神たちに会う。そして、ケチャリ（空中移動）とブッチャリ（世界中どこへでも意のままに行く）という能力を手中にする」。

意のままに幽体離脱する方法を学びたい人、肉体を持ったまま四次元へ入ったり、世界中どこへでも飛行機なしで肉体を移動させるためのヒーナスの科学に参入したい人、すぐにでも超視覚や超聴覚を必要とする人、そのような人々は毎日自分のマインドを心臓のチャクラに集中し、この驚くべき中枢について深く瞑想すべきである。毎日一時間、この中枢について瞑想するならば、驚くべき成果がもたらされる。このチャクラのマントラは母音の“O”である。O O O O Oのように伸ばして発音する。

ここに示したプラクティスを行っている間中、われわれはクリストに祈り、そして心臓のチャクラを目覚めさせてくれるよう懇願すべきである。

五つの偉大なるイニシエーションの要約

第一イニシエーション。魂と意識^{インテイク}（ブッディ体）が溶けあって、新しいイニシエイトを形作る。そしてもう一度流れの中に入る。

第二イニシエーション。ソマ・プチコン（黄金の霊体）と呼ばれるエーテル体が誕生する。

第三イニシエーション。アストラル体のチャクラが開き、美しさに満ちた子アストラル・クリストが誕生する。

第四イニシエーション。たいへん貴重な子メンタル・クリストが誕生する。イニシエイトは新しいブダとして誕生する。

第五イニシエーション。人間的霊とコーザル体（意志体）とが、アートマン・ブッディ（魂と意識）である内的マスターとともに融合される。このようにして三つの炎は一つとなる。これが白ロジの大密儀の新しい正統なマスターである。第五イニシエーションに到達した者は誰でも、ニルヴァーナ（涅槃）に入ることができる。そしてコーザル界に生まれ、霊を具現するのである。第五イニシエーションに到達する者だけが、霊を持った人、すなわち真の人間である。

火の乗物

真正で正統なアストラル体、メンタル体、コーザル体の乗物は、性の秘儀によって生まれる。男女の結びつきの間、夫婦のオーラが完全に開かれるのは明白なことである。その後、われわれの最も奥深いところで、驚くべき霊の生成が実現される。最終的結果として、われわれの真正のアストラル体の誕生が、そして時期を経て、順次ほかの体が生まれていくのである。

忍耐と粘り強さ

能力というものは遊びごとで得られるものではない。それは多大な忍耐の問題である。成果を求めてあちこち探しまわる人々や、数ヶ月のプラクティスの後にすぐにも顕れを求め気まぐれな人々は、実際のところ神秘主義に対する準備がまだできていない。このような人々は時機尚早であり、神秘主義の研究には向いていない。また、未熟でもある。彼らには、期が熟すまでである宗教に入って、少しの間待つように助言する。やいばの刃先のように鋭く狭い道を歩き通すには、聖ヨブの忍耐が必要とされる。この道を歩き通すためには、鋼のように粘り強い沈着さが必要なのである。

意識ある信仰

疑いに満ちた人々が実践的神秘主義に参入するのなら、完全に失敗する。われわれの教えを疑う人々は、「やいばの刃先の道」に対する準備ができていないのである。このような人々は、まず、どのような宗教でもよいかから加入して、意識ある信仰とは太陽のような強大な力を持つものである、という「偉大なる現実」を求めてみるのが最善である。彼らが意識ある信仰に到達して、その持つ力を手中にしたその時こそ、狭くて細い困難な道に参入するための準備ができたことになる。疑いを持つ神秘主義者は間違いになってしまう。信ずるといふことは、驚くべき太陽の力なのである。

宗教と学派

世界中のあらゆる宗教や精神主義学派の存在は大いに必要であり、「知識の入口」に入るための控え間として役立っている。これらの学派や宗教は、世の中にとって欠くべからざるものであり、彼らに敵対するような発言をしてはならない。これらの学派や宗教で、われわれは精神的な最初の光を受け取るのである。重大なことは、宗教を持たない人々がいるということであり、それらの人々が精神的研究に身を捧げている人々を迫害するということである。実際に、宗教を持たない人々は、怪物のようである。

人類のそれぞれのグループは、その学校、宗教、教派、指導者などを必要とする。人類のグループはそれぞれ異なっているために、いろいろな学派と宗教が必要である。

イニシエーションの道を歩き通す者はみな、他人の信条をどのように尊重したらよいかを知るべきである。

慈 悲

完全なる結婚の道を歩き通す者はみな、慈悲深さを開発すべきである。残忍で冷酷な人はこの道を進むことはできない。どのように愛したらよいかを学び、そしていかなる時でも、他の人々のために自分の血の最後の一滴までも与えられるようにならなければならない。慈悲の心は、心のすべての扉を開き、マインドに太陽信仰をもたらす。慈悲とは意識ある愛であり、慈悲の火はハートのチャクラを開発する。慈悲の火によって、性的蛇が脊髄の経路を通して、すみやかに上昇することが許される。「やいばの刃先の道」を急いで前進したいのであれば、精力的に性の秘儀を実践し、偉大なる宇宙的慈悲に完全に身を委ねるべきである。このようにして、後に続く者たちのためにすべて自分を犠牲にし、自分の血と人生を与える者は、急速にクリスト化していくのである。

心霊(サイキス)の開発

あらゆる感覚は、心霊における要素の変化である。自然界の六つの基本的次元と人間の六つの基本的次元のそれぞれに感覚が存在している。そし

て、それらすべての感覚に、心霊^{サイキック}の要素の変化が伴う。

経験された感覚は、常にわれわれの記憶の中に痕跡を残す。われわれには二つのタイプの記憶がある。精神的記憶と動物的記憶である。精神的記憶は高次元で経験した感覚の記憶を保存し、動物的記憶は肉体的感覚の記憶を保存する。そして感覚の記憶は、知覚を構成するのである。

すべての肉体的知覚と心霊的知覚は、実際に感覚の記憶である。

感覚の記憶は、連合するものと連合しないもの、引きつけあうものと反発しあうものというように、いくつかのグループにまとめられる。

感覚は明確な二つの流れに分けられる。一つは感覚の性質に従うもの、もう一つは感覚を受け入れる時間に従うものである。

様々な感覚が集合して一つの原因を形成し、それが外的に投影される。その時、われわれは「この木は緑色である。高い。低い。いい匂いがする。いやな匂いがする」などと言う。アストラル界やメンタル界での知覚の時には、「この物体、あるいはこの主題には、そのような性質がある。そのような色がある」などと言う。この場合、感覚の集合は内的であり、その投影もまた内的であり、四次元、五次元、六次元などに属する。われわれは肉体的器官で肉体的知覚をし、心霊的器官で心霊的知覚をする。同じように、われわれの知覚には肉体的感覚と心霊的感覚がある。イニシエーションの道を歩き通す者はみな、この心霊的感覚を開発しなければならない。

概念はいつも知覚の記憶によって形成される。この理由から、宗教の偉大な創始者であるアデプトから発せられた概念は、彼らの心霊的知覚の超越的記憶に負うところが大きいのである。

知覚の形成は、言葉を形作り、さらに言語の出現へと導く。また内的知覚の形成は、マントラの言語を形作り、さらにアデプトや天使によって話される黄金の言語の出現へと導く。

概念がなければ言語は存在できない。そして知覚がなければ概念は存在できない。何の知覚もなく、内的世界についての思考を押しつける人々は、たとえ善意であるにしても、実際に偽りを与えてしまうことになる。

心霊生活の基本的レベルでは、感覚の多くは金切り声、叫び声、音などとして表現される。これらは喜び、恐怖、快感、痛みを明らかにするものである。これらは物質的世界で起こり、そしてまた内的世界でも起こる。

言葉の出現は意識における変化を表すものである。この理由から、弟子が普遍的宇宙言語で話し始める時、意識における変化が起こる。蛇の普遍

的な火と転生するエゴの消滅だけが、そのような変化を引き起こすことができるのである。

概念と言葉とは同一の本質を持つものである。概念は内的であり、言葉は外的である。このことはあらゆるレベルの意識、あらゆる宇宙の次元で同様である。理念とは単なる抽象的概念である。理念とは非常に広い概念であり、精神的原型の世界に属するものである。物質世界に存在するあらゆるものは、精神的原型の写しである。イニシエイトは三昧の間、アストラル・トリップあるいは超アストラル・トリップで精神的原型の世界を訪問することができる。

超常感覚と超常感情の神秘的内容は、通常の言葉では表現できない。言葉はそれらを暗示し、それらを指し示すことができるだけである。実際、大自然の直観芸術だけが、これらの最高の超常感情を明らかにすることができる。あらゆる蛇の文明では、直観芸術が知られていた。エジプトやメキシコのピラミッド、千年スフィンクス、古代の一枚岩、神聖文字、神々の彫刻などは、イニシエイトの意識と耳だけに話しかける直観芸術の秘密の証言である。イニシエイトは、この直観芸術を神秘的エクスタシーのうちに学びとるのである。

空間の性質は、われわれの感受性によって変化する。このことはわれわれがチャクラを開発して、なじみの三次元空間のかわりに四次元空間のすべてを知覚できるようになった時、はじめて証明されるであろう。

心霊的器官が変われば、世界の性質も変わる。チャクラの開発によって、イニシエイトは世界の変化を体験する。われわれはチャクラの開発によって、マインドから知覚の主観的要素を排除することができるのである。主観は、真実性を持たない。客観こそ、精神的であり真実である。

内的訓練を通してチャクラを目覚めさせると、心霊的特質が増大する。心霊的領域の異変によって、同時進行している物質世界の知覚の変化が被い隠されてしまう。新しさは感じられるが、古い知覚と新しい知覚との科学的相違を論理的に明確な形で見分けられないのならば、そのイニシエイトは能力不足から概念の完全な平衡を失う結果となる。それゆえ、イニシエイトたちの秘教的教理が正確にその目的を果たすため、早急に概念の平衡を達成する必要がある。意識の変革は、秘教的訓練の真の目的である。

われわれは宇宙意識を必要とする。それは宇宙意識を感ずることである。宇宙意識とは宇宙の生命であり、秩序である。

宇宙意識は、新しいタイプの^{インテレクトゥアリズム}の主知主義を生み出す。それは光明を得たインテレクトであり、超人の特質である。意識には三つのタイプがあり、第一に単純意識、第二に個別的自己意識、そして第三に宇宙意識である。第一の意識は動物が持っているものであり、第二の意識は人間と呼ばれる知的動物が持っているものである。第三の意識は神々のものである。人間の宇宙意識が生まれる時、人間は内的にはまるで蛇の火に食い尽くされるように感ずる。梵天の光彩のきらめきが人間のマインドと意識に浸透し、その瞬間から、イニシエイトは新しい高次の理念の秩序を持つようになるのである。梵天の歎喜には^{フラフフ}ニルヴァーナ（涅槃）の芳香がある。

イニシエイトが梵天の火によって照らされる時、秘教的人類のグループに仲間入りする。このグループの中に、われわれは言葉に表せないほど神聖な家族を見出す。その家族は^{フラフフ}アヴァターラ（神々の化身）、預言者、そして、神々として世界中に知られている長老の秘儀司祭たちから成っている。これらの名の知れた家族のメンバーは、進化したすべての人種の中に見出される。彼らは仏教、道教、キリスト教、スーフィー教などの創始者である。実際には、これらの人々は少数であるが、数少ないにもかかわらず、人類の真の指導者、^{ホカ}長である。

宇宙意識には開発の段階が無限にある。新しく誕生したイニシエイトの宇宙意識は天使の宇宙意識より段階が下であり、天使の宇宙意識は大天使の宇宙意識ほど発達してはいない。このように宇宙意識はいくつもの段階がある。これが「ヤコブの階段」なのである。

神聖な浄化がなければ、宇宙意識の達成は不可能であり、愛がなければ、神聖な浄化を獲得できない。愛は、神聖な浄化の道である。最も崇高な愛の表現が、性の秘儀の中に見出される。性の秘儀の間、男と女は唯一の両性具有者となる。それはきわめて神聖なものである。

性の秘儀は、^{フラフフ}梵天の光彩を授かるために必要なすべての内的条件を提供し、志願者に宇宙意識誕生のために必要なあらゆる火の要素を与える。

宇宙意識の出現のためには、特別な洗練が必要である。それは宇宙意識に親和する要素の育成と、反発する要素の排除である。

宇宙意識を授かるために準備された人々の最も特徴的なことは、この世界をマヤ（幻影）として見ているということである。彼らはちょうど、人々が目で見ると同じように、この世界を知覚することができる。しかし、それは単なる幻影にすぎず、彼らはその幻影の向こうにある偉大なる^{リアリティ}現実、

精神性、真理を探求する。宇宙意識を誕生させるためには、精神的、内面的なものに完全に身を委ねなければならない。

性の秘儀は、イニシエイトに^{フラフフ}梵天の光彩と宇宙意識の誕生を得るために必要とされるすべての可能性を提供してくれる。緊急に内的瞑想と神聖な浄化の結びついた性の秘儀が必要である。このようにして、われわれは梵天の光彩を授かるための準備をするのである。

実際に、天使は完全なる人である。人として完全なる段階に達した者はみな、天使へと変わる。天使が人より劣っていると考える者は、真実を曲げてとらえている。もし人としての完璧な段階を得ていなければ、それ以前では誰一人として、天使の段階に達することはできない。もし霊を再生していなければ、それ以前では誰一人として完全なる人の段階に達することはできないのである。これは性に関する問題である。真の人だけが天使として生まれる。真の人の内にのみ、宇宙意識が生まれるのである。

【メルキセデック (Melchizedek)】 グノーシス派のキリスト教徒が、イエス・ Kristusより偉大な神として信じた救世主。

【サナット・クマラ】 第12章注参照。

【ウラン】 現在、最も重い元素として知られているのはローレンシウム（原子番号103、原子量260）である。

【テノチティラン】 第23章注参照。

【サストラ (Sastra)】 ヒンズー教の聖典（シュルティ、スムルティ、プラーナ、タントラの四群よりなる）。宗教生活をはじめ、法律、医学、建築、芸術等の諸分野を網羅している。

【ウラニア (Urania)】 “天上界のもの”の意で、天の女王としてのアフロディーテの添え名。

【聖ヨブ】 ヘブライの族長。神への信仰が厚く、あらゆる苦難に耐えた忍苦、堅忍の典型。旧約聖書「ヨブ記」参照。

【ヤコブの階段】 族長の一人ヤコブが、夢の中で見た階段のこと。それによりヤコブは、神を確信するようになった。一つの階段が地の上に立ち、その頂きは天に達し、天使たちが上り下りしていた（創世記第28章10-22）。

第二十章

復活と生まれ変わり

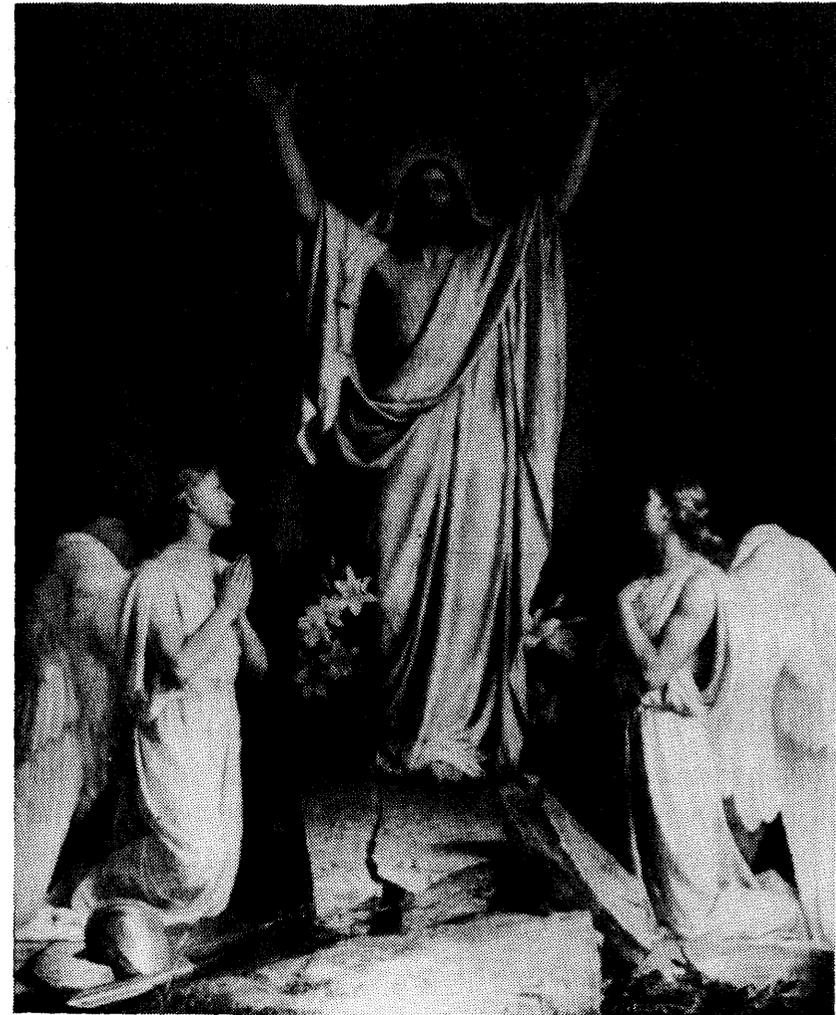
互いに愛しあう二人は、神々のように不滅になることができる。命の木の甘味な果実をすでに食べることができた者は幸せである。愛すべき兄弟たちよ、エデンの園には、根を共有しているこの上もなくすばらしい二本の木があるということを知りなさい。一つは知識の木であり、もう一つは生命の木である。最初の木はあなたがたに智恵を与え、二番目の木はあなたがたを不滅の存在にする。

「偉大なる作業」^{グランドワーク}に働くすべての者は、生命の木の甘味な果実を食べる権利を持っている。実際に、愛は至高の知識である。

「完全なる結婚」の道歩き通す男と女は、最終的にニルヴァーナ（涅槃）に入る権利を勝ち取る。それは世界と人々のことを、永遠に忘却してしまうことを意味している。ニルヴァーナの幸福感は言葉で表現できるものではない。そこでは、すべての涙が永久に忘れ去られている。霊は、罪に汚れた四つの体を持たず、天球の音楽の無限の幸福感に浸っている。ニルヴァーナは、神聖な星々に満ちている空間である。

慈悲深いマスターたちは、人類の苦しみに心動かされて、ニルヴァーナの大いなる幸福を放棄し、大いなる苦痛に満ちたこの谷にわれわれと一緒にとどまることを決意された。完全なる結婚を実践する者はみな、必ずアダプトにまで到達する。またすべてのアダプトは、多数の孤児たちへの愛ゆえに、ニルヴァーナを捨てることができる。アダプトがニルヴァーナの至高の幸福を放棄する時、長寿の妙薬^{エリキサー}を求めることができる。そのすばらしい妙薬を授かる特権を持つ者は、死ぬがそれは死んだのではない。三日にして復活するからである。このことはすでに「崇敬すべき人」によって示されたことである。三日目には墓の前に、特別の薬とかぐわしい軟膏を持つ神聖な女たちに伴われて、アダプトがやって来る。また死の天使たち^{ヒエラルキー}や神聖な天使の一群もアダプトに付き添う。

アダプトは、神聖な墓の中に眠っている自分の肉体を呼び出すために、大きな声で叫ぶ。その肉体は起き上がり、実在している超空間を利用して墓から抜け出すことができるのである。



復活したイエス・クリスト

高次の世界で、アデプトの肉体は、神聖な女たちによって薬が与えられ、かぐわしい香油が塗られる。肉体が生き返った後、高次の命令によって、彼は霊のマスターである「恒星の長」に浸透する。そのようにして彼は、栄光の肉体をたずさえて戻って来るのである。これがキューピットの尊い贈物である。

復活した体はすべて、高次の世界で平穩に暮らしている。しかしわれわれは、次のことを明らかにしたい。復活したマスターたちは、どこの場所でも自分の体を目で見え、手で触れるようにすることができるということを、そしてそこから一瞬にして姿を消すこともできるということ。ちょうど良い例として、カリオストロ伯爵のことが思い浮かんだ。この偉大なマスターは、ヨーロッパにおける政治的使命を果たし、人類に衝撃を与えた。この偉大なマスターこそ、実際にヨーロッパの王たちの没落を引き起こした人物なのである。事実、共和制は彼に負うところが大きい。彼はイエス・クリストの時代に生きたこともあった。またクレオパトラとも個人的に親しく、カトリーヌ・ド・メディチのために働いたこともあった。彼はヨーロッパで様々な時代に有名であった。ホセ・バルサモとか、カリオストロ伯爵などのいろいろな名前を使っていた。

インドでは、現在でもインドのヨギ・クリストである不死なるババジが生きている。このマスターは、恐ろしい闇の時代に生きた偉大なマスターたちの指導者であった。それにもかかわらず、この崇高な長老は二十五歳の若者のように見える。

ザノニー伯爵が千歳であるにもかかわらず、若々しいということを出してみよう。不幸なことにこのカルデア人は、ナポリから来た女優と恋に陥ったために、完全に失敗してしまった。彼はその女性と性交して、ヘルメスの杯をこぼすという間違いを犯したのである。その結果は恐ろしいことになった。フランス革命で、ザノニー伯爵は断頭台の露と消えてしまった。

復活したマスターは超空間を使って、ある場所から他の場所へ移動する。これは超幾何学によって証明することができる。天体物理学が近いうちに超空間の存在を発見するであろう。

復活したマスターは、ある国での使命を終えると、死を通過する贅沢を楽しむこともある。三日後に彼らは再び復活して、違う名前でも働くために別の国へ行く。このようにして、カリオストロ伯爵は死んでから二年後、

彼の仕事を続けるために異なった名前を使って他の都市に現れたのである。

完全なる結婚は、われわれを神々へと変える。偉大なるものは、愛の恩恵である。実際に愛だけが、われわれに不死性を授けてくれる。愛に祝福あれ。互いに崇めあう者たちに祝福あれ。

復活と生まれ変わり

神秘主義を学ぶ者の多くは、復活と、生まれ変わりとを混同してしまう。福音書は神秘主義を学ぶ者たちによって、いつも間違っ理解されてきた。復活にいろいろなタイプがあるように、生まれ変わりにもいろいろなタイプがある。われわれがこの章で明らかにしたいのはこのことである。

真のアデプトはみな、天国の体を持っている。この体は肉と骨からできている。しかし、この肉体はアダムに由来するものではない。天国の体は、物質的有機体の最も良質の原子によって、精巧に作られているのである。

多くのアデプトは、死んでから高次の世界にこの天国の体を持って復活する。復活したマスターは、この天国の体で物質世界を訪れ、自分の体を意のままに、目で見え、手で触れるようにすることができる。これが言語に絶した神聖なる復活である。死すべき運命にあるアダムの肉体での復活は、この涙の谷に戻ることで、大変辛いものである。しかしそれゆえに、たいへん栄光あるものであると断言できる。番人の壁(The Guardian Wall)を造るという秘密の道のアデプトはみな、アダムの肉体で復活したことがある。

秘伝的復活もある。火の第三イニシエーションはアストラル界での復活を意味するものである。火の第三イニシエーションを通過する者はみな、アストラル界でクリストのドラマ(受難、死、復活)を生きなければならぬ。

パーソナリティの生まれ変わり

パーソナリティとは時間である。パーソナリティはそれ自身の時間に生き、生まれ変わることはない。人が死ぬとパーソナリティも墓へ行く。パーソナリティにとって未来というものはないのである。パーソナリティは墓地の中をさまよって生きるか、あるいは墓の中にもぐるしかない。それはアストラル体でもないし、エーテル^{ダブ}複体でもない。また霊でもない。そ

れは時間である。それはエネルギーであり、非常にゆっくりと崩壊していくものである。パーソナリティは決して生まれ変わることはできない。決して生まれ変わることはない人間のパーソナリティには、何の未来もないのである。

何が生き続け、何が生まれ変わるのか、それは霊でもない。なぜなら人間はいまだに霊を持たないからである。実際に生まれ変わるものは、エゴ「我」であり、それが生まれ変わりの主役なのである。死人の幽霊、その思い、その記憶、その間違いなどが生き続けるのである。

寿 命

あらゆる生物の命の単位は、心臓の一つ一つの鼓動と同じである。生きとし生けるものすべては有限の寿命を持っている。惑星の寿命は27億拍から成る。これと同じ拍数が、蟻、虫、鷺、微生物、人間そしてすべての生物全般に対応している。それぞれの世界の寿命と、それぞれの生物の寿命は相対的に同じである。世界の鼓動は、27,000年ごとであるが、昆虫の心臓の鼓動はもっと速いことは明らかである。夏の一夜しか生きられない昆虫も、惑星と同じ心臓の鼓動数を経験する。ただその鼓動が非常に速いだけなのである。

学識はあるが無知で愚かな者が信じているように、時間は直線的なものではない。時間とは閉じた曲線であり、永遠とは別のものなのである。永遠は時間とは全く関係がない。また、時間と永遠の両方を超越するものがある。それは光明を得たアデプトや人類のマスターたちだけによって知られている。

三つの知られている次元と、三つの未知の次元とが存在する。全部で六つの基本的な次元がある。三つの知られている次元とは、縦、横、高さである。三つの未知の次元とは、時間と永遠とそれら二つを超越したものである。これが六つの曲線のらせんである。

時間は四次元に属する。永遠は五次元に属する。時間と永遠の両方を超越したものが六次元に属する。

パーソナリティは閉じられた時間という曲線の中に生きている。それは時間の娘であり、時間とともに終わる。時間というものは生まれ変わることはできない。人間のパーソナリティにとって、いかなる未来も存在しな

いのである。

時間の輪は永遠の輪の中で回転している。永遠の中には時間はないが、時間は永遠の輪の中で回転する。蛇はいつでも自分の尾を噛んでいる。時間とパーソナリティには終わりがあるが、回転する輪により、地上に新しい時間と新しいパーソナリティが現れる。エゴは生まれ変わり、すべてが繰り返される。人生の最期の実感、感情、心配事、愛着、言葉などが原因になって、すべての性的感覚とすべての恋のドラマが新しい肉体を造るのである。既婚者と恋人のロマンスは、前世での死の間際の最後の苦しみと関係していることがわかる。「生命の道は、死という馬のひずめの跡でつくられるものである」。死によって時間が閉じられ、永遠が開かれる。永遠の輪ははじめは開いているが、エゴが時間の輪の中に戻って来た時に閉じられるのである。

再 現

第四の道のイニシエイトにとって再現とは、行為と場面と事件とが繰り返されることである。

すべてのことは繰り返される。再現の法則は、本当に恐ろしい現実である。すべての生まれ変わりにおいて、同じ出来事が繰り返されるのである。出来事の繰り返しはそれに応じたカルマに伴って起こる。これが原因に対する結果を調整する法則である。実際にすべての繰り返しによってカルマが、時にはグルマ（ほうび）がもたらされるのである。

偉大なる秘儀グランドワークの仕事を行う者、すなわち完全なる結婚という細くて狭い困難な道を歩き通す者はみな、再現の法則から少しずつ解放されていく。この法則には限界がある。その限界を超えると、われわれは天使か悪魔に自分を変える。白の性の秘儀によって、われわれは天使に変わる。黒の性魔術によって、われわれは悪魔に変わるのである。

パーソナリティという問題

時間の娘であり、時間とともに死ぬパーソナリティというこの問題は、たいへん重要である。実際、もしパーソナリティが生まれ変わるなら、時間もまた生まれ変わることになる。このことは、時間とは閉じた曲線であ

るから明らかに矛盾したことになる。もしローマ人が、シーザーの時代のパーソナリティを持ってこの二十世紀の現代に生まれ変わったとしたら、きっと耐えられないことになるだろう。彼の社会習慣が、決してわれわれの今日の習慣と相容れないために、彼を犯罪者として扱わなければならないだろう。

エゴの帰還

イエスは手にした鞭で寺院から商人たちを追い払った。このことは、死と恐怖という恐ろしい現実を意味している。われわれはいつも「我」が複数であると言ってきた。「我」すなわちエゴは、悪魔の軍団である。多くの読者はこの主張を好まないであろうが、それは真実であり、たとえ好まれないとしても、われわれは真実を述べなければならない。

悪魔との仕事、すなわちエゴ（我）の一部、人間以下の存在たちを根絶するという仕事の間に、われわれの意識と生命の一部を所有している存在たちが除去され、内的寺院から吐き出されて来る。時々これらの存在たちは、動物の体に生まれ変わることがある。動物園でよく起きることだが、自分自身の中から捨てたエゴの形態が動物の体の中で生きているという事実、何とたびたび出くわすことであろうか。すべてが動物的な人は、その動物的なものを取り除いたら、実際何も残らない。このようなタイプの人々は絶望的なケースである。再現の法則は、これらの人々にとっては終わっている。生まれ変わりの法則も、これらの人々にとっては終わりである。この種類の人々は、動物の肉体へ生まれ変わるか、さもなければ最終的に奈落へ行くことになる。そこでゆっくりと崩壊し始めるのである。

復活の利点

人類への愛のためにニルヴァーナを放棄する人はみな、自分の肉体を何百万年もの間保存することができる。復活がなければ、アデプトは自分の体を絶えず変えることを余儀なくされるであろう。これは明らかに不便なことである。復活があれば、アデプトは自分の体を絶えず変える必要はなくなるのである。彼は何百万年もの間、自分の乗物を保存できる。

復活したアデプトの体は完全に变化する。体の内にある霊も完全に变化

し、アデプトが完全に「霊」そのものとなるまで、「霊」へと変換していくのである。

復活した体は内的世界に基本的位置を持っている。それは内的世界に在って、意志によって物質世界でも見えるようにするのである。このようにして、復活したマスターはどこにでも意のままに瞬時に現れたり消えたりできる。誰も彼を逮捕したり、監禁したりすることはできない。彼はアストラル界をどこにでも旅できるのである。

復活したアデプトにとって最も興味あることは、大いなる跳躍である。時期が来れば、復活したマスターは別の天体へ自分の体を運ぶことができる。自分の体で別の天体に住むことができるのである。これが大きな利点の一つである。

すべての復活したマスターは、アストラル界のものを物質界へ運んで、それを目に見え、手で触れるようにすることができる。このことはマスターが物質的に姿を現しても、アストラル界にその基本的位置があることから説明できる。謎のカリオストロ伯爵はバスチーユ監獄から抜け出してから、友人を宴会に招いた。宴会が最高に盛り上がったところで彼は、すでに故人となった多くの天才を呼び出したのである。天才たちは、驚いている客人の前でテーブルについた。

他の場合、カリオストロ伯爵はまるで魔法でも使ったかのように、食事中の客のすべての陶食器を、高価な金の食器に変えてしまった。また力のあるカリオストロ伯爵は、鉛を黄金に変えたり、炭素に命を吹き込んで最良質の純粋なダイヤモンドを作ったりした。

すべての復活したマスターたちの力は、本当にすばらしいものである。私の偉大な友で、大いなるタタール地方にいまに暮らしている復活したマスターは、次のように言った。「人は地球を飲み込む以前には、愚者以外の何者でもない。人は多くを知っていると信じているが、何も知ってはいない。人は地球を飲み込んだ時にのみ、善なる存在となる。それ以前では人は何も知らない」。彼はまた、こうも言った。「マスターたちは性により墮落する」。それについてはザノニー伯爵のことが思い出される。彼は射撃した時に落ちてしまったのである。ザノニー伯爵は復活したマスターであったが、ナポリから来た女優と恋に陥り、墮落してしまった。彼はフランス革命の時、断頭台の上で死んでしまったのである。

復活を達成したいと望む者はみな、完全なる結婚の道をたどらねばなら

ない。別の道はない。性の秘儀によってのみ、われわれは復活に達することができるのである。

性の秘儀によってのみ、われわれ自身を積極的にしかも超越的に「転生の輪」から解放することができるのである。

霊の喪失

これまでの章で、われわれは人間がいまだに霊を具現していないと言ってきた。性の秘儀によってのみ、われわれは内的乗物を創ることができるのである。これらの乗物は精液システムの中にあって、植物の種子や硬い穀粒と同じように、暗い穴の中に潜み眠っているのである。人間がクリスティックな乗物を持った時、霊を具現することができる。硬い穀粒との仕事をしない者、すなわち性の秘儀を実践しない者は誰も、クリスティックな体を発生させることはできない。クリスティックな体を持たない者はみな、霊を具現することはできないばかりか、霊を失い、長い間奈落へ沈んで、そこでゆっくりと崩壊していくのである。偉大なマスター・イエスがこう言われた。「もし人間が、世界を手に入れたとしても霊を失うとしたら、いったい何の利益があるのか。霊を失ったことに対して償い得るどんな償いがあるのか」。

霊を具現しない者はそれを失う。クリスティックな乗物を持たない者は、霊を具現することはできない。硬い穀粒との仕事をしない者は、クリスティックな乗物を手に入れることはないのである。性の秘儀を働かない者は、穀粒との仕事をやっていない。死からの復活は、霊を持った人にのみできることである。実際、霊を持った人とは、言葉の完全なる意味において、完全な人である。真の人間だけが偉大な復活に到達できるのである。霊を持った人だけが十三番目のアルカーノの葬儀の試練に耐えることができる。これらの試練は、死よりもさらに恐ろしいものである。

霊を持たない者は人間の素描であり、死人の幽霊である。ただそれだけである。霊を持たない人間の乗物は、幻影の乗物であり、本物の火の乗物ではない。事実、霊のない人間は真の人間ではない。実際のところ、人間はいまだに自己実現を達成してはいない。霊を持っている人はきわめて少ない。人間と呼ばれている存在の大多数は、いまだに霊を持っていないのである。もし霊を失うとしたら、世界のあらゆる富を集めることができた

としても、それが何の役に立つというのであろうか。

死からの復活とは、霊を持った人だけがなし得るのである。まさに不死性とは、霊を持った人にのみ当てはまることである。

愛と死

多くの読者にとって、われわれが死と復活とを愛に関連づけるのは不思議に思うであろう。ヒンズー教の神話では、愛と死とは同一神の二つの側面である。シヴァ神は創造する性の普遍的な力の神であると同時に、激烈な死と破壊の神でもある。シヴァ神の妻も二つの側面を持っている。彼女はパルヴァティであると同時にカーリーでもある。パルヴァティとしては、至高の美、愛、幸福の神である。カーリー（ドゥルガー）としては、死、不幸、悲痛の神なのである。

シヴァとカーリーは、ともに知識の木を象徴している。善の科学と悪の科学の木である。



踊るシヴァ神

愛と死は、決して離れることのない双子の兄弟である。生命の道は死という馬の足跡によって形作られる。多くの宗派や学派は、一方に偏りすぎるために間違いを犯してしまうのである。彼らは死を研究するが、愛を研究したいとは思わない。またその逆であったりする。実際にこれらは同一神の二つの側面なのである。

東洋や西洋の種々の教義は、愛について知っていると思っているが、実際は何も知らない。愛とは宇宙的規模の現象であり、その中に地球や人類の歴史すべてが、単なる出来事として含まれているのである。

愛とは、秘密に満ちた神秘的な磁気的力である。それは錬金術師が、賢者の石と復活のために必要不可欠な、長寿の^{エリキク}妙薬を作るために必要とするものである。

愛とは「我」が決して従属させることのできない力である。なぜならサタンは決して神を服従させることはできないからである。

学識はあるが無知で愚かな者は、愛の源泉について誤った考えを持っている。愚かな人々は愛の結果についても、誤った考えを持っている。愛の唯一の目的が、種の繁殖であると考えるのはばかげたことである。実際、物質主義的貪欲者は、愛が開花し成長する非常に異なったレベルの世界を、徹底的に無視するのである。ほんのわずかな愛の力だけでも、種を永続させるために役立っているのである。残りの愛の力によって何が起こるのか、それはどこへ行くのか、それはどこで花開くのか、学識はあるが無知で愚かな者は、それらのことを知らない。

愛とはエネルギーであり、それは失われることはない。その余剰エネルギーには、人々が知らない他の使い道と結末がある。

愛の余剰エネルギーは、思考、感情、意志と密接に関係している。そして性エネルギーなしには、これらの機能は開花できないのである。その創造エネルギーは、美、思考、感情、調和、詩、芸術、知識などへと変換される。創造エネルギーの最終的変換は、意識の目覚めとイニシエイトの死と復活をもたらすものである。

実際に人類のあらゆる創造的活動は、愛の驚嘆すべき力より生じる。愛は、人間の神秘的なパワーを目覚めさせる驚嘆すべき力である。愛がなければ、死からの復活も不可能となってしまうのである。

愛の神秘的祝祭をあらためて祝うために、もう一度、愛の寺院を開けることが緊急に必要である。愛の魔法だけが、火の蛇を目覚めさせることが

できる。もしわれわれが死からの復活を望むのであれば、まず最初にその蛇に喰われる必要がある。火の蛇に喰われるいない人は、何の価値もない。

もし「言葉」が、われわれの内でも肉となることを望むのなら、熱心に性の秘儀を実践する必要がある。「言葉」は性の内にある。リングとヨニはあらゆる力の源である。

テオティワカンの蛇の神殿

われわれは最初に杖の上まで蛇を上昇させ、次にその蛇に飲み込まれる必要がある。このようにしてわれわれは蛇になるのである。インドでは、アデプトはナーガ、すなわち蛇と呼ばれる。またメキシコのテオティワカンには、すばらしい蛇の神殿がある。火の蛇だけが、死の中から甦ることができるのである。



テオティワカンの蛇の神殿

二次元的心理学を持った二次元世界の住人は、その世界のレベルで起きるすべての現象は、その世界の中にその現象の原因と結果があり、その誕生と死があると信じている。彼らにとって、似た現象は、同じようなものなのである。三次元世界から到来するあらゆる現象は、これらの二次元世界の生物には、二次元世界の事実としてしか捕えられない。彼らにとっては、二次元世界しか存在しないのであるから、三次元世界について話されても、それを受け入れることはできないであろう。しかし、もしこれらの生物が二次元世界のあらゆる現象の原因を深く理解するために、彼らの二次元世界の心理学を捨てようと決心すれば、その世界から出て、大きな未知の世界（三次元世界）を驚きを持って発見するであろう。同じようなことが愛という問題についても起きる。人々は、愛とはただ種を永続させるためだけのものであると信じている。人々は、愛とは卑俗なもの、肉欲的快楽、激しい欲望、満足などに過ぎないと信じ込んでいる。これらの動物的情欲を乗り越えて理解することのできる者だけが、そしてこの種の動物的心理学を放棄する者だけが、別の次元の世界において、愛と呼ばれる偉大にして荘厳なるものを発見することができるのである。人々は眠りこけている。人々は眠るように生きている。愛の夢を見ているが、愛に目覚めることはない。人々は愛を歌い、愛とは夢に見たそれだと信じている。人が愛に目覚めた時、愛を意識し、夢を見ていたことに気がつく。その時、まさにその時にのみ、人は愛の真の意味を発見するのである。その時にのみ、夢見ていたものが何であるのかを発見し、愛と呼ばれるものが何であるかを理解するのである。この目覚めは、肉体の外にいる間にアストラル体で経験する意識の目覚めと似ている。アストラル体にいる人は、夢を見ながら歩く。人は自分が夢を見ているということを悟る時、次のように言う。「これは夢だ。私は夢を見ている。私はアストラル体の中にいる。肉体の外に出ているのだ」。すると夢は魔法のように消え失せ、その時アストラル界に目覚めたまま一人残る。すばらしい新世界が、目覚めた人の前に現れる。意識が目覚めたのである。今、彼は自然のすばらしさをすべて知ることができるのである。このようにして、愛の目覚めも起きる。目覚める以前は、愛について夢見ている。われわれはこれらの夢を現実のものと思いついて信じている。そして愛していると信じている。情熱、ロマンス、何か快いもの、幻滅、見かけだけの誓い、肉欲、嫉妬などの世界に住んでいて、これが愛であると信じている。われわれは夢を見ていて、そしてその

ことを顧みないのである。

死からの復活は、愛がなければ不可能である。なぜなら、愛と死とは同一神の二つの側面だからである。復活を達成するには、愛を目覚めさせることが必要である。

四次元、五次元、六次元の世界での愛の意義を発見するためには、緊急にわれわれの三次元的心理学と低俗なる事柄を放棄しなければならない。

愛は高次元から来る。三次元的心理学を捨てないのならば、誰一人として愛の真実の意味を発見することはできない。なぜなら、愛の起源は三次元世界にはないからである。もし平面的生物が、二次元世界の心理学を放棄しないのであれば、唯一の宇宙の実在とは一つの平面上の線と、線の色の変化であるなどと信じるであろう。平面の生物は、線といくつかの線の色の変化が、多くの色の光線の車輪、多分、馬車の車輪が回転している結果であることを知らない。二次元世界の生物は、そのような馬車があるということさえ知らないし、また二次元世界の心理学ではそのような馬車を信じることはできないであろう。それが高次元の原因による結果にすぎないということを知らなければ、自分の世界に見える線と色の変化を信じるだけなのである。このようなことはまた、愛とは三次元世界のことだけであると信じ込んでいる人々にもあてはまる。彼らは、愛の真の意味を粗末な事実として受け入れるだけである。このような人々は、火の蛇に喰われることはできない。死の中から復活することもできない。

すべての詩人、すべての恋人たちは愛の歌を歌っているが、誰一人として、いわゆる愛と呼ばれるものを本当に知らない。人々は愛と呼ばれるものを夢見ているだけである。人々は愛に目覚めてはいない。

【カリオストロ伯爵】 謎の多い人物であるが、かなりの権力を持つ伯爵であった。現在はヒーナスの状態で見守っている。復活、不死、治療のマスター。

【カトリーヌ・ド・メディチ(Catherine de Medicis)】 1518～1589。フランス王アンリⅡ世の妃。

【ザノニー伯爵】 復活のマスターであったが、ヘルメスの杯をこぼしたためにギロチンで死ぬ運命となってしまった。彼は、また黄金の霊体を再生するために、肉体を持って生まれてこなければならない。

第二十一章

第九球体

歴史上、われわれに引き継がれてきた偉大な古代文明の中において、第九球体へ降りることは、秘儀司祭にとって最大の試練であった。ヘルメス、仏陀、イエス、ダンテ、ゾロアスター、その他数多くの偉大なるマスターたちは、この困難な試練を通らなければならなかった。

真に愛すべき弟子たちよ、第九球体とは「性」であることを覚えておきなさい。第九球体へ参入する者は多いが、その困難な試練に勝利して出ていく者はきわめて少ない。ほとんどの神秘主義の学徒は、ある学派から他の学派へ、あるロッジから他のロッジへと蝶のように飛び歩いて生きている。好奇心の強い彼らは、常に新奇さを追い求め、街にやって来る新しい講演にすぐとびつく。彼らのうちの一人が、性の秘儀「アルカーノA・Z・F」での仕事を決心する時も、火と水の仕事をするため第九球体へ降りて行こうと決心する時にも、やはりいつもと同じである。常に好奇心に満ちて“捜し回る”だけで、いつも“愚か”である。

神秘主義の学徒は、あらゆることを、ちっぽけな学派やつまらない理論に置き換えてしまう。彼が第九球体へ入るとしても、それは他の取るに足らない学派に入ると同じで、常に愚かで好奇心が強く、馬鹿げた行動をするのである。完全なる結婚の道を通して、真理を熱烈に真剣に求める者を見出すことはむずかしい。時々、非常に円熟していて真剣であるかのように見える学徒が現れるが、しかし結局はまだ、未熟であることがわかる。悲しいことだが、これが人生の現実である。

第九球体の試練は非常に精妙で繊細なものである。医者には信心深い人に性エネルギーを消耗するように勧める。そうしないと病気になってしまうからと言うのである。助産婦は妻に恐れを植えつけ、あらゆる組織の指導者も学徒を脅す。聖人に変装した黒魔術師は、聖人のごとき態度で信心深い学徒に射精するよう助言する。にせの賢者は熱心な学徒に射精するネガティブな性魔術を教える。その教え方というのは、邪悪な者が聖人に変装し、自分の教義に崇高で神秘的な色合いを加えて、帰依者を逸脱させ、「やいばの刃先の道」から遠ざけるように巧妙に操ろうとするものである。そ

のようにして、学徒は黒魔術へと墮落していくのである。

学徒が道からそれる時、自分がノーシスのマスターよりも賢いと信じている。実際に第九球体の失敗者というのは、非常に長くて辛いこの奥義の試練をどうしても通過することのできない人々であり、彼らは本当に恐ろしく邪悪な悪魔へと変わってしまう。最悪なことには、自分が悪いとか邪悪であると信じている悪魔はいないということである。どんな悪魔も自分を聖人か賢者であると信じているのである。

性の秘儀の実践を始めると、有機体はそれをひどく不快に感じる。時には性腺と副甲状腺が興奮状態となり、頭痛がしたり、ある種のめまいを感じたりすることがある。これらの小心で好奇心が強く、“ちっぽけな学派”を次から次へと蝶のように飛び回る人々は、それに恐れをなして逃げ去り、必ず“逃避”のために他の“ちっぽけな学派”を捜し出すのである。そのようにしてこれらのかわいそうな愚か者たちは、何一つ得ることなく死んでしまう。不幸にも、彼らは自分の時間を無駄にしてしまったのである。そして死後、これらの愚か者たちは、悪魔の軍団となって生き続けるのである。

第九球体は、自己実現を熱望する者にとって決定的なものである。霊を具現することなくして、奥深い自己実現は不可能である。アストラル・クリスト、メンタル・クリスト、意志クリストを生み出すことがなければ、誰も霊を具現することはできない。神智学でも内的乗物について語られるが、それは人が深遠なる自己実現を果たそうとする時、必ずや溶解してしまう単なるイメージの産物にすぎない。

われわれは、誕生する必要がある。この生まれるということは今までもまたこれからも、完全に性の問題なのである。われわれは生まれる必要がある、また生まれるために、人は第九球体まで降りて行かなければならない。これが秘儀司祭としての最大の試練である。これは最も困難な試練である。この困難な試練をパスできる者は稀にしかいない。普通は誰もが第九球体で失敗してしまう。

夫婦は互いに深く愛しあうことが必要である。人々は愛と欲望とを混同している。世界中のすべての人々は欲望を愛しているのである。そして本当の愛と欲望とを混同している。霊を具現する人だけが、愛とは何であるかを理解することができる。「我」は愛が何であるかを知らない。「我」が欲望なのである。

霊を具現する者は誰でも、それゆえにブッダである。すべてのブッダは内なるクリストを具現させるために第九球体で働くべきである。第九球体でブッダが生まれる。第九球体でクリストが生まれる。まず最初にわれわれはブッダとして生まれ、次にクリストとして生まれるべきである。

愛に祝福あれ。真に愛しあう者たちに祝福あれ。第九球体から勝利して出てくる人々に祝福あれ。

恐れを広める人々

多くのにせの秘教家たちは無制限な大量虐殺を犯してきた。実際、本当の大量虐殺とは、人々がクングリニーを恐れるように仕向けることである。本や印刷物などを使って、クングリニーを覚醒させることは危険であると吹聴するのは、人類に対するこの上ない罪である。またクングリニーに対して恐れを抱かせるような哲学を流布する者は、戦争の犯罪人よりも悪質である。戦犯者は人間に対して罪を犯したが、クングリニーを恐れさせるように布教するにせの秘教家は、霊に対して罪を犯しているのである。クングリニーを目覚めさせない者は、誰一人として霊を具現することはできない。クングリニーを目覚めさせない者はみな、霊を持たないままであり、結局、自分の霊を失うことになるのである。

道徳的に進歩することなしに、クングリニーを目覚めさせることができるというのは偽りである。それゆえに人は精神的な進歩が実現されるのを待たなければならない。クングリニーの発達には心の美徳によって支配されるからである。われわれはクングリニーに関して具体的な教えを提供するが、すべての真の蛇の文明では、その道が深く理解されてきた。白の性の秘儀を実践すると、クングリニーがあらぬ方向へ向かっていくというのは誤りである。黒の性魔術が実践された時にだけ、クングリニーは人間の原子地獄へと下降し、サタンの尾に変わるのである。それゆえにクングリニーが脊髄の経路を出て組織を裂き、ひどい痛みを生じさせ、場合によっては死に至ることさえある、などという恐怖を煽動する者の馬鹿げた主張は嘘である。「霊の暗殺者」とも言えるこれらの主張は全くの偽りである。なぜならば、七つの蛇の一つ一つに学徒を見守る専門のマスターたちがついているからである。その仕事において学徒は見放されることはない。学徒が第一の蛇を目覚めさせる時、ある専門家が付き添っている。そして第

二の蛇を目覚めさせる時、また別の専門家に助けられる。このようにして次々と別の専門家に助けられるのである。これらの専門家たちは蛇を脊髄の経路を通して導くのである。彼らはアストラル界に在って、すべての学徒を見守っている。

クングリニーは射精された時に、ネガティブに目覚めるだけである。射精をせずに性の秘儀を実践する人は、何ら恐れることはない。

完全に神聖でなければ、誰もクングリニーの高次元的見地を実現することはできない。それゆえに、時機尚早のクングリニーの実現は致命的となる可能性がある、と言うのは間違いである。時機尚早の火の実現ということはあり得ないから、そのような主張は誤りである。

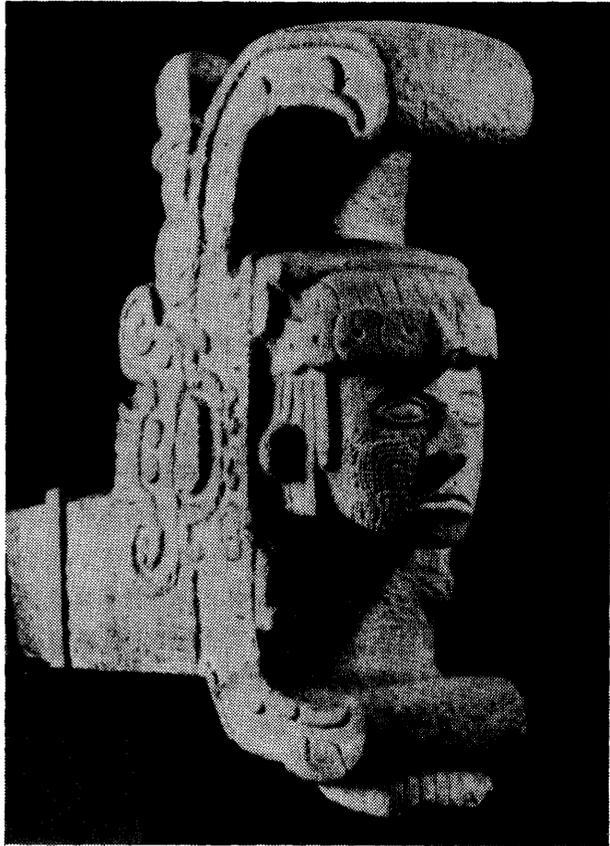
クングリニーは、神聖化という基礎を通してのみ実現されるのである。もしその脊椎骨に、必要とされる神聖さが成就されていないならば、クングリニーは脊椎骨の一つとして上昇することはない。脊椎骨は一つ一つが神聖さの道徳的な条件を持っている。クングリニーが野心や自尊心を目覚めさせるとか、動物的なエゴの持つ動物的情欲などのあらゆる低い性質を強化してしまう、などと言うのはばかばかしい誤りである。学徒を真の道から遠ざけるために、これらの恐怖をかきたてようとする者は、まぎれもなく無知な者である。なぜなら真の神聖化がなければ、正しい白の秘儀によって覚醒したクングリニーは、一つの段階さえも進むことができないからである。

クングリニーは盲目的な力ではない。クングリニーは機械的な力でもない。クングリニーはハートの火によって支配され、性の秘儀と神聖さを基礎としてのみ、開発できる力なのである。

メキシコには蛇の文明が存在している。それは今もなお畏るべきものであるということをわれわれは認識しなければならない。アステカ彫刻の一つ一つは神秘学のすばらしい本である。両手にリングとヨニを持ち、蛇を体に巻きつけたケツァルコアトルをじっと見つめ、エクスタシー（法悦）に至ったこともある。巨大な蛇が魔術師を飲み込んでいるのを見る時、驚きを禁じ得なかった。また首から男根をぶら下げた虎を見て、不思議な崇拜心でいっぱいになったこともある。事実、言葉は男根の中にある。

アステカ文明の中には恐怖をかきたてるものは何もない。どの石の記録も、どの土着の彫刻も、われわれにクングリニーの目覚めを促している。まずクングリニーを目覚めさせ、次にクングリニーに喰われてしまうとい

うことを急がなければならない。蛇に飲み込まれなければならない。クンダリニーに飲み込まれる必要がある。われわれは蛇に喰われなければならないのである。人が蛇に喰われた時、その人自身が蛇になる。そのような「蛇人」だけが、^{ヘビと}クリストを具現できるのである。クリストは蛇なしでは何もできない。



ウシュマルのククルカン

アステカの蛇の神ケツァルコアトルは、マヤではククルカンと呼ばれた。これは、大きく開けた蛇の口からククルカンが出てくるところを表している。われわれは蛇に喰われた時、われわれ自身も蛇ククルカンとなる。

真正のアステカ、マヤ、エジプト、カルデアなどの文明は、性の秘儀とクンダリニーなくしては理解することのできない「蛇の文明」である。

すべての古代文明は蛇に関するものである。すべての正統で真実な文明は蛇に関するものである。蛇の知識のない文明は真の文明ではない。

クンダリニーの上昇と下降

にせの秘教家は、クンダリニーが王冠のチャクラ（千枚の花弁を持つ蓮の花）まで上昇した後、今度はエペソの教会（尾てい骨のセンター）まで降りてそこで用心深く留まると主張する。これはひどい誤りである。クンダリニーは、イニシエイトが自分を墮落させる時にのみ、下降するのである。射精する時、イニシエイトは墮落する。そして墮落した後に上昇させるための仕事は大変困難となる。完全なる主はこう言われた。「墮落した弟子は失ったものを回復するために、後で大変な苦闘をしなければならない。従って弟子たる者は決して墮落すべきではない」と。

ヒンズー教徒が言うところによれば、脊椎の内部にはスシュムナと呼ばれる導管があり、この管の中にさらにヴァジリニと呼ばれる別の導管がある。そしてこの中にチトリニと呼ばれる第三番目の導管がある。「この第三番目の導管は蜘蛛の巣の糸のように細く、その管の中には竹竿の節のような具合にチャクラが縫いつけられている」とインドの神聖な書物では述べられている。われわれは、クンダリニーはマイスナ（性の秘儀）によってのみチトリニ管を通して上昇するということを知っている。

われわれはエクスタシーに達するために内的瞑想を実践するが、クンダリニーは、瞑想によって目覚めるものではないということもよく知っている。なぜならクンダリニーは性的なものだからである。瞑想によってクンダリニーの目覚めを達成することは確かに誤りである。瞑想は情報を受け取るためのテクニックであり、瞑想はクンダリニーを目覚めさせるためのテクニックではない。にせの秘教家は、彼らの無知によって人々に多くの害を及ぼしてきた。

インドには七つのヨガの基本的学派があり、それらのすべての学派でクンダリニーについて語られている。タントラを研究しないヨガの学派は何の役にも立たない。タントラは東洋で最高のものである。秘教ヨガのすべての真正な学派では、マイスナ（性の秘儀）が実践されている。これがタントラである。タントラはヨガに根本的な価値を与えるものである。

心臓の蓮の花の中核にはすばらしい三角形がある。そしてこの三角形は

尾てい骨のチャクラと眉間のチャクラにも存在する。これらのチャクラには神秘的な結び目がそれぞれ一つずつあり、合わせて三つの結び目がある。

ここに述べた結び目には深い意味が込められている。ここに蛇との仕事における三つの基本的な変化がある。最初の結び目（エペソの教会）において、われわれは射精するシステムを放棄する。第二の結び目（テアティラの教会）において、本当に愛することを学ぶ。第三の結び目（フィラデルフィアの教会）において、われわれは真の智慧に至り、超視覚を得るのである。

クンダリーニはその上昇過程で、三つの神秘的な結び目をほどかなければならない。原始ヒンズーヨーギたちは、脊髄のチャクラとクンダリーニにすべての注意を払い、神経叢のエーテルチャクラにはほとんど無関心であった。このことはにせ秘教家を驚かせた。事実、原始ヒンズーヨーギたちはタントリックであり、マイスナを実践した。彼らは蛇の知識を持った真のイニシエイトであった。彼らは、われわれの救いの鍵となるものが、脊髄と精液の中にあることを理解していた。そして目覚めたクンダリーニが脊髄のチャクラを開き、同時にこれらのチャクラが神経叢のチャクラを活動させるということをよく知っていたのである。最も重要なものが、脊髄のチャクラと蛇である。古代の蛇の文明の長老たちや賢者たちはみな、このことをよく理解していた。

根のチャクラ、心臓のチャクラ、眉間のチャクラのそれぞれの三角形の中には、神性が性的リングとして表現されている。これはわれわれに多くのことを教えてくれるが、学識はあるが無知で愚かな者は、いつも逃げ口上を探し、真実を曲げるために弁解する。にせ秘教家が、意識的にせよ、無意識的にせよ、苦痛にあえぐ哀れな人類をだまし続けることは正しくない。われわれは偉大な蛇の文明について深く研究してきた結果、救われた人々は本当に自分を救うことができる、と明確に言うことができる。たとえ、にせの神秘主義者や墮落した性を行う人々が、われわれを最悪の敵であると宣言したとしても、真実を述べるためにわれわれはここにいる。真実を述べよう。真実は語られなければならない。われわれは大いなる喜びをもって真実を述べよう。

三つの結び目の解放のために、クンダリーニと仕事をしなければならぬ。三つの結び目とは、純潔と愛と智慧によってわれわれの人生を変換する三つの三角形のことである。

性的痙攣

白ロッジは性的な痙攣（オルガズム）を絶対的に禁じている。痙攣にまで至るのは愚かなことである。性の秘儀を実践する者は、決して痙攣に達するべきではない。痙攣の快楽を捨てずに射精を避けようとする者は誰でも、有機体に悲惨な結果を被ることになる。痙攣は非常に暴力的なもので、有機体はその暴力にさらされると、その結果は容赦のないものとなる。不能、あるいは神経系に害を受けたり、その他いろいろな結果を生ずる。性の秘儀を実践する者は、痙攣の前に身を引くべきである。医師は痙攣の前に身を引くべきその理由をよく知っている。性の秘儀は一日に一回だけ実践することができる。決して一日に二回行ってはならない。一生の間、決して射精をすべきではない。決して、決して、決してしてはならない。白ロッジのこの命令は理解されなければならない。もしわれわれの意志に反して不名誉にも痙攣が来てしまったら、弟子はすぐにその行為から身を引いて仰向けに横たわり、次に示す動作によって、全力で抑制しなければならない。

指 示

1. 分娩中に女性が行うような最高の努力をなさい。神経の流れを性器官に送り、それと同時に括約筋すなわち精液の漏れ出る扉を強制的に閉じるのである。
2. 呼吸とともに性エネルギーが吹き上がるように上昇して、脳まで至るように息を吸いなさい。息を吸いながらマントラ“HĀM”を発音し、性エネルギーを脳まで上昇させ、心臓まで至るようにイメージするのである。
3. 性エネルギーが心臓に蓄えられるようにイメージしながら息を吐き、マントラ“SĀH”を発音しなさい。
4. もし痙攣が強すぎるようなら、我慢してマントラ“HĀM SĀH”の助けによって、息を吸って吐くことを続けなさい。“HAM”は男性的であり、“SAH”は女性的である。“HAM”は太陽であり、“SAH”は月である。なめらかで繊細な調子で“SAH”の音を発している口から、いっきに空気を吐き、そして半分開いた口でマントラ“HAM”をメンタリーに発音しながら息を吸うのである。

この秘教エクササイズの基本的な意図は、呼吸のプロセスを逆にする
ことにより、それを真にポジティブなものにすることである。なぜなら実際
の呼吸の状態では、月のネガティブな側面が支配している“SAH”は精
液を放出させるからである。それゆえにこの呼吸のエクササイズで呼吸の
プロセスを逆にすることによって、遠心力は求心力に転換され、精液は内
側に向かい、そしてさらに上に向かって上昇するのである。

補 足

痙攣の場合について前述した指示は、性の秘儀の実践の時、全般に渡っ
て応用できるものである。

性の秘儀のあらゆる実践は、この驚くべきエクササイズによって結論づ
けることができる。第九球体での仕事は、苦闘、犠牲、強さ、意志を意味
する。第九球体から逃げ出す弱い者は、震え上がり、おびえ、恐れる。し
かし蛇に飲み込まれる者は、自らを蛇に、神々に変える。

性的痙攣が起きて射精の危険が差し迫っているという重大時には、イニ
シエイトはすぐにその行為から身を退き、固い床の上に仰向けに横たわり、
息を止めなければならない。そして人さし指と親指で鼻をつまむのである。
この努力には想念の集中が必要である。新参者は心臓の鼓動の反復である
男根の脈動に、一心に集中すべきである。射精を避けるために、この性的
脈動を抑制するように試みるのである。そしてもし酸素を吸わねばならな
くになったら、さっと短く急速に息を吸い、次に最大限の長さに息を止める。
このようにして射精を避けなければならない。

【タントラ】 インドの神シヴァとその配偶者シャクティ（カーリー）と
の対話形式による神秘的な教え。リング・ヨニを崇拜。数多くのタント
ラがあり、その中には多数の性的な象徴が含まれている。タントリズム
（タントラ教）は、今日でもインド、ネパール、ブータン、チベットで
広く信仰されている。

第二十二章 性 ヨ ガ

インドには三つのタイプのタントラがある。第一に白タントラ、第二
に黒タントラ、第三に灰色タントラである。白タントラでは、射精するこ
とのない性の秘儀が実践される。黒タントラでは射精が行われる。灰色タ
ントラでは射精があつたりなかつたりである。時には射精し、また時には
射精しない。このタイプのタントラは熱心な者を黒タントラへと導く。

黒タントラの中には、ボン教や紅帽派の僧、すなわち恐ろしい邪悪な黒
魔術師が見出される。これらの悪意に満ちた者は、嘆かわしくも射精をし
た後、尿道からその精液を再吸収するために、吐き気を催させるような行
為をする。その結果は致命的である。なぜなら、一度射精された精液はサ
タンの原子で充電され、新たに有機体に浸透して、クンドリニーをネガテ
ィブな形で目覚めさせる力を得ることになるからである。そしてクンドリ
ニーは、人間の原子地獄へ下降し、サタンの尾に変わっていく。このよう
にして人類は、聖なる存在の本質から分離し、常にわれを忘れて奈落へ落
ちていくのである。ヘルメスの杯をこぼす者はみな、まさに黒魔術師であ
るということがわかる。

ヒンズー教では、性の秘儀は「マイスナ」という言葉で知られている。
それはまた「ウルドヴァラタ・ヨガ」として知られ、それを実践する者は
ウルドヴァラタ・ヨギと呼ばれている。

真に誠実で責任あるすべてのヨガの学派では、性の秘儀がきわめて秘密
裏に実践されている。一組の男と女のヨギが、十分に用意ができていると
認められた時、彼らは秘密の場所へ連れて行かれ、そこでマイスナ（性の
秘儀）を伝授された。

その二人はグル（マスター）の用心深い見守りのもとで、偉大なる仕事
をするために性的に結びつく。男は床の上の敷物に仏陀の姿勢、すなわち
東洋的スタイルで足を組んで座り、女と性的に交わる。女は男の胸に両足
を絡ませるような格好で男の両足の上に座る。男の上に座るということは、
明らかに男根を受け入れるということである。このようにして男と女は性
的に結びつくのである。その一組のヨギは、射精せずに何時間もこの状態



東洋的スタイルのカップル

性の秘儀を通じて、エゴを根絶しなければならない。
手に持っている首は、切り取られたエゴの象徴。

のままである。ヨギの務めは性の秘儀の実践中、何も考えないことである。その間、男も女もエクスタシーの状態にあり、二人は、互いに深く愛しあっていることを知るのである。創造エネルギーがそれぞれの経路を通して、聖杯（脳）にまで勝ち誇ったように上昇する。動物的情欲はしりぞけられ、そして二人は射精をすることなく行為から引き下がるのである。

この東洋型の性の秘儀を実践する方法は、西洋人にとっては心地悪いかもしれない。しかしヘルメスの杯をこぼすのを避けるため、行為から身を引くことが難しい人々にとっては、この形が推奨される。この実践は、ノスティックにとって射精を避け、また抑制を習うための性的訓練になるだ

ろう。ノスティックのカップルは、どんなマスターによる肉体的な見守りも必要としない。しかし援助を願うために、アストラル界のマスターを呼び求めることができる（その夫婦だけで行うべきである）。

性の秘儀の実践中には、動物的欲望が存在してはならない。欲望は悪魔的であることを覚えておくべきである。「我」は欲望である。「我」は悪魔的である。欲望の存在するところに愛は存在しない。なぜなら、愛と欲望は相反するものだからである。欲望は欺きを産むということを知る必要がある。欲望する者は誰でも愛していると信じ、愛していると感じ、愛していると誓う。これが欲望の欺きなのである。互いに愛していると言うカップルを、何と多く目にしたことであろうか。結婚後、砂の城は崩れ、ただ悲しい現実だけが残る。本当に愛していると思っている人でも、根底では憎しみあっている。欲望を満足させた後に失敗することは避けられない。そして、われわれが耳にするのは不満、嘆き、非難、涙だけである。愛はどこに行ってしまったのであろうか。欲望があっては、愛することは不可能である。すでに霊を具現した者だけが、実際に真の愛し方を知っている。「我」は愛し方を知らない。具現した霊だけが愛し方を知っているのである。愛には固有の雰囲気と香りとうつらさがある。動物的欲望を抹殺した者だけが、霊を具現した人だけが、それを知っている。霊を具現する人だけがそれを知り、体験することができるのである。愛とは、人々が愛と呼んでいるようなものではなく、人々が愛と信じているものは、われわれをだます欲望にすぎない。欲望とは、マインドとハートの中で、みごとに結びつけられた欺きの成分である。欲望はわれわれに、実際には愛していないのに、愛していると信じ込ませる。そして性行為の達成と欲望の充足の後にもたらされる恐るべき現実によってのみ、自分が虚偽の犠牲であったことを思い知らされるのである。われわれは愛していると信じていたが、実際はそうではなかったのである。

人類は愛と呼ばれるものが何であるか、いまだに知らずにいる。実際、霊だけが愛する方法を知り、愛することができる。人間はいまだに霊を具現してはいない。いまだに愛することが何であるのかを知らずにいる。サタンは愛とは何であるのかを知らない。実際には、人類はサタン（我）と呼ばれるものを具現してきたにすぎない。人類は愛する方法を知らない。

愛はハートからハートへ、そして霊から霊へと伝えることができるだけである。霊を具現したことの無い人は愛する方法を知らない。サタンは愛

することができないし、人類が具現してきたものはそのサタンである。完全なる結婚とは、より多く愛する者と、より深く愛する者との結合である。愛とは人類が達することのできる最高の宗教である。

欲望は一つの成分であるが、それは多くの成分に分解できる。欲望のこれらの成分が、マインドとハートを欺くのである。他の男のもとへ彼女が行ってしまったと絶望する男性は、真に彼女を愛してはいなかったのである。真の愛は何も強要しない。何も求めないし、何も欲しない。何も考えない。ただ一つのこと、すなわち愛する人の幸福を望むだけである。それだけである。愛する女性に去られた男性は、ただ次のように言うだけである。「私にとってあなたが幸福を手に入れたことは、幸せなことです。あなたがその人といっしょになって幸せを見つけてくれたならば、私もそのことを喜びます」と。

欲望は別のものである。愛する女性に他の男性のもとへ去られた熱情的な男性は、殺そうとしたり、自殺しようときえする。そして絶望のどん底にまで落ちてしまう。彼は快樂のための手段を失ってしまったのである。それだけのことである。

事実、真の愛とは霊を具現した者によってのみ理解されるものである。人類は愛と呼ばれるものをいまだに知らない。実際、愛とは天真爛漫な子供のようであり、生き生きと羽ばたく白鳥のようなものである。愛は幼少時代の最初の遊びの中に現れる。愛は無垢なため何も知らない。

死後も生き続けるその恐ろしい幽霊（我）を溶かす時、われわれの内に愛と呼ばれるものが生まれる。この状態に達した時、失った無垢を取り戻すことができるのである。

実際、人類は霊の胚芽を具現しているにすぎない。霊の胚芽は時々、愛の閃光を放射する。子供をいつくしむ母親は、愛と呼ばれるものの良い例である。愛の胚芽は、清められた愛の炎で強くすることができる。

時として男と女は、霊の胚芽から花開いた愛の放射を感じることもあるが、サタンが男と女に与えた激しく恐ろしい情欲にすぐに溺れてしまう。

もしわれわれがこれらの聖なる愛の波動を養い育てるならば、霊の胚芽は強化され堅固になり、さらに強烈に生きようになる。そして後に愛と呼ばれる体験をするのである。愛は霊の胚芽を強くする。霊の胚芽が強くなれば、われわれは霊の具現を達成することができるのである。

霊の胚芽から放射される聖なる愛の波動を感じることでできる人間は稀

である。人間が通常感じているのは欲望の力である。欲望も歌い、ロマンティックで限りなく優しくなる。欲望とはすべての宇宙に存在し、最も人を欺く毒である。欺きの犠牲者となった者は愛していると誓うものである。

男よ、そして女よ、われわれはあなたがたを愛に招く。愛する方法を知っている非常に少数の人々の後に続きなさい。

男神と女神たちよ、楽園の結婚の魅惑の中で愛しあいなさい。真実、愛しあう者に祝福あれ！ 愛こそ、われわれを神々に変えることのできる唯一のものである。

内分泌学

信じがたいことであるが、実際のところ、科学は多くのヨガの学徒よりも「変換」と「性ヨガ」について詳しく知っている。内分泌学は、確かに創造的な革命を引き起こすと考えられてきた。すでに科学者は、単に性腺がカプセル状のさやの中に密閉されたものではないことを知っている。

内分泌ホルモンと外分泌ホルモンがある。外分泌ホルモンは種を永續させるために「保存的」と呼ばれる。これに対して内分泌ホルモンは人間の有機体に活力を与えるために「活性的」と呼ばれる。このホルモンの内分泌の過程は、あるエネルギー物質から別のエネルギー物質に変わる「変換」の過程である。マイスナ、すなわち性の秘儀は、性的変換を促進するものなのである。ノスティックの内分泌は、性的なエネルギー物質のすべてを変換し昇華する。豊かな大量の性ホルモンが血液の循環系の中に満ちあふれ、別の内分泌腺に至って、それを刺激し、誘発し、活発に働かせる。そのようにして性的変換が活発化すると、内分泌腺が過剰刺激を受けて、自ずと大量のホルモンを生み出すのである。そのホルモンは液体神経系全体を活気づけ、変化させる。

すでに科学は、通常の性を行うすべての人々の間で、性的変換が起こることを認めている。今や問題は、高次の性を行う人々の強化された性的変換を認めるために、さらに研究を押し進めるだけである。仏陀の主要な三十二相を生物学的に研究する者は誰でも、仏陀の第二次性徴はまさに超人の第二次性徴であるという結論に達するであろう。仏陀の第二次性徴はまさに強力な性的変換を示している。仏陀がマイスナ、性ヨガ、性の秘儀、すなわちアルカーノA・Z・Fを実践したことは何ら疑う余地はない。仏

陀は白タントラ（性の秘儀）を教えたが、それは秘密の内に弟子に伝えられた。チャン仏教（禪仏教）ではマイスナを教えており、カップルはこの性ヨガを実践したのである。



仏陀の肉髻（につけい）

仏像の頭頂の隆起している部分で、仏陀の尊貴の象徴とされる。仏陀の三十二相の一つ。

第二次性徴

第一次性徴と第二次性徴がある。前者は生殖器官の性的機能と関係している。後者は脂肪の分布、筋肉のつくり、発毛、変声、体型などと関係している。女性の体型は男性とは異なるし、男性も同様に異なるのは明らかである。

また性器に対するいかなる損傷も、間違いなく人間の有機体を変えてしまう。去勢された男性の第二次性徴は、退化した者の第二次性徴である。中性の人や男色者の第二次性徴は、彼らが性的倒錯者すなわちインフラセクシュアルな人であることを示している。女性化した男性は何に由来するのであろうか。男性化した女性は何に由来するのであろうか。どのような第一次性徴が、本来の自分の性に対立する第二次性徴の原因となっているのであろうか。この原因の中に、インフラセックスがあることは疑いのないことである。

実際、性ヨガ、マイスナ、アルカーノ A・Z・F（性の秘儀）は高次の性機能の一つのタイプであり、それは第二次性徴を修正して、新しいタイプの人間、すなわち超人を生み出す。超人は、信条、理論、宗派、主義、狂言、学派などの結果であると考えるのは愚かなことである。実際、超人は信仰すること、信仰をやめること、あるいは学派に属すること、属さないことなどから生まれるものではない。第二次性徴の変化は第一次性徴を変化させることによってのみ修正されるのである。真正なヨガのイニシエイトは、性ヨガやマイスナによって、第二次性徴をポジティブで神聖な超越的方法で修正するのである。

心理学と内分泌学

心理学が停滞していた頃、幸いにも内分泌学の科学が登場した。ここに心理学は新たな命を得ることになった。すでに生物学的類型に基づいて、偉人たちの生涯を研究する様々な試みがなされてきた。たとえばナポレオンが衰退していったのは、脳下垂体の内分泌腺が衰えていく過程と一致していると言われている。心理学的な特徴は、内分泌腺と第一次性徴によって決まるのである。

生物・心理学的類型は、誰もそれを否定することはできないほど決定的である。それは第一次性徴に基づいているのである。事実、生物・心理学的類型は第二次性徴に基づいているが、それは第一次性徴の働きによって決定的となる。このことに基づいて、われわれがある一つの生物・心理学的類型の存在を望むのであれば、第一次性徴の仕事をするべきであると言える。性の秘儀、マイスナ、性ヨガだけが、マスターや超人や大聖の生物・心理学的類型を創り出すことができるのである。

インフラセックス

われわれはこの章で、インフラセックスを行う者がたいへん嫌うような主張をしてきた。実際に彼らは、自分たちが高次の性を行う超越的な存在であると思込んでいる。インフラセクシュアルな人々は、第三ロゴスよりも自分たちのほうがより完全であると信じている。そして性とはわいせつで、汚らわしく、物質的である、となんら良心の呵責を感じることなく

主張する。彼らは、性とは聖霊の創造的力であり、それなくして魂の自己実現は決して達成できないということを知らないのである。不幸にも彼らは、第三ログスとそのすばらしい性の力を侮辱しているのである。インフラセクシュアルな人々にとっては、聖霊の聖なる力は罪深く、わいせつで、物質的なものなのである。

インフラセクシュアルな人々は、講義や哲学や信条や呼吸法などによって自己実現を達成できる、というくだらない幻影を持っている。これらによって、第二次性徴を変換することは不可能であり、明らかにその結果は失敗に至るものである。

進化と退化

実際に、西洋でも東洋でも進化論に関して多くの基本的な哲学的教理が広められてきた。進化と退化はすべての自然界において、同時に進行している機械的な力である。われわれはこれらの二つの力の実在を否定はしない。このことについて説明してみよう。

創造と破壊のプロセス、進化と退化のプロセス、生成と退行のプロセスは誰も否定できない。ここで問題なのは、進化の機械的力が持ってもいないような特性まで、その力に原因づけることである。進化、あるいは退化は、誰一人として自由にすることはできないのである。進化によって解放や目的を達成できると考えるのは、幻影を抱いた人々の空想である。

イエス・クリストが明確に語ったことであるが、すべての人々に救いを約束したことは決してなかった。偉大なるマスターは神聖なる王国、魔術と秘教の王国に入るための、途方もなく恐ろしくて困難な戦いについて強調された。「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」「何千もの人々が私を探すが、そのうちの一人が私を見つける。何千もの人々が私を見つけるが、そのうちの一人が私の後に続く。何千もの人々が私の後に続くが、そのうちの一人が私の心にかなうのである」。

ここでわれわれは、信じるとか信じないということ、あるいは自分が選ばれた人間であると思いついてしまうこと、またかくかくの宗派に属しているということなどを問題にしているのではない。この救済という問題はきわめて重大である。人は穀粒、すなわち性的な種の仕事をしなければならない。何もないとところからは何も生じないのである。穀粒の仕事をする

必要がある。必要なことは穀粒による努力、すなわち完全なる変革である。性的な穀粒からだけ、内なる天使が生まれる。内なる天使だけが、秘教の王国に入ることが許されるのである。マイスナ、性ヨガ、性の秘儀が緊急に必要である。進化と退化の力は、単なる機械的な力にすぎない。誰も解放しないし、誰も救われない力である。それだけである。

多くの生物は退化の結果であり、また他の多くの生物は進化の結果である。未開の人喰い人種は進化の結果ではない。実際、彼らは退化の結果である。彼らは歴史の中で、以前に存在した力強い文明が退化して生じたものである。これらの種族のすべては神々、半神、巨人族などの子孫であると言える。またこれらすべての種族は、輝かしい過去の栄光を物語る伝説を保持しているのである。

トカゲはワニが退化したものである。蟻と蜂の太古の先祖は、人間より以前の巨人であった。実際に今日人類は、その第二次性徴によって示されるように、人類以前の人種が退化して生じたものである。男性化した女性は飛行機を操縦し、戦争で戦うが、彼女らはインフラセクシュアルな人々である。同様に女性化した男性もインフラセクシュアルであり、美容院でパーマをかけ、爪にマニキュアを塗る。このことを進化、すなわち聖なる両性具有への復帰などと思っている人々は間違っている。真正の両性具有者は、中性ではない。水没したレムリア大陸の両性具有者は完全であった。完全に開発され、進化した二つの性を有していたのである。彼らはインフラセクシュアルではなかった。また中性でもなかった。今日では魂と霊の完全な融合の中に、その聖なる両性具有者を見出せるだけである。完全に女性的である霊と、完全に男性的である魂とが、イニシエーションによって融合するのである。天使は聖なる両性具有の存在である。中性の天使などはいない。

意識革命の道へ入る必要がある。この道は進化と退化の法則を超越するものである。実際、これは偉大なカビール、イエスが語った細くて狭い、困難な道である。

ヨガのエクササイズ

われわれはヨガのエクササイズを批判するつもりはない。それはたいへん役に立つものであるし、内的開発においてわれわれを援助してくれるも

のである。しかしマイスナと白タントラ・サーダナを教えないヨガはすべて不完全である。洋の東西を問わず、偉大なヨギは、性ヨガによって自己実現を達成したのである。新時代のヨギ、すなわちアグニ・ヨギは内分泌学を深く研究し、性ヨガについて公的に教えなければならない。

【カーマ・カルパ】に掲載されているタントラの姿勢は、非常に誇張的で、それらのうちの多くは黒タントラへと墮落させるものである。われわれはこの章のタントラの体位を推奨する。

【ボン教】 仏教が伝わらない以前のチベットの宗教。シャーマニズム的な民間宗教として崇拜された。

【紅帽派】 チベットのラマ教旧教派の別名。新教の黄帽派に対して起こった呼称である。旧教派とは、新教派興起（14～15世紀）以前の諸宗派を総括的に名付けたもの。

【ウルドヴァラタ・ヨガ (Urdhvarata Yoga)】 ウルトヴァラタとはサンスクリット語で性魔術を意味する言葉。

【チャン仏教 (Ch'an)】 6世紀達磨大師が中国に創立した大乘仏教の一派。解脱の手段として瞑想と三昧を強調したといわれる。この教えは、日本にも伝わり、禅宗の仏教になった。

【カビール】 偉大なる司祭のこと。

【サーダナ (Sadhana)】 サンスクリット語で「成就法」を意味する。タントラの教義書。

【カーマ・カルパ (Kama-Kalpa)】 性魔術の本。タントリックな性的体位が、数多く、誇張的に示されている。

第二十三章 飛ぶ蛇

眼に涙して、言うべきでないことを言わなければならないために、私の心は引き裂かれんばかりである。なぜなら、「飛ぶ蛇」について何かを述べることは、豚に真珠を投げ与えるようなものだからである。それはたいへんな苦痛である。しかし、哀れに苦しむ人類はそれを必要としている。

蛇 鳥

マヤの『ポボル・ヴフ』には、鳥と蛇が、世界の性的創造者として描かれている。テペウとコクマツツは偉大な生命の大洋に、このりを放った。これは蛇を連れてきて、そのすばらしい血で、黄色と白色のとうもろこしを練り合わせるためであった。『ポボル・ヴフ』によれば、ツァコル神は黄色と白色のとうもろこしの粉を蛇の血で練り合わせて、人間の肉体を造った。鳥は生命の普遍的な魂を表し、蛇は第三ロゴスの性の火を表している。蛇の血は創世記の水、宇宙の偉大なる精液、エンス・セミニス、クリスト化された精液を表している。これらの「水」には、あらゆる生命の芽が含まれている。マヤの賢者は、これらの「水」は地球の血であると言った。女神コアトリクエは、生と死の母、つまりエンス・セミニスである。

実際に第三ロゴスの性の火は、宇宙を出現させるための「命の水」を肥沃にする。マヤの神学では、二人の神が創造に協力している。一人の神は人間に命と形態を与え、もう一人の神は意識を与える。第三ロゴスによって命の水が肥沃になった時、第二ロゴスの協力によって、有機体のすべてに意識が吹き込まれる。口にするのも恐れ多い神々は、すべてのロゴスの力が活動するための媒体なのである。

マヤの創世神話の基本的要素は、このりの「ハチウウイ」、金剛いんこの「モー」、長元坊の「クセンセンバック」、猿の「ツィミンク」、蛇の「カン」である。これらのシンボルは、一般的にも秘教的にも用いられている。公の一般的分野では、それらは部族の出来事や歴史的な事件を表している。また秘められた秘教的見地では、これらのシンボルは高度な科学

性と哲学的な深さ、崇高な芸術性を持ち、また非常に宗教的でもある。

マヤの人々の間では、地上の楽園は、蛇鳥の聖なる地“タモアンチャン”である。タモアンチャン族は、事実、蛇のイニシエイトたちであり、彼らの神話は蛇鳥の神話である。タモアンチャン族はトルテカ族、オルメカ族、マヤ族の系統を引き継ぐ一族である。

アステカ族の人々は多くの苦難を通して、テスココ湖（クリスト化された精液の象徴）に到着し、そこで“鳥と蛇”、すなわち蛇をくわえた鷺を発見した。アステカ族の人々は蛇の智慧をもとに、偉大なテノチティランを築いたことに高い誇りを持っている。

羽毛の蛇は明らかに蛇鳥であると言える。羽毛の蛇はケツァルコアトルであり、それはメキシコのクリストである。ケツァルコアトルの神聖なシンボルは、いつも鷺と蛇である。羽毛の蛇はすべてを物語っている。魂である鷺と火の蛇が、われわれを神々に変えるということ。

マヤのケツァルは羽毛の蛇、つまり蛇鳥である。



蛇をくわえた鷺

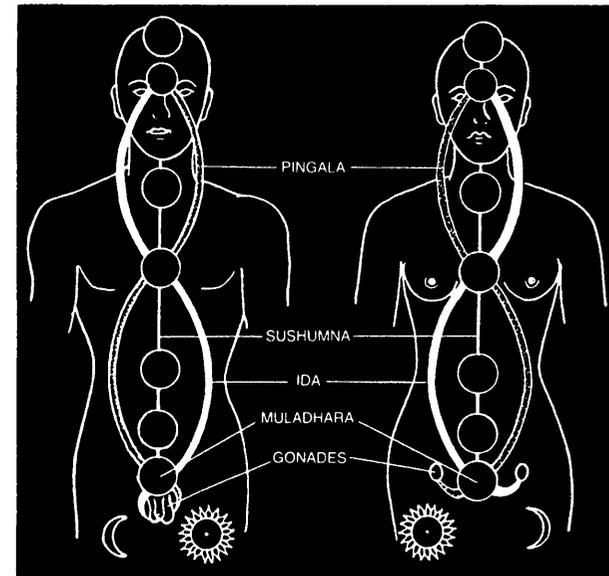
アステカ族がテスココ湖で、蛇をくわえた鷺を発見したところ。アステカ族は、この蛇の智慧により、テスココ湖の島の上に石造都市テノチティランを建設した。メキシコの征服者エルナン・コルテスがこの都市を見た時、その美しさに驚嘆したという。しかしスペイン人たちは、この都市を破壊し、後に現在のメキシコシティが建設された。

マーキュリーの杖

マーキュリーの杖は二匹の蛇を持つ脊髄を象徴している。二匹の蛇はイダとピンガラを表し、それを通して太陽と月の原子が脳まで上昇する。それらはすべての被創造物の中に反響している偉大なる「ファ音」のシャープとフラットのようなものである。

アカーシャは燃え上がる炎のように脊髄経路（脊髄の中央にある気道で、スシュムナ管のこと）を上昇する。そしてその二つに分かれたエネルギーの柱は、イダとピンガラを流れる。脊髄経路とそのまわりに蛇のように巻きついた二つの経路でアカーシャの循環が発生する。アカーシャは中央の経路（スシュムナ、イダ、ピンガラの三つの気道）から始まって、それから有機体のすみずみにまで行き渡る。

イダとピンガラは生殖器官のところから始まり、イダは脊柱の基底部から脊髄経路の左側、ピンガラはその右側に出ていく。女性の場合はこの左右が反対である。この二本の弦（イダとピンガラ）は、延髄で終わる。対になっているこの弦は半エーテル的で、半物質的であり、宇宙の高次元世界と対応している。



火の翼

脊柱の基底部分で太陽と月の原子が結びつく時、魔術的なパワーである火の蛇が目覚める。完全なる結婚の無上の喜びの内に、火の蛇はゆっくりと上昇する。そして愛の恍惚を享受するのである。

蛇が心臓の高さに至った時、火の翼すなわちマーキュリーの杖の翼を授かる。その時、蛇に羽毛がはえるのである。これがケツァル、蛇鳥^{ヘビドリ}、羽毛の蛇である。蛇鳥になったイニシエイトはみな、高次の世界を飛ぶことも、王国の様々な領域に入ることもできる。アストラル界をすぐれたアストラルの乗物で、意のままに旅行することができる。また肉体を持ったままで四次元を通り抜けて旅行することもできる。彼は蛇鳥なのである。

イエス・クリストが実証したように、蛇鳥は密閉された地下埋葬所から抜け出すことも、また水面の上を歩くこともできる。あるいは仏陀の弟子が実証したように、岩の中を端から端まで体を傷つけることなく通り抜けることができる。彼らは肉体のまま空中を飛ぶこともできるのである。

F A R A O N

イダは女性的であり、ピンガラは男性的である。それらは自然界の中に反響している偉大なる「ファ音」のシャープとフラットである。「FA」は太陽原子に相応する。「RA」は月の原子に相応する。「ON」は中央の経路を通して上昇する燃え上がる火に相応する。アストラル体で意識を持って確実に離脱するために、強力なマントラ「FARAON」のシャープとフラットをどのように響かせるかを学ぶ必要がある。

このマントラをシャープとフラットに響かせることによって、アストラル界に離脱することができる。

エジプトではイニシエイトが火の翼を授かった時、神殿でチュニックの上から心臓の高さのところに、双翼の勲章を授けられた。ナザレのイエスが火の翼を開いた時、エジプトのファラオから個人的に勲章が授けられた。

イエスのとったアストラル界へ離脱するための姿勢は、チャックモールの姿勢と似ている。しかし枕を使わないで頭をたいへん低くしていた。足の裏は床につけ、足を折り曲げて膝を立てる。この方法で、偉大なる秘儀司祭は、脊椎のすばらしい堅琴^{リット}を奏でながら眠りについたことであろう。

「FARAON」のマントラは次のように三つの音節に分かれる。FA-RA-ON。FA^{フアー}は音楽的音階である。RA^{ラー}は抑音であり、二重のR^{ルル}で母音化されなければならない。ON^{オン}はインドのマントラOM^{オーム}を連想するが、この場合は子音MでなくNである。通常、マントラ「FARAON」のイントネーションは、すべての被創造物の中に反響する重要な「FA」に置く。このマントラは、メンタリーに発音することを勧める。学徒は想像力と意志でエジプトのピラミッドに集中し、このマントラを唱えながら眠りにつくべきである。それは多くの練習と忍耐を必要とする。

飛ぶ蛇

白魔術師も黒魔術師も、アストラル体で、あるいはヒーナスの状態で肉体ごと旅行するために飛ぶ蛇を使う。深い瞑想の中で白魔術師は、地上や宇宙のあらゆる場所へ自分を運んでもらえるように、青銅の蛇に折り嘆願する。そうすると、飛ぶ蛇は彼を運んでいく。

黒魔術師はエデンの園で誘惑した蛇に祈る。そうすると、この蛇は彼を奈落や魔女のサロンや魔宴^{ザバト}などへ連れていく。

青銅の蛇は脊髄経路を上昇する。誘惑の蛇は尾骨を通して自然の原子地獄へ向かって下降する。これがサタンの尾である。悪魔のパワーはこの尾にある。

聖なる母クダリニーに祝福あれ！ 崇拜すべき母のパワーによって飛ぶ人に祝福あれ！

邪悪なるマリア（エデンの誘惑の蛇、下降するクダリニー）のパワーによって移動する人は不幸である。邪悪なマリアの闇のパワーで飛ぶ人は不幸である。彼らには、奈落と第二の死が待ち受けている。

ヒーナスの状態

点は線の切断部分であり、線は面の切断部分である。面は立体の切断部分であり、立体は四次元と呼ばれる四次元立体の切断部分である。

すべての立体は四次元的である。すべての立体は四次元を有している。第四座標、あるいは第四垂線は、すべての力学の根本的な基礎である。そして、分子間の空間^{スペース}は、四次元に相当する。

縦、横、高さの三次元世界では、われわれは決して完全な立体を見ることができない。われわれが見るものは、側面や平面や角度などにすぎない。このように知覚とは不完全であり、主観的なものである。

四次元での知覚は客観的である。そこでは立体を前から、背後からも、上からも、底からも、内側からも、外側からも見る。こういうことが、いわゆる完全に見るということである。四次元におけるすべての対象は、同時存在の形態で完全に現れる。その知覚は客観的である。

飛ぶ蛇のパワーで、われわれは肉体を三次元世界から抜け出させて、四次元世界へ移すことができる。さらに進歩した状態では、肉体を五次元や六次元へ連れていくこともできるのである。

魔法使いの蛇

われわれがコロンビア共和国のマグダレナ区を訪れた時、飛ぶ蛇を発見して驚いた。この地方のジャングルの中には、標的とした相手（犠牲者）へ向けて、飛ぶ蛇を送ることができる妖術師が存在する。その妖術師の使う手口は非常に珍しいものである。この種の妖術師は、毒蛇に噛まれた犠牲者を治療する仕事に従事している。通常、熱帯地方には毒蛇が多数おり、その蛇に噛まれた人々を治療する妖術師や祈禱師がたくさんいる。そのため、妖術師たちの間では、職業上の競争や神秘的な戦いが非常に盛んである。彼らは職業上の問題のために戦いに明け暮れている。妖術師は敵の住居へ向けて、ある種の人工の蛇を遠隔移送するために、四次元を使う。その方法は非常に単純であるが、同時に驚くべきことでもある。妖術師が蛇を作るために使う要素は、大バナナやバナナの幹の樹皮からとれる植物繊維（その土地でマハグアと呼ばれている）である。これらの繊維を1、2メートルの縄により合わせて、人工の蛇が作られる。妖術師は幹から取れた植物繊維で「蛇の七つの教会」の象徴として、七つの結び目を作り、そして秘密の魔法の祈りを唱えながら歩き回る。その魔術的操作の最後のクライマックスは、妖術師が狂乱状態になってその植物繊維を空中へ投げ上げる瞬間である。その瞬間、それは蛇に変わり、四次元に入り込む。重要なことはその人工の飛ぶ蛇が再び三次元の中に、しかも遠く離れた憎むべき敵の家の中に入り込むということである。普通、この敵というのは職業上の競争相手のことである。もし被害者の体が良く調整されている場合は

明らかに蛇は彼を害することはできない。しかし、もしその被害者の体が未調整の場合、蛇はまさに彼の心臓に噛みつき、彼は即死してしまうであろう。一般的に、妖術師は敵から身を守るために特別の薬草で体を整えている。これらの妖術師たちが犯罪行為を行うために、エデンの誘惑する蛇（下降する蛇）のパワーを使っているということは、疑いの余地がない。もしこれらの妖術師が、植物繊維を飛ぶ蛇に変えるというこの種の驚くべき技を行うことができるならば、白魔術師は彼の飛ぶ蛇で、さらに驚くべきことができるのではなかろうか。白魔術師の飛ぶ蛇はクングリニーである。白魔術師は事実、蛇鳥であり、飛ぶ蛇なのである。

蛇の七つのセンターは全能である。翼のある蛇は、ある並み外れた存在である。魔術師は蛇鳥のパワーで意のままに不可視になり、四次元空間を通過して自らを移動し、驚く人々の前で現れたり消えたりし、雷やハリケーンを散らし、大嵐を静め、死人を生き返らせ、鉛を黄金に換え、手を当てて病気を治し、三日目に地下埋葬所から起き上がり、数百万年の間肉体を保持することができるのである。蛇鳥は不死であり、全能であり、智慧を持ち、慈愛深く、畏ろしいほどに神聖である。

神秘的寺院の門番は火の蛇である。蛇鳥のパワーにより、われわれは無限の宇宙の他の惑星に自らを移動させることができるのである。

ダブル

われわれのワークの中には、アストラル体で離脱するためのすばらしいシステムがある。離脱することを習得する人々はたくさんいるが、習得しない人々も多い。ある人はノーシスの本からある鍵を読みとり、それを理解して練習を始め、すぐにもアストラル体で離脱することを習得する。他の多くの人は、一つあるいは別のシステムを練習するが何も達成できない。

事実、たいへんインテレクチュアルなタイプ（理屈っぽい、知識第一主義）の人物や学者ぶった教養でいっぱいの人（本の虫）というのは、アストラル体で意のままに離脱することができない。しかし、それに対して、たいへん素朴な人、慎ましい農夫、貧しい召使いの人などは、簡単にそれができるということがわかった。このことはわれわれを深く考えさせ、どうしたことなのか注意深く研究させることになった。事実、アストラル体で離脱することは、インテレクチュアルな活動ではない。アストラル体で

離脱することは、むしろ情緒や高等感情と関係している。その特性は頭脳ではなく、ハートに属しているのである。実際、インテレクトチュアルな人は、頭脳の中が極端に分極化していて、ハートの世界を見捨ててしまう。このようなアンバランスな結果は、霊のサイキック能力を喪失してしまうことになるのである。残念なことであるが、ある能力の獲得は、別の能力の喪失なくして達成できないのである。インテレクトを開発したい者は誰でも、サイキック能力を犠牲にしてそれを開発するのである。容易ならない問題である。なぜなら、どのようにしても無知や無学文盲であることに賛成はできないからである。インテレクトチュアルな教養が必要であるということは、当然なことである。無知は人をたいへん重大な誤りに導いてしまう。無学で無知なオカルト主義者は、作り話を言う人になり、あるいは中傷者になり、最悪の場合には暗殺者になることもある。

アストラル界では聖者に対応した邪悪なダブルが存在する。天使アナエルに対して、邪悪なダブル、恐ろしい悪魔リリットがいる。エロヒム・ギボールに対して、恐るべき悪魔アンドラメレックがいる。善良な市民に対して、邪悪な市民がいる。そして、最悪なことにダブルの外見は、見た目には、うりふたつなのである。もしあるアデプトが白魔術を教えるとすれば、よく似た顔つきや態度やポーズなどを持つそのダブルは、黒魔術を教える。これはたいへん重大なことであり、無知なオカルティストはたやすく“マグネシア（酸化マグネシウム）”を“ギムナシア（体操）”と間違えてしまう。彼らは善良な人々を中傷し、（もう一度繰り返すが）暗殺者にさえなるのである。無知なオカルティストは、もしアストラル界で自分の妻が彼の友人と同棲しているところを見つけ、運悪く、彼が精神分裂症か神経衰弱症ならば、彼はその友人と自分の妻を暗殺してしまうかもしれない。彼の見たものは、それぞれのダブルが同棲しているところか、あるいは過去の転生の出来事などであるかもしれない。彼の無知ゆえに、それを理解することができないのである。

ある男は自分の妻が、知り合いやその他の男と不貞を働いていると想像して嫉妬する。その時、男は自分で形作った考えを投影し、それをアストラル界で見ているだけなのである。もしその人物が、アストラル界に離脱することはできるが、神経衰弱症や精神分裂病を伴った無知な者であるならば、彼の見るものすべてを深刻に受けとめ、嫉妬や妄想によって混乱し、殺人を犯してしまうことにもなりかねない。それゆえに無知な人物は誰で

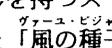
も、自分の見ているものが無意識的に投影された自分自身の心理的な投影である、ということを理解できないのである。

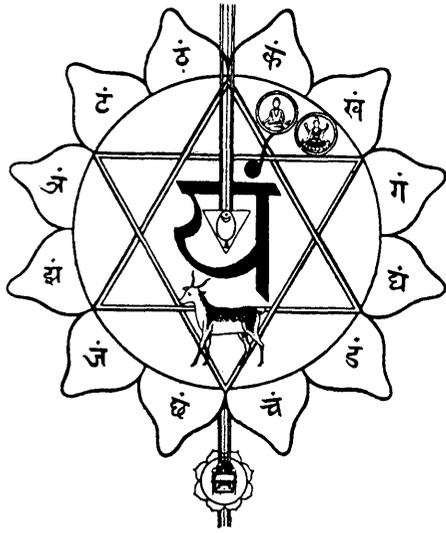
以上のことからわれわれは、インテレクトチュアルな教養は必要であるという結論に達したのである。さてここで興味深いことは、失われたサイキック能力をどのようにして回復させるかということである。才気あふれた光輝くインテレクトを持ち、サイキック能力をすべて活動させている人物こそ、まさに光明を得た人である。神秘主義者はマインドとハートの完全なバランスを確立させる必要がある。マインドが頭の中であまりにも硬化するとバランスが崩れ、アストラル体で自由に離脱することが全く不可能になってしまう。インテレクトチュアルな神秘主義者は、マインドとハートのバランスを緊急に再確立しなければならない。幸運にも、失われたバランスを再び確立するためのテクニックが存在する。そのテクニックは「内的瞑想」である。

われわれの教える鍵ではアストラル体で離脱することができない、と手紙を書いてくるインテレクトチュアルな人すべてに、毎日十分な内的瞑想を行うことを勧めている。完全な集中というカップで、瞑想のワインを飲むことは、すぐにも行わなければならないことである。

カルディア

カルディアは心臓の磁気センターである。このセンターについて『シャットチャクラ ニルパーナ（六つのチャクラの解説）』の第2章から第27章にすばらしい記述がある。その抄出を見てみよう。

心臓の蓮の華はパンドゥーカの花の色（赤）をしており、その12の花弁に Ka(क)から Tha(ठ)までのサンスクリット文字があり、各文字の上には点が打ってある。その中央円に当たる部分には、煙色をした六角形の風マングラ（）がある。そこには、内部に何千万もの電光の閃きのように輝く三角形を持つスーリヤ（太陽）マングラがある。さらにその上には、煙色をした「風の種子」()が四本の腕で突き棒をつかんで、黒いかもしかの上に乗っている。「風の種子」の膝には三つの目を持つイーシャ（主宰神）がいる。ハムサ神（太陽）と同じようにイーシャの二本の腕は、恩恵を施し、恐れを払うように差し伸べられている。この蓮



華の円内上方には、赤い蓮華の上に座った女神カキーニがいる。彼女は四本の腕を持ち、^{パーンツ}繩の輪とどくろをかかえ、^{カパーラ}恩恵を施し、恐怖を払いのけるしぐさをしている。彼女は黄色の衣をまとい、様々の宝石と骨の花冠で身を飾りたてているために、金色をしている。彼女の心臓は^{ネクター}神酒で和らいでいる。三角形の中央には、頭上に三日月と「点」を頂いた、ヴァーナと呼ばれる男根の形で金色をしたシヴァ神がいる。彼は欲望の嵐に歓喜しているように見える。彼の下にはハムサ神に似たジヴァートマ（真我）がいる。これは、ランプの炎が静止して尖端が細くなった様子に似ている。この蓮華の下方には、八つの花弁を持つ赤い小さな蓮の花があり、上向きに開いている。この赤い蓮の花の中にはカルパの木や、天幕や旗で飾った宝石の祭壇がある。これはメンタルな礼拝の場所である。

ヒンズー語で書かれたこのチャクラについての記述はたいへんすばらしいものである。花卉の数、空気の原理、シヴァ神、性の力、リングと三日月などについて言及されている。心臓についてはメンタルな礼拝の祭壇として、またすばらしい瞑想センターとして表されている。これらのヒンズー語の引用文以外にも、さらに数多くの書物が書かれていたに違いない。

カルディアはアストラル・トリップと関係する磁気センターである。意識的にアストラル体で離脱するパワーを獲得しようと望むならば、この中

枢のヴァイブレーションの型を完全に交えるべきである。この中にカルディアの開発を可能とする唯一の方法がある。アストラル体の離脱は、情緒や感情がより重要である。冷たいインテレクトではアストラル体での離脱はできない。頭脳は月であり、心臓は太陽である。

意識的にアストラル体で離脱するためには、高等感情を必要とする。ある種の情緒と感情、たいへん特殊な超感受性、そして瞑想と結びついた眠り。これらの特質はカルディアを開発することで達成される。

『シヴァ・サミタ』はカルディアについて次のように語っている。

「ヨギは広大な知識を獲得する。それは過去、現在、未来を知る知識である。ヨギは超聴覚や超視覚を得て、欲する時にはどこへでも空中を飛んで行くことができる。またアデプトやヨギの女神に会うこともでき、ケチャリと呼ばれる能力を得て、空中を移動する生物を従わせることもできる」

「毎日、神秘のバナリング (Bana Linga) を瞑想する人は誰でも、ケチャリ (アストラル体で空中を移動すること、あるいはヒーナスの状態に体を移すパワー) やブッチャリ (世界のどんな所にも意のままに行くこと) と呼ばれるサイキック能力を必ず獲得する」。



バナリング

バナとは林、リングとは男根のことで、林の中の男根が、バナリングである。左図ではリング・ヨニ (男根と女陰) が、蛇に擬された二本の木に囲まれている。

プラクティス

熱心な学徒は自分の心臓に意識を集中し、稲妻、雷鳴、そして激しいハリケーンによって押し流され夕闇に消えていく雲々を想像すべきである。ノスティックはハートの奥深いところ、内なる無限の空間に飛んでいる多

数の鷹を想像すべきである。そして、太陽と生命に満ちた大自然の奥深い森林を思い浮かべ、鳥のさえずりやコオロギの心地よい安らぎの鳴き声を思い浮かべなさい。学徒はこれらすべてを想像しながら眠りにつくべきである。その時、森の中に黄金の玉座があって、そこにたいへん神聖な女性、女神カキーニが座っていることをイメージしなさい。ノスティックはこれらこのことを想像し、そしてこれらすべてを瞑想しながら眠りにつくべきである。これを毎日一時間実行しなさい。もし毎日二時間、三時間、あるいはそれ以上できるならば、それに越したことはない。心地のよい長椅子に座るか、あるいは床かベッドで、両手両足を左右に拡げて五芒星の形を作り、横になって実行するとよい。眠りは瞑想と結びつけるべきである。忍耐は絶対に必要である。限らない忍耐によって、カルディアの驚異的な能力が達成されるのである。忍耐のない人、すべてのことを早急に欲する人、人生に屈しないやり通す方法を知らない人は、立ち去ったほうがよい。なぜなら彼らは、目的を果たすことができないからである。能力は遊びごとで獲得できるものではない。すべてのものは代償を必要とする。無償で与えられるものなど何もない。

蛇鳥の寺院

心臓は蛇鳥の寺院である。蛇鳥は静謐な心臓の寺院を司っている。われわれは愛する方法を知る必要がある。そして緊急に蛇に飲み込まれなければならない。蛇に飲み込まれたものは誰でも、蛇鳥に変わることができる。性の秘儀とハートの愛だけが、われわれを飲み込む蛇を目覚めさせるのである。蛇が心臓に達した時、火の翼を授かり、蛇鳥になる。

緊急に夫婦生活を導く方法を習得しなければならない。夫婦間の争いごとはサタンによるものである。サタンは蛇鳥と対抗して戦う。サタンは偉大なる仕事を台無しにしようとしている。ゆえに、配偶者の欠点に寛大になる必要性を理解しなければならない。それは誰もが完全ではないからである。夫婦が持つすべての欠点よりも、ヴァルカンの燃えさかる鍛冶場の中で働くことのほうが、よほど価値がある。サタンを喜ばすためにその仕事を投げ捨ててしまうことは、愚かなことである。ハートの寺院の中に羽毛の蛇の寺院がある。われわれは、愛に背く罪を犯して、その神聖さを汚すべきではない。完全なる結婚の道は、智恵と愛である。

われわれは意識を持って愛すべきである。最悪の敵をも愛し、悪には善で報いなさい。このように、愛する方法を知ることによって、われわれは静謐な心臓の祝祭に、自らを準備していくことができるのである。

ヘルメス・トリスメギストスは『エメラルド・タブレット』の中で次のように言っている。「私はあなたがたに愛を与える。その愛の内に、至高の智恵が存在する」。

恐怖をかきたてる人々

意識を持ってアストラル・トリップを行うことに対して、恐怖をかき立て、悪いうわさを吹聴するまがい物の神秘主義者や秘教主義者が、数多く存在する。実際、アストラル・トリップに対して人々を恐れさせることは、父の偉大なる仕事にとって、不誠実で有害な結果をもたらす。アストラル・トリップは、実際、何ら危険はない。なぜなら、すべての人間は通常の何時間かの眠りの間、アストラル体で離脱しているからである。残念なことには人々は、意識の眠った状態でアストラル体を離脱させている。人々はアストラル体を意のままに離脱させる方法を知らないのである。アストラル体で離脱することも、食べたり、飲んだり、結婚したりすることのように、自然の当然の機能を意識的に行うことであり、何ら危険はない。それらすべての機能は全く自然なことである。恐れをあおり立てる宣伝者が主張するように、アストラル・トリップすることが危険であるならば、現在地球上に人間は生きていないことになる。なぜなら、すべての人がアストラル体で離脱しているからである。しかし意識の眠った状態で行うという最悪の状態さえ、何も起こらないのである。この上、何の危険があると言うのであろうか。

事実、惑星である水星はコスミックな夜から現れる。休息の状態から離れ始めるやいなや、その惑星の天使団はますます活動的になっていく。水星の主たちは地球の住人に、意のままに肉体から出たり入ったりする技術を、実際的な方法で教えようと意図している。将来、すべての人間が意識的にアストラル体で離脱しなければならなくなる。それは自然の法であり、宇宙の掟であって、これに対立するものはすべて犯罪である。恐れをかき立て、悪いうわさを吹聴する人々は、無意識のうちに黒魔術師として行動しているのである。

宇宙の自己意識化

生命のユニヴァーサルスピリット（普遍的魂）の特別な目的は、宇宙のすべての次元において、自分自身を意識化することである。原則的には、生命のユニヴァーサルスピリットは自分自身を知らない。ユニヴァーサルスピリットとは、幸福であるが自分が幸福であるという意識を持っていない。意識を持たない幸福は幸福ではない。生命のユニヴァーサルスピリットは自分自身を意識化するために物質の中に降りてくる。「偉大なるリアリティ」は宇宙のすべてのオーロラの中で、それ自身の呼吸から出現し、宇宙的シナリオの中でその無限のイメージを黙想するのである。円周から離れ中心に向かう活動は、ユニヴァーサルマインド（普遍的心）と呼ばれる。われわれはユニヴァーサルマインドの無限の大洋の中に浸っている。ユニヴァーサルマインドのインテレクチュアルな活動は、求心力から湧き出ている。そしてすべての作用には反作用が伴う。求心力は中心で抵抗に会い、その反動で宇宙霊と呼ばれる遠心力を生み出すのである。事実、この振動する霊が、中心と円周の間の、また生命の普遍的魂と物質の間の、また大なるリアリティとその宇宙的イメージとの間の仲介者となっているのである。

偉大なるマスター・パラケルススは次のように言った。「霊はユニヴァーサルイマジネーションの求心力によって促された、普遍的な活動の遠心力から生まれたものである」。

実際に人間は、アストラルの幽霊の中に霊の胚芽を持つだけであるが、この胚芽は強化され、目覚めさせられなければならない。人間の内における宇宙意識の目覚めは、最も偉大な宇宙的出来事である。

偉大なる白ロジは、人間の意識の目覚めのまさにその瞬間に強い関心を持っている。アデプトは意識的にアストラル体で離脱することを人類に教えるために、たいへんな苦闘をしているのである。彼らは人々が目覚めることを望んでいる。それゆえ、この偉大なる法（目覚めの法）に反することは、すべて罪である。魂が物質の中に降りてくる目的のすべては、霊を創造し、自己意識化することである。自分自身の内なるセンターに向けて、メンタルなパワーを送る時、内部に発見する抵抗力が作用を引き起こす。そして差し向けられた求心力がさらに強められ、その結果として遠心力が生じる。このようにしてわれわれは霊を創り上げるのである。この方

法でわれわれは霊の胚芽を強化し、そしてついにある日、蛇鳥^{へびどり}として生まれるその時、アストラル体の中でそれに同化し吸収され、完全な霊を持つに至るのである。

緊急に意識を目覚めさせなければならない。アストラル体で意識的に離脱することを習得する人はみな、偉大なる知識のマスターの足もとで学ぶことができる。またアストラル界で、自分たちの師^{グル}を発見することができる。それは神秘の世界にわれわれを導いてくれる師である。

楽園の地を訪れる喜びを得るために、恐怖を捨て去らなければならない。黄金の光の国の寺院に入る喜びのために、恐怖があってはならない。そこでわれわれは、白ロジの偉大なるマスターの足もとに座り、困難な道に立ち向かう強さを得るであろう。道の途中、われわれは自分自身を強化しなければならない。休息も必要である。そして自分の師の口から直接に指示を受け取ることが必要である。われわれを慰めるために、彼はアストラル体で慈悲深い父のごとく、いつもわれわれを見守っている。アデプトは真の飛ぶ蛇である。

【ポボル・ヴフ】 マヤの神話伝説。グアテマラ高地に割拠していた小独立国家の中で最大規模を誇っていたキチュー族がたどたどしく書き綴った絵文字の文書。内容は天地創造、万物の創造、双子の神の物語など。

【テペウ、コクマツツ、ツァコル】 テペウ(Tepeu)とコクマツツ(Cocumatz)は創造主と形成主であり、それぞれの別名がツァコル(Tzacol)とビトル(Bitol)である。

【コアトリクエ (Coatllicue)】 「蛇の腰巻をつけた女神」の意。太陽、月、星を生んだ母であり、アステカのすべての神々の母でもある。

【このり】 ハイタカの雄。太陽に捧げられる。迅速に飛び、比類のない鋭い視力を持つ。

【長元坊】 ハヤブサ科の中型のタカ。

【マーキュリー】 水銀という意味。錬金術の守護神であり、ギリシア神話のヘルメスに相当する。また水星の支配者でもある。

【ヘルメス・トリスメギストス】 三倍も偉大なる者ヘルメスという意味。この名称は中世によく使われ、魔術、占星術、錬金術、神秘主義、自然科学などの様々な体系の創始者とされた。

第二十四章 秘密のエジプト

古代エジプトの太陽の国ケムには、ノーシスの大いなる神秘があった。当時、イニシエイトの教団に入学を許された者はすべて、最も困難な試験を通過した後、偉大なる秘儀グランドワーク（性の秘儀オニの鍵）の畏るべき秘密をはじめて口伝により授けられた。

この秘密を授かった者はすべて、秘密厳守を誓わなければならなかった。誓いを立てた後でそれを破った者はみな、石畳の死の中庭へ連れて行かれ、見慣れぬ神聖文字が一面に彫られた壁の前で必ず死刑になった。首は切り落とされ、心臓はもぎ取られ、その体は焼かれた。そして灰は四方八方に散らされた。

神聖な儀式の中で、偉大なる秘儀を授かった者は、直ちにヴェスタの寺院に入り実践を開始した。そこにはヴェスタ女神に仕える大勢の処女たちが、独身のイニシエイトと「偉大なる作業」を実践するために準備されていた。結婚しているイニシエイトは、家庭で彼の巫女なる妻と実践した。ヴェスタの処女は全く「愛」の聖職のためにのみ準備されていた。偉大なる女性のマスターのもとで彼女たちは準備され、大いなる試練と懺悔の行を受けなければならなかった。さらに明確に言えば、彼女たちは多くの著述家が言うところの「神聖なる娼婦」なのである。今日では寺院の中に、このようなヴェスタの処女を住ませることは不可能となった。なぜなら、この世界はあまりにも墮落してしまっているからである。それは、すでに腐敗しているところにさらにその手助けをするようなものである。それでは、実際にわれわれも墮落した罪の共犯者になってしまう。

長い歴史の中でひととき輝く独身のイニシエイトはすべて、ピラミッドの中でヴェスタの処女と性の秘儀を実践してきた。イエスもケフレンのピラミッドの中で、性の秘儀を実践する必要があった。イエスはそこで自分のすべてのイニシエーションを総括したのである。多くの人々はわれわれの証言に憤慨することであろう。そのような禁欲主義者をわれわれは批判するつもりはない。しかし、カトリックの司祭はイエスから人間性を奪ってしまった。不幸なことにこの考えは、人々のマインドの中に深く刻みこ

まれてしまい、神秘学者でさえ、イエスを去勢し骨抜きにして考えている。言葉の完全なる意味において、イエスはまさに一人の人間であった。イエスは完全な一人の人間であった。

古代エジプトのファラオの時代のオカルト・メーソンでは、基本的な三つの段階があった。それはアプレンティス、コンパニオン、マスターである。この三つの段階は、すべての人間の背骨のまわりを貫流しているエーテルの力と関係している。ブラヴァツキー夫人は『シークレット・ドクトリン』の中で、それらについて次のように語っている。

「トランスヒマラヤ学派では、これら三つのナーディ（経路）のうちの主要なスシュムナは、脊髄の中央管にあると言っている。スシュムナの左と右には、交互にイダとピンガラ（黙示録の二人の証人）がある。イダとピンガラはいわゆる人間性の音であるファ音のシャープとフラットであり、それらが適切に脈打つ時、両側の番人、精神的なマナス（意欲）と肉体的なカーマ（愛欲）が目覚め、高我が低我を従わせる」

「純粋なアカーシャはスシュムナ（脊髄の経路）の中を通る。その分かれた二つの相がイダとピンガラを流れる（イダとピンガラは脊髄にからみつく二本の共鳴弦）。それらは三つの生きた気であり、これを象徴するものがブラフマの糸である。これらは意志によって制御される」

「意志と欲望は同じものの高い位相と低い位相である。ここに、これらの経路を純化することの重要性がある。これら三つの経路から循環する流れが生じ、それは中央の経路から全身に浸透する」

「イダとピンガラはスシュムナのある脊柱の曲がった壁に沿って走っている。それらは半物質的で、陽と陰、太陽と月のような関係にあって、自在で精妙なスシュムナの火のような流れを活発にさせる。それぞれが独自の経路を持っている。そうでなければ、それらは全身に拡散してしまうであろう」。

自然の力を崇拜した古代エジプトは、自然界の四大要素を表すスフィンクスの翼の下で守られ、成長し、繁栄した。そのエジプトにおけるイニシエーションの儀式は畏ろしく神聖なものであった。尊敬すべきマスターが参入許可のために刀を使う時、スシュムナの経路のイダとピンガラ（二人の証人）は、循環している力が増加して凄まじい刺激を受けた。第一段階での刺激は、月の女性的な流れであるイダだけに影響を及ぼした。第二段階は、男性的な流れであるピンガラが、そして第三段階では、火のような

流れのクンダリニーが通過するスシュムナが刺激を受けた。この第三段階でクンダリニーは、目覚めた状態を維持した。われわれはこの三つの刺激が、ヴェスタ寺院でのワーク（性の秘儀）と関係していることを明らかにしたい。もし志願者が姦淫者であるならば、その刺激は無益な結果となるであろう。これは性の秘儀を熱心実践する人たちのためのものである。

イダは脊柱の基底部から出発してスシュムナの左側へ向かい、ピンガラは右側へ向かう。女性の場合、左右の位置が逆になっている。この三つの経路は延髄で終わる。これらのすべては、二つの翼を拵げたマーキュリーの杖によって象徴的に表現されている。

このマーキュリーの杖の二つの翼は、アストラル体で離脱するためのパワー、メンタル体で離脱するためのパワー、意識的で霊妙な乗物であるコーザル体で旅するためのパワーを意味している。やいばの刃先の道を行くすべての者にその火は与えられ、意のままに肉体から離れるパワーが与えられる。クンダリニーは人間の意識を目覚めさせるパワーを持っている。この火によってわれわれは高次の世界で完全に目覚めた状態を維持することができるのである。高次の世界で目覚めた人々は、睡眠の間、完全な意識を持って肉体の外で生活することができる。意識が目覚めた人は、もはや夢を見ることはない。実際に彼らは、完全に意識を目覚めさせた高次の世界の住人である。彼らは肉体が眠っている間、白ロジととともに働く。彼らは宇宙的な白友愛結社の協力者なのである。

明確にしよう。イダとピンガラは肉体的なものではない。いかなる医学者もメスでそれらを見つけることはできない。イダとピンガラは半エーテル的であり、半物質的である。

古代エジプトの偉大なる密儀は、メキシコ、ユカタン、エレウシス、エルサレム、ミトラ、サモトラケなどの密儀と同様に、奥深いところではすべて性と関係している。

求めよ、さらば与えられん。叩けよ、さらば開かれん。偉大なるイニシエイトはいつでも答える。自然界の四大要素の番人であるスフィンクスはいつでも答えてくれる。性の秘儀を実践する人は誰でも、火を請い求めるべきである。門番のスフィンクスに懇願し、アグニ神に請願しなさい。この神は七つの体のそれぞれにある火のパワーを回復してくれる。「五」は神聖なる火の、偉大なるイニシエーションの数である。第一イニシエーションは、すでにニルヴァーナへ導かれる流れに入った者にとって、出口を

意味する。第五イニシエーションは、山の頂上に建てられた寺院に入るための入り口を意味する。第一イニシエーションによって陳腐な生活を離れ、第五イニシエーションによって秘密の寺院に参入するのである。

【ヴェスタ】 序章注参照。

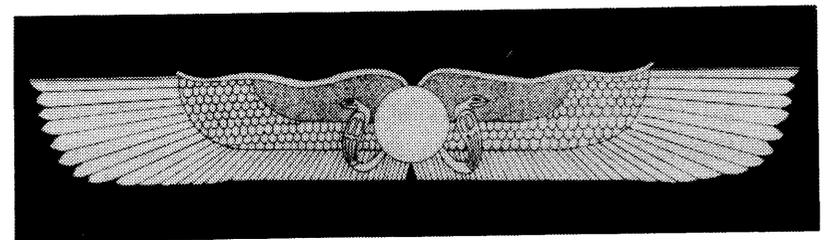
【アプレンティス、コンパニオン、マスター】 第32章注参照。

【スフィンクス】 スフィンクスは、次の四大要素を表している。人間の顔は水、ライオンの前足は火、雄牛の後足は土、鷲の羽は空気。

【サモトラケ】 小アジアのトロアスとマケドニアのネアポリスの中間にあるエーゲ海の小島。

【ミトラ】 ペルシアの救世主（神）。ミトラ信仰は太陽神と深い関係を持つ密儀宗教。キリスト教以前、ローマ、ペルシアで広く信奉された。

【アグニ神】 ヴェーダの火の神。



エジプトの有翼日輪

二匹のコブラに護られた有翼日輪。きわめて重要なエジプトの紋章で、神殿やファラオの椅子などのレリーフに掘られた。エジプトでは、蛇（クンダリニー）を上昇させた者は、高次の世界に生まれ変わり、超越的なパワーを持つとされた。

第二十五章 宿命的不幸

暗黒の時代が到来した時、イニシエイト教団は閉じられた。それは宿命的不幸であった。実際、太古の暗黒から生まれた黒の大ロジは、その時からさらに活動を強めたのである。光の限界が暗黒である。すべての光の寺院と隣りあって闇の寺院が存在し、光が強く輝くところでは、闇もより深く暗い。

イニシエイト教団は、エジプト、ギリシア、インド、中国、メキシコ、ユカタン、ペルー、トロイ、カルタゴ、カルデアなどにあった。そしてそれらには危険な正反対の存在、宿命的に対立しあう存在があった。黒魔術の邪悪な教団、光に対する宿命的な影の存在がそうである。

黒魔術の教団は、イニシエイト教団の影である。イニシエイト教団が閉じられた時、これらの宿命的な黒の教団は、さらに活動を強めた。

黒ロジの密室において、イニシエイト教団で教えられていたものと同じような用語や科学や儀式が見出されても不思議ではない。これらは道の途上の帰依者を混乱させるが、本来帰依者というものは、“不思議なもの”“異国風なもの”“風変わりなもの”“とてもあり得ないこと”の愛好者である。エジプト、マヤ、アステカ、ギリシア、カルデア、ペルシアなどの密儀を話しているこの種の黒魔術師を見つけ出すと、尊敬すべき神のような人を見つけると単純に信じてしまう。そして白魔術師であると信じ込み、黒魔術師の手中に自らを引き渡してしまうのである。

イニシエイト教団のあるところではどこでも、こういう手合いの闇の魔術師がたくさんいるものである。闇の魔術師は、イニシエイト教団と対立している。彼らはマスターのように話し、イニシエイト教団のイニシエイトであるかのように自惚れている。その上、疑いを引き起こすようなことは、一切口にしない。

彼らは親切で謙虚であることを誇示し、善と真理を守り、すばらしい神秘家を思わせるポーズを取ったりする。そのような状況のもとでは、単純で未熟な帰依者は、やいばの刃先の道を放棄してしまうことは明らかである。そして小羊の毛皮をかぶった狼の手の中に、完全に落ちてしまうので

ある。それは宿命的不幸である。

黒魔術の教団は、あらゆるところに存在している。マヤの離教した人々のグループを思い出してみよう。その中のアデプトたちはマヤの白ロジから追い出された者たちである。彼らは黒魔術師である。この黒魔術の教団はユカタンからグアテマラにかけて勢力を確立し、現在ではメキシコやグアテマラに活動的な根拠地を持っている。しかし自らをマヤの王子であるとか、偉大な司祭であるとか言っている陰険な彼らに、誰が疑いの目を向けることができようか。彼らは、世界の創造者にして維持者である至高神テオティについて、尊敬の念を込めて話しているのである。

彼らは、マヤの三位一体バカベス、それに悪の懲罰者カクステルなどを思い浮かべながらエクスタシーに浸っている。そのような状況下で、闇の住人を発見することは非常に困難である。帰依者が邪悪な者に服従する時、彼らの寺院へ連れて行かれそこで秘伝を授かる。そして非常に巧妙な方法で、黒魔術師に仕立て上げられることは明らかである。このような中で帰依者は、彼らが自分を黒魔術師に仕立てているなどとは決して気づかないであろう。奈落は、大変良い意図を持っていながら、また誠実でありながら、道を誤った人々でいっぱいである。

このような方法で、ナイルの河岸や、聖なるヴェーダの地にも、似たようなタイプの邪悪な人々がたくさん出現する。実際に、彼らはいへん活動的で、その戦列を増加させるために日夜奮闘している。

もし、学徒がこれらの陰の人物を見分けるための鍵を欲するなら、われわれは喜んで与えよう。人々に、決して精液を漏らさない白の性の秘儀を話しなさい。人々に、決して自分の精液をこぼしてはならないと話しなさい。これが鍵である。もし黒魔術師だと疑わしい人がいて、その人物があらゆる方法であなたに性の秘儀は健康に良くないとか、それは害になるなどと納得させようとしたり、射精をする考え方をほのめかしたりするなら、その人物は本当は黒魔術師であると確信することができる。

善良なる学徒よ、ヘルメスの杯をこぼすように勧める人物に注意しなさい。そういう人物は黒魔術師である。甘い言葉で誘惑されないようにしなさい。また異国風の流儀や物珍しい名前によっても誘惑されないようにしなさい。ヘルメスの杯をこぼす帰依者は、必然的に災いの奈落に落ちてしまう。目覚めていなさい。完全なる結婚の道は、やいばの刃先の道であるということをおぼえておきなさい。この道は内も外も危険に満ちている。多

くの人々がこの道を歩き始める。だが、この道から逸脱しないでゴールに到達できる人はわずかである。

カリオストロ伯爵の時代のあるイニシエイトのことを思い出した。熱心に妻と性の秘儀を実践したその学徒は、当然、階級と力とイニシエーションなどを獲得した。その日までは、すべてがうまくいっていた。しかし秘密にすべき事柄を、神秘学を学んだ友人に語らずにいるだけの強さがなかったのである。それを聞いた友人はショックを受けた。そして大変な博学で武装して、イニシエイトに射精をしない性の秘儀の実践をやめるように忠告した。誤った友人の教えによって、そのイニシエイトは間違っただ道へ導かれ、それ以来ヘルメスの杯をこぼす性魔術の実践に専念するようになってしまった。その結果は悲惨なものであった。彼のクンダリーニーは、尾てい骨の磁気センターへ向かって下降していった。彼は階級と力、剣とケープ、聖なる上着（チュニック）とマントを失ってしまった。これこそ本當の悲劇である。それは宿命的不幸である。

黒魔術師はマインドの力を強くすることを好む。彼らはマインドを通してのみ、人が神のごとくになれると信じているのである。また闇の魔術師は、純潔を非常に嫌っている。無数の帰依者が、黒ロジの弟子になるために、完全なる結婚の道を放棄した。神秘主義を学ぶ帰依者は、不思議なもの、目新しいもの、神秘的なものによって魅惑され、また奇抜な魔術師を見つけた時、マインドの卑しい売春婦のごとく容易に彼らの支配下に落ちてしまうのである。それは宿命的不幸である。

コスミックな天使として生まれたいと望む者は誰でも、また火と水と空気と土を支配するパワーを持つ天使に変身したいと望む者、自分自身を神へと変えたいと望む者は誰でも、実際に黒魔術師の危険な誘惑によって、その罠に捕えられないように注意しなければならない。

完全なる結婚の道を決して放棄しない、堅実で不動な人物に出会うことは、非常に稀なことである。人間は大変弱いものである。それは宿命的不幸である。「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」。ごくわずかな人だけが、自分を天使の状態にまで上昇させる。そのごくわずかな達成だけでわれわれは満足である。

愛、ただ一つの救いの道

愛の敵は姦淫者と呼ばれる。姦淫者は、愛と欲望を混同している。射精を教える魔術師はみな、黒魔術師である。射精をする人はすべて、姦淫者である。動物的な欲望を抹殺しない限り、奥深い自己実現を達成することは不可能である。ヘルメスの杯をこぼすような者に、愛は不在である。愛と欲望は両立しないからである。ヘルメスの杯をこぼす者はみな、動物的欲望の犠牲者である。愛は欲望や姦淫と両立しない。

スーフィズム

マホメットの神秘の中で最も神聖なものは、ペルシアのスーフィズムである。スーフィズムの良い点は、コーランを文字どおりの死んだ言葉で解釈するという点に反対し、さらに物質主義や狂信主義についても対抗しているということである。スーフィーは、ちょうどわれわれノスティックが新約聖書を解釈したように、コーランを秘教的な見地から解釈した。

西洋人にとって最も当惑することは、東洋の宗教やスーフィーの神秘主義に見られるように、性愛的なものと神秘的なものとの一風変わった不可思議な混合である。

キリスト教神学では、肉体は魂に敵対するものと考えられている。しかし回教では、肉体と魂は同じエネルギーの二つの実体と見ている。二つの実体は互いに助けあっている。このことは性の秘儀をポジティブに行っている人にも、理解されることである。東洋では、宗教、科学、芸術、哲学は、絶妙な性愛の言葉で教えられた。「マホメッドは神と恋に落ちた」と、アラブの神秘家は言う。「あなた自身のために、新しい年の春が来るたびに、新しい妻を選びなさい。過ぎ去った年の暦は使えないのだから」と、哲学者でもあるペルシアの詩人は言う。

賢者ソロモンの『雅歌』を注意深く研究する者は誰でも、それは神秘と性愛が精妙に混合されたものであることを発見するだろう。それはインフラセクシュアルな人々を大変憤慨させる。

真の宗教は、性愛と縁を切ることはできない。なぜなら縁を切ることはその宗教の死を意味するからである。ほとんどの神話と古い伝説は、性愛を基礎にしている。事実、愛と死が真正な宗教の基礎を形作っているの

ある。

ペルシアのソーフィーの詩人は神の愛を述べる時に、それを美しい女性にたとえて表現する。そのことがインフラセクシュアルな狂信者にとっては我慢のならないことなのである。ソーフィズムの考えでは、霊は、神と恋愛的な結びつきをしているのである。

実際に、霊と神との恋愛的な結びつきを説明できるものとして、男と女の甘美な性の結合以上の適切な表現はない。これがソーフィズムのすばらしい考え方である。もし神と霊との結びつきについて語ろうとするならば、愛や性に関する性愛の言葉を使うべきである。これだけが言いたいことを言える唯一の方法である。

ソーフィーの象徴的な言葉の中には、すばらしい表現がある。たとえば彼らにとっての眠りは、瞑想を意味している。実際に眠りのない瞑想はマインドを害するものである。真のイニシエイトならば誰でもこのことを知っている。人は眠りと瞑想を結合しなければならない。ソーフィーはこのことを知っているのである。芳香という言葉は、聖なる恩恵への希望を象徴し、口づけや抱擁は、彼らの間ではうっとりさせるとささせるような喜びと敬虔さを表している。またワインは精神的な知識を意味している。

ソーフィーの詩人は、女性とバラとワインへの愛を詩う。彼らのほとんどが隠者の生活をしているというのである。

ソーフィーが語る七つの神秘の状態は特別なものである。その神秘の状態と密接に関係しているある化学物質がある。その化学物質とは一酸化窒素とエーテルであり、特に一酸化窒素が重要である。それが十分に溶け込んだ時、神秘の意識を特別な段階へと高揚させることができる。

現在の人類は、潜在意識の状態にあるということを認めなければならない。このような人々は、宇宙の高い次元を知ることはできない。意識を目覚めさせることが緊急に必要である。そしてそれは、エクスタシーの間だけに可能である。もし弁証法的論理でエクスタシーを分析するなら、それが性的であるということを発見するであろう。性愛の喜びの中には性エネルギーが表現されている。これが変換され、昇華された時、意識を目覚めさせ、そしてエクスタシーを産み出すのである。

エクスタシーを失い、再び潜在意識へ落ち込むことは、宿命的不幸である。それはヘルメスの杯をこぼす時、起きる。

ある偉大なマスターが言った。「性の衝動によって、人は自然と最も私

的な関係になる。男によって経験させられる女の感情、あるいは女によって経験させられる男の感情と自然との関係を比較してみると、実際にそれは、森や谷や海や山によってもたらされる感情と同じものである。この場合の唯一の違いは、それがより強烈であり、より深い内なる声を目覚めさせ、より奥深いところの心の弦を引き鳴らすことである」。これがエクスタシーに到達する方法である。

エクスタシーは神秘的経験であり、その基本的原理は弁証法的論理に基づいている。この論理は決して破られることはない。たとえば経験における一致について考えてみよう。この原理は東洋の神秘家の間にも、西洋の神秘家の間にも存在するものであり、同様にエジプトの秘儀司祭やソーフィーの賢者、アステカの魔術師の間にも存在する。すなわちエクスタシーの間、神秘家は同じ普遍的言語を話し、同じ言葉を使い、そしてすべての創造物と結びついていると感じるのである。すべての宗教の聖典には、同じ原理が示されている。これが弁証法的論理、高等論理である。このことは、世界中のすべての神秘家は、同じ生命の泉を飲んでいるということを証明している。原因界の状態、すなわち弁証法的論理のもう一つの原理は、エクスタシーが現実で真実であることをまさに正確に示している。世界中の宗教の神秘家は、原因界の状態に関して完全に同意している。それは全くの同意である。

生命の単一性とは、弁証法的論理のもう一つの原理である。

エクスタシーの状態にあるすべての神秘家は、生命の単一性に気付き、それを感じている。無限の数学と弁証法的論理は、決して失敗することはない。しかしヘルメスの杯をこぼす者はみな、エクスタシーを失い、もはや直観力は弁証法的論理の中から除かれてしまう。それにもかかわらず、彼らは自分が超越的であると信じ、弁証法的論理を冒瀆し、しまいには途方もない愚行のうちに墮落してしまうのである。それは宿命的不幸である。

宿命の奈落に落ちたくないのならば、ノーシスを学ぶすべての人々は、黒タントラから、黒の性魔術を教える者たちから、遠く離れているべきである。

古代の古い学派に属する敵たちは、このカリ・ユガ（暗黒）の時代には非常に活動的である。

黒魔術師は、来たるべき時代に偽りの知識を押し広めるために、今の時代に途方もない大運動を展開している。彼らの望むのは、黒ロジの勝利

である。

ヨガの中のインフラセックス

ヨガの七つの学派は古く壮大ではあるが、暗い最後を免れることはできない。実際に、改宗者となりヨガの学派を作るインフラセクシュアルな人々（性的退廃者）が数多くいる。彼らは完全なる結婚の道を死ぬほど憎み、白の性の秘儀をひどく嫌っている。彼らのうちの何人かが黒タントラを教えている。それは宿命的不幸である。

本当のヨガは、白の性の秘儀を基礎とするものである。性の秘儀のないヨガはインフラセクシュアルな教えであり、それはインフラセクシュアルな人々に独特なものである。

『カーマ・カルパ』の中やタントラ仏教の中には、正当なヨガの基礎がある。アハムサーラ・ティヤカ（我の解体）とマイスナ（性の秘儀）は、本当のヨガの基礎である。アハムサーラ・ティヤカとマイスナはヨガの本当の総括である。

秘密仏教の僧院に住み込んだ者はみな、マイスナと「生まれ変わる我」の解体が、自己実現を果たしたヨギ・ババジの基礎を成していることをよく知っている。このヨギは独身ではなかった。マタジが血のつながった彼の妹であると考えた人は間違っている。マタジはババジの巫女としての妻であり、その妻によってババジは奥深い自己実現を達成したのである。

インド仏教は、禅仏教やチャン仏教と同じようにタントリックである。ヨガから白タントラを除外してしまえば失敗は目にみえている。それは宿命的不幸である。

中国と日本の仏教は、完全にタントラ的である。それらは、事実、明らかに、奥深い自己実現の道を歩んでいる。

神秘のチベットには、すばらしい性ヨガがある。チベットの偉大なマスターは、性の秘儀を実践してきた。



大日如来の手印

空海の建立した和歌山県高野山の金剛峯寺西塔の大日如来像。空海が中国よりもたらした密教の最も重要な仏がこの大日如来で、数多くの密教寺院の中心仏となっている。この仏の一大特徴は手印で、リング・ヨニ、つまり男根と女陰の交差を表している。密教のキーが、まさに性の中にあることを示している。

第二十六章

トーテム崇拝

わたしのすばらしい友人の一人が、インドから手紙を送ってきた。それによると、ヒンズーとチベットのタントリズムでは、射精をしないポジティブな性ヨガ（マイスナ）が実践され、準備のできている男女のカップルは、すぐれたグルの指導のもとで、ラーヤ・クリヤ（Laya Kriya）の実践を学んでいるということである。二人は互いに愛撫をかわしあった後、夫がペニスを膣へ挿入するタントリック・サーダナへと進む。男はアーサナの姿勢で足を組んで座り、女は男根を膣の中へ迎え入れる。二人は動くことなく長時間この結合のままである。その時、エゴや分析的な意識の入る余地を与えず、自然の行為に任せるようにする。そしてオルガズムの期待を排除する時、性愛の流れがエクスタシーを引き起こす働きの中に流れ込むというのである。この瞬間、エゴは溶解され（除去されて）、欲望は愛に変えられる。強烈な流れは電磁気の流れに似ていて、体の中を走り抜け、静的な効果を生み出す。言い表せないほどの恩恵の感動が、有機体全体を占め、二人は愛のエクスタシーと宇宙的交感を経験するというのである。

わたしの友人の話はここまでである。友人の名前は言わないことにする。この話は、ヨガの中のインフラセクシュアルな人々に嫌悪されている。彼らはインフラセクシュアルな狂信者をさらに増やすために、ヨガを実践したがっているからである。それは宿命的不幸である。

性の秘儀を除外したヨガは、水のない庭園、ガソリンのない自動車、あるいは血液のない肉体のようなものである。それは宿命的不幸である。

アステカの魔術

アステカの石畳の中庭では、長時間、男女が裸のまま互いに口づけし、抱擁しあって性の秘儀を実践した。イニシエイトがヘルメスの杯をこぼす罪を犯した時には、寺院の神聖を汚したかどで死を宣告された。その過失者は打ち首にされた。それは宿命的不幸である。

【スーフイズム】 イスラム教の中でも、特に神秘主義的傾向の強い宗教として知られる。

【アーサナ】 姿勢の意。広範囲に実践されているヨガ行法の八つの段階の内の一つ。数種のアーサナがあり、プラーナヤーマもその一つである。

唯物弁証法を信じる無知でかたくなな者は、トーテム崇拝を全く理解することなく批判するが、われわれはトーテム崇拝の偉大さを理解している。その教義は神秘主義の基本的原理に基づいているからである。

トーテム崇拝者は、すべての生物の進化を司る法則も、また生まれ変わりの法則も深く知っている。彼らはカルマが原因と結果の法則であることを知っているし、生きとし生けるものすべてがカルマの法則に従っていることを理解している。

偉大なトーテム崇拝者であるイニシエイトは、超視覚の能力を使って、あらゆる創造物の内的生命について調査してきた。彼らの科学的調査は彼らの教義に基づいており、無知でかたくなな唯物主義者などには全く知るよしもないことである。

トーテム崇拝者はあらゆる鉱物原子が、知性ある精の物質的体であることを科学的に知っている。彼らはこの鉱物の精が進化し、後に植物のアニマ(Anima)になっていくことも知っている。植物のアニマとは、植物の精霊のことであり、パラケルススは治療のためにそれをどのように使えばよいかを知っていた。植物を使って大嵐や地震を起こすこともできるし、遠隔治療をすることもできる。植物の精は全能である。なぜなら植物の精は決して性エネルギーを消費せず、姦淫もせず、それによってクンダリーニーを開発するからである。

トーテム崇拝者は、これらの植物の精が進化し、後に動物の精に変わっていくことを知っている。偉大な魔術師は動物の精を使う魔術に通じ、それによって驚くべきことを成すことができる。

トーテム崇拝者は、動物の精が完全に進化すると人間になることを知っている。十分に進化した動物の精は、すべて人間の体に生まれ変わるのである。

賢明なトーテム崇拝者である司祭は、もし人間が悪を行えば退化し、再び何らかの動物に逆行することがあると言っている。それは真実である。よこしまな人間はすべて、動物の状態まで後退する。また動物として何回

も生まれ変わることができるが、しかしそれからはアストラル界の動物に変わると言っている。このようにトーテム崇拝者の主張は正しいことがわかる。また実際に邪悪な人間が、獰猛な動物の体に生まれ変わることも十分に確かなことである。

他の例では、ある聖人のたいへん純粋な霊が、ある動物の種の中に生まれ変わり、その種を助けて意識の高い段階へ引き上げるといった場合がある。このことからわかるように、トーテム崇拝の原理は確かなものである。

トーテム崇拝者はカルマの法則を熟知していて、すべての人間の運命が前世からのカルマの結果であることを知っている。

トーテム崇拝の支配している種族では、伝統で定められているある特定の植物や鉱物の精を崇拝しているが、直接の経験からもそれを知っている。一般的にそのような精は、その種族に多くの援助を与えてきた。トーテムが樹木である時、彼らはその種の幹に人間の姿を彫刻する。

さて、われわれはケンタウルス、ミノタウルス、スフィンクスなどの半人間で半分動物であるような不思議な生き物について語っている神話や奇妙な伝説について、すべて説明することができる。これらのトーテム崇拝の奇妙な“イメージ”は、頭の固い唯物



主義者には決して理解することができない「真実の小箱」である。そこには智慧の宝石が入っている。そのような頭の固い物質主義者はただあざ笑うことしかできないのである。ヴィクトル・ユゴーは次のように言っている。「自分の知らないことを笑う者は、愚か者である」と。

トーテム崇拝では、トーテムとみなされる動物を殺すことは禁じられている。なぜなら、そのトーテムはその種の中で聖別されてきたもので、超視覚者だけが認識できる、特定の秘密の特質が結びつけられているからである。トーテム崇拝者であり賢者である司祭は、動植物の精を神性の乗物として崇拝している。そして十分に注意深い保護がその生物に対してなされ、その死に際しては、非常に神聖な祈禱式が執り行われ、数日間を喪に服するのである。このことは文明化した無知な人々には理解できないことである。なぜなら彼らは、大自然と縁を絶ってしまっているからである。しかし、トーテム崇拝の司祭は理解している。宗教的礼拝のすべての中にトーテム崇拝の痕跡が見られる。ヒンズー教徒は白い雌牛、カルデア人はつつましい小羊、エジプト人は雄牛、アラブ人はラクダ、インカ人はラマ、メキシコ人は犬とハチドリ、原始ノスティック・キリスト教徒は小羊と魚と白鳩をそれぞれ聖霊のシンボルとして崇拝した。

常に特定の動植物の精が崇拝されてきた。われわれはこれらの精が、全能の存在であることを認めなければならない。なぜなら彼らはエデンの園を出たことがないからである。

偉大な植物の精は、エーテル界、あるいは磁場の領域ですべての人類のために働く本当の天使である。

植物の精は性の秘儀のシステムによって生殖する。植物の精の間には、神聖なる結合が存在し、射精する必要もなく精子は子宮に入っていく。それぞれの動物は、精の体である。それぞれの植物は、精の物質的体である。これらの精は神聖な存在であり、エデンの園で驚くべきことを実現している。それらの中の最もパワーある精が、トーテムとして崇拝されているのである。

人が精液を漏らすことのない種の生殖を学ぶ時、エデンの園に入る。そこでトーテムの精に出会うことになる。これらの創造物は無垢である。

動物の精はもともと無垢である。愚かにも精液を浪費する動物もあるが、神聖なる火花はそれでも無垢であるから、そのことは責められるべきではない。この火花はいまだ生まれ出たことがなく、いまだに自意識を持たな

い存在である。その火花はそれが乗る乗物を持っていないのである。火花はその中に火を保留しているが、その火の単なる影であるエゴは、潜在状態のまま身体の形をとっている。

さらに純粹でより美しいのが、植物の精である。この精は神々のように生殖する。彼らは完全なる結婚に従っている。鉱物の精も完全なる結婚に従っている。彼らは互いに愛しあって生殖する。子供を持ち、言語と習慣を持っている。彼らは精液を浪費することはない。彼らは完全である。動物の精よりも完璧さを備えている。なぜなら、動物の精と違って、決して精液を浪費しないからである。

精はエデンで幸福に暮らしている。完全なる結婚の道に入るものはすべて、実際にエデンの園に入っていく。

神聖なる火を完全に開発することを成し遂げた人は、実際にエデンの園に入る。

クンダリーニーを完璧に開発すれば、エーテル体でエデンの園を訪れることが許される。

エデンの園はエーテル界にある。そこは目もさめるような青色の世界であり、幸福が統治している。エデンの園、そこは愛することを学んだ者が住むところである。

トーテムの神々

神々は存在し、キリスト教では彼らを天使、大天使、熾天使、力天使、座天使などの名で崇拝している。

無知で頭の固い唯物主義者は、人間が恐れから火、空気、水、土の神々を創り出したと信じている。学識はあるが無知な唯物主義者のこの見解は全くの間違いである。近いうちに特殊なレンズが現れ、われわれはそのレンズによってオーラやアストラル体、アストラルの世界、顕現していないエゴ、そしてアストラル界の神々を見ることができるようだろう。その時、学識はあるが無知な唯物主義者の愚かな主張は、すべて塵と化してしまうであろう。人類は言語に絶する神聖な神々を、再び崇め崇拝するようになるであろう。神々はこの世界が現れる以前から存在しているのである。

自然界の精

パラケルススはワシに乗って空を飛んだり、水の上を歩いたり、一瞬のうちに地球上の最も遠く離れた場所へ移動したりするために、自然界の精と科学の乗物を結びつける必要があると述べている。

これらの精の中には、われわれのアストラル・トリップを助けてくれるものもある。その精は国によって違うが、とげのあるリング、天使のコルネット、夜の花などとして知られている木の精であることを覚えておくとよい。そのような精は人間がアストラル体で抜け出すことを助けてくれる。ノーシスを学ぶ者にとって、いつも自分の家にその種の木があれば申し分ない。そしてその木の精の愛を獲得する必要がある。夜、木の精に集中し、“KAM”という音節を何度も発音しながら眠りに入る。そうすれば木の精は学徒の肉体からアストラル体を連れ出して、世界中のどんなに遠い所でも、無限の宇宙のかなたでも連れて行ってくれるだろう。信念と愛を尽くして頼むことを真に知っている人は、植物の精の援助を確実に受けることができるだろう。

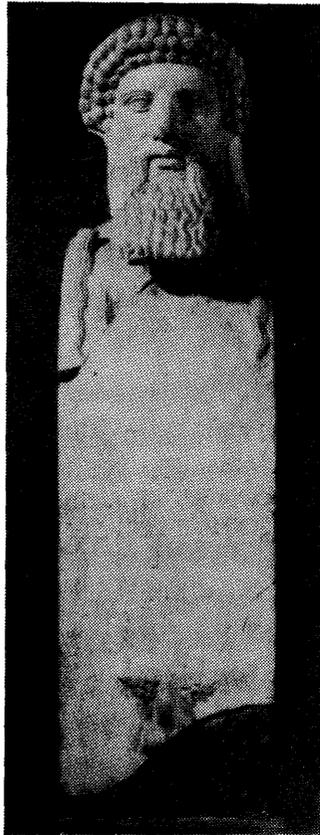
その木はパルーではフローリポンディオ (Floripondio) という名で知られ、ボリビアやコロンビアではイハントン (Higantón) という名で知られている。超常感覚機能を持つ人々の多くは、これを実践してすぐに成功する。一方、超常感覚機能を持っていない人々は、勝利を得るために大いに練習する必要がある。

- 【トーテム】 北米インディアンによるトーテム崇拝が代表的。動植物を人間と互いに守護しあうものとして、また自分たちの祖先として信仰し、それを樹木などに彫って崇拝した。これらの動植物をトーテムという。多くのトーテムが柱状に彫られたものをトーテムポールという。
- 【ケンタウロス】 ギリシア神話。上半身が人間で、下半身が馬。
- 【ミノタウロス】 ギリシア神話。牛頭人身。

第二十七章 聖なる男根崇拜

すべての宗教は性に起源を持っている。アフリカやアジアでは、リング、ヨニや生殖器への崇拜が一般的である。秘密仏教は性的であり、性の秘儀が実践的に教えられている。仏陀は性の秘儀を秘密のうちに教えた。そして、多くの男根崇拜の神々が存在する。インドのシヴァ、アグニ、シャクティは男根崇拜の神々である。

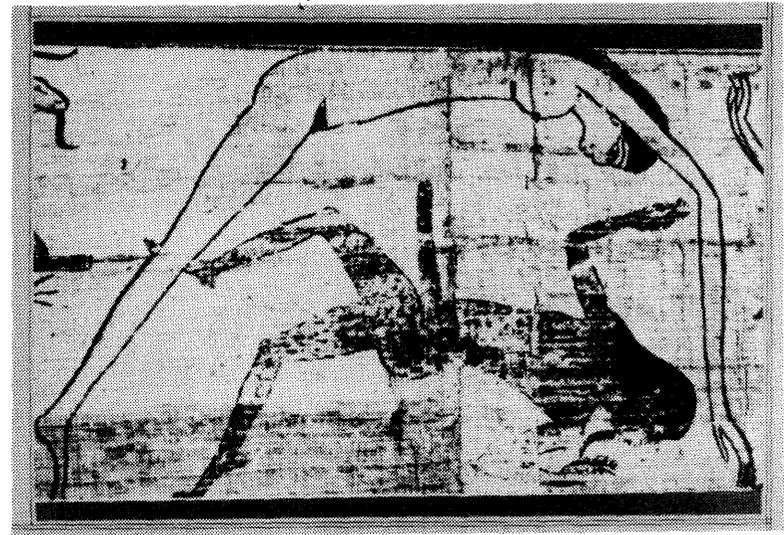
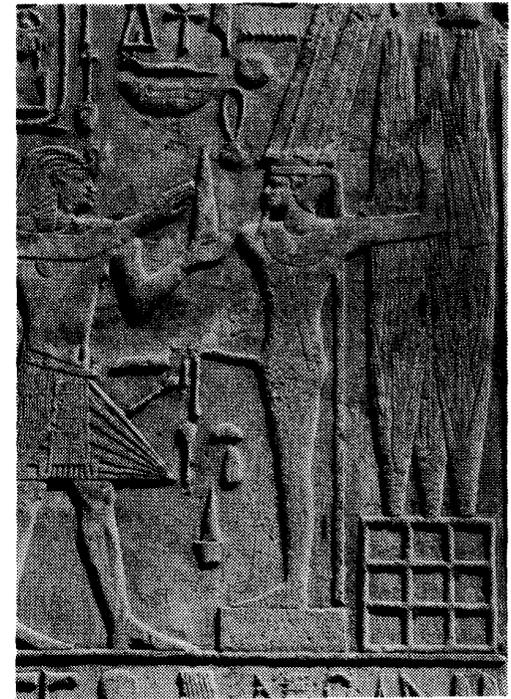
アフリカのレグバ、ギリシアとローマのヴィーナス、バッカス、プリアpos、ディオニソスなども男根崇拜の神々であった。



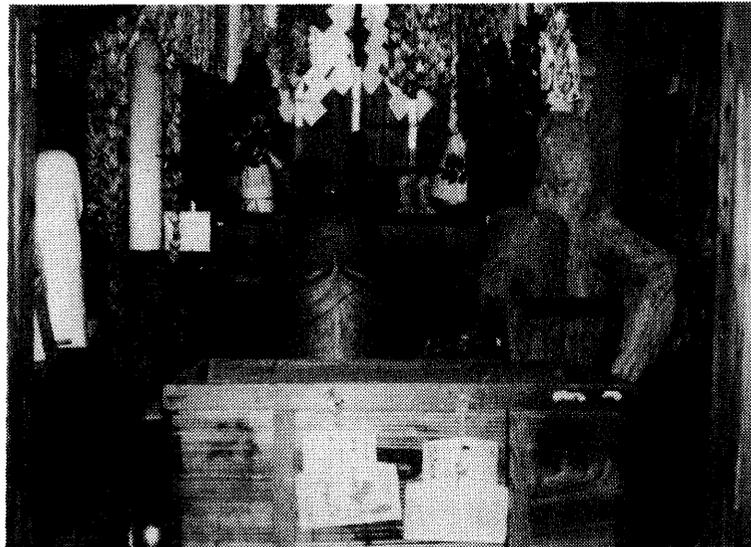
ヘルメス柱像

勃起した男根を持つ背の低い柱で、ギリシア・ローマ世界の各地で十字路を守護するために立てられた。ヘルメスとは、魔術・文学・医学・オカルトの智慧を司るギリシアの男神。彼は処女マイアから生まれた「秘儀を極めた者」であり、靈魂を冥界へ導いてくれる、「靈魂導師」と呼ばれた。また、彼は四大要素を意のままに操って、すべての物を黄金に変えることができたため、錬金術師の守護神となった。

エジプトの男根崇拜
上図はカルナック神殿の角柱に掘られた男根の神ミン神で、ファラオがミン神にパンを捧げているところ。カルナック神殿には、ミン神が数多く描かれている。下図はバビルスに描かれた天空女神ヌートと大地神ゲブ。両図はともに、エジプトで男根が深く崇拜されたことを示している。

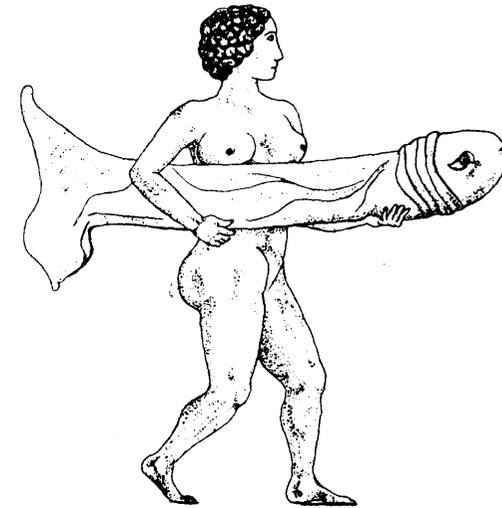


インドと日本の男根崇拜
 右図は、インドのリンガ
 (男根)柱。インドでは
 男根に神の顔を掘ったリ
 ンガ柱が広く崇拜された。
 下図は、川崎の金山(か
 なまら)神社で祭られて
 いる男根。子宝に恵まれ
 ない人が、数多く参拝す
 る。



ユダヤ人には男根崇拜の神々が存在し、性信仰に捧げられた神聖な森林
 を持っていた。時々その男根崇拜の祭司は、不幸にも墮落してしまうこと
 があった。それは、乱飲乱舞の酒神祭で自制を失ったからである。ヘロド
 トスがそれについて次のように言っている。「バビロンの女はみな、市民
 軍の寺院で僧侶と売春しなければならなかった」。

一方、ギリシアやローマのヴェスタ、ヴィーナス、アフロディーテ、イ
 シスなどの寺院では、巫女は神聖な性の務めを実習した。カッパドキア、
 アンティオケ、パンプロス、キプロス、ピロスでは、巫女が巨大な男根を
 運びながら祭りを祝った。巫女たちは男根を神のように崇め、生命と精子
 を生み出す根源としてこの上ない尊敬を払い、神秘的な高揚感に満たされた。



男根を運ぶ巫女

古代ギリシアの壺に記されたデザイン。女神デメテルの巫女が、聖なる
 男根を運んでいる。その男根は、魚の形で表現されているが、これは、精
 子を示すとともに、救世主のシンボルとなっている。

聖書の中にも男根崇拜に関する多くの言及がある。族長アブラハムの時
 代から、ユダヤ人は手をももの付け根、つまり神聖な男根の上に置いて、
 誓いを立てたのである。

秋祭りは有名なローマの農神祭に似た酒神祭であった。割礼の儀式は、
 完全に男根崇拜的である。

すべての宗教の歴史は、旧約聖書のミツバーやキリスト教の五月柱^{マイボーム}などのように、シンボルや男根のお守りでいっぱいである。古代では男根の形をした神聖な石が崇拜されたが、ある時それは男性生殖器に、またある時は女性生殖器に似ていた。そして火打石と珪土の岩は神聖なものと考えられてきた。なぜならそれらは神の恩恵として、異教の司祭の脊髄で、秘密に開発される火を生み出すことを助けたからである。

キリスト教の中には多くの男根崇拜が見られる。イエスの割礼、主顕祭、キリスト聖体祭などは、異教の神聖な宗教から受け継がれてきた男根崇拜の祝祭である。

鳩は、聖霊のシンボルであり、うっとりさせるようなヴィーナス、アフロディーテのシンボルでもある。この鳩は、聖霊が処女マリアを受胎させた時の男性生殖的手段としていつも表現されている。また同様に、“きわめて神聖な (sacrosanct)” という言葉は、“仙骨 (sacro)” という言葉から派生したもので、男根崇拜を起源とする言葉である。



マリアの処女懐胎

男根崇拜はきわめて神聖なものである。それは超科学的であり、哲学的にも奥深いものである。すでにアクエリアス (水瓶座) の時代は到来しており、科学の実験室でも男根と子宮のエネルギー的、神秘的原理が発見されるであろう。

性腺は天王星^{ウラヌス}に支配されており、実験科学によって新時代に発見されるであろう恐るべき力を内に秘めている。やがて古代の男根崇拜の科学的価値が、公に認められるようになるであろう。

種子の中には宇宙生命のあらゆる可能性がある。しかし現在の唯物科学は、自分が理解できないことを、無視するか、あるいはばかげたやり方で批判するということしかない。

アステカ寺院の石造りの中庭では、男女がクンダリニーを目覚めさせるために性的に結びあった。そこでは夫婦であるカップルが何ヵ月も何年もの間、互いに愛しあい、抱きあって、射精をせずに性の秘儀を実践した。

射精をするに至った者は死刑の宣告がなされ、彼らの頭は斧で切り落とされた。このようにして彼らは神聖なものを冒瀆したことに對する償いをしたのである。

エレウシスの密儀では衣をまとわずに踊る舞踏と、性の秘儀とは同じ神秘を基礎としていた。男根崇拜は奥深い自己実現の基礎である。

メーソンの重要な道具はすべて石の仕事をするために役立つものである。メーソンのマスターはみな、自分の賢者の石をうまく彫刻しなければならぬ。この石とは性を表すものであり、われわれはその生きた石の上に永遠の寺院を建てなければならないのである。

性と蛇

名前は言えないがあるイニシエイトの言ったことをそのまま伝えよう。

「蛇の力を完全に支配すると、いかなることも成し遂げられる。山を動かし、水の上を歩き、空を飛び、封じられた箱の中に入って土の中に埋められ、いつでも決められた時間にそこから出て来ることができる」

「古代の司祭は、ある条件のもとでオーラが見えることを知っていた。またクンダリニーは性を通して覚醒させることができるということも知っていた」

「下方に渦巻いているクンダリニーは恐るべき力であり、それは渦巻き

の形をした時計のぜんまいに似ている。それが突然飛び出してほぐれてしまう時計のぜんまいのようであれば、損傷を与えかねない（射精するという罪を犯す者のこと）」

「この特別な力は脊柱の基底部に位置しており、実際、その一部は生殖器の中にある。東洋人はこれを理解していた。あるヒンズー教徒は宗教儀式に性を活用していた。彼らは特別な成果を得るために、様々な性の体位を駆使し、性の秘儀をいろいろな形で実践した。そしてそれを達成した。何世紀も以前に古代の人々は性を崇拜し、男根崇拜に到達したのである。寺院ではクンダリニーを刺激するある種の儀式が行われた。クンダリニーは超視覚やテレパシー、その他多くの秘教的なパワーをもたらした」

「性、それは愛情を込めて正しく実践される時、何らかのバイブレーションを生じさせる。性は、東洋人が言うところの蓮花を開かせるものであり、それによって魂の世界を享受することができるのである。そして性はクンダリニーの出現と、あるセンターの目覚めを促進させることができる。しかし絶対に性とクンダリニーを乱用してはならない。性とクンダリニーは、互いに補いあって、助けあうべきである。夫と妻の間に性行為を認めないという宗教は悲劇的な誤りである」

「性経験はあるべきでない」と主張する宗教は、個人の革新と人類の革新の息の根を止めようとするものである。次の例を見てみよう。磁気学によれば磁力は一定の方向に物質の分子の向きがそろうことで得られる。すなわち通常、鉄片の中ではすべての分子が規則を守らない群衆のように、全く不規則な方向に向いている。それらの分子は偶然結合するかもしれないが、しかし一定の力（鉄の場合は磁力）がかかると、すべての分子は一斉に一つの方向へ向き、磁力を持つようになる。この磁力がなければ、ラジオも電気も存在しないし、道路や鉄道や飛行機の輸送機関もないだろう」

「人間がクンダリニーを目覚めさせる時、すなわち火の蛇が活動を始める時、体の中の分子はすべて同一の方向に整列する。なぜならクンダリニーの力が目覚めると、そのような効果が得られるからである。人間の体が健全な振動を開始すると、知覚が強められてあらゆるものを見ることができるようになる」

「クンダリニーを完全に目覚めさせるにはいろいろな方法（タントラ的な体位）がある（『カーマ・カルパ』の中に、そのすべての体位がある）。しかし、実際にそれを行う準備のできた人以外は行うべきではない。なぜ

なら、それは他の部分をも目覚めさせる強力なパワーと支配力を持っているからであり、その力は悪用されて邪悪なことのために利用され得るからである。しかし、クンダリニーは結婚した二人の愛のセンターを通して活気づき、部分的にあるいは完全に目覚めさせることができる。真の奥深いエクスタシーによって、体の分子が一つの方向に向かって揃う。このようにして人々は、偉大な力強いパワーを開発するのである」

「性についての偽りのつつましさを偽りの教えが改められる時、もう一度、真のあるべき姿に到達するであろう。もう一度、アストラル旅行者としての地位を取り戻すことができるであろう」。

男根崇拜は世界と同じくらい古い。性はクンダリニーを助け、クンダリニーは性を助ける。性もクンダリニーも乱用されるべきではない。性の秘儀は一日に一回だけ行うべきである。

「男と女は骨に皮を付けた、単なる原形質の固まりではない。人間はそれ以上の何かであるし、またそうなり得る。この地上では、われわれは魂の単なる操り人形である。この魂は肉体を通して経験を蓄積するアストラル体の中に、仮に住んでいる。肉体は操り人形であり、アストラル体の道具である」

「生理学者たちは人間の体を分析して、すべてを皮と骨の固まりに引き下げてしまった。彼らはあれこれの骨やそれぞれの器官について論議することができるが、それらはすべて物質としてだけである。キリスト教よりも何世紀もずっと前から、インド人や中国人やチベット人がすでに知っていた手に触れることのできない最高の秘密を、生理学者は発見したことも、また発見しようとしたこともなかった。背骨は実際には大変重要な組織である。それは脊髄を包んでおり、もしそれがなければ人は麻痺した状態であり、人間として使い物にならない。しかしこれらのこと以上に、背骨は最も重要なものである。実際、脊髄神経の中央には、他の次元（四次元、五次元、六次元……）へ広がる導管がある。それはクンダリニーとして知られる力が目覚めた時に通る導管である。脊柱の基底部には東洋人が火の蛇と呼んだものがある。これはまさに生命そのものの座である」

「一般的な西洋人は、この偉大な力は活動しないまま眠っていて、その力を使わないためにほとんど麻痺している。実際それはとぐろを巻いた蛇、強大なパワーを持つ蛇のように見える。しかし種々の理由（いわゆるみだらな姦淫）から、今のところ幽閉から逃れることができない。東洋では蛇

の神秘的表現はクンダリニーとして知られている。それが覚醒すると蛇のパワーが脊髄神経を通して前進し、直接、脳に向かって進み、さらにそれを越えてアストラル体にまで上昇することができる。この活力に満ちた強大なパワーが上昇し、それぞれのチャクラ、すなわちへそやのどやその他のパワーの中樞が目覚めると、その人は生き生きと力強く、自分を支配できる力を持った人間に変容する」。

男根崇拜、クンダリニーの覚醒、性の秘儀は正しく愛を持って行えば何ら危険はない。性の秘儀は夫と妻の間だけで実践されるべきであり、乱用する者、家庭の外ではかの女と行う者は必然的に失敗する。

インフラセックスの学派

世界には男根崇拜と性の秘儀を非常に嫌う退廃した性の学派が多数ある。知識を愛する人は、インフラセクシュアルな人（性的退廃者）になりたくないのならこのような学派を避けるべきである。

インフラセクシュアルな人はノーマルな性も高次の性も忌み嫌うということ覚えておく必要がある。インフラセクシュアルな人はいつの時代も第三ロゴスを冒瀆し、性をタブー、罪、恥ずべきもの、ペテンなどとみなしてきた。彼らは性を憎むことを教える学派に属し、自分を大聖や秘儀司祭などと思い込んでいる。

知識を愛する人々は、インフラセクシュアルな人々の前でしばしば混乱に陥った。彼らは確かに隠者や信心深い人のように、神秘的で神聖な風采をしている。ゆえに、もし人々が確かな理解力を持っていないならば、容易にインフラセクシュアルの道を通して邪道へ導かれてしまう。

イニシエーションと蛇

男根崇拜と性の秘儀なしでは、大密儀のイニシエーションを受けることはできない。

多くの独身の純粋な学徒は、最高の超越意識状態で小密儀のイニシエーションを受ける。しかし大密儀のイニシエーションは性の秘儀とクンダリニーなしでは達成することはできない。

しかし小密儀は試補（見習い）の道にほかならない。それは破られな

ればならない鎖であり、秘教学徒の幼稚園であり、初歩読本である。男根崇拜は人間を奥深い自己実現へ導く唯一の崇拜である。

【レグバ (Legba)】 ヴードゥー教の男神で、勃起した男根を持つ性神であると同時に、両性具有の神でもある。

【カッパドキア】 トルコの中央高原を占める地域の古名。

【アンティオケ (Antiochia)】 現在は、トルコ南部のシリアとの国境近くにある小都市。前64年ローマがシリア王国を滅ぼすとともにローマの属州シリアの首都として栄えた。キリスト教の異邦人世界への伝播の最初の基地であった。

【パンプロス】 未詳

【キプロス】 地中海東端の島国。ギリシア系住民とトルコ系住民の対立が根深い。

【ピロス】 未詳

【秋祭り】 The Feast of Tabernacles. ユダヤ人の三大祭りの一つ。祖先の荒野放浪記念の秋祭り。仮庵の祭りともいう。

【割礼】 男子の陰茎の包皮を切開する儀式。古くからエジプトなどで広く行われていた。はじめは結婚と関連した男子の成人儀式の一つであった。しかし後に、ユダヤ人は異邦人と区別するための民族共同体のしるしとして、また神の民であることとしるしとして、この儀式を重視した。

【ミツバー】 Hebrew Mitzvah. 旧約聖書に記され、またこれから引き出された 613項目の戒律。

【五月柱】 ^{マイポール} 5月1日の春祭り。広場に立てた高い柱を花やりボンで飾りその回りを踊る。

【主顕祭】 イエスが東方の三賢者、すなわちユダヤ教世界以外の人々の前に現れたことを記念する祭。クリスマスから12日後。

【仙骨】 尾骨とともに脊椎の基底部を構成する骨。尾骨の上部で、骨盤の後壁をなしている。クンダリニーは、この仙骨の付近に、蛇のようにとぐる（3回半）を巻いた状態で眠っている。

第二十八章

火の崇拜

古代ペルシアでは、火の崇拜が壮大に行われていた。火の崇拜の歴史は非常に古いものである。この崇拜はアケメネス朝やゾロアスターの時代よりもさらに古い時代からあったと言われている。ペルシアの司祭は、火の崇拜と関係するたいへん壮麗な秘教儀式を行っていた。また古代ペルシアの賢者たちも、決して火を不注意に取り扱うことはなかった。彼らには火を燃やし続けるという使命があったからである。そしてアベスタ（ゾロアスター教の聖典）の秘密教義には、特別な火が存在していたことが述べられている。恐ろしい夜に光る雷の火、人間の有機体の中において熱を生じさせ消化の過程を導く火、自然の無垢な植物の中に集中している火、山の内部で燃えている火山の火、アフラマズダの前で神々しい光輪を形作る火、人々が料理をするために毎日使う火など、様々な火がある。ペルシア人の言い伝えでは、沸騰した湯をこぼしたり、火傷をしたりするような場合に、神はその特権を持つ人々に、愛情のこもった恩恵を与えるのをやめると言われている。

実際に火は様々な姿を持っている。しかし、それらの火の中で最も力強いものは、アフラマズダ（太陽ロゴス）の前で神々しい光輪を形作りながら燃えている火である。この火は性分泌液の変換の結果、生ずるものである。これがクングリニーであり、われわれの魔術的力である火の蛇であり、聖霊の火である。

アフラマズダの火を発見したいのなら、自分の哲学的大地の内部にそれを見つけるべきである。その大地とは人間の有機体である。ペルシアの司祭は完全に暗い場所、地下の隠れた寺院や秘密の場所で、この火の開発に努めた。祭壇は、いつも賢者の石の上に据え置かれた金属製の巨大な聖杯であった。乾いた香木、特に香り高い白壇の枝が、いつも火にくべられた。老司祭は必ずふいごを使って火を吹いた。というのは人間の口から吐き出される罪に汚れた息で、火を冒瀆することのないようにするためである。

あなたがたの聖杯を、神聖な光のワインで満たしなさい。親愛なる読者よ、秘密の生きている賢者の火は、あなた自身の賢者の大地で燃えている

ことを覚えておきなさい。そうすればあなたがたは、火の儀式の秘教的神秘を理解することができるであろう。

二人の司祭が常に火の番をしていた。ここに二元性がある。彼らはそれぞれ火箸を使って木の幹をくべ、スプーンを使って香を焚いた。そこには二つの火箸と二つのスプーンがあった。これらの中にわれわれは二元性を見ることができる。このことから、「2」という数字だけが火の世話をすることができるということがわかる。完全なる二元性としての男と女が火をつけ、そしてアフラマズダの神々しい火の世話をすることが必要なのである。

福音の儀式であるブンデッシュ(Bundehesch)では、聖水の井戸のある特別な部屋があったと言われている。司祭はその聖水で、火の祭壇へ行く前に斎戒沐浴した。純粋な生命の水を飲む者だけが、火をつけることができる。また放棄（自制）の水で足を清める者だけが火をつけることができるのである。火の儀式を行うことができるのは、水を保存する者だけである。この水は精液のエッセンス（エンス・セミニス）を象徴している。

ペルシアのいたる所に、入り組んだ寺院の廃墟があり、そこには火を崇拜する控えの間があった。これらの遺跡は今日ではペルセポリス、イスファハン、エズド、パルミラ、スーザなどで発見されている。

火はきわめて神聖なものである。「完全なる結婚」の道を歩む者の家では、決して火を絶やすことはない。深い信仰を込めたらうそくの火は、常に「祈り」と同じであり、それは神聖なエネルギーの巨大な流れを高次から引き寄せる。ロゴスへの祈りは、すべて火を伴うべきであり、そうすることで祈りはさらに強力なものとなる。

火の崇拜に戻るべき時がやって来た。ノスティックは、山歩きにでかけ、母なる自然に抱かれて、焚き火を起こし、火をつけ、祈り、瞑想すべきである。このようにして、われわれは高次からの神聖なエネルギーの強力な流れを引き寄せることができる。このエネルギーが父の偉大なる仕事において、われわれを助けてくれるのである。

人間は性の秘儀を通して「49」の火をつけるべきである。われわれの想念が火のように燃えている時、宇宙の神聖なる神々のように創造することができる。神聖なる神々は、まさに火の長である。神聖なる神々はめらめらと燃える炎である。

踊るダーヴィッシュ

トルコと同様に、ペルシアにおけるダーヴィッシュ（修行僧）の神聖な踊りも、火の崇拜を基礎とするものである。アンゴラの権威者が自分たちを文明人と思い込み、これらの踊りを公的に禁止したことは恥ずべきである。

ダーヴィッシュは、太陽を回る太陽系惑星の動きを驚くべき方法でまねている。その踊りは、脊椎と性の火に深く関係している。エジプトやインドの蛇使いが示してきたように、われわれは蛇が音楽と踊りを楽しむということを決して忘れるべきではない。蛇使いがすばらしい笛を奏でると、蛇はうっとりとして踊り出す。

ここで、古代のあらゆる寺院で行われた火の儀式的踊りを思い起こすことにしよう。エレウシスの密儀の中の衣をまとわずに踊るダンス、またインド、エジプト、メキシコ、ユカタンなどの聖なる踊り子を思い出してみよう。科学者がアカシック・レコードを手中にし、世界中の人々が古代の火の踊りをテレビで見ることができるようになったならば、われわれは必ず世俗的な踊りにとって代わって、火の踊りを舞うことになるであろう。



踊るダーヴィッシュ

エジプトの暗闇

何年前か前、ギリシアやロシアでは名の知られたアトス修道院の邪悪な僧たちは、壺の中の“エジプトの暗闇”を売って、多額の金もうけをすることに専念していた。瓶につめた黒い粉が、“エジプトの暗闇”として売られるとはばかげたことである。この“エジプトの暗闇”なる言葉は、古代の比喩的言葉である。これはマントで身を包み、物質世界には目を向けず、しかし魂のすばらしい光を保ち続けながら、世界の暗闇の中に留まるエジプト人を表しているのである。

“エジプトの暗闇”の中には、実際に多くの賢者が存在している。彼らはアメン・ラーの神聖な火で輝いている。

生気を保留した状態で、生きたまま埋められた多くのエジプトの賢者が存在する。彼らは白ロジの計画に従って、目覚めさせられるその日その時が来るまで、地下埋葬所で深く眠っている。彼らのうちの一人に、紀元前三千年も前から眠ったままでいる者がいる。また他に、紀元前千年の時から眠っている者もいる。それもみな同じ格好で眠っているのである。彼らの肉体は“エジプトの暗闇”の中にあるが、その霊体は高次の世界で人類のために精力的に働きながら、意識を持って生きているのである。

その日その時、それぞれのアデプトは、兄弟たちによって地下埋葬室から連れ出され、目覚めさせられるであろう。そしてこれらのエジプトのアデプトたちは、精神的な新しい時代をつくり始めていくであろう。彼らはその記憶の中にすべての古代の知識を保存している。

興味深いことに、これらのアデプトの体は棺の中で適切に包帯で巻かれて保護され、食べることも飲むこともせずに眠っている。しかし彼らの有機体のあらゆる機能は生気を保ったままの状態にある。ある不思議な神秘的物質が有機体を保護しているのである。また恐ろしい警備の精が、彼らの地下埋葬所を守っており、考古学者でさえ誰一人として近づくことはできない。

数千年の後に埋葬所から出ることや、何世紀もの間、食べることも飲むこともせずに自分を保存することは、火のパワーと火の崇拜だけが可能とするものである。アデプトたちはすべて、性の秘儀を熱心実践してきた。火の蛇だけが、アデプトにこのような恐るべきパワーを与えることができるのである。

ヤーヴェ

記憶のサロン（アカーシャ）には、ヤーヴェという天使の経歴が書かれている。偉大なカバラ秘術師であるアンティオケのサチュルニウスは、ヤーヴェが墮ちた天使であり、また悪の天才、魔王、恐ろしく邪悪な悪魔であると言った。ヤーヴェは荒野でクリストを誘惑した悪魔である。クリストを高い山へ連れて行き、次のように言った。「イタバゴ、もしあなたがひれ伏して私を拜むなら、この世のすべての国々をあなたにあげましょう」（マタイ4:1-11）。そしてヤーヴェは、ユダヤの人々のことを“私のお気に入り^{私の}の民”と呼んだ。

ユダヤ人は故意にヤーヴェと主エホヴァを混同した。ヤーヴェはレムリアの秘儀司祭であった。彼は人間の体を持った天使であり、巫女である妻がいた。マスター・ヤーヴェは光の戦士、そして力の光線の偉大な司祭でもあった。高い聖職の位にあったので、よろいかぶと、それに純金の楯と剣を使う正統な権利を持っていた。またヤーヴェの妻も聖職にあって、すぐれたアダプトの貴婦人であった。

古代においては、戦士階級と聖職階級とはそれぞれ独立した職分を果たしていた。しかし例外があってヤーヴェの場合は、司祭であると同時に戦士でもあった。

レムリア大陸の周囲には、“古代の地球であった月”のルシファーたちが漂っていた。彼らは改宗者を探し求めていた。そして見つけた。ヤーヴェはそのような改宗者の一人であった。ヤーヴェはそのネガティブな月の邪悪な弟子になり、ヘルメスの杯をこぼす黒の性魔術を実践した。これは退廃したボン教と紅帽派の教えでもある。それは宿命的不幸の結果となった。火の蛇は下降し、人間の原子地獄へ向かって落ちていった。そしてついにヤーヴェは、恐ろしく邪悪な悪魔に自らを変えてしまったのである。

アカーシャの中にこの歴史が書かれている。ヤーヴェはレムリアの黒タントラの寺院の一員となってしまった。聖職にある彼の妻は、ヘルメスの杯をこぼす性魔術を決して受け入れなかった。しかし、ヤーヴェは他の女の誘惑に落ちてしまったのである。ヤーヴェは巫女である妻を説得したが、果たせなかった。彼女は黒魔術の寺院へ入ることを拒み、そこで結婚関係は終わった。黒の道に入ることを望まなかったこの女性アダプトは、今では高次の世界のたとえようのないほど神聖な天使となっている。

火の崇拜はたいへん精妙なものである。火の神々は、完全なる結婚の道に従う者すべてを守護している。

世界の時代

人類の歴史を金の時代、銀の時代、銅の時代、鉄の時代と区分できることは、恐るべき事実である。惑星の火はこれら四つの時代を通して進化し、そして退化する。惑星地球の火は、すでに過ぎ去った三つの時代と“古代の地球であった月”の時代にほんの少しの利益を与えただけである。この火は、カルマで満ちている。それは惑星地球における人類の失敗のためである。

時代の周期は交互に展開する。偉大な神秘的インスピレーションと無自覚の生産の時代は、別の時代（絶えざる批判と自意識の時代）へと続く。一方の時代が、他方の時代を分析し、批判するための材料を与える。精神的な獲得の領域では、仏陀とイエスが魂の最大の獲得を代表しており、マケドニアのアレキサンダー大王と英雄ナポレオンが、物質界の征服を代表している。これらの人たちは火によって再生された。人間類型の再生は、一万年も前からすでに存在している。その一つ前の千年期を映すイメージは、火の神秘的なパワーによって再現されたのである。

「上にあるがごとく、下にもある。過去にあったことは、再び繰り返される。これは天にあることは、地上でもあるということである」。

もしわれわれの地球の火が“古代の地球であった月”の時代や、過ぎ去った三つの時代の生命の期間に完全に進化していたならば、地球は真の楽園になっていたであろう。不名誉にも地球の火は、宇宙的なカルマでいっぱいである。

重大な問題

すべての人類、すべての個人の総計は、アダムカドモン（原型的人間）であり、ホモサピエンスという種であり、スフィンクス（動物の体と人間の顔を持つ生物）である。

人間は多くの大小様々な生き物の構成単位となっている。われわれがその一部を成している生き物とは、家族、町、宗教、祖国などである。



心理的付着物

われわれのマインドに巣くう多数のエゴが、われわれを驚くほど醜い存在としている。彼らは、われわれに寄生し、エネルギーを消耗させ、われわれを奴隷としている。

われわれ自身の内部には、多くの知られざる生き物が存在する。多くの「我」は互いに戦っており、多くの「我」は互いに理解しあわない。人間がアダムカドモンという偉大な精神的体の内部で生きているように、「我」のすべても人間の内部で生きている。

人間の内部に住むこれらの複数の「我」は、ちょうど人間が都市や町や宗教団体などの中で生きているのと同じである。都市の住人が互いに知らないように、九つの門のある都市（人間）に住む複数の「我」もまた、互いに知らないのである。これは重大な問題である。

いわゆる「人間」は、いまだ真の実体を持っていない。人間はいまだ成就されていない存在なのである。

人間はまさしく、たくさんの人が住んでいる一軒の家に似ている。また人間はたくさんの旅客（たくさんの「我」）が乗っている一隻の船のようである。各人が、それぞれ自分の考え、自分の計画、自分の欲求などを持っている。

火に熟練する仕事に熱心に働く「我」が、後にその仕事を嫌う別の「我」にとって代わられる。仮にヴァルカンの鍛冶場で熱心に働くことを熱望し始めたとしても、後に幻滅を感じてそれから離れ、わずかの慰めしか与えてくれないありふれた学派の中に避難してしまうのである。もっとも、さらに後に、別の「我」がそこから彼を連れ出しに来るようなこともあるが。これは重大な問題である。

さらに人間の内部には、多くの不健全な訪問者がいる。それは都市の中に、好ましくない人々や悪い習慣を持つ人々が多く入ってくるのと同じである。このようにして、九つの門のある都市（人間）の悲劇は繰り返されていくのである。ある時、都市の内部に動物的欲望を刺激する悪意ある者が入り込んでくる。人間は何が自分の内部で起こっているのかを全く知らない。不幸にも人間の意識の97%は潜在意識である。それゆえに、これらの不健全な居住者が完全に人間の脳をコントロールする時、通常ではありえないようなことが起こるのである。聖人でさえそういう不運な瞬間には、姦淫をしたり、殺人を犯しても何ら不思議ではない。

九つの門のある都市には、そこに住み着き、また訪ねて来る多くの目に見えない存在がある。それゆえ、火の仕事に熟練することはたいへん困難である。これらの謎の存在、すなわち「我」は、それぞれが自分勝手な考えと習慣を持っている。なぜ、このように多くの問題がこの家に存在する

のかを説明しよう。男が自分の恋人に夢中になっても、翌日にはその女を捨ててしまう。きょうは夫に忠実な妻であっても、翌日には他の男と駆け落ちをしてしまう。これが重大な問題なのである。

人間の心理の中の考えは、次から次へと変化してとどまることがない。マインドの中には、印象、出来事、感情、欲望などの連続する映画フィルムがあり、その一つ一つが与えられた時間だけ完全に「我」を決定づけている。九つの門のある都市には多くの人々が住んでいる。これは重大な問題である。火の崇拜は大変困難である。なぜなら九つの門のある都市には、火の崇拜を嫌う人々が多く住んでいるからである。

肉体は四次元の体、リング・サリーラ、生命体の一部分にしかすぎない。同じように人間のパーソナリティも、人間の体の四次元的なもう一つの部分である。エゴ（複数の「我」）は、人間のパーソナリティを凌駕する部分である。パーソナリティは死んでも、その記憶はエゴの中に残るからである。

愚かにも知的動物は、霊や魂について何も知らない。この動物は、いわば人間性の標準レベルにはほど遠い。

人間は半覚醒状態であるため、肉体とパーソナリティとエゴは互いに関知しあわない状態にある。このように普通の人間は、霊や魂を知ることほとんどないのである。

実際に、肉体とパーソナリティとエゴという人間の三つの低い側面は、麻酔の影響やトランス状態、催眠状態や霊媒状態、眠りの間や、エクスタシーなどを通して互いに知ることができるだけである。

スフィンクスの神秘とは「人間」である。人間の頭を持った動物とは人間のことである。スフィンクスの問題が解決されない限り、われわれは地獄の奈落へ落ちてしまう。

火に熟練する仕事を働くすべての者は、毎日、秘密に存在する父に対して熱心に援助を願うべきである。

イエスは強固な意志のむちで、寺院から商人を追い出した。この時に実現した奇跡をわれわれの内部で再現するために、緊急に内なる神に嘆願する必要がある。父に愛された者だけが、われわれの意識の寺院から、これらの侵入者である「我」を追い出すことができる。その寺院の商人たちは、偉大な仕事を汚しているのである。彼らは、寺院のろうそくの火を消す悪意ある者たちである。これは重大な問題である。

実際にこれは、やいばの刃先の道である。この道は内も外も危険で満ちている。「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」（マタイ 22:14）。

四つの福音書

四つの福音書は、火に熟練する仕事と深い関係がある。愚かにも四つの福音書を死んだ言葉で訳してしまっている。福音書は完全に象徴的である。ベツレヘムの馬小屋での誕生は、金星のイニシエーションを象徴している。キリストはいつも人間という馬小屋で、欲望という動物に囲まれて、世界を救うために生まれるのである。

エクスタシーの間、すべての神秘家は星を見る。これは三博士が見た星である。この星は中心太陽であり、声の軍団によって形作られるキリスト太陽である。これはイニシエーションを宣言する星であり、火の帰依者を導く星である。

イニシエーションはいつも、生命の水を錬金術師の光のワインへ変換するカナン^カの奇跡によって始まる。この奇跡は完全なる結婚によってなされるのである。

われわれは神秘的力を持つ火の蛇を、父のゴルゴタの丘（脳）まで上昇させなければならない。

火に熟練する仕事で、真の帰依者はイニシエーションのドラマのすべてを生きなければならない。四つの福音書にはその鍵が書かれてあり、イニシエイトだけがそれを理解することができる。秘儀司祭であるイエスは受難のドラマを生きた最初の人でもなく、また最後の人でもない。そのようなドラマは、自らをキリスト化しようとするすべての人々によって生きられてきたものである。古代宗教の聖なる書物を調査する人はすべて、イエス・キリストの何百万年も前に、このドラマが存在したことを発見し、驚くであろう。すべての偉大なアヴァターラたちは、キリストと同じ受難のドラマを生きた。彼らはイエスと同じ役割を演じたのである。

偉大で完全なるマスター・イエスは、すでに書かれたドラマのすべてを生きた。しかし、われわれは四つの福音書を死んだ言葉で訳すべきではない。イエスの時代には、ベツレヘムの村は存在しなかったということ思い出しみなさい。

四つの福音書は、火の崇拜者のための実用的なガイドである。アルカー

ノA・Z・Fの秘密を知らない者は、火の四つの福音書を理解することはできない。

母なるクダリニー

クリストは常に聖なる母クダリニーの子である。彼女は常に第三ロゴスの仕事と恩寵によって、子をはらむ。彼女は出産以前も、出産中も、また出産後も常に処女である。エジプト人の間では、処女はイシスである。またヒンズー教徒の間ではカーリー（そのポジティブな面）、アステカ人の間ではトナンツィンである。彼女はまた、レア、キュベレ、マリア、アドニア、インソベルタなどである。



銭洗弁天

聖なる母は日本では、観音あるいは弁財天（弁天）と呼ばれる。この写真は鎌倉の銭洗弁天。彼女の体は聖なる蛇（クダリニー）に巻かれている。聖なる母に深く祈る時、彼女は必ず、われわれを助けてくれる。

クダリニーを開発し、進化させる過程がなければ、言葉を具現することはできない。ノーシスの儀式にはこの祈りが書かれている。

「おお、ハデット（Hadit）、翼のはえた光の蛇よ、わが存在の源のノーシスの神秘となりたまえ。われをつなぐ中心点となりたまえ。神聖なる球体と天空の青はわがものなり。

「^オ ^ア ^カ ^ク ^コ ^ノ ^ナ ^キ ^ホ ^ソ ^ノ ^サ」
O AO KAKOF NA KHONSA」。

火の崇拝者は妻と性の秘儀を実践している間、この祈りを唱えることができる。この祈りのマントラは、性エネルギーを昇華する力、ノスティックの質料を心臓にまで至らせる力を持っている。

イニシエイトが肉体をヒーナスの状態にしたり、高等魔術の様々な奇跡のために聖なる母クダリニーに祈る時、彼女はきわめて純粋な処女として、またすべての崇拝すべき母として現れる。彼女の中には、すべての転生におけるわれわれの心から愛すべき母がいるのである。

母なるクダリニーは脊髄の経路を通して上昇する火の蛇である。われわれは蛇に飲み込まれる必要がある。まさに蛇そのものになる必要がある。

蛇を完全に目覚めさせ開発したと思っているにせの秘教家は、大変な間違いを犯している。クダリニーは、完全に開発し終わるまで、育成し、進化させなければならないのである。性はクダリニーを助けるべきであり、クダリニーは性を助けるべきである。性やクダリニーを乱用してはならない。

七つの蛇は、七つの光の蛇の中に驚くべき二重性を持っている。第一に火、そして第二に金星のイニシエーションにおけるブラフマの光彩である。われわれはまず火の七つのはしごを使って上昇する必要がある。次に光の七つのはしごで上昇するべきである。われわれはまず火の中で、次に光の中で復活する必要がある。

性の錬金術による黄金の子をその両腕に抱いた愛情深い聖なる母クダリニーは、われわれを畏るべき「やいばの刃先の道」へと導くのである。死すべき運命にあるいかなる人間も、彼女のヴェールをとることはなかったが、崇拝すべきイシスは、われわれがすべての誤りを心から後悔するのならば、過去のカルマをすべて許してくれる。

火の蛇によって、われわれは完全に変わることができる。火の蛇によって、われわれは畏るべき神聖なる存在、宇宙の神々に変わるのである。

【アフラマズダ】 序章注参照。

【アンゴラ】 トルコ共和国の首都アンカラの旧名。

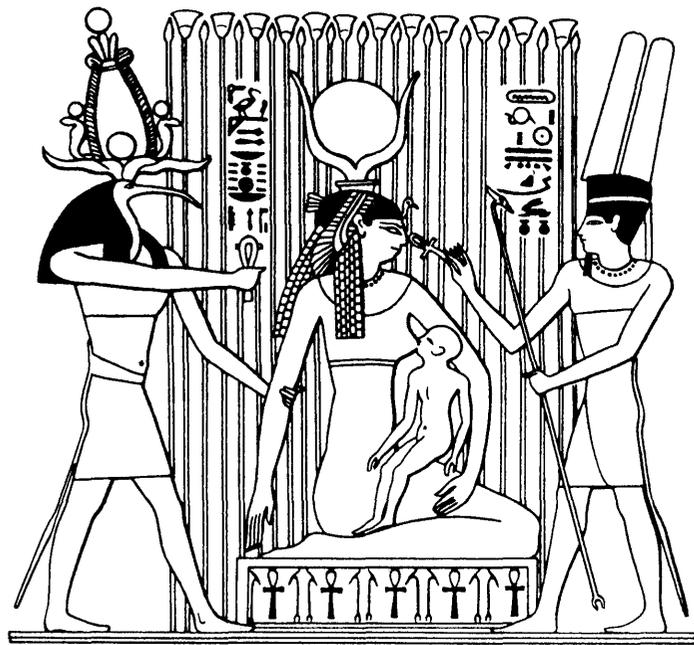
【アトス】 ギリシア北東部の半島の都市。

【アメン・ラー】 アメンは古代エジプトの主神。後に太陽神ラーと習合して宇宙創造神アメン・ラーとして崇拝された。

【古代の地球であった月】 第15章注参照。

【三博士】 イエスの降誕の時に、東から来た三賢者のこと。(マタイ2:1)

【カナン¹の奇跡】 カナン(パレスチナの古代名)は、アブラハム(信仰の父)とその子孫に神から与えられた地である。この地でアブラハムが百歳、妻サラが九十歳の時、子イサクをもうけた(創世記第17章)。



聖なる母イシス

エジプトの聖なる母イシスが、その子ホルス(エジプトにおけるキリスト)に乳を与えているところ。彼女に右手のアメン神がアंक十字を捧げ、左手のトート神がヘルメスの叡智を与えている。イシスは、死者の王にして神であるオシリスの妻で、イシス信仰は古代世界全般に広まった。

第二十九章

エ ッ ダ

ゲルマン民族の聖書であるゲルマンの『エッダ』に注意を向けてみよう。この古代の本には、北欧の叡智が秘められている。世界の創世に関するエッダの神話は次のようなものである。

「はじめに二つの領域だけがあった。一つは火と光の領域。そこでは絶対的な永遠の存在、アルファディルが統治していた。もう一つはニフハイムと呼ばれる闇と寒さの領域。そこではサチュル(暗黒、闇)が支配していた。これら二つの領域の間には“混沌(無秩序)”が広がっていた。アルファディルから逃れた火花がニフハイムの冷たい蒸気を受胎させて、イミールが生まれた。イミールは巨人族の父である。イミールに栄養を与えるために同様な方法で雌牛のアウズムブラが造られ、その乳房から四つのミルクの川がふき出した。それをたっぶり飲むとイミールは眠りに落ちた。彼の両手の汗から一組の男と女の巨人が造られた。そして、彼の片足から六つの頭を持つ怪物が造られた」。

天地創造の起源の中に、性の錬金術を見出すことができる。火が、混沌状態の冷たい水を創造力に富むものにする。男性要素であるアルファディルがサチュル(闇)に支配されていた女性要素、ニフハイムを受胎させ、生命を創造する力を与えている。このようにして、巨人族の父であり、すべての人間に内在している神であり、マスターであるイミールが生まれる。彼は「偉大なる作業^{グランドワーク}」の「第一物質」によって養われる。この物質とは、アウズムブラあるいはインドの聖なる白い雌牛のミルクのことである。モーゼの創世記にも、エデンの園の四つの川、すなわち四つのミルクの川について述べられている。またこれらの四つとは、めらめらと燃える火の精、純粋な生命の水の精、性急な風の精、そして賢者の香り高い土の精のことである(四つのタットワ)。すべての錬金術的操作は、これら四大要素の活動によって始まる。これらは創造のための性の錬金術には欠かすことができないものである。

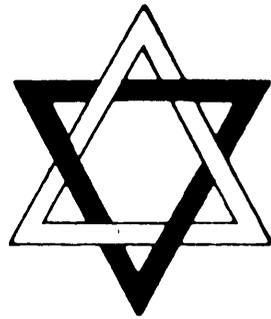
イミールが眠っている時、彼の汗から一組の男女の巨人が生まれた。それは神聖なる島の巨大かつ崇高な原初の両性具有者である。モーゼの創世

記にも、アダムが眠っている時、神がアダムの肋骨の一本からイヴを取り出したとある。取り出される以前には、イヴはアダムの内部にあり、アダム自身であった。つまり両性具有であった。この両性具有の巨人（ポラー人種）の足から、六つの頭を持つ怪物、すなわちソロモンの星（人間の性の錬金術）が生まれた。それによって巨人が何世紀にも渡って分離していき、最後には性的に分離した人類になってしまった。この相対する性への分離が大きな悲劇の始まりであった。両性具有の巨人から生まれた六つの頭を持つ怪物とは、このことであった。



左図は、神がアダムの肋骨からイヴを取り出すところ。

右図は、ソロモンの星で、秘教的には性を示す。上向きの三角形が陽極、男性を表し、下向きの三角形が陰極、女性を表す。また、この星はヘブライの印にもなっている。



人類は聖なる両性具有者に再び戻ろうとしている。男は聖なるイヴとともにエデンの園に戻ろうとしている。男と女が性的に結びつく時、彼らは一つの両性具有の存在となる。実際、至高なる性的エクスタシーにある時、われわれは神々である。イニシエイトはこの至高なる瞬間に、この魔術的現象をどのように活用したらよいかを知っている。

性的に分離した人類の誕生は、何百万年もかかって実現した人類創世記上の壮大なる出来事である。ゲルマンのエッダは世界の創世を記述したのち、相対する性への分離について次のように述べている。

「すぐに神々は最初の人類のカップルを創造することに決めた。トネリコの木から男が造られ、アスクールと呼ばれた。ハンノキ(Alder-tree)から女が造られ、エムブラと呼ばれた。オーディンが彼らに霊を与え、ヴィリーが彼らに理解力を与えた。またヴェーが彼らに美と感覚を与えた。そして神々は自らの仕事に満足し、宇宙の中心にあるアスガルの館で休息し楽しむために退いた」。

世界の滅亡に関するエッダの話はゲルマン民族の黙示録である。

「自然そのものが、その秩序を乱し始める。季節の変化がなくなり、恐ろしい冬であるフィムブルが三年間支配する。それは太陽がその力を失ったからである。人々の間にはもはや信頼などなくなり、同種族の両親とその子供、兄弟の間にさえ平安は見られない。死者を敬うため、爪を切ってから埋葬するドイツ人の神聖な義務も無視されるようになる。時の終わりに、霜の巨人リメールが、無数の乗組員とともに巨大な船で航海に乗り出す。その目的は、神々を滅亡させるため、そして神々の幸福に満ちた輝かしい住居であるヴァルハラと宇宙を破壊するためである。不信心な人々によって切られた死者の爪で作られたこの恐ろしい船は、前進していく。この船は物質的には小さいにもかかわらず、墮落の極限まで増大していく。それから、神が鎖でつないでおいた怪物たちが自分たちを縛りつけていた鎖を破壊する。山々が水中に没し、ジャングルは根こそぎにされる。世界が始まって以来、一匹の狼が太陽と月を一飲みしようとして吠えて、爪で引っ掛けようとしていたが、ついにそれに届き、一口で太陽と月を飲み込んでしまう。この狼フェルニスに縛られていた紐を食いちぎり、上顎と下顎を天と地に触れるほど大きく開けて世界を襲撃する。もうそれ以上の空間がなくなるほど大きく開いて。

ミッドガルという蛇が地球上至る所にはびこる（人類が姦淫、つまり性エネルギーを消耗するようになったからである）。霜の巨人たちが爪でできた船に乗ってレバントからやって来る。正午には、破壊的な火の力が近づいてくる。アセスでの最終決戦を煽動するロキとサチュルとムスペルの子供たち。ヴァルハラの子神々が敵を迎え討つための準備は完了した。見張り番のヘインダルが住居へ通ずる橋の入口に陣取り、クラリオンを奏でる。そして、神々は戦死した英雄たちの霊を結集して、巨人たちを迎え討つために出かけて行く。戦いが始まり、両軍の破滅をもって戦いは終わる。死んだ神々と巨人たちは白熱した火を世界に放ち、広大な、火による浄化を

地上にほどこした」。

エッダの創世記と黙示録を深く分析すれば、キーポイントはほかでもない、性問題にあることが示されている。性によって世界は創造され、性によって原初の両性具有者は分離された。精液をこぼさない者はその時、神である。精液をもらす者はその時、悪魔に変わる。

性によって世界は創造された。そして人類がおぞましき姦淫者となり、大淫婦が墮落の極限まで至り、ミッドガルという蛇が地上にあふれる時、世界は破滅するのである。

実際、人類が精液をもらすことに慣れると、大淫婦（それを表わす数字は 666 である）が生まれる。姦淫は人類を墮落させる。人類は姦淫によってひどく邪悪になり、世界は破滅する。神が鎖につないでおいた、人類の知らない自然界の怪物や精たちが、原子力を携えて解放される。ジャングルは根こそぎにされる。そしてカルマという狼が恐ろしく吠えたてる。狼フェルニスがしばられていた紐を食いちぎり、上顎を天に下顎を大地に触れるほど大きく口を開けて世界を襲う。カルマはひどく恐ろしいものであり、世界は不調和のうちに崩壊するであろう。古代にも、地球がもう少し太陽に近かった頃、似たような地球の崩壊があった。その時、地球は今の位置に投げ出されたのである。このように大地殻変動はカルマの法則によって繰り返される。それゆえ、ゲルマンのエッダにも広大な火による浄化によって、すべてのものが焼き尽くされ、滅んでしまうと述べられている。

性の錬金術のない創世記は、一つとして存在しない。性的退廃の記述を持たない黙示録は、どこにも存在しない。あらゆる創世記と黙示録は男根と子宮とを基礎としている。火が創造し、火が破壊する。破壊的な火の力はすでに進行しており、原子力戦争が地球を焼き尽くすこれらの力を解き放つであろう。人類は火によって間もなく破壊されるであろう。

「完全なる結婚」の道に完全に参入する必要性を理解すべき時が来た。この道を歩もうと決心した者だけが、深い暗黒の奈落と第二の死から救われるのである。

神は完全なるカップルの頭上に輝く。

人類の救済

われわれは真実の名にかけて、「人類の救済」という問題を解くのは途方もない難題であることを理解しなければならない。イエスは、秘教の領域に参入し、永遠なる救済を得ることは、きわめて難しいと強調している。

もしわれわれが本当に救われたいと望むなら、霊を創り上げることが急務である。われわれはすでに、人類とは霊的胚芽の存在であるにすぎないと言ってきた。また、この胚芽を強化させ、さらに宇宙的霊を具現する必要があるとも言ってきた。

ところで、霊を具現するということは、叡智あるジャガーによって、飲み込まれ、それに同化することを意味しているのである。われわれは叡智あるジャガーに飲み込まれてしまう必要がある。このジャガーとは、インティモ、つまりわれわれの真の存在のことである。アステカ人は、「この世に現われた最初的人类はジャガーに食われてしまった」と言った。ユカタンにはジャガーの寺院があり、ジャガーの爪を持ったケツァルコアトルが人間の心臓を捕らえている。アメリカにあるすべての神秘的な寺院では、



人間の心臓を喰うジャガー

ジャガー崇拜が必ず見られる。このジャガーの騎士という階級は、アステカ文明のメキシコにおいて、きわめて神聖なものであった。

処女の心臓を神に捧げるという人身供養を思い出すことは興味深いことである。このことのすべてに、秘教的な意味が隠されているのだが、今日の学識はあるが無知な人々には理解できないことである。われわれが人間を生贄いけにえにすることに同意していないことは明らかである。そのような生贄は野蛮なものである。無数の子供や処女が神々への生贄とされた。苦痛で恐怖におののく様子、これは忌まわしいことである。しかし、「血まみれの心臓を神々に捧げる」という事実について、よく考えてみる必要がある。この事実は全く途方もないことである。インティモ（われわれの真の存在）はその人間の心臓を飲み込んでしまう必要がある。すなわち、霊と呼ばれるものを偽造してきたパーソナリティを、食いつくし、吸収し、同化する必要があるということである。

インティモとは、まさにたくさんの葉をつけた木のようなものである。それは全く疑う余地がない。葉一枚一枚がその人のパーソナリティなのである。インティモは、にせの秘教術師が信じているようなたった一つのパーソナリティを持つものではない。インティモは、様々なパーソナリティを持ち、さらに驚くべきことには、そのパーソナリティたちを世界中の至る場所に生まれ変わらせることができるということである。

人は霊を創り上げない限り、明らかに消えてなくなる存在である。その時、彼は深い暗黒の奈落へ転がり落ちていく。しかし、それはインティモにとって少しも問題ではない。これはちょうど「生命の木」から葉が一枚離れ落ちるようなものであり、その一枚の葉は生命の木にとって取るに足らないものなのである。インティモは、残った葉っぱたち（パーソナリティたち）が霊を創り上げ、叡智あるジャガーに飲み込まれようともがいているのを見守っているのである。

生命の木から離れた時、「人」と呼ばれる知的動物、すなわちパーソナリティというのは、煙草の灰より価値のないものとなる。しかし愚かなことに、自らを偉大なる存在だと感じているのである。あらゆる偽りの秘教の流れには、恥ずべき多くの狂信者、自らをマスターだと感じ、他の人々からそう呼ばれるのを楽しんでいる人々がたくさんいる。自らを神だと信じ、また自らを聖者と思っている人々である。真に偉大なのは魂、インティモである。知的動物であるわれわれは風に吹かれる葉っぱである。生命

の木の葉、これがすべてである。「人間とは植物と幽霊の混じりあったものである」「あわれな影は霊と呼ばれるものを創り上げる時、はじめて不滅の存在となることができる」。

人類は失敗した。人類の大多数は、ほとんどすべてがいまだに霊を持っていない。人類の大多数は、運命という嵐に吹き飛ばされ、奈落の底に吹き飛ばされた葉っぱのようなものである。

ゲルマンの『エッダ』には、フェルニスという恐ろしい狼が紐を喰いちぎったとある。カルマが人類全体におおいかぶさるのである。そして、ヴァルハラValhallaの神々が敵と戦う。

ミッドガルという蛇が地球上至る所にあふれ、世界は完全に失敗した。

ゲルマンの神話は北欧から来ている。智恵は北方より来る。最初の人類は、知識というジャガーに喰われてしまった。それは不滅の人類であった。第二の人類は強い嵐によって吹き飛ばされてしまった。第三の人類は鳥に変えられた。第四の人類は人魚に、第五の人類は山羊に変えられた。

人類の発祥地は北方地方である。ゲルマンのエッダは北欧の知識である。アステカの先住者たちは、北方の神聖な島に住んでいたのである。

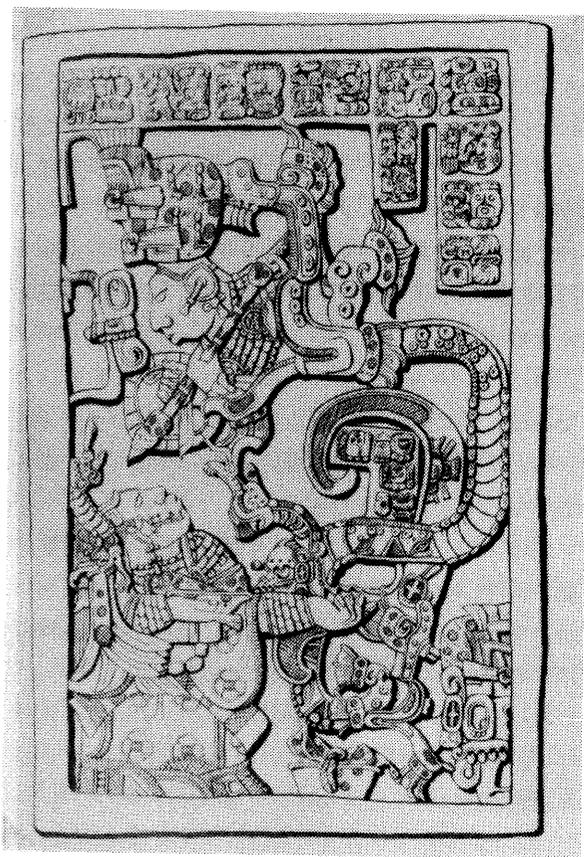
隠された叡智は北方から来てレムリアへ行き、レムリアからアトランティスへ行った。アトランティスが沈んだ後、アトランティス大陸の一部だった所にその知識が残った。インドは決してアトランティス大陸の一部だったのではない。すべての古代の叡智はインドにある、というのはばかげた理論である。蛇に関する知識を見つきたいのなら、メキシコ、エジプト、ユカタンなどを探すとよいだろう。これらの地方は、まさにアトランティスの一部をなしていたからである。

ゲルマンのエッダを研究し、その行間にあふれた意味を汲み取り、イースター島、メキシコ、ユカタンなどについての調査を急ぐべきである。

創世記と黙示録のあるゲルマンの『エッダ』は、純粹な性魔術である。性の中に、われわれの存在の根源がある。

われわれは蛇に飲み込まれる必要がある。ジャガーに飲み込まれなければならない。最初にまず蛇がわれわれを飲み込み、次にジャガーがわれわれを飲み込む。

- 【エッダ(Edda)】 「太祖母」の意。北欧神話で母なる大地(Elda)を表す。
- 【タットワ (Tatwa)】 サンスクリット語で真実、ありのまま、実在の意。万物を支配する五つの根源的力(エーテル、空気、火、水、土)をいう。
- 【アスガルの館】 天上の神々の住居。地上との間にはビフロストという橋が掛かっている。
- 【オーディン、ヴィリー、ヴェー】 オーディン(Odin)は北欧の万物の父、神々の王である。ヴィリー(Villi)とヴェー(Ve)はその兄弟神。
- 【ロキ(Loki)】 北欧の神々の中の、異質な存在、悪神と見なされている。世界の終わりの時には、魔軍の中に入って神々と戦うとされている。

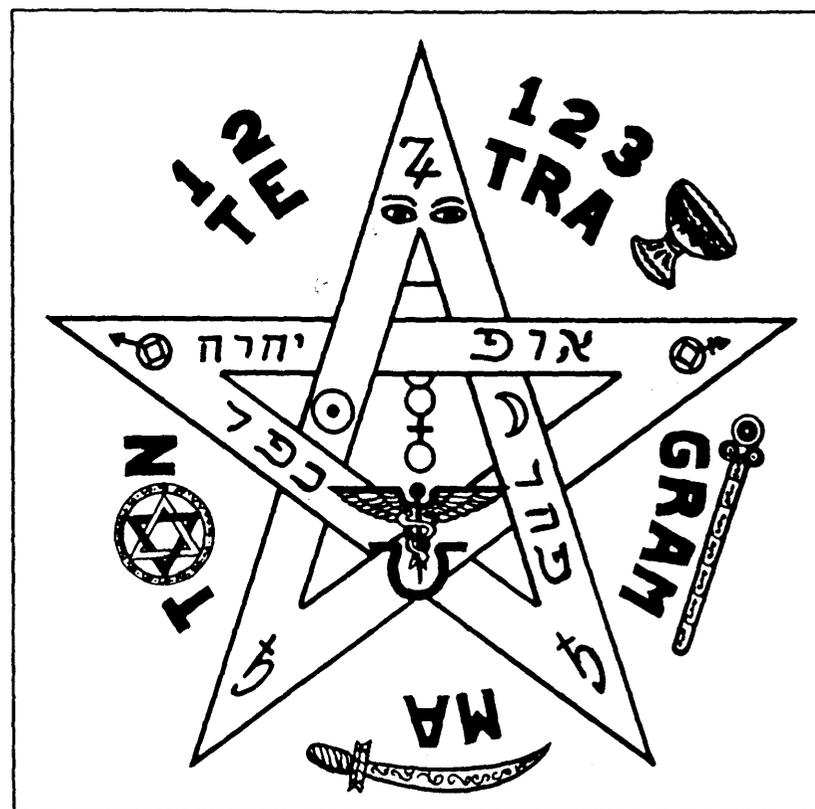


蛇に飲み込まれるマヤの戦士

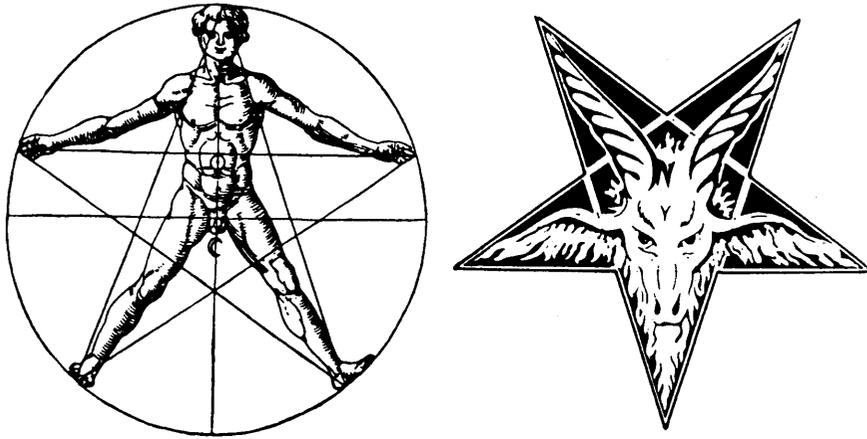
第三十章 五芒星

五芒星(ペンタグラム)は、魂が自然界の諸要素を支配することを表わしている。この魔術的な記号を使って、われわれは、火、空気、水、土の領域に存在する自然界の四大要素に命令することができる。

この畏るべきシンボルを前にすると、悪魔たちは恐怖のあまり震えおのき逃げていく。



頂点を上向きにしたペンタグラムは、闇の力を追い払うために役立つ。一方、下向きのペンタグラムは、闇の力を呼び寄せてしまう。出入口の敷居に頂点を内側に、下の二つの角を外側に向けて置けば、黒魔術師の侵入を防ぐことができる。ペンタグラムは、「^{はのほ}焰の星」である。ペンタグラムは、受肉した言葉の象徴であり、その先端の向きによって神を表わすことも、悪魔を表わすこともできる。また犠牲の小羊を表わすことも、あるいはメンデスの山羊を表わすこともできる。先端を上向きにしたペンタグラムは、クリストを表わし、下の二つの角を上向きにした逆様のペンタグラムは、悪魔を表わす。さらにペンタグラムは、完全なる人間を表わす。先端を上向きにすればマスターを、反対に先端を下向きにすれば墮天使を表わす。墮ちた菩薩はすべて逆向きの焰の星である。事実、墮ちたイニシエイトはすべて、逆向きの焰の星である。



左図は、完全なる人間を表すペンタグラム。
右図は、悪魔であるメンデスの山羊を表す。

焰の星は、七つの惑星に相当する七つの金属の合金でできたものが最も望ましい。それは次の通りである。月に相当する銀、水星に相当する水銀、金星に相当する銅、太陽に相当する金、火星に相当する鉄、木星に相当する錫、土星に相当する鉛である。メダルにして首に掛けたり、指輪にしてそれを身につけることができる。

また、白い小羊の毛皮に焰の星を描いて部屋に置くこともできる。また、婚礼の際、寝室の入口で使用することもできる。このようにして闇の力が寝室に入り込むのを防ぐことができるのである。また、ペンタグラムをガラスに描くと幽霊や悪魔を威嚇することができる。

ペンタグラムは、生命の普遍的な言葉の象徴である。そしてある秘密のマントラによって、ペンタグラムを即座に輝かせることができる。

ゴバラタパニヤクリシュナの『ウパニシャッド』の中には、焰の星をアストラル界に即座に形作るといふ、パワーあるマントラを見出すことができる。その前に出ると、悪魔たちは恐れおののき逃げてしまう。

このマントラは五つの部分から成っている。
「^{クリム}Klim , ^{クリシュナ}Krishnaya , ^{ゴヴィンダ}Govindaya , ^{ゴピハナ}Gopijana , ^{ヴァラハ}Vallabhaya Swaha」

このマントラを発音すると、第十八番目のアルカーナの闇の住人たちも恐れ逃げてしまう焰の星が即座に形作られる。これらの悪魔たちは、イニシエイトが偉大なる作業をして働いている時、激しく攻撃してくる。完全なる結婚の帰依者は、これらの闇の力と戦いを繰り広げなければならない。脊柱のそれぞれの骨は、黒魔術師との恐ろしい戦いを表す。彼らは光の道を歩もうとする者、やいばの刃先の細い道を歩もうとする者たちを、脱落させようと戦いを挑んでくる。

前述した強力なマントラは、はっきりと三つの部分に分けることができる。「^{クリム}K l i m」(インドの神秘主義者たちが、「引力の種子」と呼んでいる)を発音すると、即座に太陽ロゴスの世界から防御のためのクリスティックなエネルギーを引き付け、そして神秘の扉が地上に向かって開かれる。その後、次に続く三つのマントラを発音すると、その人物にクリスティックなエネルギーが注入される。最後に五番目の部分が発音すると、クリスティックなエネルギーを受けた者は、闇の力から自分を守る強大な力を放射することができる。そして闇の力は、恐れをなして逃げていく。

言葉は常に幾何学的な模様に結晶する。これは磁気テープによって証明することができる。会話はテープに録音されて残り、個々の文字は幾何学的な形の中で結晶化している。吹き込んだ会話をもう一度聞きたい場合にはテープレコーダーで再生するだけでよい。このように、神は幾何学的に創造する。言葉は幾何学的な形態をとり、われわれがこのマントラを発音する時、超感覚世界において即座に「焰の星」が形作られるのである。その星はクリスティックな力を運んでくる。その星は言葉を表わしている。

ヴァルカン（火と鍛冶の神）の燃える炉で働く者は、このパワフルなマントラで防御することができる。このマントラは一音節ずつ発音し、それによって、人に憑依していた悪魔たちを追い払うことができる。

緊急に「焰の星」を形作る方法を学ぶ必要がある。このマントラを使って、闇の力と戦うための星を作ることができるのである。

言 葉

学識はあるが無知な人々は（今世紀あまりにも多いが）、自分の知らないことに対して、白痴のように笑いかねない。そのような人々は、われわれのマントラは何の価値もない言葉であり、そのエネルギーは空中に消滅するにすぎないものだと考える。彼らは言葉に内在する価値を知らないのである。彼らは言葉の重要な本質を知らず、われわれのマントラについてただ嘲笑うだけである。

すべての言葉には、外的価値と内的価値が存在する。言葉の重要な本質は、内的価値にあることは間違いない。言葉の内的価値は、この三次元世界で理解されるものではない。言葉の内的な要素は、われわれの次元より上の高次元世界において探求されなければならないものである。われわれの眼前にあるこの空間は、より高次の空間の一部であるにすぎない。このことによってわれわれは、すべての次元を知っているわけではないことがわかる。われわれの知っているのは、縦と横と高さから成る小さな部分であるにすぎない。

言葉の内的要素は、高次元世界において幾何学的に作用する。この章で紹介したマントラを発音すれば、肉眼では見えないが、第六感では完全に見える五芒星を、確かに形作ることができるのである。

科学者は四次元世界のことについて何も知らない。彼らは四次元空間における超幾何学について何も知らない。空間を宇宙における“物質”の一つの形態であると定義づけると、それは重大な概念的欠陥を招くことになる（物質の概念を導入する時、すでにそれは未知の世界について言及していることになる）。何故ならば、実際、“物質”は未知の世界のものとして存在し続けるからである。物理学的に“物質”を定義づけようとする試みは、出口のない袋小路に至るだけである。 $X=Y$ 、 $Y=X$ 、といったように。これが物理学者にとって、出口のない袋小路なのである。

心理学的な物質の定義づけも、やはり出口のない袋小路に至るものである。ある学者は、次のように言っている。「（力としての）“物質”はわれわれに何の困難も与えない」と。なぜなら、それを作り出したのはわれわれだからという単純な理由によってである。“物質”というと、われわれは五感で知覚できる対象を思い浮かべる。このようなことを論じる時に厄介なのは、複雑な事実ではなく、具体的な心理的変化なのである。

厳密に言えば、物質は単に一つ概念として存在するにすぎない。実際のところ、物質に関する定義は（概念として話される時でさえ）あまりにも不明瞭なため、ほとんどの人がその定義を使って、理解していることを正確に言い表わすことができない。物質のことを実際には誰も知らないが、この概念は、保守的で反動主義的な唯物実証主義の学派の基礎になっている。

物理学者は好まないだろうが、“物質”と“エネルギー”は、一連の複雑な事象（その実質的な起源は科学によって解明されていないが）を表現するために公式に認められた言葉であるに他ならない、と断言しなければならない。誰が物質を見たことがあるだろうか。誰がエネルギーを見たことがあるだろうか。われわれは単に現象を見ているにすぎない。誰も実体から切り離した物質を見ることはないし、誰も運動から切り離されたエネルギーを見ることはないのである。このことから、物質とエネルギーは抽象的な概念にすぎないことは明らかである。対象そのものから切り離して物質を見ることはないし、運動から切り離してエネルギーを見ることはない。物や現象から切り離された物質やエネルギーは、人類にとって一つの神秘である。人間は意識の97%が眠っており、3%しか意識が目覚めていない。人間は自然界の現象を夢の中で見ているのである。そしてその現象を、物質やエネルギーと名付けている。宇宙やすべての現象が存在する以前、すでに「言葉」が存在していた。実際、「ロゴス」は夢見ているのである。

生命のはじまりに、声の軍団は神聖な言葉で歌いながら、火の儀式を祝福した。偉大なる言葉は、自然界のすべての現象を引き起こすものとなった「偉大なる作業」の「第一物質」によって、幾何学的な形に凝縮され、結晶化したのである。

「世界」と「意識」は、真に「言葉」の結果である。三次元空間は、われわれの肉体的知覚に属するものである。われわれから発する表現や概念の

質を洗練すれば、それは知覚する能力も洗練することになり、高次の世界に至ることになる。そこでは三次元世界は、一つの夢の記憶として残るにすぎないのである。

実際、われわれの意識の前に現れる世界は、われわれの五感が決まりきった反応によって作り出した、機械的な状況にすぎない。

世界と意識を越えたところに、すべての存在を生じさせた最初の「原因」がある。これが「言葉」である。世界を創造したもの、それは言葉である。「はじめに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。この言葉ははじめに神とともにあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった。光は闇の中に輝いている。そして、闇はこれに勝たなかった」(ヨハネ 1:1-5)。

言葉は完全に五芒星で象徴される。これが「焰の星」である。これによって、われわれは黒の力から自分自身を防御することができる。この驚くべき星を前にすると、天使や悪魔の小隊は身震いする。

【メンデスの山羊】 悪魔崇拜の対象。山羊の顔、二本のひづめ、男女両方の生殖器を持つ。ルシファー。ティフォン・バフォメット。

【ゴパラタパニ(Gopalatapani)】 未詳。

【ウパニシャド(Upanishad)】 古代インドの哲学書。奥義書という意味で師から弟子に口伝えられる「秘密の教え」である。聖典ヴェーダに付随された文献の一つでその最後の部分を形成しているので、別に“ヴェーダンタ”と言われる。

第三十一章

北極のエスキモー

伝説によると、グリーンランドやアラスカのエスキモーは、はるかなるトゥーレ(Thule)島から来たという。エスキモーは、ポリネシア、チュニジア、デンマークからの侵入者との混血だと言われている。

ノスティック・バラ十字の偉大なマスターである、アーノルド・クルム・ヘラーは、聖なる島、はるかなるトゥーレ島について、崇高なことを述べている。ドン・マリオ・ローザ・デ・ルナによれば、この島は今なお存在するが、ヒーナスの状態にあるという。そしてこの島に、最初人類が存在していたということが知られている。

このポーラー人種は、現在の人類とは全く異なった環境の中で進化を遂げていった。三億年以上さかのぼるその時代に、地球は、正しくは半エーテル的、半物質的なものであった。それはまるで湾曲した青い大洋のようでもあり、夜の大空のようでもあった。

その頃、人類は空中に浮くことができ、その体はアンドロジヌスで、エーテル的な存在であった。肉体は伸縮自在で精妙であり、10メートルから20メートルもの身長でいることもできれば、思うがままに小人の背丈まで体を縮めたり、今日の人類と同じくらいの大きさになったりすることもできた。

しかしこの頃の人々が、ハーマフロダイトだとは断言できない。この人種はアンドロジヌスである。彼らの性エネルギーは異なった方法で機能し、分裂生殖という形によって繁殖を行っていた。ある決定的な瞬間に、もとの体が真二つに分かれた。これは細胞分裂による増殖に似ている。そしてこの分裂生殖が起こる時には、いつも神に対する深い祈りと尊敬があった。

信じられないことだが、この最初人類は大変高度な文明を持っていた。太古の地球の柔軟な、エーテル的物質を使って、家、宮殿、都市、荘厳な寺院を建築したのである。当然考えられることだが、今日の唯物主義に凝り固まった頑固者は、このような文明の遺跡が決して見つかることがないので、われわれの主張を嘲笑うであろう。しかしこの時代、地球はエーテル的、いわゆる前物質であったので、このような太古の文明の遺跡を発見することはできないのである。ただ、偉大な超視覚者だけが、宇宙に刻ま

れている記憶の中に、最初の人類の生活の歴史をすべて見る事ができる。この人類は原形質の体を持っていた。これは人類の本当の原型である。偉大な超視覚者は、ダーウィン主義者やヘッケル主義者の言う“原形質”を一笑に付すであろう。

地下の洞窟で発見された人類の化石は、この原形質の種族とは何の関係もない。これらの化石は、海中に沈んだアトランティスの末裔、墜落したその部族らのものである。

ポーラー人種の文化は、宗教と科学と哲学が完全に結びついたものであった。はるかなるトゥーレ島の住人は、他のマハーマンヴァンタラのマスターの菩薩（ボディサットヴァ）であった。

アダムとイヴは、一体の存在であった。今日では、アダムとイヴは分離され、苦しみ、そして再び一体となるために飽くことのない渴望を持って互いを探し、求めあっている。性行為の間だけが、男女が一つの存在となる時である。この性的な快い官能の間、男女両者は、“一体の存在”になるという大いなる恩恵を受け取るのである。

その時代のコスミックな儀式は、大変興味深いものである。熟練した超視覚者であれば、寺院の中に、純粋な神秘のメーソンを発見することができるであろう。しかし、これらの儀式は、現在世界中に存在する儀式とはかなり異なるので、現代のメーソンのメンバーでさえも、これらの儀式がメーソン式であるとは気づかないかもしれない。

寺院の明りは取り付けられていなかった。尊敬すべきマスターは王座につくことも、また去ることもできた。時には、第一の番人が王座につくこともあった。その後で交替のために、第二の番人にそこを譲った。中でも高位の僧は、空中浮揚によって自分の位置を代えた。彼らの祭服の色は白と黒が組み合わせられたもので、それは魂と物質の闘いを表している。そして寺院の構造は完璧であった。仕事における象徴と道具は、大変長い年月をかけて魂が物質に下降して来たドラマを表現するため、逆さまにして使われていた。逆さまの帝王の笏や聖杯などを見れば、驚嘆の念を禁じえないであろう。そこではすべてが逆さまになっていた。今日まで生命は物質に下降して来たので、その表現は、象徴的表現を取らなければならなかったのである。

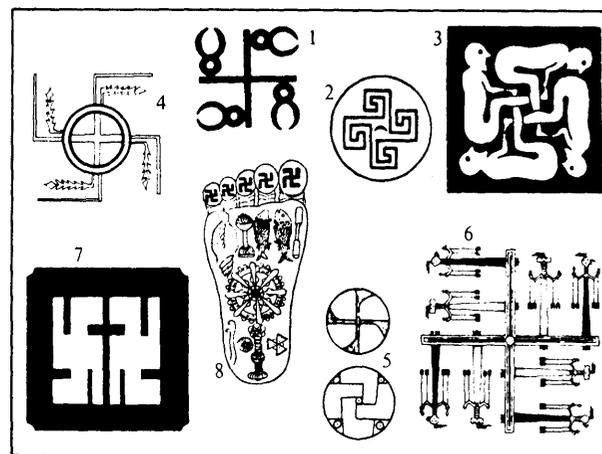
その“聖なる進行”は荘厳なものであった。これによって偉大なる神秘と、魂の物質への至高なる降下を理解することができる。魂が物質へと下

降していくこの出来事は、非常に長い年月の間、その人種が待ち望んでいたことであった。今日の人類がより高次の世界へ戻ることを待ち望んでいるのと同じくらい、その人種は物質への下降を待ち望んでいたのであった。

原形質の人種が使う言語は、黄金の言葉であり、その音声の組み合わせによって、あらゆる種類の宇宙的な現象を生じさせることができた。それは普遍的で宇宙的な言語であった。完全なる結婚の道をたどる者は、自分自身の内に、この原初の言葉を再発見することができる。神聖な火花がどの高さにもまで達すると、われわれは聖なる言語を純粋に正しい発音で話し始める。それは黄金の川が、太陽の降り注ぐ深いジャングルの中を爽快に流れるさまに似ている。この言葉によって、神々の祖先は、その子供たちに歌いながら大自然の宇宙的な法則を教えたのである。

最初の人種が用いた書体は、ルーン文字であった。フリーメーソンの木槌は、エジプトの太陽神ラーの矢に由来するものであり、その矢はルーン文字である。

その時代、ポーラーの寺院で行われていた儀式は、すべてルーン文字に基づくものであった。儀式を司る人の動きは、すべてルーン文字に由来していた。これは聖なる文字である。スワスティカ（まんじ）がルーン文字であることを思い出してみよう。またヘブライ文字も、ルーン文字の変形以外の何ものでもない。



各国に見られるスワスティカ。1. 2. 3はスカンジナビア、4. 5. 6はアメリカインディアン、7は日本、8はインド。

秘教的知識の発祥の地は、多くの人が信じているアジアではない。秘教的知識の真の発祥の地は、ウィラコッチャが多くの美しい事柄を語っている神聖な島、はるかなるトゥーレ島である。

この原形質の人種の時代に、神聖なこの島は北極地方にあったのではない。実際には大陸であり、その正確な位置は赤道上にあった。後に、地球の地軸が変化して、その島は北極に残ったのである。地軸の変化があったことは、現代科学によってすでに立証されている。実際、現在も両極は赤道に向かって移動しつつある。

現在のエスキモーは他の人種と混血してきているが、今述べてきた最初の種族の子孫ではない。むしろ彼らは退化したアトランティス人と言うべきである。しかし彼らはいくつかの興味深い伝統を保持している。それは、エスキモーの人々が家族を結束させる親密な絆を築いているということである。それぞれの家長が、署名、トーテムの刻印、聖なる動物の種類の名が記されたお守りを持っており、それは親から子孫たちへ代々受け継がれている。そして実際にエスキモーが北極で暮らしているために、多くの思想家は、エスキモーの起源は最初の人類である太古の北歐人だという考えに固執している。

興味深いことに、古代エスキモーの間では、特別な権力も酋長も王の存在もなかった。彼らは長老による協議会で統制されていた。若い男たちは、他の氏族の女たちと、完全なる結婚によって結ばれていた。そこでお守りは、親族同士の結婚を防ぐための区別の目印として役立っていたのである。かつて、一妻多夫制が存在したこともあり、男の子よりも先に生まれた女の子は全員殺されたが、幸い、そのような野蛮な習慣はすでに廃止されている。

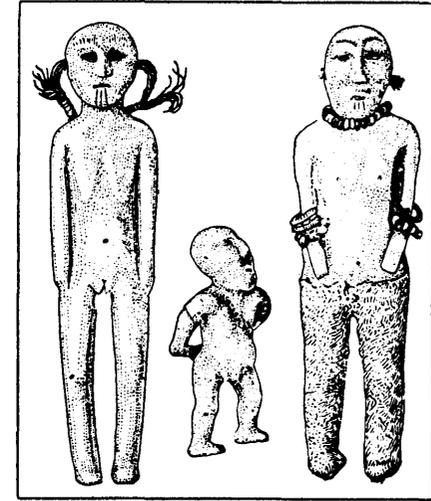
R. ウエスターマークは、彼の著書『人類婚姻史』の中で、エスキモーは、自分の妻を別の男に貸したり、取り替えたりすると述べている。これは確かに姦淫の習慣である。この恐ろしい習慣は、尊敬すべき救世主イエス・ Kristusが説いた教義と相入れないものである。しかしすべての規則には例外があるものであり、エスキモーがすべてそのような野蛮な習慣を持っているとは信じ難い。

「神のぶどう畑」には、あらゆるものが存在し得るのである。

皮で死体を包み、囲いで取り巻かれた小丘に葬るとというのが、エスキモーの習慣である。アリューシャン列島では、死体は縄で縛り、崖の割れ目

の間に葬られた。

エスキモーは永劫回帰の法を知っている。つまり、「エゴは、新しい子宮に戻る」ということを知っているのである。エスキモーの呪物崇拜、すなわち粗末で小さい人形などは、そのエッセンスを表している。それは小さくて粗末なものだと考えられているが、司祭はその人形によって、霊が造り上げられていることを知っている。



妊娠、子供の誕生、思春期、そして死に際しては、それぞれ特別な秘教的礼拝式が執り行われる。エスキモーは、神の女性原理を崇拜し、海底に住む崇高なる女長老セドナ(Sedona)を愛している。セドナは、海の生き物を彼らエスキモーの食糧として与えている。当然のことであるが、学識はあっても神秘学について何も知らない無知な人々は、このエスキモーの神聖なる宗教を鼻であしらってしまう。エスキモーの最上の聖歌と儀式は、聖なる母に捧げられるものである。シャーマン(司祭)が、腹を立てている女長老セドナを慰めるために象徴的な旅に出かけ、彼女と和解する目的で共同社会を作るというくだりは、フリーメーソン志願者がロッジのまわりを象徴的に旅することを思い起こさせるものである。これらの旅は、高次の世界を通して、志願者の意識の向上を成し遂げることを外的に象徴したものである。フリーメーソンのいう五つの神秘的な旅とは、大密儀の五つのイニシエーションと密接な関係がある。無知な世俗者は、このようなエスキモーの旅の話を聞いてもただ嘲笑うだけであるが、それは自分の無知を笑っていることにほかならない。馬鹿になったように笑っているが、実は自分たちの無知を笑っているだけなのである。

エスキモーたちは、第六感を目覚めさせた真のすべてのイニシエイトと同様に、妖精、巨人、土の精ノームや、火の精サラマンダー、水の精オンディーンなどをはじめ、様々な目に見えない住人たちが多く存在することを熟知している。幸いにも、催眠術を受け入れて、それに催眠学という新

しい名前をつけてからの公式科学は、超視覚を理論的帰結として認めざるを得なくなった。超視覚を認めることによって始めて、催眠中にどうして壁の向う側の物を見ることができるのか、何千マイルも離れた所で起っていることを知ることができるのかを、説明することができるのである。

きょう科学が否定していることが、明日には認められるということになるであろう。現在、妖精、小人、土の精ノーム、火の精サラマンダー、水の精オンディーン、空気の精シルフォなどの存在を認めるパラケルススやエスキモーを嘲笑う人々は、科学によって、これらの目に見えない次元の住人たちの実在が再発見されるようになった時には、自分自身を笑い、そして恥かしさのあまり赤面することになるであろう。ほんの5年前にガラスヘビ（北米南部産の足のない^{とかけ}蜥蜴の一種で、尾がガラスのようにもろい）の存在を誰が信じたであろう。有名な科学者で、また評判の懐疑主義者が、有名なガラスヘビを1961年に発見した。このヘビは、危険に遭うと自分の意志で尻尾を切り捨てることができ、後で簡単にそれを再生することができるのである。

このガラスヘビは、獣などに襲われて身の危険に陥った時、自分自身の体をねじらせて硬直させ、槍で突くように相手に向っていく。そして、すぐに尾の部分捨て、頭と胴体は、素早く逃げ去る。獣が尻尾に気を取られている間に、そのヘビは無事に逃げおおせるのである。そして後になって、頭と胴体から新しい尾が生えてくるのである。これが事の次第である。自然には多くの驚嘆すべきことが存在している。あらゆる宗教は、宇宙的で唯一なる宗教が様々な形をとったものである。それゆえ、すべての宗教を尊重するということが重要なのである。学識はあっても、無知なままこの野蛮な時代に生きる人々には、知るよしもない偉大なる真理と宇宙的な科学が、あらゆる宗教の中に存在する。

奥深い自己実現を達成したいと望む者は、硫黄（火）、窒素（空気）、人（水）、牡牛（土）を使って、実験室で働く必要がある。これらの四大要素は十字を形作る。完全なる結婚の道を歩む錬金術師は、偉大なる山脈（背骨）の深い洞穴の中で、鉛を金に変換しなければならない。

その偉大なる山脈にはノームが住み、土中の宝物すべてを守護している。ノームは鉛を黄金に変換する偉大な錬金術師である。



実験室で働く夫婦
周囲の四人に顔は、火、水、空気、土の四大要素を示す。上部の子供は、性の秘儀から作り出される黄金の子ホルス（黄金の霊体）を示す。最上部の入口のところに、植物の実が9つ結実している。秘教的に、“9”は隔者つまりイニシエイト（奥義参入者）を指す。われわれは、性の秘儀を通じて完全なる人・クリストに至るのである。

土の精ノームは火の精サラマンダー、空気の精シルフォ、そして純粋な生命の水をもたらす魅力的な水の精オンディーンとともに作業を行っている。燃え盛る火の精たちは、水（精液）がその容器（性器）の内から上方へ蒸発するように、実験室のかまどの火（「エペソの教会」と呼ばれるチャクラ）を活動させる。精液の蒸気は、煙突（背骨）を通して蒸溜器（脳）にまで上昇する。そこで土の精たちは、完全に鉛を金に変換する蒸溜法を行うのである。パーソナリティの鉛を、魂の黄金に変換することが必要である。この方法によってのみ、再び神の言葉を純粋に正しい発音で話すことができるのである。われわれの金言はテーレーマー（意志の力）である。

われわれは、秘教的フリーメーソンの三段階で表される五つの崇高な火のイニシエーションを通過しなくてはならない。われわれは、はるかなるトゥーレ島の聖なる智慧に戻る必要がある。その神々の地、はるかなるトゥーレ島については多くのことが語られてきた。

そこには、エスキモーの先祖、アステカ人の先祖がいる。そしてケツァルコアトル（アステカの主神、羽毛の蛇）が住んでいる。ケツァルコアト

ルはそこからやって来て、そこへ帰って行ったのである。皇帝モクテスマは、魔術師の使節団をかゝる神秘の地、トゥーレ島に派遣した。その使節団はヒーナスの状態^{*}でその島へ行った。すなわち、四次元を通して旅をしたのである。このはるかなるトゥーレ島は聖なる地、聖なる島である。一番最初の大陸として存在し、そして最後の大陸となるであろう。この地は四次元の北極の氷原にある。モクテスマによって派遣されたアステカの魔術師たちは、ヒーナスの状態^{*}で、アステカの先祖たちへの贈物を持ってその地に到着した。また彼らは、モクテスマとアステカ人たちに次のようなメッセージを持って帰った。「もしあなたがたが、その情欲、残虐行為、不道徳を放棄しないのであれば、罰せられるであろう。海から白い人々がやって来て、あなたがたを征服し、滅ぼすことになるであろう」。スペイン人がメキシコにやって来て、これらはすべて実現した。

この四次元の出来事と、北極の四次元にある聖なる地のことを聞いたなら、学識はあるが愚かで無知なる人々は嘲笑うであろうが、彼らは実際に宇宙の次元のすべてを研究したわけではない。数学が宇宙の次元を定義できないのは残念なことである。「あらゆる数学的表現は常に、現実における実在を示している」と形式論理学では考えられている。しかし、幸いにも宇宙の六つの基本的な次元を定義するために、数学を用いることを可能にする弁証論理学が存在する。

一般に次元は、一乗、二乗、三乗、四乗などの累乗によって説明される。この考えは明らかに、ヒントンがかの有名な四次元立方体の理論（ $A^4:A$ は四乗となる）を作り出すための基礎となっている。これは累乗を使って次元を説明する方法である。著述家の多くは、次元間の相違というものは存在しないという理由で、数学は次元と何の関係もないと考える。しかし、われわれにとってはこの概念は誤りである。なぜなら、次元間の相違は明白なものであり、全宇宙は、数と量と重さの法則に従って、作られていると信じるからである。マインドが形式論理学の枠の中に閉じこめられている限り、数学の適用範囲を三次元だけに制限し続けるであろう。われわれは、累乗による次元の説明を論理的なものとみなすために、弁証論理学を緊急に必要とする。弁証論理学によってのみ、そうすることが可能になるのである。

超幾何学は超空間を研究するものであり、完全にユークリッド幾何学にとって代わるものであると言われている。実際、ユークリッド幾何学は、

ある特定の物理的空間の性質を調べるために役立っているにすぎない。しかし、もし四次元の研究を放棄するならば、明らかに物理学の進歩が停滞するであろう。四番目の座標に、力学における重要な秘密が存在する。

超幾何学は、三次元世界を超空間の一部として捕らえるという利点がある。三次元空間における点は、超幾何学における線のほんの一区画、あるいは一部分にすぎない。形式論理学では、超幾何学における線を、われわれの住む三次元空間における二点間の距離として考えているが、それは不可能である。またその線を三次元の空間に図形として表現することも不可能である。しかし弁証論理学によれば、超幾何学におけるその線はわれわれの住む空間の二点間の距離であり、また形や質を使って表現することができる。ゆえに、北極大陸が四次元と関わっているということが不合理なことではなくなる。また弁証論的思考によるならば、北極大陸に肉体を持った人間が住んでいるという考えも不合理ではない。

われわれはこの北極大陸の地図を作ることもできるが、それは弁証論理学にも受け入れられるであろう。一方、形式論理学はわれわれの主張をばかかっていると思えず上、実際われわれを間違った考え方へと導く。三次元空間という世界は、われわれの心理や五感の中に確かに存在するものである。しかし、超視覚や超聴覚などを開発するならば、すなわち霊的能力を完全なものとするならば、誰でも高次元の驚異を発見することができるようになる。内的知覚力の開発によってのみ、大自然の高次元を学ぶことができるのである。唯物論的実証主義は、自由な研究を規制する万里の長城を築き上げた。今日では、この壁に反対して立ち上がるすべてのものに対して、学識はあるが無知な人々は、それを反科学的だと非難している。唯物論的実証主義は、保守的であり、復古的である。ノースは、革命的であり、保守的または復古的な考えを完全に拒絶するものである。

ドイツの偉大な哲学者イマヌエル・カントは、空間を、われわれの意識が感受している世界の特性として考えた。「われわれはまさに、自分自身の内に宇宙空間状態を持っているのだから、われわれの内の空間と超空間との間に関係を確立することができる」と。

顕微鏡が発明された時、果てしないミクロの世界がわれわれの前に開かれた。これと同じように第六感を覚醒させるならば、四次元の世界がわれわれに開かれるであろう。この第六番目の感覚を発達させた者は、北極大陸の真相を自分の目で確かめるために、大自然界の記録をあまねく包含し

ている“アカシック・レコード”を読むことができる。最初にこの世界に存在したのは黒色人種であった。彼らは原形質のような体を持ち、分裂繁殖型の性行為（細胞分裂による増殖に似ている）によって、一人で生殖を行うアンドロジヌスの人種であった。この最初の人種は、四次元空間に住んでいた。同じように当時この地球も四次元にあった。この種族は、巨大な文明を持ち、黄金の言語を話し、ルーン文字を使っていた。ルーン文字には偉大な秘教的パワーがある。この時代にそのルーン文字を使って、大天使ウリエルは貴重なコスミックな本を書いたのである。われわれはこの本をアカシック・レコードによって学ぶことができる。

最初の人種の知覚や表現方法は、現在の人類のような主観的なものではなかった。このポーラーの人々は、完全に明白で客観的な表現力と知覚力を持っていた。彼らは、体を完全に正確な姿で見ることができたのである。現在の人類は、横からの姿や、他の角度からの姿、また表情や外観を見ることができただけである。今では誰も、体を完璧な姿で見ることができない。人々は退化してしまい、不完全で主観的な知覚と完全に墮落した主観的な表現様式を持つにすぎないのである。われわれは、今や原点に戻る必要がある。客観的な表現と知覚を再び手に入れるために、性の秘儀と内的瞑想を通して、霊的器官を再生しなければならない。

われわれの知覚と表現から、すべての主観的要素を排除することが緊急に必要である。これは、瞑想の技法によって表現の質を向上させ、また性の秘儀によって霊的器官を再生することによって得ることができる。

秘教的知識の発祥の地は北極であり、東洋学者たちが考えている東洋ではない。エスキモーたちは、まさに研究するに値するたくさんの宗教的伝統を保持している。

アルキメデスは「私に支点を与えよ。そうすれば宇宙を動かしてみせる」と言った。アルキメデスは宇宙を動かすためのこを捜していたのである。このてこが存在する。エリファス・レヴィは、「このてこは、アストラライトである」と言った。われわれはもっと明確に言おう。アルキメデスのてこは、クンダリニーである。クンダリニーを発達させた者なら誰でも、肉と骨から成る自分の体を四次元に至らせ、神々の地であるかのトゥーレ島へも行くことができるのである。祈り方を知っている者なら誰でも、四次元を通してあの神聖なる島へ連れて行ってもらえるように、聖なる母クンダリニーに頼むことができる。クンダリニーは、アルキメデスのてこで

あり、それはわれわれが肉体のまま四次元に入って行くためのてこなのである。てこの発明によって、すぐに原始人と動物との違いが生まれ、それによって、実際に概念の真の出現となったのである。もしわれわれがてこの作用を十分に霊的に理解するならば、このてこは正しい三段論法の構造に基づいていることがわかり、驚くであろう。この正しい三段論法を組み立てる方法を知らない者は、てこの作用も理解することができない。霊的領域における三段論法は、物質的領域におけること文字通り同じものである。実際、確信を持って言えることだが、地球上で暮らしている人類は二つのグループに分けられる。すなわち、てこの作用を識る者と、これを識らない者とのである。人間が、四次元世界へ行き、肉体ごと神々の地へ入るためには、「アルキメデスのてこ」「超アストラルの蛇」を必要とする。数学を等式と差違の基本的原理から解放した時、高次元の空間において、物事のより高等な秩序へとわれわれを導く道が見つかるのである。

偉大な著述家、P. D. ウスペンスキーは次のように述べている。「新しい数学“無限数と変数の数学”の原理によれば両方（等式、差違）とも不合理に見える。すなわち、ある大きさはそれ自体不変ではあり得ない。ある部分が全体と等しいこともあり得れば、全体より大きいこともあり得る。また二つの等しい大きさの一方が他方より際限なく大きいということもあり得る。すべての異なった大きさのものは、それらの間ではそれぞれがすべて等しいのである」。

実際には、定数と有限数から成る数学の見解でこの問題を研究すると、これらは全く不合理なことになる。しかし、定数と有限数から成る数学は、それ自体では存在しない大きさどうしの関係を示す微積分学、不合理な微積分学である。このことは確かで全く疑う余地のない真実である。それゆえ、人々が信じようと信じまいと、公式科学の視点から見ると明らかに不合理なものは、真実であり得るのである。

ある時、名の知れた刑法学者は「真理を発見するためには論理を捨てるべきだ」と言った。この法律家が言ったことは、ある意味では正しいが、別の意味においては誤っている。実際のところ、われわれは論理を捨てるのではなく、形式論理学を捨てるべきなのである。なぜなら論理学は正確な思考のための技術だからである。われわれが正しい思考を止めたならば、不合理に陥るのは明らかである。イヌマエル・カントは、著書『純粹理性批判』において、先験的論理方法を明らかにした。ベーコンや有名なアリ

ストレス以前から、『ヴェーダ』という聖なる古代インドの聖典において、すでに超絶的論理のための法則が与えられていた。

それらの法則は大変古い書物の中に保存され続けてきた。この論理学は弁証論理学である。これは直観の論理学、エクスタシーの論理学である。この論理学は、演繹的論理学や帰納的論理学が公式化されるずっと以前から存在している。この弁証論理学と呼ばれるマインドの驚くべき鍵を手に入れるならば、あやまちに陥る恐れもなく、万物の根源の世界の神秘の扉を開くことができるのである。この弁証論理学の公理は、エクスタシーを通してのみ公式化されるものである。

多次元から成る世界を深く理解し、北極の氷原に位置する神聖なる神々の地を訪れたいと真に願うのであれば、マインドの寺院から、インテレクトの言っているおきまりの論理の盲目的崇拜のすべてを、緊急に捨て去る必要がある。モリエールや、彼の風刺画などにしか役立たない形式論理学から自由になるには、マインドをびん詰から解放させる必要がある。

ヒーナスの地、千夜一夜物語にある驚くべき秘密の地、そして言語に絶するほど神聖な黎明の神々のみが住む黄金の国々は、アルキメデスのてこを発見すれば、まさに現実となるであろう。この神秘的なてこを軸にして、われわれは四次元へ飛んでいくことができる。時がやって来た！ マインドを解放し、クングリニーを目覚めさせよ！ 今こそ、自分が望むままに、いつでも四次元に行けるよう習うべきである。もし、クングリニーを目醒めさせた人が眠りに入る時、四次元に入れるように、そして聖なる島へ連れて行ってくれるようにとクングリニーに嘆願するならば、親愛なる読者よ、必ずやその奇跡が実現されるということがわかるであろう。イニシエイトが知っておくべきことは、眠ったままの状態、その身をベットから持ち上げることだけである。自らを助ける方法を知る者には、蛇がすべてにわたって援助をしてくれるであろう。「汝自らを救え。そうすれば、われは汝を救うであろう」。

【ドン・マリオ・ローザ・デ・ルナ】 スペインの有名な著述家。著者にヒーナスの科学について語ったと思われる。

【アンドロジヌス、ハーマフロダイト】 広義には、ともに両性具有とか

雌雄同体の意味で、一つの固体の中に男性と女性の両性があることを指す。この両性具有にも、二つのタイプがある。一つは細胞のように両性の分化が見られない（潜在的に男性と女性を具有している）場合と、もう一つは通常の植物のように一つの固体の中に、両性の分化が見られる（具体的に男性と女性を具有している）場合である。著者はここで、前者をアンドロジヌス、後者をハーマフロダイトと言っている。

段 階	意 味	例
第1ステップ (アンドロジヌス)	性的に未分化 潜在的に両性を具有する	ポーター人種 細胞
第2ステップ (ハーマフロダイト)	一固体の中で、両性に分化 男性器と女性器を合わせ持つ	ムー時代前期までの人種 通常の植物
第3ステップ	男性と女性に分離 一固体は、男性器か女性器か のいずれかしか持たない	ムー時代中期以降の人種 (現在の人種も入る) イチョウなどの雌雄植物

【R・ウエスターマーク】 Edward Alexander Westermarck(1862～1939)のこのことと思われる。フィンランドの人類、社会学者。婚姻の比較研究で有名。

【マハー・マンヴァンタラ】 “マハー”は大きい、長いという意味で“マンヴァンタラ”とは宇宙、天体、生命体の顕現周期のこと。ここでは天体周期のことを指す。結び注参照。

【モクテスマ (Moctezuma II)】 1466～1520。アステカ帝国最後の皇帝。

【ヒントン (Hinton)】 未詳。

【エリファス・レヴィ】 1810～75。パリ生まれ。本名アルフォンス・ルイ・コンスタン。今日西欧において行われる魔術の基本、カバラのバラ十字的解釈の権威者であり、実践者。著書『魔術の歴史』『高等魔術の教理と祭儀』他。

【P. D. ウスペンスキー】 1878～1947。グルジェフの下で8年の修練を積み、後に、彼独自の思想やシステムを普及。著作には、『超宇宙論』『奇跡を求めて』『ターシャム・オーガナム』がある。

【ベーコン】 1561～1626。イギリスの哲学者。真の知識は、事実の観察と実験からの帰納によってのみ得られるとした。

【モリエール】 1622～1673。フランスの喜劇作家。代表作『タルチュフ』。

第三十二章 聖なる三位一体

インドの聖典は、へそ、心臓、のどが有機体である人間の火のセンター（中枢）である、とはっきり述べている。そしてわれわれがこれらのセンターについて瞑想するならば、その段階に応じてサラスワティ（弁財天）、ラクシュミ（吉祥天）、パルヴァティ（シバ神の神妃）ないしギリジャー（女神）というマスターたちに出会うことができると言っている。

これらの三人のマスターは、われわれの輝く叡智の龍の深遠なる三つの部分とともに働く。また三人のマスターは、太陽ロゴスの三つの側面から生じる力を支配している。

サラスワティは父の力とともに働く。ラクシュミは子の力と、そしてパルヴァティは聖霊の力とともに働く。

サラスワティは人間のマインドを支配し、ラクシュミはアストラル体に、そしてパルヴァティは肉体に力を及ぼす。

アプレンティス（見習い職人）は、神聖な巫女である妻とともに「性の秘儀」を実践し、その肉体を完全なものにすべきである。この仕事はたいへん厳しく困難なものである。

コンパニオン（職人）は、自分のアストラル体が有益な器となるように、それを完全なものに変換していかなければならない。

マスター（親方）は、全宇宙空間が奏でる音楽の中で燃え盛る炎の力によって、メンタル体を完全なものにしなければならない。

アプレンティスは性の秘儀を実践している間、性器官をコントロールするために、パルヴァティに援助を請わなければならない。

コンパニオンは、肉体からアストラル体に抜け出る方法を教わるために、ラクシュミに祈るべきである。明瞭な意識を持って、アストラル体でポジティブに旅に出る方法を習得することは緊急である。

マスターは、マインドをクリスト化するため、サラスワティに援助を求める必要がある。これらの祈願は、性の秘儀を実践している間に行われる。

性の秘儀を実践している間中、聖霊の力に援助を求めることが必要である。それは緊急に必要である。われわれの内的宇宙の深みにおいて、アス

トラル・クリストを誕生させるために、クリストの力に援助を求めることは緊急である。そしてマインドのクリスト化を助けるために、父の力の援助を請うことは絶対に欠かせないことであり、それによってメンタル・クリストを生じさせなければならない。

肉体、アストラル体、メンタル体を、よく磨かれた素晴らしい魂の乗り物に変換すべきである。

アストラル体で、意識的にアストラル界へ旅立つ方法を習得することは絶対に必要である。マインドは、アストラル界にあるということを思い出してみよう。至急、白ロッジの寺院を意識を持って訪れなさい。アストラル界では、われわれはマスターの足元で直に学ぶことができる。

これから、ある有名な賢人がアストラル・プロジェクション（幽体離脱）について述べた著作の中で伝授しているマントラを紹介しよう。これらのマントラはサンスクリット語で、インドのヨギが幽体離脱の際、用いるものである。

幽体離脱のためのマントラ

ハレー ラーマ ハレー ラーマ ラーマ ラーマ ハレー ハレー ハレー クリスト ハレー
“Hare Rama, Hare Rama, Rama Rama Hare Hare, Hare Christ, Hare
クリスト クリスト クリスト ハレー ハレー
Christ, Christ Christ, Hare, Hare.”
ハレー ムラレ モドゥップ コイプトウス ハレー コパル ゴヴィンダ ムクム ソンレ
“Hare Murare Modup Coiptus Hare Copal Govind Mukum Sonre.”
マゲ プラーゲ ヨディ コルピ バシィ パルヴォット トゥルロ ヒロ ノ ダーネ エン バイ デ
“Mage Prage Yodi Kolpi Basi Parvot Tullo Hiro No Dane En Bai De
ネム
Nem.”
シュリ ゴヴィンダ シュリ ゴヴィンダ シュリ ゴヴィンダ シュリ ゴヴィンダ ガネーシャ ナマプ
“Sri Govind, Sri Govind, Sri Govind, Sri Govind, Ganesha Namap.”

これを行う時は、頭を北か東に向けて眠りに入るようにする。まずはじめに、このインドのマントラを暗記することが習得の第一歩である。そして仰向けに横たわり、マスター・ラクシュミを呼び、意識を持ったポジティブな状態でアストラル体連れ出してくれるように、全身全霊を尽くし祈願するのである。クリストの名においてラクシュミを呼ぶことが重要である。

インヴェーション(祈願)

「クリストの名において、クリストの栄光によって、クリストの力によって、われは御身を呼ぶ、ラクシュミ、ラクシュミ、ラクシュミ、アーメン」。

この祈りは、われわれが肉体から意識を持って抜け出し、またアストラル体で意識を持って旅する方法を覚えてもらえるように、マスター・ラクシュミに嘆願しながら何千回と繰り返されるものである。この祈りが終わったならば、マインドをクリストに集中し、サンスクリット語のマントラを何千回と繰り返し唱えるのである。祈り続けながら、安らかに眠りに就き、そして眠りから覚めたなら、自分はどこにいたのか、どこを歩いていたのか、誰と話していたのかなどを思い出すように、夢を思い出すためのプラクティスを行うのである。

ラクシュミに、幽体離脱のテクニックを覚えてくれるようにお願いすることが必要である。意識を持った幽体離脱の方法を習得するためには、聖ヨブのような非常な忍耐を必要とする。アプレンティス(見習い職人)の時期は七年間続き、七年を経てようやく、輝く一条の最初の光が差し込むのである。

さて、何のためにこれを学ぶのであろうか。これは単なる好奇心や、世俗的興味を持つ者、また神聖なる寺院を冒とくする者は、はじめからやらないほうがよい。この科学は単に好奇心を持つ人々のためのものではない。

完全なる結婚の道を行く者は、神聖なる妻と性の秘儀を行い、そのたびに行う行為は洗練されていき、自らも神聖化され、そしてインティモの持つ光輝と力が彼のアストラル体とメンタル体に反射し始めるようになる。そして光明(イルミネーション)がやって来る。道とはこのようなものである。しかし、この光は、アプレンティスの段階の後にしかやって来ない(われわれは、フリーメーソンの神秘学の用語を用いて話している)。

この光を受け取るために準備する真の志願者はみな、「三角定規とコンパス」によって認められ、確かめられるであろう。

道を行く者の魂とパーソナリティが、秩序ある、完全な調和の内に表現しあう時、はじめてこの光を得る準備ができたことになるのである。

この光を得られないとぼやく者は誰も、「三角定規とコンパス」の試練に耐えることはできない。



三角定規とコンパス

「三角定規とコンパス」が、フリーメーソンのシンボルになっている。

コンパスの二本の足が二元性を意味し、精神と物質のバランス、さらには魂が肉体を支配することを意味している。三角定規はわれわれの体の上位の三つ組のことで、これらの三つの体が下位の四つの体を支配する時、フリーメーソンのシンボルが与えられる。また、上図のどくろは、魂が肉体を支配するためには、心理的死(心理の浄化、エゴの根絶)が必須であることを示している。

下位の四つ組(メンタル体、アストラル体、エーテル体、肉体)が、魂に忠実に従うならば、光明に至ることになる。一方、下位の四つ組が魂に従わないのであれば、すなわち、人がその魂に従う術を知らない間は、光明を得ることは不可能である。

性の秘儀を実践する者は、毎日特別な香で寝室を清めるのが望ましい。香はアストラル体を浄化する。そして、よい香は仕事の⁷⁻²ためにわれわれが必要としているマスターを招いてくれる。

安息香で香を調合するとよいだろう。安息香はアストラル体を浄化するとともに、淫らで官能的な考えを一掃してくれる。安息香は、香炉の中で他の香と混ぜ合わせたり、火鉢の中で焚くのもよい。これが最も実用的である。

また、雰囲気の浄化のために、バラのエッセンスをこれらの香と調合す

することもできる。バラが偉大な力を持つ花であるということ覚えておくとよいだろう。バラは花の女王である。魂のバラが、われわれの肉体の試練に対して、その香気と爽快なつぼみを開くことが必要である。

また、婚礼の寝室に、敬虔な雰囲気を作り上げるためには、オリーブの香もよい。夫婦は、芳香と愛のうちに暮らすべきである。

香や香油は、ヒンズー教、パールシー教、ジャイナ教、神道など、あらゆる寺院でかぐわしく焚かれ用いられている。香や香油は、ギリシア、ローマ、ペルシアなどの寺院でも、決して欠かされることはなかった。

光明を得ることを願うなら、多くの浄化と神聖化が必要である。

特別の指示

偉大なる秘儀司祭イエスは、次のように言った。「汝自らを救え。そうすれば、われは汝を救うであろう」。ノーシスを学ぶ者は、マスターのこの言葉を心に明記しておくべきである。この章で示した幽体離脱のためのマントラは素晴らしいものである。マスター・ラクシュミへの祈りは、崇高であり、かつ驚くべき効果を持つものであるが、このマントラに頼るだけでなく、ノーシスを学ぶ者は自らの努力が必要である。自分のへそに集中して、マントラを心の中で繰り返しながら眠りに就くべきである。そして自分が眠っていることを意識し、睡眠に特有のだるさを感じたなら、自分が微風や気体のように、薄く広がっていく様を想像するのである。すなわち、自分は気体であり、薄く広がるものであるということを感じながら肉体の持つ重力を忘れるのである。どのような種類の引力も全く受けることはないのだから、どこへでも飛んで行ける、と考えるべきである。そして肉体を忘れ、自分は雲であり、芳香であり、微風であり、神聖なる氣息のようであると感じながら、寝床から飛び出すのである。これは心の中で飛ぶことをイメージするというのではない。これは全くの“行為”なのである。具体的な行動に移すということは、緊急に必要なことである。一度肉体の外に出たなら、家を出て、ノーシス教会、あるいはどこにでも自分が行きたい場所へ向けてアストラル体を導くのである。アストラル体で、他の惑星を旅することもできる。人は宇宙のはるか彼方までも、そして神秘なる寺院も訪れることができるのである。

また、アストラル体で、自然界のアカシック・レコードを学び、過去、

現在、未来のすべての出来事を知ることができる。東洋の預言では、二十世紀末には科学者がこの自然界のアカシック・レコードを映し出す特別なラジオ・テレビ装置を開発するであろうと言っている。その時、全人類は地球とその住人の歴史のすべてを、映像を通して見るようになるであろう。イエス、マホメット、仏陀、ヘルメス、ケツァルコアトルのような偉大な人物の全生涯も見られるであろう。現在、人類はクリスト、キケロ、オルフェウスなどの人物が発した言葉をキャッチするラジオを完成させようと奮闘努力している。これらの波動は確かに存在している。なぜならば、自然界で振動しているものを止めることのできるものは、何もないからである。ただそれらをキャッチする受信機やテレビ装置といったものを完成させることが問題なのである。またアストラル体やアストラル界を見ることのできる特殊なレンズが発明されるのも、遠い日のことではないであろう。偉大なる白ロジは、これらの科学的発明や発見へと人類を導いている。

【アプレントイス、コンパニオン、マスター】 フリーメーソンの用語で三つの階級を指す。西洋中世のギルド（同業組合）からきている。このギルドでは、弟子が親方のところに住み込んで技術を修得するが、見習いの時は、アプレントイス（見習い職人）と呼ばれ、一人前となった時は、コンパニオン（職人）と呼ばれた。そして、親方から独立した時は、自らがマスター（親方）となった。

【聖ヨブ】 ヘブライの族長。神への信仰が厚く、あらゆる苦難に耐えた忍苦、堅忍の典型。旧約聖書「ヨブ記」参照。

【パールシー教】 7～8世紀にイスラム教徒の迫害を逃れたペルシア系のインド・ゾロアスター教。

【ジャイナ教】 前5～4世紀頃インドに興った宗教。ヴェーダを否定し、不殺生と苦行の実践を重視。

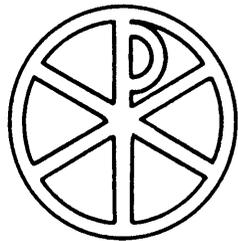
【キケロ(Cicero)】 前106～43。ローマの政治家、弁論家、哲学者。

【オルフェウス (Orpheus)】 ギリシア神話。詩の女神カリオペの子。

第三十三章

クリスト

崇敬すべき神クリストゥス（クリスト）は、古代の火の神への崇拜に由来する。P（Pyre：火葬用の積みまき）と、X（Cross：十字）の文字は、聖なる火を作り出す神聖文字を表している。



クリストは、ミトラ、アポロ、アフロディーテ、ジュピター、ヤヌス、ヴェスタ、バックス、アスタルテ、デメテル、そしてケツァルコアトルなどの神秘として崇拜された。

クリスト原理は、どのような宗教においても必ず存在する。すべての宗教は一つである。湿気が水固有のものであるように、宗教は生命固有のものである。壮大なる宇宙の普遍的宗教は、何千もの宗教形態に変化させられてきた。しかしこの普遍的宗教の根本原理から見れば、分化させられたそれぞれの宗教の司祭たちは、全く同一である。

イスラム教の司祭とユダヤ教の司祭、また異教の司祭と公認のキリスト教の司祭との間に根本的な違いは存在しない。宗教は一つである。一つであり、完全に普遍的である。日本の神道の神主やモンゴルのラマ僧の行う儀式は、アフリカやオセアニアの魔女や魔術師の儀式に似ている。

ある宗教形態が墮落し、消滅する時、普遍的生命はそこに新しい宗教形態を創造する。

真正なノスティック・キリスト教はパガニズムから来ている。パガニズム以前、コスミック・クリストはすべての宗教で深く敬われていた。エジプトにおいてクリストはオシリスであり、クリストを体現した者はオシリスとなった。いつの時代においても、普遍的で無限なるクリスト原理とそれに同化したマスターが存在していた。エジプトではヘルメスがクリストであった。メキシコではケツァルコアトルが、聖なるインドではクリシュナがクリストであった。エジプトの地で学んだ偉大なノスティックであるイエスは、聖地パレスチナにおいても、普遍なるクリスト原理と同化する

名誉を得た。そしてそれにより火の神と十字の神によって、クリストゥス（Khristus）と再び命名されるに値する者となったのである。

ナザレのイエスーイエズスーゼウス（Jesus—Jesus—Zeus）は、普遍的なクリスト原理を完全に具現した近代の人物である。彼以前にも多くのマスターたちが、この火によるクリスト原理を具現した。

ガリラヤのラビ（イエス）は神である。なぜなら彼はコスミック・クリストを完全に具現したからである。ヘルメス、ケツァルコアトル、クリシュナもまたコスミック・クリストを具現したゆえに神々である。

神々を崇めることは必要である。神々はその帰依者を援助する。「求めよ、さらば与えられん。たたけよ、さらば開かれん」（マタイ7:7）。

火を生じさせる技とは、性の秘儀である。完全なる結婚によってのみ、われわれは火を生じさせ、それを活動させ、そしてクリストを具現することができるのである。このようにして、われわれ自身が神々となる。

クリスト原理は常に同じである。これを具現したマスターたちは、生けるブッダである。そしてこのブッダたちには、常にヒエラルキー（階級制度）が存在する。ブッダであるイエスは、普遍的な白ロジにおいて、最も高い段階に至ったイニシエイトである。

一つの宗教形態がその使命を果たした時、それは崩壊する。実際にイエス・クリストは、新しい時代の創始者であった。イエスはその時代の宗教にとって必要な存在であった。一方、ローマ帝国の終わりにおけるパガニズムの僧侶階級は、全く不名誉な状態に落ちてしまった。群衆はもはや聖職者を尊敬せず、芸術家は神聖な儀式を喜劇に風刺し、聖なるオリンポス山やアベルヌス湖をあざけり、悪態をついた。これらの人々がバックス神を、飲んだくれの女として真似たり、時にはロバに乗った太鼓腹の大酒飲みとして風刺画にしたことは、何とも痛ましいことである。また言語に絶する神聖なヴィーナスを、乱痴気騒ぎの快楽を探して回る不貞な女として描いたのである。そのヴィーナスには、パーンやバックスの前でサチュロスに追いかけて回されているニンフ（妖精）たちが従った。

宗教が退廃したこの時期において、ギリシアやローマの人々は、戦いの神マルスさえも重んじることはなかった。彼らは、マルスがヴァルカンの美しい妻ヴィーナスと不義を働いている最中に、ヴァルカンの目に見えない網によって捕らえられた、などと風刺的に描いた。彼らは侮辱や風刺や皮肉などによって神々を笑いものにしたが、そのやり方は明らかにパガニ

ズムの退廃を示すものであった。神々の父であるオリンポスのジュピターさえ、女神やニンフや人間までも誘惑することに専念していると皮肉っぽく描かれ、冒瀆から免れなかった。プリアポスは恐ろしい夫として、また古来神々の住む山であるオリンポスは、乱飲乱舞の酒宴の場へと変えられたのである。

太古からの恐怖の源だったプルートが治める恐ろしいアベルヌス湖（地獄）は、もう誰もが怖がらず、数々の風刺や笑い転げるような筋立ての喜劇となった。司祭が下す破門や除名といったものも、何の効果も示さなくなってしまった。このように人々は、もはや彼らを尊敬しなくなった。一つの宗教形態がその使命を果たし、そして必然的に終わりを告げたのである。ほとんどの司祭は墮落し、すでに荒廃したヴェスタ、ヴィーナス（アフロディーテ）、アポロの寺院を世俗的なものに悪用していた。

この時代は、多くのパガニズムの司祭が、浮浪者、喜劇役者、人形使い、乞食などになっていった。

一般の大衆は彼らを笑いにし、石を投げて追いかけてたりした。これがローマ・パガニズムの宗教形態の終わりである。その形態は役割を果たし、最後にそこに残っているのは消滅だけであった。

世界は何か新しいものを必要としていた。普遍的宗教は新しい形で示されることを必要としていたのである。そこでイエスが新しい時代の創始者となった。イエス・キリストは事実、新しい時代の聖なる英雄であった。

325年のニカイア会議では、唯物主義の愚かな人が考えるような新しい英雄は生まれなかった。このニカイア会議において、ある人物とある教義が公式に認められた。

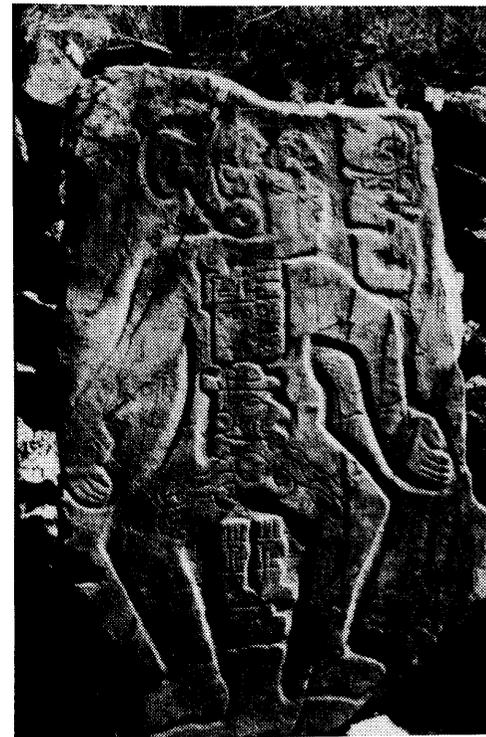
その教義とは、今日ローマ・カトリック教会によってねじ曲げられてしまった原始キリスト教であり、その人物とはイエスである。多くの人物が新しい時代の神の化身であると自ら宣言したが、イエスを除いて誰一人、新しい時代の教義を説いた者はいなかった。真実とは自ら語るものであり、イエスは彼が説いたところのものを生きたのである。それが、イエスが新しい時代の創始者であると認められたゆえんである。

イエスの教えはキリスト教的な秘教であり、すべての世代や時代を貫く太陽の宗教である。

イエスによって教えられたノスティックな教えは、オーロラの神々の原始キリスト教、太陽の宗教である。

ニカイア会議において、新しい宗教形態（キリスト教）が公認されたが、それまで長い間、恐るべき迫害と殉教に耐えねばならなかった。このことは、ネロ帝の時代のライオンの円形競技場を思い出すだけで十分であろう。この競技場に、キリスト教徒が投げ入れられ、野獣のえじきとなった。

カタコンベの時代と、これらすべてのノスティックの受難について思い起こしてみよう。ニカイア会議において、ようやく太陽の教義とコスミック・キリストを具現した人物を、明確に、そして公式に承認することになったのである。



踊る人（太陽人間）

上図はメキシコのモンテ・アルバンにある“踊る人”で、生殖腺の部位に太陽と日々の長老の顔が描かれている。われわれの性エネルギーとは太陽エネルギーそのものであり、性エネルギーを昇華することにより、黄金の霊体つまり太陽の霊体が形成され、ついには太陽人間つまり日々の長老に変容する。イエス・キリストの秘教的な教えの根幹は、性の秘儀を通じて太陽人間に至ることであった。

ここでエジプト、ギリシア、ローマ、イベリア、スカンジナビア、ゲール、ゲルマン、アッシリア、アルメニア、バビロニア、ペルシアなどの宗教の神聖な神々は、今なお滅んではないことを明らかにしよう。これらの神々はそれぞれの使命を果たし、そして退いた、というだけのことである。マハーマンヴァンタラの未来において、これらの言語に絶する神々と、その神聖な宗教は、新たな啓示のために、来るべき時に再び戻ってくるであろう。

一つの宗教形態が退くと、その宗教を超えた普遍的原理は、その後続く宗教形態へとゆだねられていく。それが生命の法則である。

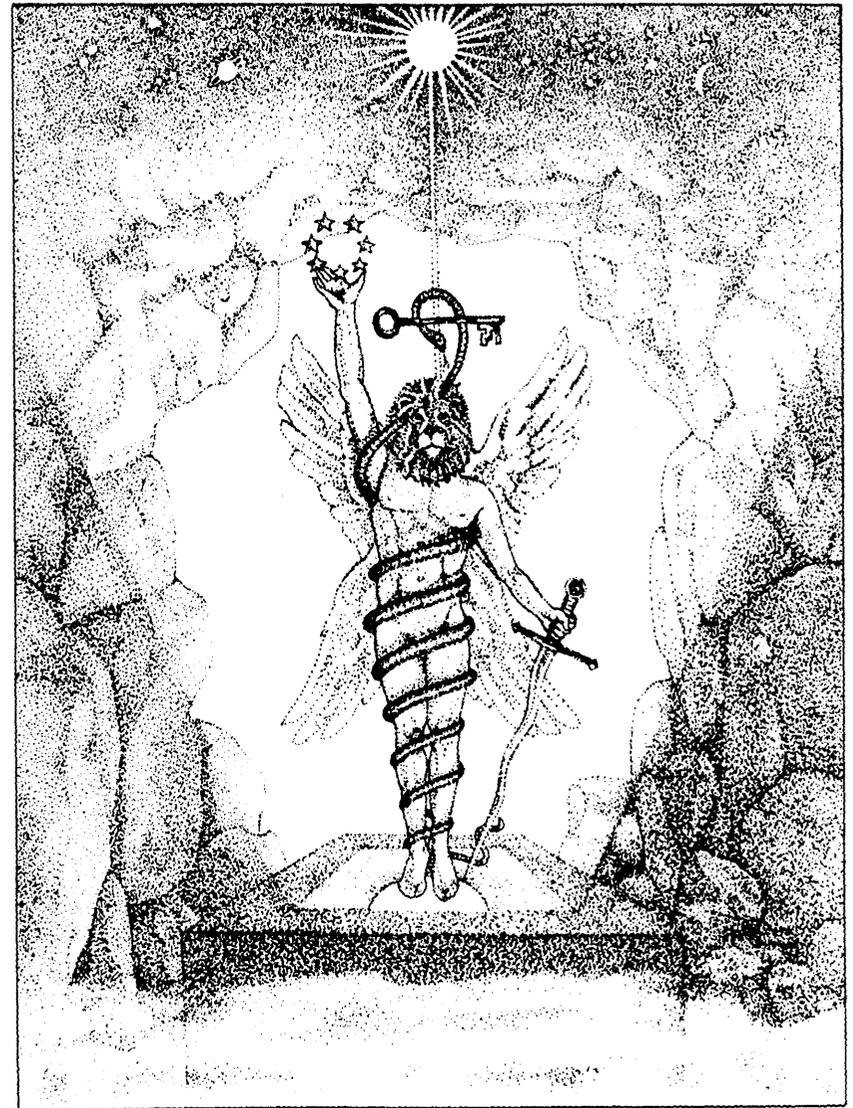
イエスも、クリシュナ、仏陀、ゼウス（ジュピター）、アポロの聖なる特性を持っている。彼らはみな、処女から生まれた。実際にキリストは、常に宇宙の処女なる母のもとで誕生するのである。すべてのマスターは性の秘儀を実践してきた。また、象徴的に言えば、巫女である妻の胎内からキリストは誕生すると言うことができる。

神々の誕生の表象、象徴、そしてドラマは常に同じである。ペルシアの太陽神ミトラもイエスと同じく12月24日の夜12時に生まれた。イエスが生まれたのはベツレヘムである。この名前はバビロニア人やゲルマニア人が、その太陽神をベル、またはベレンと呼んだのに由来する。これにより太陽キリストを具現した者の真実を理解できる。

イシス、ジュノー、デメテル、ケレス、ヴェスタ、マイアといった女神たちは、秘儀司祭であるイエスの母として人格化された。ヘブライ人のマリアは、偉大なイニシエイトであった。このことは神秘学者の誰もが知るところである。これらの母なる女神たちはみな、生命の普遍的な言葉を生み出す聖なる母クンダリニーとして、すばらしく表現されている。

すべての聖人、殉教者、聖女、天使、智天使、熾天使、大天使、能天使、力天使、座天使はみな、半神、タイタン、女神、空気の精、キュクロプス、そして神々からの使者たちと同じである。しかし今では新しい名前になっている。宗教的原理は常に同じである。宗教の形態は変わり得るが、その本質は変わり得ない。なぜならただ一つの宗教、普遍的宗教のみが存在するからである。

古代の尼僧の修道院は新しい形で再起したが、不幸にも中世の司祭は、^{フロンツェルマン}偉大なる秘儀を知らず、巫女を姦淫するためにのみ利用した。もしも彼らが偉大なる秘儀を知っていたならば、彼らはその偉大なる使命を果たし、



太陽神ミトラ

ゾロアスター教の神で、ローマ帝政期にペルシアなどで広く信奉された。太陽神ミトラは、ライオンの顔を持ち、蛇に巻かれている。ライオンは叡智を、蛇はクンダリニーを指す。ここでも、クンダリニーを上昇させることが太陽人間に至るキーであることを示している。

自己実現の道を深めていったことであろう。そしてローマ・カトリック教会は墮落することなく、キリストの秘教体系が、現在すべての寺院で光輝いていたことであろう。

ノースにおけるキリストの秘教体系は、このアクエリアスの新時代に、カトリック教に代わるものであり、人は言語に絶する神々を敬慕するようになるであろう。完全なる結婚は、新しい時代における宗教の道である。性の秘儀なくしてコスミック・キリストを具現することは不可能である。愛は最も崇高なる宗教であり、神は愛である。愛と呼ばれているものの重要性を深く理解すべき時がやって来た。実際に、愛はわれわれが完全にキリストとなるための、唯一のエネルギーなのである。

性は太陽の石である。性は土台の石であり、その石の上にわれわれは、主なる父の寺院を建てなければならない。「家造りらの捨てた石が、礎の石になった。これは主がなされたことだが、私たちの目には不思議に見える」。まさにこの石は、自分を完全だと思っているインフラセクシャルな者（性的退廃者）に投げ捨てられたものである。タブーとして、あるいは罪、あるいは単なる快樂の手段としてみなされているこの石が、寺院の礎の石に置かれるということは、実に驚くべきことである。「それゆえにあなたがたに言うが、神の国（魔術の王国）はあなたがたから取り上げられて、神の国において実を結ぶ人々に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それが誰かの上に落ちかかるなら、その人は粉みじんにされるであろう」（マタイ21：42-44）。

性は家族の基礎の石である。なぜなら性なくして、家族は存在しないからである。性は人間の基礎の石である。なぜなら性なくして人が生まれることはできなかつたからである。性は宇宙の基礎の石である。なぜなら性なくして宇宙は存在し得なかつたからである。

第三ロゴスの性エネルギーは、すべての星雲の中心から、またすべての原始の渦巻の中から湧き出てくる。地球の中心からこのエネルギーの流出が途絶えたなら、地球は死んだ天体となるであろう。

第三ロゴスにおける性エネルギーには三つの表現形式がある。

1. 種の生殖作用
2. 人類の革新
3. 精神的発展

クングリニーは、第三ロゴスが地球のすべての要素を生み出したのと同じ種類のエネルギーである。

自然界には三種類のエネルギーが存在する。第一に父のエネルギー、第

二に子のエネルギー、第三に聖霊のエネルギーである。インドにおいて父はブラフマ、子はビシュヌ、聖霊はシバである。

聖霊の力は内部へ、そして上に向けて返還させなければならない。性エネルギーをハートに向けて、至急昇華させなければならない。この磁気センターにおいて性エネルギーは子の力と交わり、超越的世界へと上昇する。クングリニーの完全な開発を成し遂げた者だけが、キリストを完全に実現するのである。キリストを実現した者だけが、父を具現することができる。

子は父とともにあり、父は子とともにある。子によらずして父に達する者はいない。そういうものである。

父と子と聖霊の力は、まず下り、そして内に、そして上へと戻っていくのである。これが法である。



ワステカの青年像

ケツァルコアトルに仕える青年像。背中に背負っている子供は、カエルのように上に向かってジャンプしようとしている。これは、われわれが上昇させなければならない聖霊、性エネルギー、クングリニーを示している。

聖霊のエネルギーは性腺まで降りて来る。子のエネルギーはハートまで降り、父のエネルギーはマインドまで降りてくる。われわれは聖霊のエネルギーによって戻るが、この帰還にはすばらしい遭遇が伴う。ハートにクリストを、そしてマインドに父を見出すのである。このような遭遇は、聖霊のエネルギーを自分の内と上に向けて帰還させたことを意味する。このようにして四次元、五次元、六次元の空間をも超越していくのである。そして自分自身を完全に解放することができるのである。

秘儀司祭イエスについては多く語られてきたが、実際には彼の本当の生涯というものを、誰も知らない。そして秘儀司祭イエスを去勢してしまう傾向さえある。キリスト教の宗派では、イエスは女々しく弱々しい、また気紛れな婦人のように時々怒りだすインフラセクシャルな人として表現されている。これはすべて全くばかげたことである。真実は、誰もイエスの私的な人生を知らないということである。なぜなら、われわれには彼の伝記がないからである。客観的な超視覚能力によってのみ、自然界のアカシック・レコードの内にあるイエスの人生を学ぶことができる。アカーシャは、すべての空間に浸透し、充滿しているとらえがたい作因である。地球や人類のすべての出来事、イエスの生涯などは、アカーシャの中に永遠なる生きたフィルムのように記録されている。この媒体は大気にさえも浸透する。今世紀の終わり近くには、ラジオやテレビの技術は、アカシック・レコードを見るための装置を持つようになるであろう。そして人々はこの装置によって、秘儀司祭イエスの人生を学ぶことができるであろう。すべての運動は相対的であり、ただ一つ不変のものが光速であることをわれわれは知っている。光は、決まった一定の速度で進む。天文学者は特別なレンズを使って、もはや存在しない星を観測している。彼らが見て写真に撮ったものは、星々の記憶であり、アカーシャである。これらの星の多くはたいへん遠いところにあるので、それらの星から旅立って来た光は、世界が形成される以前から旅を始めることもできたであろう。実際、この光速という普遍率は、過去の出来事を覗くことができるような、ある特殊な装置の発明を確かに可能にしている。それは不可能なことではない。非常に特殊な望遠鏡や特別なラジオ・テレビの装置を用いて、世界の創世時から地球上で生じた音、光、出来事、事件などをとらえることができるであろう。間もなく、二十世紀末までには科学はここに達し、そしてイエスの生涯について書かれることになるであろう。

ノーシスの学徒は、いつでも必要な時にアストラル体でアカシック・レコードを学ぶことができる。われわれは偉大なマスターの生涯を知り、また言葉の最も完全な意味で、イエスが真実完全なる人間であったことを知ることができる。イエスはインフラセクシャルではなかったのも、巫女である妻がいた。イエスの妻は非常に崇高な神秘的パワーを持つ女性で、全くのアデプトであった。イエスはヨーロッパ中を旅して歩き、また地中海にある秘教的学派の一員でもあった。イエスはエジプトで学び、ピラミッド寺院の中で、彼の巫女と性の秘儀を実践した。

このようにして彼はイニシエーションを再度受け、後には金星のイニシエーションに到達した。イエスはペルシアやインドなども旅して回った。それにより、言葉の完全な意味において偉大なるマスターは、完全なるマスターである。

実際に四つの福音書は、錬金術と白魔術の四つのテキストである。生命の水（精液）を、錬金術師の光のワインに変換することからイニシエーションは始まる。この奇跡はカナン⁺の結婚式において実現される。常に完全なる結婚において行われるのである。この奇跡とともに、人はイニシエーションの小道を歩み始めるのである。イエスの受難と死の生涯のドラマすべては、この世界と同じぐらい太古から存在するものである。このドラマは、はるかなる過去の古代宗教より来たものであり、世界中のあらゆる端々にまで知られている。このドラマはイエスに、そして刃先の小道を通り抜ける者すべてに当てはまる秘教的人生である。またイエスと同様に、クリストを実現したすべてのイニシエイトに当てはまるものである。実際、イエスにおける受難と死と復活という生命のドラマは、この世界が存在するずっと以前から実在する宇宙的なドラマであり、無限空間のすべての世界で知られているものである。

四つの福音書は、性の秘儀と完全なる結婚の鍵⁺によってのみ理解することができる。この福音書は、刃先の小道を通り抜ける数少ない者へのガイドとして、まさに書かれたものである。四つの福音書は決して一般大衆のために書かれたものではない。宇宙のドラマを新しい時代と適合させる仕事は、驚異的なものであった。この仕事には隠れたイニシエイトのグループが参加し、輝かしい仕事を成した。

世俗的な者が福音書をひもとくと、誤った解釈をすることになる。



イエスは彼のすべての内なる乗物において、キリスト化を成し遂げた勇者であった。これは、彼がINRI（火）とともに働くことにより獲得したのである。このようにして、この秘儀司祭は父と一体となることができたのである。イエスは自らをキリスト化し、父なる存在のもとへと上昇した。精神的にも、生理学的にも、生物学的にも、また魂の領域においても、自らをキリスト的な本質と同化させた者はみな、キリストとなるのである。このようにキリストとは、ある特定の聖人であるとか、個人のことを指すのではない。キリストは無限空間すべてに遍く存在する宇宙的な本質なのである。われわれの内に、キリストを実現させなければならない。これはINRI（火）によってのみ可能となるのである。

キリストは、蛇の存在なしには生まれることはできない。この蛇は、性の秘儀の実践によってのみ開発し、上昇させ、成長させることができる。キリストを実現した者が、自らキリストとなる。そしてキリストだけが唯一、父のもとに上昇することができるのである。この父とは、聖人や人間などの個人を指すのではない。父と子と聖霊は、本質であり、力であり、超越した、そして大変神聖なエネルギーである。それだけである。不幸にも人々は、これらの超越的な力を擬人化して表そうとする傾向があるということである。

イエスは受難のドラマを生きたが、それを生きたのは彼だけではなかった。イエス以前にもヘルメス、ケツァルコアトル、クリシュナ、オルフェウス、仏陀など、何人かのイニシエイトもそれを生きた。そして彼の後にも、他の数名がそれを生きた。受難のドラマは宇宙的なものである。

キリストと性の秘儀は、すべての宗教、学派、そして信仰を統合するものである。完全なる結婚は誰をも傷つけない。すべての宗教のすべての司祭、すべての学派のすべての教師、そしてキリストを敬慕する者や知識を愛する者はすべて、完全なる結婚の小道を通り抜けることができるのである。総括は誰も傷つけることなく、みなに恩恵を与える。これが総括の教義であり、これが新時代の教義である。

すべての学派、宗教、宗派、教団などのメンバーは、蛇の知識に基づく新しい文明を築くために、完全なる結婚の原理に大いに賛同するであろう。われわれは、完全なる結婚に基づく新しい文明を必要としている。今や世界全体が危機の時にあり、愛によってのみ、われわれは自らを救うことができるのである。

われわれノスティックは、どんな宗教とも敵対しない。それは馬鹿げているからである。すべての宗教は必要である。すべての宗教は、宇宙の普遍的、無限なる宗教が、異なった表現をとったものにすぎない。重大かつ嘆かわしいことは、無宗教な人々が存在するということである。われわれはすべての学派や宗派が、その伝道、教え、研究、討論などの使命を全うすることを信じている。基本的で、かつ重要なことは、人々が完全なる結婚の小道をたどるということである。愛は何者をも傷つけず、損害を与えることもない。ノーシスは、すべての宗教、学派の信仰の炎であり、源である。ノーシスは知識と愛である。

時を経ることによって、あるいは進化や転生を通して、また多くの経験をすることでクリストを実現することができると信じる者は、全くの誤りである。このように考える者は、自分の過ちを時代から時代へ、人生から人生へと、あとまわしにしつづけ、実際に終わりが来た時には、自らを奈落の底へ落としてしまう。

ノスティックは進化論の法則を否定はしない。ただ進化論の法則がクリストを実現させるということは、誰にも起こりえないと確信するだけである。進化と退化の法則は、自然という偉大なる実験室のすべてにおいて、同時に作用している純然たる機械的な自然の法則である。多くの生物や多くの種は、退化の産物であり、また他の多くの生物や多くの種は進化の産物なのである。由々しきことは、持ちえもしない美徳や才能も進化のゆえんとすることである。進化論でクリストを実現することは、誰にもあり得ない。クリストを実現することを望む者は誰でも、意識を変革する必要がある。これは「穀粒との仕事」によってのみ可能となるのである。「穀粒との仕事」ということを明確にすると、三つの点から説明できる。第一に生まれること、第二に死ぬこと、そして第三に愚かに苦しむ人類への献身である。

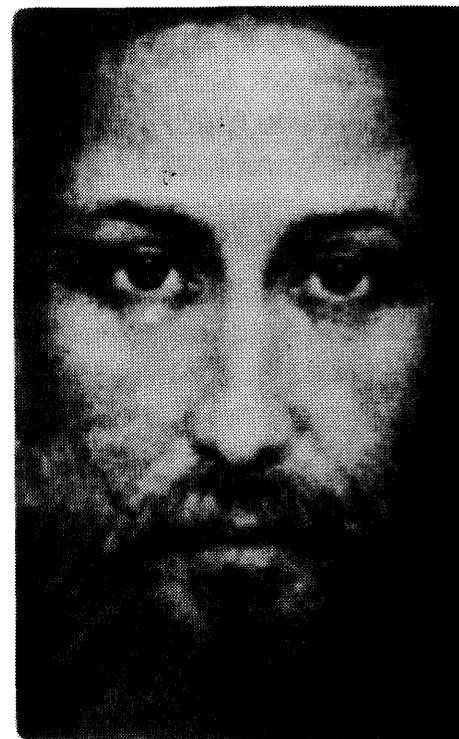
「生まれること」は完全に性的な問題である。「死」は神聖な問題である。そして「人類のための献身」は、クリストを中央に置くことである。

天使がわれわれの内に生まれなければならない。この天使は性的な胚によって誕生する。悪魔は死ぬべきであり、これが聖なることである。そしてわれわれの生命を他人の生命のために捧げるべきである。これがクリストを中央に置くということである。

秘儀司祭イエスは、記されている受難のすべてのドラマを実際に生きた。

たとえわれわれが本当に惨めな地上の虫けらであるにしても、われわれ自身も受難のドラマのすべてを生きる必要がある。

イエスはローマの兵士とヘブライの女との間にできた子であった。偉大なる司祭は中背で、太陽光線ですぐ日焼けするような白い肌をしていた。偉大なるマスターは黒い髪と、同じ色のあごひげをたくわえていた。彼の二つの目は、言いようもない夜の闇のように思われた。ナザレ人というのは、“ナザレ”すなわち真っすぐな鼻の者という言葉から来ている。イエスの鼻はユダヤ系の湾曲したものではなかった。偉大なるマスターの鼻は真っすぐであった。これはヨーロッパ系白人の特性である。イエスがユダヤ系であるのは、ただヘブライ人のマリアから来るものであり、それ以外は白人のケルト人である父親から来ている。彼の父はローマの兵士であった。マスター・イエスの聖なる妻も白人であり、ナザレ人とともにヨーロッパ大陸の地中海の国々を旅した時に実証したように、彼女は偉大な秘教的パワーを持っていた。



イエスは全くの男であった。イエスは多くの宗教が言うような、骨抜きにされた男ではなかった。イエスは完全なる結婚の小道を通り抜け、妻と性の秘儀を実践しながら、彼自身の内にキリストを形作ったのである。われわれが確信を持って言っているこのことは、狂信的な人々を憤慨させるであろうが、科学者が自然界のアカシック・レコードをキャッチし、超モダンテレビジョン（その時代にその装置がどう呼ばれようが）を使って、自分自身でイエスの生涯を見ることができるような能力を手に入れたなら、人々はわれわれの言うことが正しいとわかるであろう。

これらのアカシックレコードによって、すべての世界史を知ることができる。偉大な人物の人生、クレオパトラとアントニウスの完全な歴史などもわかるであろう。時間の経過とともに、事実がわれわれの主張を実証することになるだろう。

完全なる結婚の第三十三章を終えようとしている今、偉大なるマスター、イエスが、アメリカ合衆国の西部にいるという知らせを受け取った。偉大なるマスターは名を隠し、人に知られずに道を歩いており、一般市民と同じような外見なので誰も彼に気づかない。凄まじいばかりのクリスティックなエネルギーが彼から放射され、アメリカ中に広がっている。偉大なるマスターは、聖地で持っていたその肉体を今も持っている。確かに偉大なる秘儀司祭イエスは、死んでから三日目に復活し、いまだにその肉体で生きている。イエスは不老不死の^{エリキソ}妙薬によって復活に至った。イエスは自らをキリスト化したので、不老不死の妙薬を受け取り、完全なる結婚の小道を歩き通したので、自らをキリストとならしめたのである。

第三十三章を終えるにあたり、次のことを明確にしておきたい。それは、宗教、科学、芸術、哲学という四つの分野の中心において、至高なる総括が見出されるということである。そしてそれが、「完全なる結婚」なのである。

【パガニズム(Paganism)】 ユダヤ教以前のギリシア・ローマの多神教。
【ラビ(Rabbi)】 ユダヤ教の律法学者。また、ユダヤの先生や師に対する尊称。ここでは、イエスのことを指している。

【オリンポス山】 北ギリシアの最高峰。ここに、ギリシア神話の主要な十二神が住むと考えられた。

【アベルヌス湖】 ナポリ西方の湖。陰うつな湖で死後の国タルタロスに通じていると信じられた。

【パーン】 山羊のような角とあごひげとひずめを持つ牧神。ギリシアの最も古い神々の一人。

【バッカス】 ローマ神話の酒神。ブドウ酒の神。また、ブドウ酒祭の狂宴の神ともなった。

【サチュロス】 パーンによく似た牧神で、角とひずめを持つ。パーンの子孫とも侍者とも言われる。

【プリアポス】 ギリシア神話の男根の神。農業と牧畜の守護神。

【ニカイア会議】 小アジアの北西部の都市ニカイアで、AD 325年に開かれた第1回公会議。主として、イエス・キリストの性格に関するアリウス派の異端を排斥したもの。アリウス派では、イエスは〈父〉なる神から生まれた被造者であり、時間的はじめを持つとされたが、ニカイア会議において、〈子〉であるイエスは、〈父〉と本質を同じくする〈神〉であるとの思想が確立した。

【カタコンベ】 地下墓地の意味。ローマ初期、迫害を受けたキリスト教徒がここに隠れ、集会や儀式を行うようになった。ローマ郊外に壮大な迷路状の地下墓地が残っている。

【今……】 著者は、1950年に本書を書き上げた。

結 び

「わが愛するノース運動の兄弟たちよ。この秘教講座も終わったことなので、私はこれらの会合を終わらせて、当分の間、休会にしようと考えていた。しかし思うに、これら会合は、われわれ全員の魂が必要とするものなので、やはり毎月27日には引き続き会をもうけるのが、最もよいのではないかと思う」。

1961年7月27日、私はある著名な科学者の家でこのように語った。その頃の私は、「完全なる結婚」の著作を終え、それと同時にノスティック・バラ十字会の学徒の集まりにおいて述べてきた性の秘教的教えの講座も終えたところだった。

私がメキシコでの秘教的な会合を終わりにしようと考えた動機は、非常に失望したことがあったからである。最初の頃は会合の部屋には、多くの人々が集り、みんな、性の神秘と完全なる結婚の道を喜んで学んでいた。しかし時が経つにつれて、人々はもはや完全なる結婚にも、性の神秘にも興味を抱かなくなった。

二年間にわたる会合を終えるのだが、出席する秘教学徒は指で数える程である。そのような次第で、私は講演会を続けても無益だと考えたのである。私はあの夜、講義と会合を終わりにしようと考えていたが、その時、何か重要なことが心に浮かんできた。限りなく崇高な、気高い愛に満ちるのを感じたのである。私は、彼らを残して立ち去ろうとしていた自分を思い出し、苦しくなった。このことがあって私は、この会合を終わりにせず、小人数ながら引き続き前進しようとしたのである。帰宅すると私は、チャプルテペック寺院からテレパシーによるメッセージを受け取った。家を出て、チャプルテペックの森へ今すぐ来るようにと指示されたのである。

私はその指示に従い家を出て、マスター・ウィラコッチャが小説『バラ十字』で語っている不思議な森へ向かった。チャプルテペック城は、幾千もの小さな明かりですばらしく輝いていた。並木道と中央階段には人気がなく、入口は厳重に閉じられていた。夜警と警官が用心深く、油断なく見張っていたので、真夜中のしかもこのような時間にチャプルテペックの森に入るのは困難であった。ノスティック・バラ十字の学徒であろうと、危険を侵して森の中に入ったなら、何かの賊と間違えられてしまうだろう。

チャプルテペック城には莫大な財宝があるので、警備隊による油断のない警戒は厳重そのものであった。すべて黄金で作られたマクシミリアン皇帝の食器や、宮殿のサロンに収められている植民地時代の財宝はたいへんすばらしい物である。それはメキシコで最も壮麗な宮殿である。

いかにして私が真夜中にチャプルテペックの森に入ったかは、さして重要ではない。事実、私が中に入ったということである。それだけである。私は並木道を通って、マデロ大統領により建てられた噴水へ向かってチャプルテペックの丘を回って行った。道はさびれ、それに夜の闇……。しばらくの間、合図を待った。たいへん長い時間のように思われたが、ついに誰かが援助してくれ、すべての手はずが整えられた。

寺院の院長であるアデプトが中に入るように命じたので、もう何もすることなく中に入ることができた。寺院はチャプルテペックの丘の内部にあり、以前はアステカ人の目には見えたが、後のスペイン人の侵入によりヒーナスの状態に入った。この寺院の内部は、ナワ族の光と信仰の帝国である。

鞘から抜かれた剣を持った二人の門番が入口を警護していて、高次からの指示がない限り、誰も中に入ることはできない。

それは私にとって、限りなく幸福な夜であった。寺院には純白の光が、洪水のようにあふれていた。それは生命と魂の内部に完全に浸透する光、そしてどこにも影を造らない光であった。この光は聖体顕示台の聖杯から発せられていた。このような光の中で、霊は言い表すことのできない真実の幸福感で充たされる。

一人の天使が私とともに寺院に入り着席した。寺院長のアデプトが、何枚かの、生き生きとして躍動感に満ちあふれた非常に美しい絵画を見せてくれた。これらの絵画は、白ロジにはふんだんにある。フランツ・ハルトマンが、彼の『バラ十字アデプトの邸宅への冒険』という著作の中で、ボヘミアのバラ十字寺院で見たこの種の絵画について、すでに述べている。この種の絵画の図柄は、生命と躍動感に満ちている。これは大自然の王者の芸術と呼ばれるものである。

寺院長は、私たちがこれらの絵画に感嘆しているのに気づき、天使にそれから私に視線を向け、「この絵には手を触れないように」と言った。天使は素直に指示に従った。私は正直に言って、手で触れてみたい衝動を感じていた。それほどに、すばらしい美しさだったのである。するとすぐマ

スターから厳しく注意された。「申したでしょう。この絵に触れぬように」と「ええ、触ってみようなどとは思っていません」と弁解した。

あの夜、寺院は言いようもないほど美しく輝いていた。あのすばらしい美しさは、人間の言葉では言い表し得ないものである。天井も壁もすべてが、純金だった。しかし何か、私を驚嘆の念でいっぱいさせた。私は神智学、バラ十字、錬金術、ヨガなどについて多く語られるのを聞いてきた。しかし今ここには、このヒーナスの状態の完全なるノスティック・バラ十字寺院には、私と同じように、この会合に招待されたごく少数の紳士淑女がいるだけであった。

神秘学のある学者たちの講堂は、いつも何千もの人々であふれていることを思い出した。そして何千もの人々でいっぱいの中での様々な寺院のこと、さらに何百万人もを会員を持つバラ十字会などと自称する団体を思い起こした。しかし今、この白ロジの寺院の中には、片手で数えられる数名しかいないのである。そこで、私はすべてを理解した。はじめの頃は、われわれの秘教的集會にも、多くの人々がやって来た。時が経つにつれて、多かった参加者は目に見えて減っていき、今や知識と愛を渴望するわずかの人がやって来るだけである。私はこれらを理解すると思わず叫んでしまった。「世界中の寺院やロジや学派は、いつも人々でいっぱいだ。それは悪魔がおびき寄せるからだ。しかし真に神聖な叡智の寺院には、少数の人しか来ないものなのだ！」私は愕然として、自分に向かってこう言うと、寺院長も同意しているのがわかった。そして彼は、「その通りです。悪魔が彼らを誘惑しているのです」と言った。私の言ったことにうなずいて、マスターは天使に楽隊と合唱隊のコーラスのために上がって行くように指示した。天使が指示通りにコーラスのために上がって行き、そして幾世紀にも渡る歴史をオペラにして歌った。

天使は教理的な見地から、未来に起こる第五番目の天体周期に意識をあわせた。

その新時代には、すでに物理化学的なこの地球は死んだ天体、すなわち新しい月となり、進化を遂げた生命はすべてエテリックな次元、あるいはわれわれの地球のエーテル界に存在するであろう。そして肉と骨からなる七つの人種は、もはや存在せず、それらは絶滅するであろうと歌った。

天使はたとえようもないほど清らかな声で歌い、それは人を恍惚とさせるモーツァルトのフルート曲のようであった。私の全存在がエクスタシー

に満たされた。天使が歌うのを聞いたなら、それは生涯決して忘れられないものとなるだろう。

天使は未来の第五番目の天体周期に心を合わせて、地球の進化の歴史をつづったオペラを歌った。彼は地球に送られた預言者全員を覚えていた。そして美しいメロディーで、世界中の七つの人種の歴史、現在の五番目の人種の黙示録、かつて存在した大陸とその滅亡のすべて、地球での重大な大異変、大戦、偉大なアヴァターラたちによる人類を救うための人間離れた努力、ゴルゴタの丘ではりつけにされた殉教者などについて物語った。そして天使は救われた者がほとんどいなかったことを嘆き悲しんだ。天使のような誕生を成し遂げた者は、ほんの少数だけである。成し遂げなかった者、すなわち人類の大多数は、奈落に飲み込まれてしまったのである。地球という惑星で、進化と退化を始めた何十億もの魂のうち、人生において天使の段階にまで至ったのは、ほんの一握りの存在だけである。「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」。

天使のたとえようもないすばらしいオペラがこの部分に達した時、私はある大なる感動と驚きでいっぱいになった。率直に言うと、私は救われる者は少なく、多くの者は道を失うというその状況は、今の地球と、前のマハーマンヴァンタラにおいて“地球であった月”だけに限られたことであり、他の天体では事情が異なるだろうと信じていたのである。天使は、「地球で起こったような状況は、無限なる空間の、あらゆる世界で常に繰り返されている」と語り、私のこの思い違いを正してくれた。天使がその何とも言いようのない美しい歌を終えると、私は最初は多くの人たちが会合を援助してくれたのに、なぜその中の少数の人しか残らなかったかを理解した。今や私は、この少数の人たちとともに進むつもりである。もはや部屋を人でいっぱいにするということには興味を抱いていない。事実、始める者は多いが、到達する者は少ない。完全なる結婚は、やいばの刃先の小道である。一方、学派やロジや教団などに加入するのは、とてもたやすいことである。またヨガ、錬金術、哲学、占星術といったものを学ぶのも、大変すばらしいが、容易なことである。しかし天使として誕生すること、それはきわめて困難なことである。

天使は、性の種子から誕生しなければならない。それは全く困難な位置にある。小麦の種は簡単に発芽する。確かに死んでしまう種子も多いが、そのほとんどは芽を出し、穂をつけた麦へと自らを変換し、多くの人々を

養う穀物となる。

とうもろこしの種を蒔くのもたやすいことである。だめになってしまう種も多いが、そのほとんどは死ぬことなく発芽して、とうもろこしを実らせる。

最も困難なのは天使の種である。この種は人間の性腺の中に宿っていて、しかもめったに発芽することはないのである。

唯一、完全なる結婚だけがこの種を発芽させ、そして収穫を得ることを可能にするものであるということを強調し、この本の結論としよう。この最終的収穫が天使である。そして困難な課題はそこに宿っているのである。

結局人々は、ある一つの信仰、またある一つの宗教や宗派に属しているということで救われると信じている。当然、これは誤りである。人が何を信じようと信じまいと、それによって種子が芽を出すということは決してありえないのである。すなわち人間が何を考えようと考えまいと、人間の考えなどで虫一匹さえ生まれはしないということである。理論をつづった羊皮紙の中から、決して人間が生まれるということはない。この誕生という問題は性にある。この中に誕生があるのである。天使の誕生も決して例外ではない。

すべての宗教や学派や宗派、そして信仰団体などのメンバーは、「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」と言う。世間の人々はみな、これを暗唱し、当然自分は選ばれる者であると信じ込んでいる。誰も、自分が選ばれないとは思ってもいない。自らの信仰や理論、研究など、それらによって、自分はすでに救われていると信じているのである。それは誤りであり、ばかげたことである。誕生するということは、信仰、理論、概念などの結果ではあり得ない。事実は違うのである。誕生、それは完全に性的な問題なのである。

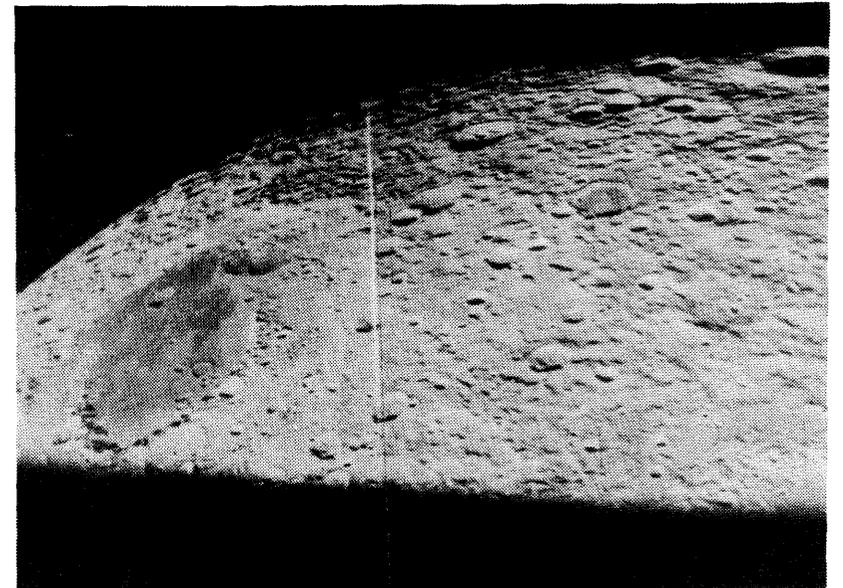
すべての偉大なる宗教では、秘教的奥義として性の秘儀を教えている。しかし不幸なことに、人々はそれに注意を払わない。問題はここにある。

人々は性の秘儀を好まない。それはその人物が持っている不実なパーソナリティと動物的情欲を、犠牲にすることを意味するからである。本当に断固たる決意を持って、性の秘儀を実行できる者はめったにいない。好奇心で始める者は多いが三日と続かず、また、姦淫を犯すことに時を費やすようになる。そして後になって、性の秘儀は危険であるなどと言いふらす臆病者さえ出てくる。このように芽を出さないまま、朽ちる種もある。

性は、人間を最終的な解放へと導く手段である。自己実現のために、他に何か異なった方法があるかもしれないと考えるなら、完全に失敗してしまうことは明らかである。これはすべての大陸と世界、そして空間にあてはまる法則なのである。

さて、セレーネについて少し話すことにしよう。今日では月は確かに死んだ天体である。しかし枯死する以前は、大変美しい海、豊かに繁る植物、あらゆる人種などが存在する天体であった。不幸にも月の住民たちは、自ら悪魔と化してしまった。わずかに一握りの人間だけが、実際にアダプトの段階に達したにすぎなかった。この地球でも結果は同じであろう。少数のグループの人々のみが、天使として生まれるだけであろう。間違いなく、地球上の人類は奈落に飲み込まれるだろうと断言できる。

神智学者は、すべての人類は解放に至るであろうと言っているが、それは間違っている。この概念は誤っているので、白ロジには受け入れられない。



月の表面

現在の月は死んだ天体となっている。ここに、悪魔に化したセレーネの住民たちのサイキスが閉じ込められている。

あるものを信仰しているから救われるであろうと信じる者はみな、間違いを犯している。この概念は誤っている。プラーナヤマの呼吸法や、哲学によって救われ得ると信じる者も、考え違いをしている。生まれることなしに、誰も自らを救うことはできない。性なくして、誰も生まれることはないのである。

私は人類に対する計り知れない哀悼を抱いて、この本を終えることになってしまった。あまりにも多くの人々が、奈落に飲み込まれてしまうのは痛ましいことである。私は、苦悩しながら書いている。それは人類が、完全なる結婚を受け入れないということを知っているからである。この本を真に利用する方法を知る者は、ごく少数であると強く確信してこの本を終えることにする。人々はこのようなことは好まない。個人的な信念、宗教、教団、学派などによって自分は救われる、と信じているすべての人々に、それは間違っているということをおぼせさせる方法はない。来たるべき第五番目の時代において、完全なる結婚を受け入れない者は、すべて悪魔と化し、奈落の民となるであろう。そして完全なる結婚を受け入れる者は天使となるであろう。

われわれはアーリア人種の最後の民にあたる。聖ヨハネの黙示録を生き始め、そして無数の人々が奈落に落ちつつある。奈落に落ちるこの不幸な人々は、自分は大変良いことをしていて、すでに選ばれた者であると信じている。また信仰によって、自分は救われたなどと確信しているのである。これらは彼らが信じていることであり、それを間違っている、と示すことはない。そのようにして彼らは、自ら奈落へと落ちていき、そこで何百万年もの間、その人物が宇宙の塵となるまで、ゆっくりと崩壊するのである。これが第二の死である。われわれは、自らを天使と成らしめた者だけが救われると述べて、この本を終えることにしよう。天使は、まさしくわれわれの内に誕生させなければならない。この生まれるということは、完全に性的な問題であり、その唯一の道、それが「完全なる結婚」である。

サマエル・アウン・ベオール

【聖体顕示台】 聖体を入れて信者に礼拝させる、台付きの透明な容器。

【フランツ・ハルトマン】 現代の錬金術研究家。『バラ十字団の秘密象徴』『知恵の神殿の入口にて』の著作がある。

【第五番目の天体周期】 現在は第四番目の天体周期（マハーマンヴァンタラ）にあり、第五番目の人種（アーリア人種）が生きている。今後、第六、第七の人種が興亡するが、それが終われば次の第五番目の天体周期が新たに始まる。

【マハーマンヴァンタラ】 “マハー”とは、大きい、長いという意味で“マンヴァンタラ”とは、宇宙、天体、生命体の顕現周期のこと。ここでは、天体の周期を意味する。現在われわれが月と称しているものは、かつて、もっと大きかった天体（セレーネ）の最後の残骸であり、ちょうど現在の地球がこの宇宙で占めているのと同じポジションを、一つ前の第三番目の天体周期において占めていた。

【セレーネ(Selene)】 第15章注「月が地球であった時代」参照。

【アーリア人種】 現在の人類はアーリア人種と呼ばれ、第五番目の人種である。次の第六番目の人種は、現在すでに隆起しつつある新しい大陸にまもなく出現するであろう。第四番目はアトランティス人種、第三番目はレムリア（ムー）人種、第二番目はイーベルポーリア人種、第一番目はポーラー人種。

ノーシスについて日本の読者へ

(新泉社刊『心理革命』より引用)

ノーシスは宇宙の創造とともにある

「ノーシス (Gnosis)」の語源はギリシア語で、「知ること、知識」を意味する。知識といっても、表面的、一般的なものではなく、深い知識、叡智^{インテレクト}をさす。あるいは「直観的認識力」と言ってもよい。すなわち頭の知識やアカデミックな知識でなく、ハートの知識、心に根ざす知識と言えよう。さらに別の言葉で表せば、物質開発のための知識ではなく、知性と意識を開発するための知識である。

ノーシスは人類と同じほど古い歴史を持つ。宇宙の創造自身がノーシス(叡智)なくしてはできなかつたからである。ノーシスの起源は創造主の女性的見地であり、この永遠なる二元性をもとに、全宇宙や自然、叡智が生成されたのである。

すべての古代文明はこの知識によって生まれてきた。たとえば日本の古神道の中にもノーシスを認めることができる。神道の儀式や祭の中にノスティックなシンボルが見られる。また、チベットの仏教もその基礎にノーシスがある。あるいはエジプトのピラミッドにも、アステカ、マヤの神殿や古文書にも。

日本民族が民族自身の神秘として、永い間伝統として守り、受け継いできたものの一部はまぎれもなくノーシスである。ノーシスは民族の歴史とともに受け継がれてきたものである。

原始キリスト教徒たちの中にも、ヘブライのカバラにもノーシスの原理はある。古代中国の道教の中にもノーシスの基礎は見出される。

逆に言えば、すべての文明の一番奥深いところにノーシスはある。従って、一つの文明の奥義を理解すれば、他の文明も理解することができる。ノーシスの鍵^{キー}をもってすべての文明を掘り下げ、そして神秘の扉を開けることができる。

ノーシスはすべての宗教の源泉である。またすべての芸術のインスピレーションであり、さらにすべての科学の起源にもノーシスがある。

従って、ノーシスはすべての宗教を自分の子として認め、決して拒絶するものではない。ノーシスの知識を理解することにより、キリスト教信者

は真のキリスト教徒たりうるのであり、仏教徒はその真髓にせまることができるのである。

ノーシスに属する古代文献の中に、コプト語で表記されたパピルスがある。それは『ピスティス・ソフィア』と呼ばれ、その中にはイエス・クリストが復活後11年にわたって使徒たちに伝えた秘密の教えが記されている。

紀元後2世紀に表されたとされるこの価値ある文書は1785年、大英博物館の所蔵となり、1847年にラテン語、1924年に英語、その後ドイツ、フランス、スペインの各語にも訳出されているが、そこに秘められた神聖なる秘密の深さゆえ、現代に至るまで正当に解釈されることがなかった。

この中では霊の救済と、聖書の黙示録のつづきとして人類の運命についての記述が特に重要である。霊の最終的救済に至る方法についても明確に答えが与えられている。

救世主は使徒たちに「光の神秘をすべての人間が受けるように伝え広めよ」「自分自身に注意せよ、罪を犯すな。悪の上にさらに悪を積み、悔い改める時間もないまま肉体の外にでることのないように。なぜなら、永遠に光の王国に入ることのできない無縁な者となるからである」と述べている。

『ピスティス・ソフィア』が重要なノーシスの文献だと言っても、ノーシスがカトリックやプロテスタントに属するという意味ではない。キリスト教成立以前の『死海文書』も、またノーシス文献である。

ノーシスはいつの時代にも、どこにでも存在する。人類の歴史の中で叡智を伝える神話に、古代都市の神殿に、中世の錬金術に、宗教の奥義に、今、光をあてて明らかにする、それが現代の「総括的ノーシス」である。

サマエル・アウン・ベオールについて

永い、永い間、秘中の秘とされた「性の秘儀」はイニシエイトたち(奥義に通じた人たち)や、秘教的グループに限られて、ひそかに保持されてきた。それを手に入れるために何人の勇敢で不屈な研究者たちが命をかけたであろうか。「性の秘密」はつい最近、1950年頃まで、決しておおよけにされることのない神秘のヴェールでおおわれていた。

しかし1962年2月4日以来、われわれの太陽系は水瓶座の時代に入った。このアクエリアスの時代は「光の時代」「直観の時代」であるとも言われる。この光の時代の到来とともに、イニシエイトの一人であるサマエル・アウン・ベオール (SAMAEL AUN WEOR) が「性の秘密」と「近代的ノース」をおおやけにした。世界ではじめてすべての神秘に光をあて、その実用的意義を明らかにしたのである。今、それは光を求めるすべての人々の手の届くところにおかれている。

彼こそが近代的ノースの創始者である。彼が明らかにしたノースの鍵は、第一に性の秘密であり、次にそれにともなった心理の浄化、心理的ワークである。

人類の歴史には、人類を導く教育者となる人が時に現れる。彼らが現れる目的は、人類が存在の目的を見失い、道をふみはずした時に正道を示すことにある。まさしく、マスター・サマエルはこれら人類を導くグループに属している。彼の役割はこの人類に最後の救世のメッセージを与えることである。

1940年代、彼は南米コロンビアで家族とともにネバダ山脈の山奥で貧しい生活を送っていた。すでに叡智を持って生まれついた彼は、そこで多くの農民たちの治療に無料であっていた。この治療法はユニヴァーサル医学と呼ばれる古代エジプトのミイラ作りにも使われた知識をもとにしたものである。また彼は自然医学のすばらしい知識も実践した。それは自然界の「精」^{エッセンス}を使つての治療である。すなわち薬草を使う時、その成分の作用より、「精」によって治療するという方法である。

昼間の治療が終わると、夜は人類に与えなければならないメッセージを伝えるべく、本の執筆に専念した。その結果あらわされた最初の本が『完全なる結婚』 (El Matrimonio Perfecto, 1950) である。この本の中で、彼ははじめて人類に「性の奥義」を明らかにしてくれた。しかしそれによって彼は投獄されたのである。この時代 (1950年) に性に関するテーマをおおやけにした不道徳と、医師の免許を持たずに治療行為をしたかどによって。

彼はこの投獄中を執筆活動にあて、『カルメンの聖母』 (イニシエーションの聖母) が書きあげられている。

監獄から出た時から、ラテンアメリカにノースを普及するための本格的活動が開始された。数多くの講演活動と著作活動が精力的に展開され、

その著作は70冊に及んでいる。それらすべての作品を彼は無償で人類に提供している。

治療行為をしながらノースを広めていた彼は、いつもその地の医療団体から追われることになり、次第に北上し、1950年代の終わりにメキシコにまで到った。メキシコ人である彼はヨーロッパ、アジアにもメッセージを伝えるため、その後のノース普及の本拠をメキシコシティに置いたのである。

彼は素朴な人々、正義を求める人々、精神的な真の進化を求める人々のために書き続けた。今、彼の著作は世界中に普及されている。スペイン語の原書から英、仏、独、伊、葡など各国語に翻訳され、最近アラブ語への翻訳も試みられている。(日本語訳の第一冊目は新泉社刊『心理革命』)

ノースの基本

ノースの基本は、次の三つに要約される。

I、心理的死 (エゴの根絶)

われわれの心に巢食う怒り、ねたみ、利己心、肉欲、うぬぼれ、怠惰、虚栄、恐怖などの欠点を絶え間なく排除することを意味する。これらの欠点はノスティック心理学で「エゴ」と命名され、エゴこそが価値ある「意識」を絶えず妨害しているのである。このようなネガティブな心理的エネルギーの変換 — すなわち根絶が達成された時、意識の目覚めは確立され、第二の誕生を迎える。エゴに閉じ込められていた本来の自己が解放されるのである。そしてまた同時に、エゴ根絶の過程を通して、高次元の知識が獲得される。

II、錬金術的誕生 (性エネルギー昇華)

性エネルギー昇華による内的な「黄金の子」の誕生をいう。われわれの性ホルモンを宇宙生命の基礎エネルギーとして生かし、魂の衣となる「黄金の霊体」を創るための原料を手に入れることである。性エネルギー昇華のテクニクはグラン・アルカーノ (偉大なる秘儀) として今まで秘密とされていたものが、ノースの教えを通じて公表されている。

III、ノスティック・イニシエイト (人類への献身)

I、IIのワークと平行して人類のために献身することである。この知識を世界中の人々へ何の代償も期待せずに広めることである。人類の歴史の

パズルの最後のひとこまである、救世のメッセージが受けられるように隣人に働きかけるのである。ノースの教えを一人でも多くの人に広めることこそが、民族を退廃から守り、狂暴化から防ぐ道であり、これが戦争排除の最も強い武器ともなるのである。

日本とノース

現在、マスター・サマエルの教えを受けた多数のインストラクターたちが、世界中でノースの普及にあたっている。ノースは知識の独占や商業化をすることなく、宗派的、政治的な意図も持たない。この知識はすべての人々、すべての宗教、すべての国々に順応できる自由なシステムである。

日本でのノース普及が本格的に開始されたのは、1982年4月からであるが、日本での受け入れられ方はすばらしいものがある。すでに日本人インストラクターの準備ができ、何カ所かで日本人による普及が始まっているほどである。

それは日本民族と社会がたいへん奥深いことに起因している。ほとんどの外国人は日本人の国民性の奥深さに浸透することができず、30年以上も日本に住んでいる外国人でさえ、日本人は理解できないという人もいる。それは日本人を表面的部分でしか観察しないからで、その人にとって日本人は神秘とされてしまう。

ノースもまた奥深い知識であり、日本人の心の奥底にまで浸透して、その琴線にふれたならば、ノースは容易に日本人に受け入れられるのである。

日本でのノースの受け入れられ方には、大きな可能性がある。なぜならそれは輸入された知識ではないからである。日本人にはなじまない、不可解な知識ではないからである。日本人自身が、前縄文時代からその根を脈々と保存してきた古神道の儀式に、そして仏教の教えに新たな息吹を与えるのが、近代的ノースにほかならない。

一方で日本は今、近代的なエレクトロニクスの時代を生きている。工業的科学技術的に頂点にあり、そのまま上昇を続けることができるか、または他の先進国と同様、病んで地に落ちるかという、日本の歴史の中でも最も危機的な瞬間にあると言えよう。まさにこの時にノースは日本に到着

した。

ノースは古い伝統に対峙するものではなく、むしろそれを近代化する効果を持つものである。そして精神の奥底にひそんでいる意識をゆり動かし、呼び起こす。

人間は外部（肉体）と内部（魂と霊）からできている。肉体的生活のために衣食住が必要であると同様、内部のためには精神的な糧が必要である。しかし日本は物質的な技術的開発のみに力を注ぎすぎ、もう一方の精神的な価値の開発をおこたった結果のアンバランスに苦しんでいる。

ノースは内的な力を活動させるための知識である。ノースによって内的な渴望をうるおすことにより、外と内のバランスをとることができ、人間を調和的開発に導くことができる。

先進国といわれる国々の多くが退廃の道を歩んでいる時、日本に新しい希望を与えるノースが迎え入れられる必然性があると確信するものである。

日本民族は「底力」を秘めている。しかし力にはそれを正しく使うための導きとなる知識がある。日本は工業的、商業的に成功しているので、精神の分野における成功が日本の今後を決めると言っても過言ではない。

ノースは普遍的知識であるから、一人の人間の問題解決と同様、国際的、社会的問題の解決にそのキーを適用させることができる。そしてまた同時に、人間洗練のための芸術と哲学を柱としている。

アジア諸国の先端に行く日本は、物質的な経済交流のみでなく、彼らに新しい文化を提供することが待望されていると言えよう。それによってアジア諸国の人々も新しい精神のルネッサンスに参加することができるだろう。

また、ノースの知識は崇高な技術に結びつけることもできる。それは国際摩擦を引き起こす商業的技術ではなく、目に見えない次元——四次元の存在を確認する形而上学的なエレクトロニクスの技術である。日本のテクノロジーがこれを獲得したならば、無限の可能性の原野を手に入れることになる。

実用的で総括的な知識であるノースは、今、全世界の三千万人の人々に影響を与えている。中南米ではメキシコのほかに、コロンビアをはじめ、ベネズエラ、ブラジル、ペルー、エクアドル、アルゼンチン、チリ、プエルトリコ、パナマ、ニカラグア、エルサルバドル、グアテマラにすでに普

及されている。アメリカ合衆国では、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シカゴ、ニューヨーク、マイアミで活動が展開されている。またカナダのモントリオール、ケベック、ヨーロッパではイタリア、スペイン、フランス、ドイツ、ベルギー、オランダ、スイスにセンターがある。最近はアフリカにも普及されている。

日本ノース・センター（現、日本ノース・インターナショナル）は1983年4月に開設された。

113-91 東京都文京区本郷郵便局私書箱108
日本ノース・インターナショナル

ミゲル・ネリ

（編者・注）

ミゲル・ネリ氏はメキシコの人類学者で、サマエル・アウン・ベオールの教えを受けた後、調査研究のため世界各地を遍歴し、ノースの知識をアメリカ、カナダに伝えた。その後、日本人の夫人とともに1982年から東京でノース講座を開催し、おおきな感動を呼び起こした。約7年間にわたる彼らの精力的な講演活動により、現在、ノースは全国の主要都市に広まっている。

「ノースについて日本の読者へ」は、マスター・サマエルの著書『心理革命』の日本語訳（新泉社・1983年8月発行）のために寄稿されたものである。一部編集しているが、ほとんど原文のまま引用している。

また全国各地で、日本のインストラクターによるノース講座が開催されている。興味のある方は上記日本ノース・インターナショナルまでお問い合わせのこと。

編者あとがき

本書は、サマエル・アウン・ベオールがスペイン語で著作した『完全なる結婚』の日本語訳である。

われわれノースを愛する多くの日本人が5年以上の歳月をかけ、翻訳および編集したものである。

翻訳などに全く素人のわれわれが、本業とする仕事の合間をみて完成したものだけに、読者の目から見れば、もの足りない点が多々あると思われる。

しかしここには、われわれの精一杯の気持ちが込められている。翻訳も編集もボランティアであり、出版費用も寄付でまかなわれている。本書は少しでも多くの日本人に性の叡智を伝えたいというわれわれの魂の叫びが結実したものである。

本書を出版するにあたり、編者の脳裏に去来する出来事がある。

それは、天動説が常識とされていた時代に、イタリアの天文学者ガリレオ・ガリレイがコペルニクスの地動説を立証し、そのために宗教裁判にかけられたことである。現代のわれわれから見れば、当然の地動説が当時の人々には受け入れられなかった。

本書は、まさに、コペルニクスの地動説に匹敵するものである。

あまりに革新的であるがゆえに、本書は多くの人々から全く無視されるであろう。真に革新的な知識というのは、容易に受け入れられるものではない。人類のエゴ（特に肉欲のエゴ）が、この性の叡智を拒絶するのである。

あなたは、そのいずれであろうか。

しかし、真理はその強さゆえに、遅かれ早かれ万人の肯定するものとなるであろう。コペルニクスの地動説がそうであったように。

いよいよ、1990年が始まる。この90年代は、まさに、ヨハネの黙示録が示す終わりの時代となるであろう。人類のエゴが、余すところなく一気に表面に顕れ、われわれはその醜悪さに驚くであろう。

このエゴの中心にあるのが肉欲のエゴであり、それを根絶する鍵が本書

の中にある。

本書を読まれた方は、別書『性エネルギー活用秘法』（学研 MU BOOKS）などを参照して、是非、性エネルギー昇華とエゴ根絶のワークを実践していただきたい。根気よく続ける限り必ずや、偉大な効果を実感するであろう。そして、まさに「性」が、神々に至る道であるということをお納得するであろう。

読者の方々の奮闘努力を心より期待する。

1989年12月

編者

索

【あ】

- アーノルド・クルム・ヘラー 103
- アリア人種 336
- アーマン 36
- 愛と死 201
- 愛の余剰エネルギー 202
- 愛をわれわれは知らない 204~5
- アイン・ソフ 132
- アヴァターラ 117, 190
- アカーシャ 38, 62, 322
- アカシックレコード 304, 313, 322
- 秋祭り 261
- アクエリアス（水瓶座）の時代 1, 50, 54, 263
- アグニ神 242, 258
- アグニ・ヨギ 224
- アストラ液 23
- アストラ界 12, 49, 79, 102, 137, 147, 159, 165, 228, 309
- アストラ・クリスト 70, 122, 135, 140, 171, 309
- アストラ光 23
- アストラ体 102, 122, 140, 183, 204, 231, 238, 309
- アストラ・トリップ 122, 231, 234, 237, 238, 257
- アストラの幽霊 72
- アダムカドモン 273
- アダム・クリスト 54
- アダムとイヴ 282, 296
- アダムの肉体 195
- アダムの二人の妻 41
- アダプト 2, 192, 195, 238
- アトランティス大陸と黒の儀式 119
- アナエル 26
- アナガリカスの階級 38
- アニマ 253
- アハムサーラ（私の解体） 250
- アブラクサス（イラスト） 95
- アフラマズダ（オルムズド） 5, 268

引

- アプレンティス（見習い職人） 308
 - アフロディーテ 6, 261, 262
 - アベスタ 268
 - アメン・ラー 271
 - アルカーノ A・Z・F 4, 9, 18
 - アルカディア 102
 - アルキメデスのてこ 304
 - アンドラメック 27
 - アンドロジヌス 16, 47, 295, 307
- ### 【い】
- I・A・O 94
 - イエス・クリストの生涯 323
 - イエスはピラミッドの中で性の秘儀を実践した 95, 99
 - イエローブック 84
 - 意識 157
 - 意識を覚醒した人は夢を見ない 148
 - イシス 261, 280（イラスト）
 - 礎の石 320
 - 意志体（コーザル体） 173
 - イシュアラ（空気の神） 176
 - イダ 227, 241
 - 偉大なる煙突 175
 - 一酸化窒素 248
 - イニシエイト 3, 63, 165, 178, 242, 318, 325
 - イニシエーション 19章
 - イニシエーションの要約 185
 - インテレクチュアル（センター） 135, 231, 232
 - インテレクト 7
 - インフラセックス 4章, 5章, 222, 266
 - INRI 95, 96, 325
 - INRIと十字架（写真） 96
- ### 【う】
- ヴァジリニ 211
 - ヴァジロリ・ムドラ 38

ヴァルカンの炉の中のアンドロジヌス
(写真) 151
ヴィーナス 6, 258, 262
ヴィクトル・ユゴー 174
ヴェスタ神 2, 240
失われた能力を性の秘儀で取り戻す
108
ウスペンスキー 305
内なる超人の創造 52
内なる星(アイン・ソフ) 132
宇宙意識 190
宇宙言語 102
宇宙的な性の力 70
宇宙の自己意識化 238
ウムブラルの番人 165
羽毛の蛇 226
ウラニア 179
ウラヌス(天王星) 50, 54, 263
ウリエル 304
ウルドヴァラタ・ヨガ 215
運動センター 136

【え】
エーテル体 171, 256
エイカシア(第一の意識状態) 150
永劫回帰(の法則) 131, 299
エクスタシー(法悦) 152, 160, 248
エゴは睡眠中に肉体から抜け出る 147
エジプト死者の書 4
エジプトの暗闇 271
エジプトの性儀式のマントラ 84
エジプトの有翼日輪(イラスト) 243
エスキモー 298, 299
エッダ 5, 29章
エデンの園 192, 256
エペソの教会 20, 60, 64, 73
エホヴァ 27~28
エメラルド・タブレット 237
エリキサ(妙薬) 192, 328
エリファス・レヴィ 304
エレウシス 65, 71(写真), 91, 92, 263
エロヒム・ギボール 27

エンス・セミニス(精液のエッセンス)
225, 269

【お】
大いなる跳躍 199
黄金の子 54, 279
黄金の霊体 171
オシリス 5, 66
恐れを広める人々 208
堕ちた菩薩 290
「音」による創造 27
踊る人(写真) 317
オンディーヌ(水の精) 175, 176, 300

【か】
カーマ(愛欲) 241
カーマ・カルパ 224, 264
カーリー神 127, 201, 278
我 72, 80, 86, 14章
海王星(ネプチューン) 57
下位の四つの組 311
概念 188
雅歌 247
カタコンベ(地下墓地) 317
カップルの性 88
割礼の儀式 261
金山(かなまら)神社(写真) 260
カナンの結婚式(儀式) 277, 323
私の起源 131
カバラ 18, 41
神の子と人間の子 112
神は進化しない 132
仮面舞踏会(イラスト) 87
カリオストロ伯爵 194, 199
カリ・ユガの時代 249
カルディア(心臓の磁気センター) 233
カルディアの開発 235
カルマ 107, 171, 197, 253
感情センター 75, 136
完全なる人(天使) 36
ガンダルヴァ(天界の音楽) 179

【き】
記憶回復のマントラ 149
記憶と感覚 188
記憶と精液 157
記憶力を開発する特別な栄養 158
客観的超視覚 159
教育と子供 112
恐怖をかきたてる人々 237
金星のイニシエーション 19, 99, 173
禁欲者と夢精 90

【く】
クーツミー 120
空気の試練 167
空気の精(シルフォ) 175, 176
ククルカン(写真) 210
クリスト 4, 5, 120, 325
クリスト原理(クリスティック原理)
4, 5, 314
苦しみ 132
苦しみの根源 138
黒のイニシエーション 128
黒のチベットタントラ 36
黒の月 27
黒魔術(師) 34, 36, 38, 119
クンダリーニー 60, 131, 208~211, 304

【け】
ケチャリ 185, 235
ケツァルコアトル 226, 301
ゲブ神(写真) 259
ケム 240
ゲルマン民族の黙示録 283
顕現 121
原始キリスト教 316
原子地獄 23, 40, 70, 208, 215, 272
賢者の石 121
現実 161

【こ】
コーザル界(原因界、意志界) 102,
137, 160, 185

コーザル・クリスト(意志クリスト)
101, 104, 141, 155, 207
コーザル体(意志体) 102, 140, 141,
173, 185
公開的サークルと秘教的サークル 180
交感神経系 58
高次の性 6章
恒星の体 72
紅帽派 36, 215
五月柱(メイポール) 262
コクマツ 225
穀粒との仕事 200, 326
九つの門のある都市 275
五大要素 176
言葉 188, 292
子供の指導 113
ゴナデス(生殖腺) 227
個別意識 190
五芒星 30章
ゴルゴダの丘 277, 333
根気とかんばり 149
コンパニオン(職人) 308

【さ】
サーダナ 224, 252
サイキス(心霊)の開発 187
再現 197
最後の晩餐 115
最初的人类 295
祭壇 121
逆様の儀式 296
サストラ 179
サタンと我 36
サタンの死 131
サナット・クマラ 120, 171
ザノニー伯爵 194, 199
サマディ(三昧) 152, 160
サラスワティ 308
サラマンカの寺院 30
サラマンダー(火の精) 175, 176, 300
サルデスの教会 20, 62, 77
三角形とコンパス(イラスト) 311

三十三個の脊椎骨 170
 サンタマリア 32, 34
 サンニマヤ 33

【し】
 シークレット・ドクトリン 241
 シヴァ神 201, 258
 時間 133
 時間とは閉じた曲線 196
 磁気化(性の秘儀による) 89
 思考と感情と意志の一致 12
 自己想起 147
 実験室で働く夫婦(写真) 301
 実質成分交換の儀式 117, 118
 慈悲 187
 ジャガー(写真) 285
 シャクティ 258
 射精しなくても子供はできる 88
 シャンバラ 121
 十字旗 1, 2
 重大な問題 273
 12法則の世界 102
 主顕祭(顕現祭) 262
 主の祈り 124
 ジュピター 5, 94
 寿命 196
 松果腺 157, 158
 小密儀のイニシエーション 167, 266
 職業 113
 シルフォ(空気の精) 175, 176, 300
 白タントラ 215
 白のイニシエーション 128
 白魔術(師) 23, 34, 36, 38, 119
 白ロッジ 3, 158
 進化 54
 進化と退化 132, 222
 神聖な8(∞) 176
 神聖なる娼婦 240
 心臓のチャクラ 75, 76, 184
 心理的インポテンツ 49
 心理的付着物(イラスト) 274
 人類の救済 285

【す】
 スーフィーダンス 91
 スーフィズム 247
 スーリヤマンダラ 233
 水星の主 237
 水素が高次の体の栄養となる 141
 スシュムナ 211, 227, 241
 スダシヴァ(エーテルの神) 176
 スフィンクス 241, 276
 スミルナの教会 20, 60, 75
 スワスティカ(まんじ) 297
 スワミ・X 140

【せ】
 性エネルギーの三つの型 46
 性エネルギーの三つの表現形式 320
 聖痕 82
 聖十字 34
 性センター 137
 性的痙攣(オルガズム) 213
 性的な夢 154
 聖なる音楽と踊り 91
 性による内的乗物の創造 102
 性の質的変換による再生 55
 性の秘儀はかつて伝達禁止 67
 性の秘儀は妻とだけ 69, 92
 性の秘儀は両刃の剣 92
 聖錬金術 16, 17
 ゼウス 5, 94
 世界の鼓動 196
 世界の四つの時代 273
 脊髄内部の三つの導管 211
 銭洗弁天(写真) 278
 セレーネ(古代の地球であった月)
 144, 145, 335
 仙骨 262
 前立腺のチャクラ 75

【そ】
 総括 1, 2, 105, 328
 相互聖体化 16
 ソマ・プチコン(黄金の霊体) 171, 185

ソロモン 94, 247
 ソロモンの星(イラスト) 282
 存在の本質 94, 215, 282

【た】
 ターヴィッシュ 91, 270
 第一イニシエーション 81
 第一物質 175
 タイガーの騎士 29, 30
 第九のアルカーノ 55
 第九の球体 18, 176, 21章
 第五イニシエーション 79, 81
 第五番目の天体周期 332
 第三ロゴス 4, 9, 176
 第二次性徴 219, 220
 大日如来の手印(写真) 251
 第二の死 83, 92, 336
 大密儀のイニシエーション 168, 266
 ダイヤモンドの眼 81
 太陽系の中心寺院 76
 太陽蛇(イラスト) 145
 太陽神経叢 179
 太陽と月の原子 73
 太陽霊 71
 太陽ロゴス 71
 タットワ 281
 タットワを見るプラクティス 109
 ダブル 25, 232
 タモアンチャン(族) 226
 墮落した宗教と独身主義 90
 ダルマ 197
 男根崇拜 27章
 タントラ 211, 215

【ち】
 知覚 188
 父と子と聖霊 112, 321, 322
 チトリニ 211
 チャクラ 7章
 チャクラと神経系 181~3
 チャックモール 178~9
 チャバホット 27

チャブルテベック城での会合 330
 チャムガム 177
 中心太陽(クリスト太陽) 277
 中世の黒ミサ 117~8
 超意識 157
 超幾何学 303
 超視覚 78
 超視覚とにせの超視覚 159
 長寿のエリキサ 192
 直観芸術 189
 血を使う儀式 115

【つ】
 ツァコル神 225
 ツインソウル(対霊) 25
 月を太陽に変換する 21
 ツタンカーメンの黄金のマスク(写真)
 143
 土の試練 167
 土の精(ノーム) 175, 176, 300
 罪 112

【て】
 テアテラの教会 20, 60, 76
 ディアノイア(第三の意識状態) 150
 ディオニソス 258
 テオティワカンの蛇の神殿 203
 哲学的金 175
 テノチティトラン 226
 デバダッタ 25
 テペウ 225
 デメテル(豊穡の女神) 71
 天国の体 195
 天使 191, 333
 天使は両性具有 223
 デンデラの蛇(写真) 67
 天王星(ウラムス) 50, 54, 57

【と】
 トータルな革命 132
 トーテム崇拜 26章
 トート神 67

頭頂のチャクラ 81
銅の手おけ 34
東洋のスタイルのカップル (イラスト)
216
トゥーレ島 295
トゥリヤの状態 150, 159~60
トナンツイン 278
飛ぶ蛇 229
塗油式 121
トリベニ 60

【な】
内的経験 158
内的光明 184
内分泌学 219
七つの教会 7章
七つの教会とチャクラ 7章, 61
七つの金属 290
七つのセンター 134
七つのチャクラと三つの脊髄神経 (イ
ラスト) 59
七つの蛇 82, 168, 183
七つの蛇の二重性 279
ナヘマ 27, 41, 44
ナマス (意欲) 241
ナラヤーナ (水の神) 176

【に】
ニカイア会議 316
27億ビート 196
24法則の世界 102
ニルヴァーナ 172~3, 192
忍耐と粘り強さ 186

【ぬ】
ヌース (第四の意識状態) 150
ヌート神 (写真) 259

【ね】
ネプチューン (海王星) 57

【の】
ノーシスの神殿 122
ノーマルな性 5章
ノーム (土の精) 175, 176, 300
脳脊髄神経系 58
のどのチャクラ 77

【は】
パーソナリティ 195~7
ハーマフロダイト 295
パールシー教 312
灰色タントラ 215
パガニズム 314
はっきりさせること 160
鳩 262
花嫁の禿げ頭 27
バナリング (イラスト) 235
ババジ 120, 194, 250
母なるクンダリーニー 278
バビロンの天使 102
バプテスマのイエス (写真) 99
バラ 312
パラケルスス 238, 253, 257
バラ十字とペリカン (イラスト) 35
パルヴァティ 201, 308

【ひ】
ヒーナス 29, 32, 84, 123, 229
光と闇の戦いの根源 23
ピスティス (第二の意識状態) 150
額のチャクラ 78
秘伝的復活 195
人の子 20
火のサロン 166
火の試練 166
火の精 (サラマダー) 175, 176, 300
火の乗物 186
日吉神社の獅子 (写真) 82
ピンガラ 227, 241

【ふ】
JUAN (ファン) 97

フィラデルフィアの教会 20, 63, 78
不義姦通 138
副交感神経系 58
複数の我 86
二人の証人 (黙示録の) 39, 241
復活と生まれ変わり 192
復活の利点 198
物質の定義 292
ブッダ 86
ブッダの誕生 172
仏陀の肉髻 (につけい) 220
ブッチャリ 185, 235
ブラーラヤ 62
ブラヴァツキー夫人 241
ブラフマ (土の神) 176
ブラフマの糸 38, 241
ブラフマの光彩 190, 279
プリアポス 258, 316
プンタ (エーテルの精) 176

【へ】
蛇鳥 225
蛇鳥の寺院 236
蛇に飲み込まれるマヤの戦士 (イラスト)
288
蛇の栄養 175
蛇の文明 180
蛇をくわえた鷲 (イラスト) 226
ペルガモの教会 20, 60, 75
ベルシャザルの宴 102
ヘルメス柱像 (写真) 258
ヘルメス・トリスメギストス 237
ヘルメスの杯 4, 137, 245
弁証論理学 302
ペンタグラム (イラスト) 289, 290

【ほ】
ポーラー人種 282, 295
宝石 83
法則数とそれぞれの体 101
北方から叡智がやって来た 287
焰の星を形作るマントラ 291

ポボル・ヴフ 225
ポリヴィジョン (直観的超視覚) 157
ボン教 36, 215
本能センター 137

【ま】
マーキュリーの杖 74, 227, 242
マイスナ (性の秘儀) 215, 250
マインド 7, 86, 102, 135, 165
マインドの玉座 78
マスター (親方) 308
マスターベーション 50
マタジ 123, 250
マハーマンガヴァンタラ 296, 333
魔法使いの蛇 230
魔法の耳 77
マリア 127
マリアの処女懐胎 (写真) 262
マントラ IAO 94
マントラ INRI 96
マントラ OAO KAKOF NA KHONSA 279
マントラ KAWLAKAW ... 95
マントラ KAM 257
マントラ KLIM KRISHNAYA ... 291
マントラ HAM SAH 213
マントラ HARE RAMA ... 309
マントラ FA-RA-ON 122, 228
マントラ FE-UIN-DAGJ 84
マントラ RAOM GAOM 149

【み】
眉間のチャクラ 61, 63
水の試練 167
水の精 (オンディーナ) 175, 176, 300
三つの危険 39
三つの見地 113
三つの神経系 58
三つの結び目 212
ミツバー 262
ミトラ 318, 319 (イラスト)
魅惑 146
ミン神 (写真) 259

【む】
 無意識の夢み手 (写真) 156
 無原罪の受胎 5
 無思考の能力 160
 娘について 113
 六つの基本的次元 163, 196, 187

【め】
 メーソン 263, 296
 迷宮 (ラビリンス) 1~2 (写真)
 迷走神経系 58
 目覚めの法 238
 メルキセデック 170
 メンタル界 12, 49, 137, 165
 メンタル・クリスト 135, 140, 172
 メンタル体 102, 140
 メンデスの山羊 (イラスト) 290

【も】
 モーゼの杖 (蛇) 65, 100, 170
 黙示録の中の二人の証人 39, 241
 モクテスマ 302
 モンセラットの寺院 28, 31

【や】
 ヤーヴェ 25, 272
 ヤーヴェ・セモのサロン 34
 ヤコブの階段 190
 ヤンブリチユス 26

【ゆ】
 幽体離脱のためのマントラ 309
 ユニヴァーサルマインド 238

【よ】
 欲望と愛は全く違う 217, 247
 四次元 229
 四つの意識状態 150
 四つの試練 166
 四つの福音書 277
 四つの道 64, 119
 ヨハネの福音書が教える性の秘儀 97

夜の汚れ (夢精) 50, 154
 49の火 269

【ら】
 ラーヤ・クリヤ 252
 ラオデキアの教会 20, 63, 81
 ラクシュミ 308
 ラスピーチン 84

【り】
 理念 189
 龍蓋を持つタイの仏坐像 (写真) 169
 両性具有 16, 47, 223, 295, 307
 リリット 26, 41
 リンガ柱 (写真) 260
 リンガ・ヨニ 203, 209, 258

【る】
 ルーン文字 297
 ルシファー 36
 ルドラ (火の神) 176

【れ】
 霊の喪失 200
 霊の胚芽 97, 218
 レグバ 258
 レムリア (ムー) 48, 223, 272
 錬金術 16, 50, 54, 175, 281, 323

【ろ】
 6法則の世界 101
 ログス (第三ログス) 4, 9, 176

【わ】
 ワステカの青年像 (写真) 321

サマエル・アウン・ベオール主要著作一覧

心理革命 (日本語訳・既刊)
 完全なる結婚 (")
 ノーシス入門
 教育の基本
 黄道帯について
 イエローブック
 弁証法の革命
 火の薔薇
 ノーシス人類学
 地獄・悪魔・カルマは存在する
 タロットとカバラ
 アクエリアスのメッセージ
 黄金華の神秘 (タオの秘密)
 アステカの秘密の教え
 高等神秘 (チベットの秘密)
 エジプトの錬金術
 ベル・セブの革命
 根源的な変換
 カルメンの聖母
 大いなる反乱
 自己認識の方法
 イニシエーションの三つの山
 内分泌学と犯罪学の基礎的知識
 マントラ神通術
 魔術秘教論文
 人間の社会的変革
 社会的クリスト
 キリスト教と社会主義と資本主義
 パルシファル
 オカルト医術
 ピステイス・ソフィア解説書